

学位請求論文

ドイツ語イディオム学習・教授法に関する総合的研究
—日独イディオム比較・対照研究の視点から—

植田康成

内容目次

はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	3
序論		
第1章	イディオム研究概観	8
第2章	イディオムの言語的特徴	13
第3章	イディオムの意味的機能	20
第4章	ドイツ語イディオム学習における困難性	35
第5章	日独イディオム比較・対照の視点	60
本論		
第一部	日独イディオム比較・対照研究	
第6章	資料源について—先行研究概観を兼ねて—	71
第7章	色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム	78
第8章	数詞を構成要素とするイディオム	100
第9章	"Zunge"と「舌」を構成要素とするイディオム	111
第10章	"Mund"と「口」を構成要素とするイディオム	122
第11章	身体動作に関するイディオム	133
第12章	外来語を構成要素とするイディオム	160
第二部	ドイツ語イディオム学習・教授法研究	
第13章	固有名を構成要素とするイディオム	179
第14章	政治的カリカチュアに見るドイツ統一とイディオム	214
第15章	政治的カリカチュアとウィットを素材とするイディオム学習	242
結論		
第16章	ランデスクンデとイディオム学習	259
おわりに	・・・・・・・・・・・・・・・・	266
参考文献	・・・・・・・・・・・・・・・・	268
資料		
第7章に関する資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	282
第8章に関する資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	294
第9章に関する資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	303
第10章に関する資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	311
第12章に関する資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	316
第13章に関する資料	・・・・・・・・・・・・・・・・	326

(本文は、1頁30行、1行40字で設定してある。各章のタイトルは、14インチ、本文は12インチ、脚注は10インチの大きさの印字である。注釈は、脚注方式で章ごとに通し番号としている。資料は、1頁60行、一行40字で設定してある。)

0 はじめに

1927年、船でヨーロッパ留学に旅だった哲学者和辻哲郎は、途上、始めてみる異国の風物に感銘を受け、彼の「風土論」を練り上げていく。和辻は、航海の順路に従って、風土を3つに類型化して、論じていく。

東南アジア、インドを典型とする「モンスーンの風土」がまず論じられ、次に中近東の「砂漠的風土」が考察される。中近東の乾燥しきった荒涼とした砂漠とはまったく対照的ともいえるイタリア半島の緑に驚きを覚えた和辻は、ヨーロッパの風土を「牧場的」と規定する。和辻は、イタリア、ギリシャ、ドイツ、イギリスの自然およびその自然との関連においてそれぞれの文化を論じる。

ギリシャ、イタリアの明るさに対して、アルプスの北側に位置する西欧は、陰鬱を特徴とする。しかしそこにおいても自然との関連で、人間の気質に相違が観察されるという。「ヨーロッパを北から南へ、すなわち日光が強まっていく方向へ旅した者は誰も感ずることと思うが、日光の力の強まるに従って人間の気質は漸次興奮的・感激的になっていくのである。ドイツ人の沈鬱は南ドイツではよほどその度を減ずる。」(『風土』、135頁)

和辻によると、ヨーロッパの自然は、コントロールしやすい自然である。理由として、5項目が指摘される。まず、極端な気候の変化がない。そのために、ヨーロッパの森の樹木は、ほとんどが植林によるものであるが、いずれも直立し巨大であるという。また、一般に害虫が少なく、雑草が少ない。このことは、農業が自然との格闘という形ではなく、あくまでも人間の意のままに操るという形になることを意味する。

ヨーロッパの「牧場的風土」そのものを特徴づける語として、和辻はドイツ語の"Wiese"について言及し、この語に相当する日本語はないという。確かに"Wiese"は、単なる草原ではなく、家畜とりわけ牛の飼料として耕作されているのである。日本では北海道における牧場が、このドイツ語に対応するといえよう。"Wiese"との関連でいえば、"Heuernte"（草の刈入れ）という言葉も、日本に住む者にとっては、特に北海道の地にすむ者でなければ実感しにくい。収穫という語を、稲や麦の刈り入れと深く結びつけて理解しがちな日本人には、わざわざ草を刈り入れると言うことがすぐには理解できない。和辻は、また"Kälte"（寒さ）と"Frische"（冷たさ）の区別についても触れている。いずれの語も、ドイツの風土に深く根ざした語であり、たとえば日本語には直接的にそれに対応する語はない。

和辻の風土論の根本テーゼは、和辻自身のことばでまとめると次のようになる。

「われわれはヨーロッパの牧場的風土からしてその文化を理解しようと試みた。しかしこの風土がこの文化の原因だということではない。文化においては歴史性と風土性とは楯の両面であって、その一をのみ引き離すことのできないものである。風土的性格を持たない歴史的形成物もなければ、また歴史的性質を持たない風土的形象もない。だから我々は歴史的形成物のうちに風土を見いだすこともできれば、風土的形象のうちに歴史を読むこともできる。我々は風土に視点をおきつつこの両方向の考察を雑然として試みたにすぎぬ。」
(『風土』、143 頁)

本論文の基本主張も、この和辻のテーゼを受けて、文化の一部としての言葉は、その言語が属する文化（圏）の影響を反映し、あるいはその文化（圏）を作り上げているがゆえに、異言語（外国語）の学習は、当該異言語が属する文化（圏）についての理解に導くものであり、そこにまた異言語学習の一つの意義も存在するのだというものになろう。

『風土』の記述からすると、和辻の乗った船は、スエズ運河を通り、地中海に入って、まずイタリアの山々を右手にみながら、フランスのマルセイユに到っている。おそらくは、1 カ月以上の船旅であつただろうと想像されるが、現在から見ると気の遠くなるような悠長な旅であつたからこそ、和辻の「風土論」は、構築されえたとはいえよう。時は金なり、とばかりに、東京からドイツ連邦共和国のフランクフルト・アム・マインまで約 12000 キロメートルの距離を、わずか 12 時間で飛んでいくという現在の旅の在り方では、とても和辻の「風土論」は生まれようがなかったのではなかろうか。時間の身近さが空間的距離の大きさに対する錯覚を生み、彼我の差がないかのように思わせているふしもあるからである。しかし、厳然として、彼我の差は存在しており、時間の短縮はことばや風俗といった文化的差異の大きさを小さくはしてくれないのである。長い期間をかけて異国文化に触れた和辻よりも、ワーブによって空間を飛び越えでもしたかのような旅をする現代人の方が、もしかすると彼我の差の大きさを鮮烈に体験しているのかも知れない。そうであれば比較文化というようなタイトルの下であれこれ論じるよりも、百聞は一見にしかずであり、実際に体当りで現地に飛び込む方が、より多くを見ることにつながるともいえよう。しかしながら、中には予備的に知っておく方が、無用の誤解を避けることができることも多いのではないか。また、異言語および異文化について知ることは、個人が異言語および異文化とどのようにつき合うかについて、多くの有益な示唆を与えてくれるだけでなく、自らの言語、文化について顧みる契機も与えてくれるであろう。

以下の論考は、筆者が過去 10 年以上前から実際のドイツ語授業、演習において実践し

てきたことを踏まえてなされたドイツ語イディオム学習・教授法に関する具体的提案を含む論述である。もちろん、具体的提案を行う前提としては、それなりの考察が先行していなければならない。筆者の具体的提案の基盤は、日独イディオム比較・対照研究という視点である。これは、言語学的な観点からの比較・対照のみならず、いわゆる「ランデスクンデ」(Landeskunde)に関する分野をも包括するものであると筆者は理解している。このような理解は、30年近くドイツ語教育に携わってきた者としての体験に基づいている。すなわち、ドイツ語学習は、単に発音、文法、語彙といった文法的側面にとどまるものではなく、ドイツ語を支えるドイツの文化、政治、経済、歴史、さらにはドイツ語文化圏をとりまくヨーロッパ文化に関する知識(それらもランデスクンデに含めることができる)の習得なくして、十全なドイツ語学習はあり得ないと考えている。そのようなランデスクンデの重要性は、とりわけ、ヒアリング(聴取による理解)、現実のコミュニケーションの場における受容的理解において痛感される。対話相手の発言を理解するには、対話相手の知識の世界を共有していないかぎり極めて困難であると言うべきであろう。

イディオム表現は、それ自体、「メンタル・レキシコン」(mental lexicon)において、通常の語彙とは別の引き出しに収められており、別個の学習が必要であると考えられる^{*1}。従って、通常の語彙学習とは別個の学習・教授法が考えられなければならないが、しかし、まったく分離してしまってもいいものでもない。なぜなら、イディオム表現であるという判定、理解は、通常の語彙に基づく構成主義的理解を前提としているからである。

つまり、個々の単語の意味の総和として理解可能な通常の言語表現と、イディオム表現の違いはどこにあるか、という問いに行き着くことになる。筆者の考察の方向は、イディオム表現が構成主義に基づく意味理解の埒外にあるという事実を踏まえて、どのようにすれば、イディオム表現の理解、産出をより効果的に行うことができるのだろうかという問いに答えようとするものである。そのための方策として、エピソードに基づく理解および記憶と、映像あるいはイメージに基づく理解と記憶という人間の記憶の2つのタイプに注

*1 我々は頭脳の言語領野のどこかに、文を作り出すための規則の集合と、語彙の集合を記憶している。その語彙の集合は大きく言って、個々の単語と、複数の単語からなるフレーズ(あるいはきまり文句としての文)という2つの部分集合からなっていると考えられる。後者の集合にイディオム表現が含まれている。第2章で詳述するように、イディオム表現には、それに対応する単一の表現が存在しているというのが通常である(語彙性)。個々の単語とは別の集合として記憶されているということを、引き出しに例えて表現しているのである。

目した。すなわち、前者はウィットを素材とするイディオム学習・教授法というテーマに関する考察であり、後者は政治的カリカチュアを素材とするイディオム学習・教授法というテーマに関する考察となった。

イディオム学習・教授法に関する具体的提案をふくむこの2つの方向における考察を支えるのは、もちろん、日独イディオム比較・対照研究である。筆者の日独イディオム比較・対照研究は、ある意味では模索そのものであり、決して体系的なものではない。ドイツ語教育、ドイツ語研究の分野において公にされた日独イディオム比較・対照研究をテーマとする論考は、筆者の知る限り、これまでなかった。どのような方法、視点から日独のイディオムを比較・対照すべきなのか、確実な成果が上がるかと保証された規定のルールは、まだ存在していない。従って、筆者の研究は必然的に試行錯誤の性格を持たざるを得ない。しかし、目指す目標だけははっきりしている。それは、日本語母語話者にとってのドイツ語イディオム学習のための具体的な提案につながる考察を展開しようというものであり、そのための学習素材を提供し得るものでありたいというものである。そのような目標設定ゆえ、本論文は、論述そのものもそうであるが、資料の部にあげた例文等は、ドイツ語イディオム学習のための素材として活用されることを願うものである。

本論文は、序論、本論、結論の3つの部分からなっている。

序論は、日独イディオム比較・対照学の構想を提示するための論述であり、5つの章からなっている。第1章は、イディオムに関する研究状況について概略的に述べる。第2章は、イディオム表現の言語的特徴について述べる。この章は、イディオムを言語学的にどのように捉えるかについての論述でもある。第3章は、「イディオムの意味的機能」について、具体的にひとつのイディオム表現を取り上げて、論述する。第4章は、日本語母語話者がドイツ語イディオム学習において直面する困難性について、日独比較・対照の視点から考察する。第5章では、日独両言語におけるイディオム表現を比較・対照するための視点について考察し、本論への足がかりとする。

本論は、内容的には、第7章から第12章までと、第13章から第15章までの2つの部分に分かれる。第6章は、本論文における日独イディオム比較・対照研究のための資料源策定について述べると同時に、先行研究概観を兼ねる。第7章から第12章までは、序論（特に第5章）における考察に基づいて、日独両言語におけるイディオム表現を、いくつかの事項分野を取り上げて、比較・対照していく。取り上げる事項分野は、「色彩」（第7章）、「数詞」（第8章）、「舌」（第9章）、「口」（第10章）、「身体動作」（第11章）、「外来

語」(第12章)、「固有名」(第13章)である。第13章は、「固有名を構成要素とするイディオム」の日独比較・対照であるが、ドイツ語イディオム学習・教授法の視点からの考察が基底におかれているため、内容構成上は第二部に属するものとしてある。第14章は、「ドイツ統一」に関する政治的カリキュラムを素材とした論述である。第15章は、ウィットを素材とするイディオム学習に関する論述である。

第16章では、結論として、ドイツ語イディオム学習・教授法の展開について考察する。イディオム学習がランデスクンデと不可分に結びついていることについて論述し、イディオム学習が、ドイツ語学習の重要な単元であることを主張する。イディオム学習・教授法において、可能な限り多様な方策が考えられなければならないということ、そして可能な限り体系的な学習・教授法に向けての研究が行われるべきことを述べて、結論とすると同時に、将来における課題とする。

第1章 イディオム研究概観

1. 0 はじめに

本章においては、まず言語理論一般におけるイディオム研究の状況について述べる。次にドイツ語のイディオムに関する研究状況について述べる。最後に本論文のテーマとなるドイツ語と諸言語との比較・対照研究、とりわけ日独イディオム比較・対照研究に関する状況を概観する。

1. 1 イディオムに関する一般理論的研究

1. 1. 1 海外

現代言語学に世界規模の革命をもたらしたチョムスキーによる生成変形文法の枠組みにおいてさえ、イディオムは例外現象として排除されていた。唯一チェイフの勇氣ある試み (Chafe 1970) が存在していたにすぎない。

しかし、1970年代後半以後における言語実用論、発話行為理論、会話分析の展開の中で、イディオムに関しても、1980年代から研究状況は一変してくる。

心理言語学の分野における研究が盛んに行われるようになり、イディオムに関する心理言語学的な研究も、とりわけ英語圏では盛んとなってくる。イディオム表現の理解過程 (たとえば Gibbs u.a. 1989 および Gibbs 1990) や、「メンタル・レキシコン」(mental lexicon)におけるイディオム表現のあり方等に関する研究テーマが目立つ(Aitchison 1994)。

ドイツ語圏でいち早く現代言語学の方法と視点から、ドイツ語のイディオム現象を捉えようと試みているのが、ブルガー・ヤクシェ (Burger/Jaksche 1973) である。しかし、ドイツ語圏で本格的なイディオム研究の遂行を促したといえるのは、フライシャーの著書 (Fleischer 1982) と、ブルガー／ブーホーファー／シアルムによる大部のイディオム・ハンドブック (Burger u.a. 1982) であろう。とりわけ後者のハンドブックは、イディオム研究のほとんどの分野におよぶテーマを扱っており、その後の研究の指針として後学にとっては貴重な文献となっている。

また、これらの書に先立つ 1981 年に出たクルマスの著書 (Coulmas 1981) は、発話行為理論の視点から「決まり文句」(Routineformeln)が担っている機能を論じたものであるが、イディオム研究にとっては、これも必読の文献である。

ブルガーの1976年の論文 (Burger 1976) は、ノンバーバルな身体動作に関するイディオム表現を取り扱ったものとしては、先駆的な研究である。この方向における最新の研究には、1991年に出たリュエグの著書 (Rüegg 1991) がある。そして具体的なテキストにおけるイディオムのさまざまな機能とバリエーションを詳細に論じているのがブルガーの著書である (Burger 1998)。

ドイツ語圏以外でドイツ語イディオムに関する貴重な貢献をおこなっている研究者として、フランスのグレシャノー (たとえば Gréciano 1989) とアメリカ合衆国のミーダー (たとえば Mieder 1995) がいることを付け加えておく。後者のミーダーは、ドイツ語のことわざの研究分野における第一人者として著名である。

90年代に起こった言語学における「認知的転換」(kognitive Wende)は、イディオム研究にも当然ながら大きな影響を及ぼしている。ドイツ語のイディオムに関しては、後の節で述べるように、ドイツ語教育上の問題として、早い時期からドイツ語圏以外における研究が盛んであった。中でもソ連、そしてロシアにおけるドイツ語研究者たちが精力的に取り組んでいた。上で言及したフライシャーの仕事も、ソ連のドイツ語研究者たちの成果に大きく依拠していることが、その参考文献からうかがえる。その伝統を引き継ぐ形で、認知言語学の観点からイディオム現象をとらえ直そうとしているのがドブロボルスキーの仕事である (Dobrovok'skij 1995)。

1. 1. 2 日本国内

日本国内では、日本独文学会の機関誌『ドイツ文学』に、動詞を構成要素としてもつイディオム表現を、その特定の動詞を軸に分類し、体系化しようという試みを行なった伊藤の論文 (伊藤 1991) が発表されている。ようやくイディオム現象を体系的に取り扱おうとする機運が生まれてきているという状況であるといえよう。ドイツ語イディオムに関する理論的研究は、伊藤の仕事以外にほとんど見かけない。

1. 2 ドイツ語と諸言語との比較・対照研究

ドイツ語とドイツ語以外の諸言語との比較・対照研究が行われるようになったのは、ヨーロッパ共同体の実現過程と関連しているともいえるが、ドイツ連邦共和国の事情をいえば、客員労働者たちのドイツ語習得の問題と密接している。客員労働者たちが、学校教育を経ないで自然の状態、どのようにしてドイツ語を習得しているか、その過程において客員労働者の母語がどのような影響を及ぼしているかを追求するためにも、ドイツ語との

比較・対照研究が必要となってきたのである。ドイツ連邦共和国、マンハイム市にある「ドイツ語研究所」(Institut für deutsche Sprache)を拠点とするドイツ語との比較・対照研究が70年代から並行的にいくつかの研究プロジェクトとして遂行されるようになる。

ドイツ語と日本語の比較・対照研究については、1999年に出版された著書(Nitta u. a. (Hrsg.) 1999)によると、1971年に日本のドイツ語研究者たちによって開始されたようである。おそらく日本側からの働きかけもあったのであろうが、上述したように、ドイツで進行していた、主として客員労働者たちの母語とドイツ語の比較・対照研究プロジェクトを拡大する形で、1974年から、当初は5年計画のプロジェクトとして日独対照研究が遂行されることになった。日本側から国立国語研究所が参画し、数人のドイツ語研究者たちがドイツに赴いて共同研究を遂行した。その成果は金子亨編集4巻本(Kaneko 1984-87)として公刊された。しかしながら、この日独対照研究においては、日独のイディオムに関する比較・対照研究は射程外におかれていた。

このドイツ連邦共和国と日本両国間の共同プロジェクトとしての日独対照研究は、その後日本におけるドイツ語研究者に一つの恒常的な研究方向として根付いてきているようである。そういった方向における研究成果として『応用言語科学としての日独語対照研究』(小坂光一、同学社、1992年)を挙げることができよう。そして一番最近の研究としては、記念論文集という形ではあるが"Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen, Hrsg. v. Nitta, Haruo /Shigeto, Minoru /Wienold, Götz. München: iudicium, 1999"がある。

1. 3 ドイツ語イディオムと諸言語のイディオムに関する比較・対照研究

イディオムに関する比較・対照研究は、前節で触れた「対照研究プロジェクト」とは異なって、ドイツ語圏以外でドイツ語研究やドイツ語教育に携わっている研究者が主体となって遂行されてきている。ノルウェー語や、フィンランド語、セルボ・クロアチア語、スウェーデン語との比較・対照研究については、第4章において言及するグラープ(Glaap 1979)や、コルホーネン(Korhonen 1989)、ペトロビツ(Petrovic 1988)、コラー(Koller 1974)の研究がある。比較・対照研究については、とりわけ東欧諸国でドイツ語教育が盛んになるにつれて、今後に展開していくものと思われる。フェルデスの研究については、本論文の第5章においても紹介しているが、ドイツ語とハンガリー語におけるイディオムとの比較・対照のみならず、ドイツ語イディオム研究そのものにおいても重要な貢献をお

こなっている(Földes (Hrsg.)1992、Földes 1996その他)。

1. 4 日独イディオム比較・対照研究

本論文が目指している日独イディオム比較・対照研究については、もちろん、ドイツ語研究、ドイツ語教育に専心してきた先人たちの仕事にその方向の考えがなかったわけではない。種々の独和辞典を編纂するに当たっては必然的に日独比較・対照の視点からの考察が必要とされる。ドイツ語学習用として編纂された数々の慣用句辞典や、参考書の類にも日独比較・対照の視点からおこなわれた考察が含まれている。そういった辞典やドイツ語学習書のうちのほんの2、3を例示的に上げるとすると、次のようなものが筆者の手元にはある。

『日独口語辞典』(早川東三(著者代表)、朝日出版社、1985年)は、ドイツ語として表現しにくい日本語表現を辞典形式で説明しているが、辞典としてだけでなく、読み物としても興味深く読める。多くのイディオム表現が採録されており、ドイツ語学習、とりわけドイツ語表現能力の向上に役立つであろう。

ドイツ語のイディオム表現を厳選して収録しているのが、『ドイツ語基本熟語辞典』(岩崎英二郎/子安美知子/上田浩二/岡村三郎、白水社、2000年)である。小辞典の形ではあるが、『独和大辞典』(小学館)では見いだせない、的確な日本語訳が与えられている。イディオム学習に資することを目的としたドイツ語学習書としては、『ドイツ語おもしろ表現』(松田秀元/下山峯子、三修社、1986年)と、『猫の嘆きと白ネズミ』(瀬川真由美、白水社、1996年)の2つを挙げるができる。

ドイツ語慣用句辞典や、イディオム表現に関する語学参考書の類は他にも種々ある。上記の4つを例として挙げたのは、そういった辞典や学習書においても、必然的に日独比較・対照の視点からの考察が展開されている、ということを述べたかったためである。

しかしながら、日独比較・対照という観点から、日独のイディオム表現、中でもプロクセグラムとキネグラムを比較・対照したのは、筆者の知る限りミヒェルの研究(ミヒェル1985)が最初のものである。筆者は、そのミヒェルの論考に刺激され、ブルガーの論文を助けとして、日独イディオム比較・対照という領域でいくつかの論考をドイツと日本で公

にしてきた^{*1}。この領域で、筆者に次ぐ若い研究者も何人か育ってきているというのが、日本におけるドイツ語教育を見据えた日独イディオム比較・対照研究の状況であるといえる。

1.5 おわりに

第4章で提案するように、日独のイディオムに関して、事項分野別に比較・対照することは可能であり、それなりに興味深い結果も出てきている。そして、今後における研究の展開も期待できる。しかし、現在この分野で必要なのは、日独イディオムを比較・対照するための方法の確立と理論化、そしてイディオム学習・教授法の体系化ではないだろうか。筆者が過去10余年おこなってきた日独イディオム比較・対照研究と、イディオム学習・教授法をテーマとした研究によっても、未だ見通しはついていないと言わざるを得ない。本論文によって、そのための試みをおこなうものである。

*1 筆者は、これまでイディオム表現を支えている比喩的イメージの日独両言語における違いやどのような分野からの比喩を用いているかについて、具体例に依拠しながら、日独のイディオムを観察してきた (Ueda 1991a および本論文第4章参照)。また、ノンバーバルな行為が持つ比喩的意味の違い、ノンバーバルな行為に関与する小道具の違いに焦点を絞った研究を試み、これについてもいくつかの考察を公にしてきた (Ueda 1991b, Ueda 1993a および本論文第11章参照)。さらに日独対照イディオム学の構築を目指して、日独両言語における固有名詞を構成要素として持つイディオム表現を比較考察の対象とすべく、その手始めとしての作業を行ない、論文として公刊した (Ueda 1993b および本論文第13章参照)。

第2章 イディオムの言語的特徴

2.0 はじめに

本章では、まず、ドイツ語のイディオム表現に関する研究を踏まえて、イディオムの言語的特徴がどのようなものであるかについて述べる。次に、日本語のイディオム表現に関する研究を踏まえておこなわれているイディオムの規定について紹介する。個々の研究者によって用いられている用語は異なっているけれども、イディオム表現の言語的特徴については、大きな食い違いはないことを確認した上で、本論文の出発点としてイディオムの規定を確認しておくことが、ねらいである。

2.1 ドイツ語のイディオムに関する研究を踏まえての規定

2.1.0 はじめに

第1章において簡単に述べたように、ドイツ語のイディオムに関する研究が盛んになったのは、1980年以後である。しかし、現在に至る20年間に、数多くの研究成果が公刊され、それらのすべてに目を通すことさえ困難になってきている。ましてやそれらの数多い研究業績におけるイディオム表現の言語的特徴に関する議論をまとめて、遺漏のないイディオムの規定をおこなうことは、至難の技である。そのような研究状況に鑑みて、本章では、代表的なものとして、フライシャーの著書(Fleischer 1982)と、ブルガーの著書(Burger 1998)に依拠して、ドイツ語のイディオム表現に関する研究に基づいて提案されているイディオムの言語的特徴について述べることにしたい。

2.1.1 イディオムの言語的特徴

イディオム表現がもっている特徴は、「固定性」(Stabilität)、「イディオム性」(Idiomatizität)、「語彙性」(Lexikalisiertheit)、「再生産性」(Reproduzierbarkeit)、「イメージ性」(Bildhaftigkeit)の5つに集約されるようである。

2.1.1.1 固定性

イディオム表現は、複数の構成要素から成っているのが普通であり、それだけでは独立した文を形成し得ず、文の一部となることしかできない。そしてイディオム表現を構成している各要素は、固定しており、他の要素と交換することはできない。たとえば、「首が回らない」という表現は、「首」を「頭」や「うなじ」に置き換えて、「頭が回らない」、

「うなじが回らない」とすることはできない。また「首が回る」ということもできない。他の要素で置き換えたならば、イディオムとしての意味は失われる。これが第1の特徴「固定性」が意味していることである。

とはいいいながらも、イディオム表現の固定性は、絶対的なものでもない。中には、ある程度の自由度を持つイディオム表現もある。日本語の「目をつぶる」というイディオム表現は、片目をつぶるのか、両目をつぶるのか、はっきりしない。それに対応するドイツ語のイディオム表現は"ein Auge zudrücken"であるが、イディオムとしての意味を強調するときには"beide Augen zudrücken"ということも可能である。

2. 1. 1. 2 イディオム性

第2の特徴「イディオム性」とは、イディオム表現が持っているイディオムとしての意味は、当該のイディオム表現を構成している各構成要素の意味を加算したものではないということである。イディオム表現を文字通りの意味で理解することも可能であるが、イディオムとしての意味は、文字通りの意味とは全く別のものである。「頭が上がらない」という表現は、もちろん、文字通りの意味で使用されることもあるだろうが、イディオム表現としての意味は、「対等になれない、かなわない」（『日本語大辞典』42頁）という意味であり、構成要素の意味の総和ではない。ドイツ語の"jemandem einen Korb geben"についても同様である。この表現は、文字通り、「誰かにかごをあげる」と理解することも可能であるが、「求婚を断る」というイディオムとしての意味を持っている。つまり、イディオム表現は、文字通りの意味の他に、イディオムとしての意味をも有している。ビューラーの用語でいえば、言語における「総和増大」（Übersummativität）の現象であると理解できる（Bühler 1982: 349）。

2. 1. 1. 3 語彙性

第3の特徴「語彙性」とは、イディオム表現は、通常は、複数の構成要素から成っているが、そのイディオムとしての意味は、個々の構成要素の意味の総和ではなく、表現全体が1つの辞典的な意味を持っているのである。たとえば「腹を括る」は、文字通りロープかひもで腹を括るという意味で使われることもあるだろうが、通常は、「どんな結果がでて驚かないように、心を決める」（『日本語大辞典』1590頁）というイディオムとしての意味を持っており、「覚悟を決める」と言い換えることができる。ドイツ語の"jemandem auf die Finger gucken"というイディオム表現は、ドゥーデンによると、"jmdn genau beaufsichtigen, kontrollieren" (DUDEN 1992: 206)つまり、「誰かを注意深く監視する、

コントロールする」という意味をもっているのである。イディオム表現は、メンタル・レキシコンにおいては、単一の辞書的意味を持つものとして、通常の単一の辞書単位とは別の場所に収納されていると考えられる。(メンタル・レキシコンにおけるイディオム表現の位置についてはエイチソンの論 (Aitchison 1994) を参照。)

2. 1. 1. 4 再生産性

第4の特徴「再生産性」とは、第1の特徴「固定性」、第3の特徴「語彙性」と密接している。イディオム表現は、その表現全体が一つのまとまりとしてメンタル・レキシコンに記憶されているのであり、発話の度に個々の構成要素が辞典からとりだされ、統語規則に従って組み立てられていくのではない。既成の一まとまりの表現としてメンタル・レキシコンに収納されており、1つの辞書的意味に対応する表現として取り出される。従って、それに応ずる形で、イディオム表現は学習されなければならないということになる。

2. 1. 1. 5 イメージ性

第5の特徴「イメージ性」とは、多くのイディオム表現は、比喩的な表現であり、豊かなイメージを伴っているということを指す。そしてそのイメージは、様々な事柄の領域に由来している。「頭から湯気を立てる」という表現は、「かんかんになって怒っているさま」(『日本語大辞典』42頁) という意味であるが、本当に顔から頭まで真っ赤にして、頭の上から蒸気が出ているかと思うほど怒っている様子が、思い浮かぶであろう。ドイツ語の"den Gürtel enger schnallen"は、「欲望を抑える」あるいは「経済的に切りつめて生活する」という意味であるが、バンドをきつく締めるというイメージが伴っている。そのようなイメージが、カリカチュアの描き手たちにインスピレーションを与え、創作へと駆り立てているといえるだろう(右のカリカチュアを参照)。



同一の意味を有しているイディオム表現であっても、言語によってそのイディオム表現を支えているイメージが異なる場合がある。そういうときには、思いもつかない領域に由来するイメージであるため、簡単にはイディオムとしての意味が把握できないということになる。

上で言及した"den Gürtel enger schnallen"は、「ベルトをきつく締める」というのが文字通りの意味である。普通、そのような直訳から多くの日本語母語話者が思い至るのは、「禪を締めて掛かる」つまり「心を引き締めて物事にとりかかる」(『日本語大辞典』

1752 頁) というイディオム表現と意味であろう。しかし、ドイツ語のイディオム表現は、一時的に空腹をしのぐためにベルトをきつく締める、ということに由来している。経済的に切りつめて生活するという同様の意味をもつ日本語のイディオム表現は、「財布の紐を締める」ということになる。"Gürtel" (ベルト) という語から「財布の紐」に思い至ることはそう簡単ではない。

言語によって、イディオム表現の持つイメージあるいは比喩が異なっている場合が多いという事実が、イディオム表現の理解と学習を困難にしている一因でもあろう。外国語学習においては、学習者は、必然的に、すでに習得している母語 (第1言語) において思考しているからである*1。

2. 2 日本語のイディオムに関する研究を踏まえての規定

2. 2. 0 はじめに

日本語のイディオムに関する理論的研究として比較的最近のものとして筆者が参照し得たものは宮地の著書 (宮地 1982) である。他には、第6章で日独イディオム比較・対照研究をおこなうための資料源を策定するために検討した種々の日本語の慣用句に関する辞典あるいは事典がある。慣用句、イディオム表現に関する近年の研究成果を踏まえて、高校生向けに極めて分かりやすい論述をおこなっているのが、木下哲生『ことわざにうそはない?』 (アリス館、1997年) である。木下は形態統語的、意味論的な観点および語用論的な観点から、明快に慣用句を説明している。以下、この本の叙述に従って、日本語における「慣用句」の特徴と機能について、まとめておくことにしよう。

2. 2. 1 イディオムの言語的特徴

木下は、慣用句の特徴を、形態統語、意味論、語用論の観点から、次のようにまとめている。そして、現在において新しく創られている慣用句についても興味深い指摘を行っている。

2. 2. 1. 1 形態統語的特徴

1. まず慣用句は、「複数の単語が連結して、ひとまとまりになっている」 (102 頁) 表現であるとしている。ことわざとの対比でいえば、慣用句は、ことわざとは異なり、

*1 このような問題について考察することも日独イディオム比較・対照研究の課題であるが、それについては他の場所で筆者としての試みの論を展開している (Ueda 1991、Ueda 1993 および本論文第4章を参照)。

「人生の知恵や教訓、たとえ」などを教えてくれるものではない。

2. 慣用句は、形態統語的に見ると、4つの型に分類できるとしている。①名詞＋名詞（あとの祭り、一か八か等）、②名詞＋動詞（足が出る、筆を折る等）、動詞＋名詞（思うつぼ、行く末等）、③名詞＋形容詞（頭がかたい、根が深い等）、形容詞＋名詞（黄色い声等）、④動詞＋動詞（痛くもかゆくも、似たりよったり等）、形容詞＋形容詞（安からう悪からう、善し悪し等）。

「慣用句は、文法的には、名詞、動詞、形容詞、形容動詞と、同じ働きをもっている」（114頁）とされている。

3. 慣用句は、「それを構成している単語の意味とは独立して、独自の意味を表す」（112頁）。

4. 慣用句を使う理由は、「文章に生き生きとした表現力をつける」（116頁）という点にある。

2. 2. 1. 2 意味的特徴

さらに意味の点から慣用句は5つのタイプに分類できるようである。

A. 慣用句の意味に、そのことば（構成要素となっている単語）の意味が全く反映されていないもの（たとえば、赤の他人、一枚かむ等）。

B. 慣用句を構成している単語が、文字通りの意味を失っていないもの（たとえば、油を売る、ごまをする等）。

C. 文字通りの意味が現実には必ずしも実行不可能ではないが、通常は実行する事がないことを意味しているもの（たとえば、泡を食う、肝をつぶす等）。

D. 文字通りの意味が実行不可能なことを意味しているもの（息を殺す、命のせんたく等）。

E. 慣用句が意味する行為をするときの動作が、そのまま慣用句となっているもの（たとえば、あごを出す、肩を落とす等）^{*2}。

2. 2. 2 新しい慣用句

木下は、さらに慣用句がどのようにできたか（第四章）、どのようなことばが使われているかについて述べている（第五章）。慣用句は必ずしも過去の言語遺産というだけでなく、現在においても新しい表現が生み出されているということは、留意しておくべきだろ

*2 これは、第11章で取り扱うことになるが、ブルガーのいう「キネグラム」ということになる。

う。若者の間では、「目がうるうる」（感動したり、相手に感情的にうったえかけるようす）（139頁）や「耳がダンボになる」（人の話に聞き耳を立てる）（141頁）といった新しい表現が創られ、使われているのである。

3 本論文におけるイディオムの理解

ドイツ語のイディオム表現に関する研究に基づいて提案されているイディオムの規定と日本語の慣用句についての特徴付けを互いに見比べてみよう。

「固定性」（Stabilität）とは、木下の特徴付けで言えば、形態統語的特徴の第1番目の特徴に相当する。イディオム表現は、複数の語彙からなるフレーズであるということである。「イディオム性」（Idiomatizität）とは、木下による形態統語的特徴の第3番目の特徴に当たる。「語彙性」（Lexikalisiertheit）、「イメージ性」（Bildhaftigkeit）の2つの特徴は、木下の形態統語的特徴の第4番目にまとめることができる。木下の特徴付けで明示的に述べられていないのは、「再生産性」という特徴であるが、これは、おそらく「固定性」という特徴付けから導き出されるものであるもので、あえて述べる必要がないと見なされているのであろう。

木下がさらに述べている意味論的特徴は、慣用句が持っている固定性、イディオム性には段階があるということである。ブルガーは、キネグラムについて、真のキネグラムと疑似キネグラムを区別しているが（第11章参照）、木下の特徴付けがより細かい。

ドイツ語のイディオム表現に関する研究に基づいて提案されているイディオムの規定と日本語の慣用句についての特徴付けを見比べてみると、ドイツ語のイディオム表現に関する規定には、そのイディオム表現が統語論的にどのような機能を果たしているのか、という観点が欠けている。その理由は、ドイツ語においては、イディオム表現のほとんどが述部を形成する要素となっていることにあると思われる。しかしながら、統語論的に主語となるイディオム表現も存在する。従って、日本語の慣用句についての特徴付けにある統語論的な機能について、ドイツ語のイディオム表現についても分類・分析してみる必要があるように思われる。本論文では、イディオム表現が果たしている統語論上の機能についても、可能な限り配慮して、分類・分析を試みたつもりである。

結論的には、ドイツ語イディオムに関する研究に基づいて提案されているイディオムの規定と、日本語慣用句に関する研究に基づいて提案されている慣用句の規定の両者を総合

した観点を採用するということになる^{*3}。

*3 とはいいいながら、第6章における資料源についての検討で述べるように、資料源そのものが一貫した観点に基づいて表現を採用しているとは思われない。そのため、資料収集の際に、筆者の判断にも多少の揺れがあることは認めざるを得ない。

第3章 イディオムの意味的機能^{*1}

"Jetzt wächst zusammen, was zusammengehört." — Willy Brandt

(一緒であるべきものが、いま一緒になるのだーウィリー・ブランド)

3.0 はじめに

本章においては、ドイツ統一に至る過程における決定的な出来事であったベルリンの「壁」の崩壊、国境の開放をめぐる政治家たちの演説、とりわけW・ブランド(Willy Brandt)が1989年11月16日、ドイツ連邦議会でおこなった演説の中で使ったイディオム表現"die Attitüde der beleidigten Leberwurst" (むくれたレバー・ソーセージ) の持つ機能と効果を、その具体的なコンテクストの中で考えていく。そのことによって、イディオム表現の持つ特徴と機能について理解することを目指す。

分析そのものは、イディオム表現は「総和増大」(Übersummativität) というゲシュタルト心理学における一原理の言語現象における発現である、という観点からなされる。イディオム表現において、成分個々の総和を越えて増大したものとは何か、それが、解明されるべき問題である。

イディオム表現は、そのイディオム表現単位としての辞書的意味以外に、エルトマン(Erdmann 1966)のいう感情値(Gefühlswert)、あるいはキューン(Kühn 1985)のいう意味的付加価値(semantischer Mehrwert)をもつ。それがイディオム表現を形成する各成分の総和を超えるものであるというのが、とりあえずの結論ということになる。これは言い換えるならば、イディオム表現は人々の感情に訴えかける豊かなイメージを伴っているということである。政治演説や政治討論あるいはスポーツ報道においてイディオムが多用される理由は、まさにそこにあるといえる。

具体例として、かなり長いドイツ語文が引用されるが、これは、当該のイディオムが使われているコンテクストを可能な限り正確に把握するために必要なことである。それらの例文は、いずれも歴史的な意味を持つ発言であり、ドイツ語教育の観点から見れば、その

*1 本章における論述は、次の論文が基となっている。「壁」の崩壊とイディオムー"die Attitüde der beleidigten Leberwurst"ー 『広島大学文学部紀要』第57巻、1997年、210-228頁。本文の中の年代が現在時点から計算した場合と食い違っている箇所があるのはそのためである。

ようなドイツ文を読み、記憶に留めておくことは、ドイツ語学習を支え、内実あるものとするだろう。そしてまた、ドイツ現代史に関するランデスクンデとしても役立つであろう。

3. 1 ブラント演説を取りまく状況

誰もが希求しながら、しかし現実に起こり得るとは予想もしなかった「壁」の崩壊、それは全く時の偶然、偉大なミステークが引き起こした事態でもあったことが、事後的に判明している。

すなわち、DDR 政治局の決定そのものは本来、旅行の自由は 1989 年 11 月 10 日から実施する、というものであった。しかし、それを発表した政治局員 G・シャボウスキー (Günter Schabowski) は、記者団の質問に、「遅滞なく」(unverzüglich)と繰り返したのである。

そして、その発表を聞いた多くの DDR 市民は、半信半疑ながら、国境の検問所へと押し掛ける。雪崩うってくる群衆のパワーに圧倒され、警備兵は何もなしえなかった。こうして、DDR 市民は、ほんの散歩のつもりで、西ベルリンへと出かけていったのである。28 年にもわたって、東西ドイツを分断していた「壁」は、まことにあっけなく崩壊したのであった。本章の冒頭に引用した一文は、壁の崩壊を聞いた際、ブラントが述べた最初のコメントである^{*2}。

東西の壁を越えて、多くの DDR 市民は西ベルリンへ、そして西ベルリン市民は東ベルリンへと繰り出し、「狂っている！」(Wahnsinn!) の叫びを繰り返しながら、歓迎の交流が続く。そのお祭り気分は、2 日にわたって続いた。西ドイツのテレビ局は、12 日の夜

*2 ブラントは名文句をたくさん残した。壁の崩壊を聞いて、まず最初にブラントはこのようにコメントしたのであった。このブラントの言葉は、その約 1 ヶ月後に、連邦大統領 R・v・ワイツゼッカー (Richard von Weizsäcker) によって、さらにバリエーションが作られた。ワイツゼッカーは、1989 年 12 月 13 日、DDR のテレビで放送されたインタビューの中で、「再統一」あるいは「統一」についての考えを求められて、次のように述べている。

ワイツゼッカー：私の考えをいえば、我々は一つの国民である。そして一体であるべきものは、一体となっていくだろう。しかし、それはまさに一体となっていかなければならないのであって、むやみに膨張していくことではならない。時間が必要なのである。

WEIZSÄCKER: Meine Meinung ist, daß wir eine Nation sind, und was zusammengehört, wird zusammenwachsen. Aber es muß eben zusammenwachsen. Es darf nicht der Versuch gemacht werden, daß es zusammenwuchert. Wir brauchen die Zeit. (DER SPIEGEL DOKUMENT, Oktober 1990, S. 13)

そして、統一後の過程で、このブラントの言は、ドゥーデン 12 巻『引用、名文句辞典』(DUDEN BAND 12: 249)が一例として挙げているように、「Jetzt bricht zusammen, was zusammengehört」(一体であるべきものが、今やともに崩壊していく)というように、極めて悲観的な展望を表明するものとさえなってしまったのである。

までほとんど休みなく、壁の開放に関する報道番組を流したが、四六時中にもわたる放送というのは、ドイツのテレビ局としては極めて異例のことであった。

「壁」が崩壊した翌日の11月10日夜、当時の西ベルリン市長W・モンパー（Walter Momper）の言葉によれば、「再会」（Wiederssehen）を祝う行事が西ベルリン市庁舎前で繰り広げられる。そして、そこでは、ドイツ連邦共和国首相H・コール（Helmut Kohl）、外相H・D・ゲンシャー（Hans-Dietrich Genscher）、西ベルリン市長モンパーといった政治家たちが「壁」崩壊を喜ぶ演説を行った。中でも、かつて「壁」が作られた際（1961年8月13日）西ベルリン市長の職にあり、その後ドイツ連邦首相を務めたブランドによる演説が印象的であった。

ブランドは、「壁」崩壊の2、3ヶ月前に公刊した回想録中の一文を引用して、次のように演説を結んだ。「私がずっと確信していたことだが、このセメントによる分断、鉄条網と立入禁止による分断は、歴史の流れに逆らって立っているのだ。そしてこの夏私が書き付けたこと、それは随時あとで当の書物を読んで確認できることだが、この秋に何が起ころか全く知らずに書いたのであった。すなわち、ベルリンは生き続けるだろう、が壁は、崩壊するだろう」*3。

偶然が引き起こしたともいえる「壁」の崩壊、この歴史的な事件を目の当たりにして、多くの人々が感激の涙を流したことだろう。とりわけ、ブランド自身は、涙を抑えることができなかった。1週間後の1989年11月16日、ドイツ連邦参議院でブランドは、次のように演説している。

「長年ベルリンで責任を担ってきた者にとっては、かつてのドイツの首都で起きていることは、とりわけ心に迫ってくる。私はあからさまに告白するが、とても涙をこらえることができない。そして、殆どとりすますことなく、荒れることもなく、これほどの人々が喜んでいるのを見るとき、明るい未来に対する希望がわいてくる。

先週の金曜日（11月10日）の夜、ベルリン市庁舎前で起こった野次の口笛は、本当に聞くに耐えなかった。とはいえ、決して暴徒のやから（Pöbel）ではない。

*3 Meine Überzeugung war es immer, daß die betonierte Teilung, und daß die Teilung durch den Stacheldraht und den Todesstreifen gegen den Strom der Geschichte standen.... Und ich habe es in diesem Sommer zu Papier gebracht - man kann es nachlesen, wenn man will - ohne zu wissen, was es im Herbst geschehen wird: Berlin wird leben und die Mauer wird fallen. (1989年11月10日夜ARDの実況放送)

あの場には、ベルリンのもう1つの側からきた人々も数多くいたのである。私は批判しているのではない。私は、この具体的な出来事を越えて、ともどもに問いかけたい。そもそもわれわれが語っている政治の言葉は、変化した国民の心情を十分に汲み上げるものになりうるだろうか... われわれは互いに言い聞かせる必要がある。不遜や傲慢、そしてまた同じようにふてくされること (die Attitüde der beleidigten Leberwurst) も時宜に叶ったものではない。

... われわれがいま体験しているのは、議員の皆さん、取るに足りなくはない部分が、統一へ向けての草の根の運動の芽生えにかかわっている... 3つ目のカテゴリーは、国家の統一あるいは新しい統一というものであろうが、それは DDR にいる人々が、自決権 (Selbstbestimmungsrecht) を行使する中で、それを望んだときに実現するだろう。」^{*4}

ブランド、モンパー、ゲンシャー3人の演説は大拍手で受けとめられた。それと対照的だったのが、コールの演説だった。コールは喜びに沸きだっている人々を前にして、とりわけ彼の前に演説したブランド、モンパー、ゲンシャー3人の発言に刺激されて、「このような暴徒のシーンが可能であったことを恥ずかしく思う」と述べたのである。そのため、彼の演説を聞いていた人々は、怒り、激しく口笛を吹き鳴らし、ブーイングで演説を野次り倒したのであった。

前掲のブランド元首相の演説は、東西ドイツの問題はヨーロッパ共同体、全ヨーロッパの政治情勢の中で考えるべきだという現首相コールの考えを支持しながらも、他方ベルリン市庁舎前で再会の喜びに沸き上がっていた人々を「暴徒」と決めつけた、そのコールの発言をたしなめてもいるのである。

コールは、その後の記者会見で、「モンパーは自分とは違う言葉を話している」と論評し、モンパーがドイツ基本法をどのように理解しているか疑うと批判している。それは、モンパーが演説の中で「DDRの民族」(das Volk der DDR) という表現を使ったからである。コールのそのような批判的言辭は、自分の演説だけが聞き入れられなかった不満をモンパーにぶつけていると取れなくもない。

モンパーの演説は約10分足らずのものであった。その中でモンパーは、今になってみ

*4 このブランドの発言は、次の節で全文を掲載してある。

ると、極めて意味深い発言をしていたことに気づかされる。モンパーの演説の中からいくつかのキーセンテンスを任意に取り出してみよう。

11月10日付けの多くの新聞の見出しにもなったのだが、「われわれドイツ人は、今世界で一番幸せな民族だ！」(Wir Deutschen sind jetzt das glücklichste Volk auf der Welt!)

(DOKUMENT:3)^{*5} という発言。そして、上でも言及した、「きのうは再統一の日ではなく、われわれの街での再会の日であった。」(Gestern war nicht der Tag der Wiedervereinigung, sondern der Tag des Wiedersehens in unserer Stadt.) (DOKUMENT: 3)。「われわれの民主主義は、1945年、われわれを解放してくれた人々によってプレゼントされたものである。DDR市民は、民主主義を自ら勝ち取ったのだ。」(Unsere Demokratie ist uns von den Befreiern 1945 geschenkt worden. Die DDR-Bürger haben sich die Demokratie selbst erkämpft.)

(DOKUMENT: 4) という、自らを反省し、DDRの人々を讃える言葉。そして、現在になってその問題がより深刻になってきているのだが、「われわれは頭の中の壁を取り壊さなければならない。」(Wir müssen die Mauer in unseren Köpfen abbauen.) (DOKUMENT: 4) という発言。「頭の中、すなわち意識の中に存在する壁」の問題は、統一後7年以上が経過した現在、一層深刻な問題となってきた^{*6}。

ところで、コールが批判しているモンパーの発言部分は次のようになっているが、問題の語句はモンパーの演説中でたった1度しか出てきていない。

「われわれを長い間苦しめてきた国境は、きのう、その分断的な性格を失った。自由に旅行することは、人間の権利だ。同様に、人間の権利として、(DDRの)人々は今日までの幾週間かの間に、押しつけがましい指示を払いのけ、自らの国を自ら築く権利を取り戻した。DDRにおいて今や、ドイツの歴史の魅力的な1章が書かれているのだ。歴史のそ

*5 以下のモンパーの発言は DER SPIEGEL DOKUMENT, Oktober 1989 から取ったものである。DOKUMENT という文献指示は、この特集号をさす。

*6 「頭の中の壁」、「意識の中の壁」という問題の所在について言及したのも、筆者の知る限り、モンパーが最初である。この問題については、脚注*2でも言及したように、統一以後その問題が顕在化してきたのである。この問題はかつての東西ドイツにおける人々の言語行動、そしてモンパーが繰り返し強調しているのだが、それぞれの「国民」のアイデンティティの違いでもある。社会主義体制から資本主義市場経済体制への適応、順応を迫られたかつての東ドイツの人々が、さまざまな局面で不利益を被るという結果を引き起こしている。この問題に関しては Ueda 1996a でいくつかの文献を挙げてあるが、ドイツにおいても言語学者たちがようやくこの問題の所在と重要性に気づき、本格的な研究を開始したという状況である。

の章は、**DDR**の民族そのものによって書かれるのだ。」^{*7}

翌日11月11日(土曜日)の記者会見で、モンパーは、コールの批判に次のように反撃している。

「連邦首相は、ドイツの歴史におけるこの決定的な状況を的確に捉えることができないと非難せざるを得ない。その後の記者会見でも明らかだが、コールにはこの歴史的瞬間における人々の感情を理解する能力がない、ということを私達は目の当たりに確認した。

コールは、明らかにこの歴史的な時間における人々の感情を素通りするような考えで話している。現在、東ヨーロッパのみならず、旅行の自由を認めた**DDR**においても状況が変化したことによって必要とされている思考の転換を、コール氏が計っていないことは明らかである。コールは、いまだに過去となった一昨日の思考に取り付かれている。

10月7日に東ベルリンでソ連の総書記長ゴルバチョフが言ったことが、コール氏についても当てはまる。遅れて来た者を、人生は罰するのだ。コール氏は、とりわけ、私が彼とは同じ言葉を話していないと批判している...個別のこととして彼が批判しているのは、私が**DDR**の民族(*das Volk der DDR*)という言い方をしたことであるが、勿論私はその言葉を極めて意識的に使ったのだ。誰の目にも明らかだが、コール氏はおそらく**DDR**における民主化運動に対して心底から嫌悪を抱いており、**DDR**の人々が現実に自決権を行使するのを忌み嫌っているとしか思われぬ...

DDRに住む人々すなわち**DDR**の民族が新しく獲得したアイデンティティ(*diese neugewonnene Identität der DDR-Bevölkerung oder des DDR-Volkes*)というものをコール氏は理解したくないらしい。というのは、それは再統一についての彼の考えと合わないからだ。しかし、**DDR**の人々がアイデンティティを獲得しているというのは、いわば現実である。コール氏およびその他の西側政治家たちは、東ドイツ国民のアイデンティティを認識し得て当然であろう。

DDRの人々にとって再統一は興味ある問題ではないということをコール氏が理解していないのは明らかだ。開放された国境をもつ自由なヨーロッパこそ関心事なのだ... 昨日

*7 Die Grenze, die uns so lange gequält hat, hat gestern ihren trennenden Charakter verloren. Das freie Reisen ist ein Menschenrecht. So wie sie sich in den letzten Wochen das Recht genommen haben, die Bevormundung abzuschütteln und ihr Land selbst zu gestalten. In der DDR wird jetzt ein faszinierendes Kapitel deutscher Geschichte geschrieben. Dieses Kapitel der Geschichte, das wird vom Volk der DDR selbst geschrieben. (DER SPIEGEL DOKUMENT, Oktober 1989, S.3)

と今日は、再統一の日（die Tage der Wiedervereinigung）ではない。現実にはそれは再会の日（die Tage des Wiedersehens）なのだ。

連邦政府が10月18日（エーリヒ・ホネッカーが辞職した日）以後過ぎ去っていった日々に、2つのドイツ国家間の協同を実際的に組織し、良き隣戚関係を保つての国民生活と民主的なDDRをめざして全力を挙げて努力していたならば、大いに歓迎するところであった。しかし、現実には連邦政府が取った実際的な対策は、遺憾ながら人々の期待をうちのめすものでしかなかった。

連邦政府がやったことは、丸まるひと月、いやそれぞれ以上の日々を無為の内に過ぎさせるがままにしておくことであった。その間、再統一と民族問題についてくだらない論議を重ねるだけで、実際的な歩みは1歩たりとも踏み出すことがなかった...」

東ドイツ政府が東西ドイツの国境を開放するという歴史的な決断をしたとき、西ドイツ政府首相コールはポーランドのワルシャワにあって、ポーランド政府首脳との会談、そしてレセプションに出席していた。そのことが西ベルリン市民だけでなく、東ベルリンからきていた東ドイツの同胞、西ドイツ国民の大部分から不評をかった。彼の演説は野次の叫びと口笛で殆ど聞き取れず、ついには演説を諦めざるをえなかった。勿論、ポーランドとの外交も西ドイツにとっては国境の確定をめぐる極めて重要であったのだが、コールにとってはまことに不幸な時の巡り合わせになったとしかいいようがない。

3. 2 ブラント演説の中のイディオム

すでに上で日本語訳として掲げたブラントの演説のドイツ語原文は、およそ次のようである。

"...Dies sind in der Tat bewegende Tage, sie handeln ja auch von dem tiefgreifendsten Umbruch, den unser Teil der Welt seit dem Ende des Zweiten Weltkrieges erfährt. Verwunderlich wäre es gewesen, hätten die Winde der Veränderung um Deutschland einen Bogen gemacht...

Man kann schon heute in einer Zwischenbilanz feststellen, der Führungsanspruch der einen Partei läßt sich nicht mehr aufrechterhalten. Und daraus folgert ja logisch, daß Artikel 1 der Verfassung der DDR vor Wahlen gestrichen werden muß. Politischer Pluralismus bricht sich Bahn, freie Wahlen werden im nächsten Jahr auf der Tagesordnung stehen in der DDR.

Jemand, der eine jahrzehntelange Verantwortung in Berlin getragen hat, in nicht immer ganz einfachen Situationen, dem geht das besonders nahe, was sich in der alten deutschen Hauptstadt abspielt und ich gebe offen zu, ich habe meiner Tränen kaum Herr werden können. Aber dann soviel Fröhlichkeit, so wenig Verkrampftheit, so wenig Aggressionen, das läßt hoffen.

Die Pfiffe am Rathaus am letzten Freitag, ich hab sie wirklich nicht gern gehört, aber es war kein Pöbel. Es waren sehr viele Landsleute aus dem anderen Teil der Stadt dabei. Ich kritisiere nicht, sondern ich frage uns miteinander über diesen konkreten Anlaß hinaus, ob unsere politische Sprache der veränderten Gemütslage der Nation hinreichend gerecht wird... Wir müssen uns alle miteinander sagen, daß Überheblichkeit ebensowenig angebracht ist, wie **die Attitüde der beleidigten Leberwurst.**

Ich war und bleibe der Meinung, daß Europa nicht Einförmigkeit braucht und nicht Einfarbigkeit braucht, nein, in Europa, das gilt heute für die Europäische Gemeinschaft und es muß mal gelten für das größere Europa, da muß Platz sein für alle relevanten Strömungen der europäischen Demokratie, für linke und rechte, liberale, konservative und christliche Demokraten.

...Falsch wäre es, da berühren sich meine Gedanken sehr stark mit den vom Bundeskanzler vorgetragenen, ganz falsch wäre es, aus einer mißverstandenen europäischen Perspektive ableiten zu wollen, wir bräuchten uns um die Europäische Gemeinschaft nicht mehr so viele Mühe zu geben. Das Gegenteil ist richtig...

...Neu und wiederholt stellt sich die Frage nach der deutschen Einheit. Offensichtlich halten die Landsleute in der DDR das Thema Wahlen jetzt für das vorrangige. Und das kann ich verstehen. Keiner von uns wird da widersprechen wollen... Ich habe seit vielen Jahren mein Problem mit der Wieder bei der Vereinigung, weil ich überzeugt war und bin, dieses suggeriert, als könnte es etwa so wieder mal werden wie es mal war. Außerdem steht es nicht im Grundgesetz.

...Was wir erleben, meine Damen und Herren, das hat nun zu einem nicht unerheblichen Teil zu tun mit dem Heranwachsen einer Einheit von unten... Die dritte Kategorie ist die, die von der staatlichen Einheit oder von der Neuvereinigung handeln würde, wenn die Menschen in der DDR dies in Ausübung ihres Selbstbestimmungsrechts

so wollen. Ich würde keine Option ausschließen, keine Option abweisen..." (Badische Zeitung, Freitag, 17. November 1989)

ここで取りあげるイディオムは、ブラントの演説の中の"die Attitüde der beleidigten Leberwurst"である。このフレーズは本来は"die gekränkte/beleidigte Leberwurst spielen"が基になっている。意味は、"(aus nichtigem Anlaß gekränkt sein" (Friederich 1976: 288)、すなわち、「些細なことで不機嫌になる」である。あるいは別の辞典では、"ugs.; aus nichtigem Anlaß beleidigt tun, schmollen" (DUDEN Universal-Wörterbuch A-Z: 937)とあり、「些細なことで気分を害されたとして、不平不満をいう」の意である。

なぜレバー・ソーセージなのか。古代ギリシャ以来の人間観がその背景にはあるようである。すなわち、古代ギリシャでは肝臓が人間の感情の中心であると見なされていたのである。上記のイディオム以外に、たとえば"etwa. frißt j-m an der Leber:(Ärger, Zorn, Kummer usw.) macht j-n halb krank"(Friederich 1976: 287) (恐れ、怒り、心配などで、半ば病気になる) や"frisch (o. frei) von der Leber weg (reden, sprechen usw.): so, wie man denkt, ohne Hemmungen (reden usw.)"(Friederich 1976:288) (考えていることを、躊躇することなく、言う) といったものがあるが、これらのイディオムからも、肝臓が、腹立ち、怒り、心配など、人間の感情にかかわっていることがわかる。

しかし、どういう経過で肝臓がレバー・ソーセージとなったのか。これには民間語源学あるいは言葉遊び的な要因が絡んでいるようである。つまり、「ソーセージをゆがいている鍋から美味な血・ソーセージの方が先に取り出され、残ったレバー・ソーセージはゆだりすぎて破裂した」という話が結びついたのである。ソーセージがゆだりすぎて皮がはじけたのを、怒りのあまりはじけたという具合に見立てたのである。レーリヒによると、この話は、上部ザクセンで実際に語られたもののようである (Röhrich 1991/92:945)。

イディオム表現"die gekränkte (oder beleidigte) Leberwurst spielen"の基本的な意味は、以上のようであるとして、それでは、ブラントが演説の中で使っている表現"die Attitüde der beleidigten Leberwurst"の意味はどうなるのだろうか。ブラントの演説は、実際には目の前にしている国会議員だけでなく、ドイツ国民全体に呼びかけていると理解できる (4節参照)。とすると、ドイツ国民が「些細な理由でむくれている」ということになるが、それはどのような事態を捉えての発言であろうか。

DDR で民主化を求める運動が高まり、E・ホネッカー (Erich Honecker) は病氣も重なり、退陣に追い込まれた。しかし、そのホネッカーに代わって登場したE・クレンツ (Egon

Krenz) は、殆ど政治的にリーダー・シップを発揮し得ず、DDR 国民の意思を掌握できない。他方、DDR の経済も殆ど救いがたい状況になりつつあった。「壁」が崩壊し、旅行の自由がもたらされたにもかかわらず、BRD へと移住していく DDR の国民の数は増しこそすれ、一向に減らない。

事態は、もはや DDR という国家をそのまま維持していくことが、実質的に不可能になりつつあることが、誰の目にも明らかであった。いつしかライブチツヒにおける月曜デモのスローガンは、「われわれが国民だ」(Wir sind das Volk!) から「われわれは一つの国民だ」(Wir sind ein Volk!) へと変わり、統一を求める声が高まっていった。^{*8}

しかし、東西ドイツの統一が成るには、解決されるべき様々な問題があった。しかも、ドイツの周辺諸国は、統一によって巨大国家となるドイツに、不信感と、恐れを表明していたのである。民族の統一という明らかに前世紀の政治理念の実現に対して、統一ヨーロッパを目指していた周辺諸国が快い顔をするはずはなかった。まして西ドイツ自身が統一ヨーロッパへと向かって、先頭に立って引っ張っていたのであれば、なおさらである。

そのような周辺諸国からの疑念、不信、恐れ of 表明に対して、ブランドは、ドイツ国民が驚喜して喜ぶことはそれなりの理由があることであるが、ドイツ国民自身も周辺諸国の警戒心、恐れを、歴史に照らして反省し、いたずらにむくればかりいず、手を携えていく努力をしなければならないと呼びかけているのである。

3. 3 イディオムの意味的特徴

言語表現は、個々の言語要素を結合することによって成り立つ(シンタックス)ののだが、その結合された全体の意味は、決して個々の要素が持っている意味の合計に留まてはいない。必ず何か増加しているものがある。ビューラー (Bühler 1982:349 ff.) は、言語におけるこのような現象をエーレンフェルス (Christian von Ehrenfels) が提唱した総和増大 (Übersummativität) というゲシュタルト心理学の概念を用いて説明している。ビューラー自身は、シンタックスのレベルにおける付加的な複合 (attributive Komplexionen) のみを総和増大の例として挙げているが、私見によると、イディオム現象も総和増大の原理の

*8 些か皮肉と批判を込めて、このスローガンは、現在では次のようなウィットのバリエーションで語られているようである (Müller 1994: 125)。

"Der Wessi zum Ossi: >Wir sind ein Volk.< Der Ossi:>Wir auch.<" (西側ドイツの者が東側ドイツの者に向かって: われわれは一つの国民だ。東側ドイツの者: われわれもそうだ。

言語における発現と捉えることができる*9。

イディオムとは複数の語から成る固定的な表現であり、全体として一つの辞書的な意味を持っている。とはいえ、当然字義通りに解する可能性も依然としてあり、その固定性、凝集性には段階付けを行うことが可能であろう。しかしながら、イディオムの辞書的な意味は、それを構成する個々の言語要素が持っている意味の総和を超えるものであり、各構成要素の意味の総和ではない。心理言語学の用語でいえば、話し手・聞き手のメンタル・レキシコンに登録されているイディオム表現の辞書的な意味は、各構成要素の意味の総和に、さらに何かがつけ加わったものなのである。そのつけ加わったものとは何か。この問題をキューン (Kühn 1985) は追求している (第4節参照)。

つまりイディオム表現"die gekränkte Leberwurst spielen"は、それを構成している4語"die"、"gekränkte"、"Leberwurst"、"spielen"の意味を合計した、いわば字義通りの意味を保持しているだけでなく、各構成要素が持っている意味の総和を越える"aus wichtigem Anlaß gekränkt sein"というイディオム表現としての意味をも持っているのである。

というよりも、共時的に見ると、イディオム表現"die gekränkte Leberwurst spielen"には、"aus wichtigem Anlaß gekränkt sein"という意味が対応しており、言語体系内ではその表現と意味内容が1 : 1の対応をなしていると考えられる。従って、言語習得の点でいえば、そのような対応付けを行えるようになればいいのであり、それが外国語学習においてもとりあえずの目標となろう。

しかし、外国語学習の効率、学習効果というという観点からすると、イディオム表現が持っているイメージ性を有効に利用することが必要である。イディオム表現に関しては、出発言語と目標言語において、意味内容が同じであっても、イメージ性が異なる場合が多く、そのような違いを理解することが外国語学習においては、単に言語レベルの理解だけでなく、ランデスキュンデも含めて、欠かせない課題となってくるであろう。また、イディオム表現に関する語源的な説明は、当該のイディオム表現になぜそのような辞書的な意味が付与されるようになったのかについて、ある種の「ひらめき体験」(Aha-Erlebnis)を与えてくれるものであり、そのことが理解過程にプラスに作用し、学習効果を高めて、長期記

*9 総和増大 (Übersummativität) とペアになっている概念は、もちろん「総和減少」(Untersummativität)である。総和減少というゲシュタルト心理学における原理の言語における発現として暗喩 (Metapher) の現象がある。ビューラーは、『言語理論』の中で1章を割いて暗喩を分析している (Bühler 1982: 342-356)。

憶に移行することを助けてくれると考えられる。

3.4 イディオムの表現効果

あるイディオム表現と、そのイディオムが表現単位としてもつ辞書的意味とを比較するとき、その両者にはどのような違いがあるのだろうか。イディオムの辞書的意味に対応する表現形式があるにも関わらず、イディオム表現を使うのは、なぜなのか。キューン (Kühn 1985) が考究の対象としているのは、この問題である。

キューンも偶然にブラントがドイツ連邦議会でおこなった演説の中で用いたイディオム表現を分析の対象としている。そのキューンの分析における重要な概念は、自己演出 (Selbstinszenierung)、意味的付加価値 (semantischer Mehrwert)、多方向発信 (Mehrfachadressiert) の3つであるが、イディオムの特質としては意味的付加価値が中心をなす。自己演出、多方向発信は、とりわけ政治演説に特徴的なものであり、イディオム使用の目的、意図といったいわば語用論的な次元に関わっている。

たとえば、ある野党に属する政治家が演説をおこなう時、その演説は、もちろん自党の方針に沿いながらも、自分自身の意見を開陳し、与党の政策や見解を批判、攻撃することによって、理想的にはもっとよい政策の実行を迫るという目的でおこなわれる。しかし、とりわけ現在のように、国会での議論がマス・メディアによって広められるようになれば、演説している当の政治家は、どうしても選挙区の支持者たちのことを考慮せざるを得ない。そしてまた、テレビなどのマス・メディアを通じて、自分の演説内容を知ることになる人々のことも意識せざるを得ない。

こうして、当該の政治家の演説は、少なくとも3方向の受け手を意識したものとならざるを得ないのである。そのため、必然的にそれぞれの受け手を配慮した言葉遣いを選択することになる。そしてその中でなおかつ、自己主張をおこなうことを目指すのである。その意味では、政治家の演説は、いかにして自分を3方向に向かってアピールするかという意図から組み立てられていると捉えることができる。

キューンが分析しているのは、1984年2月8日、ブラントが連邦議会でおこなった演説の中で用いた "jemandem auf die Finger gucken" (誰かの行動を注意深く監視する) とい

うイディオムである。ブラントの演説そのものは、当時発覚したある一つのキャンダル^{*10}に関して、コール政権を批判しているのだが、このイディオムが出現する箇所を最小限引用すると、次のようである。

"Was heißt hier übrigens Opposition? Zum einen zeigt der Gegenstand, mit dem wir uns heute befassen, wie wichtig es ist, daß das Parlament insgesamt **der Regierung auf die Finger guckt.**" (Kühn 1985:39) (ところで、野党ということは、ここで何を意味するのか?一つには、今日ここでわれわれが取り組んでいる対象が示しているように、連邦議会が全体として、政府の行うことを注意深く監視することが、如何に重要かということである。(SPDの議員席から拍手))

ここでは"der Regierung auf die Finger gucken" (政府の行うことを注意深く監視する)となっているが、たとえば、ドゥーデンのイディオム辞典には、つぎのような説明が載っている: "jmdm. auf die Finger sehen/schauen/gucken(ugs.): jmdn genau beaufsichtigen, kontrollieren" (DUDEN Band 11: 206) (誰かを子細に監督する、行動をコントロールする)。

さらに母語話者としてのキューンによると、当該のイディオム表現と基本的に同じ意味を持つ表現としては少なくとも14の言い回しがあるようである (Kühn 1985: 41)。たとえば、(1) die Regierung kontrolliert (政府がおこなうことをコントロールする)、(2) die Regierung beaufsichtigt (政府のおこないを監視する)、(3) die Regierung beobachtet (政府がおこなうことを観察する)、(4) auf die Regierung aufpaßt (政府のおこないに注意する)といったものがある。このような言い回しと、問題としているイディオム表現"der Regierung auf die Finger gucken"の違いは、どこにあるのだろうか。

まず当該のイディオムが、口語的、俗語的なレベルに属する表現であることに注意する必要がある。少なくとも、SPDの国会議員として、もっとイデオロギー的な政治用語を駆使することもブラントには可能であったはずである。そうしないで、あえて口語的表現を選択したのは、ブラントが念頭においていた受け手が、目の前にしている国会議員だけではなかったと理解してよいだろう。

そして、さらにブラントは、政府の行動をコントロールしたり、観察するだけでなく、イディオム表現を用いることによって、このスキャンダルに関して政府与党に対する彼の

*10 このスキャンダルは、ドイツ防衛軍の将軍キースリング (Kießling) が同性愛者であるということで恐喝されていることが発覚し、解任させられた。しかし、調査の結果証拠不十分ということで、今度は、防衛大臣ヴェルナー (Wörner) が、そのような失態の責任をとって辞任したというものである。

態度をも表明しているのである。すなわち、「連邦政府の行ったことは、政治的、道徳的に間違っている」、「従って、われわれは政府の行いを、もっと注意深く、何をするかわからないという疑いの目でもって、監視し、見守っていくべきである」という態度を表明しているのである。この自らの態度を表明する機能を、キューンは、イディオム表現の付加的価値と命名している。

ブランツが試みているのは、結局、キースリング・ヴェルナー・スキャンダルに対して政府与党がとった行いは、道徳的に間違いだということを明らかにし、他方、与党内部にも存在する一部の批判勢力を勇気づけることであり、上の引用にもあるように、なおかつ自らが属する野党の支持をも取り付けることである。さらには、自らの選挙区の支持者たちに国会における自分の活動をアピールすることでもあったのである。

3.5 おわりに

ブランツの演説とモンパーの演説を聞き、読み比べてみると、同じ SPD に所属する政治家であるにも関わらず、その演説の調子だけでなく、使われている語彙に大きな違いがあることに気づき、興味深く思う。それは、多方向発信性をどれだけ意識しているかという違いでもあるといえる。

ブランツの演説には、第2節で引用したドイツ文を見て分かるように、文体としても演説に合わせて、文法を崩している箇所や俗語的なイディオムを多用しているのが目立つ。しかし、モンパーの演説の文章は、「ベルリンのみなさま」(Liebe Berlinerinnen und Berliner)といった呼びかけにも関わらず、極めて優等生的な政治家の文章という感じが否めない。

ブランツが、あえて俗語的なイディオムを使っているのは、そのイディオム表現が持っている強烈なイメージ喚起力に理由があるといえる。レバー・ソーセージがゆだりすぎて皮がはじけるというのは、ドイツ人なら日常の経験で十分に熟知していることである。そのようなドイツ人ならほぼ誰もが共通に持っている言語知識のみならず、体験、感情に訴えかけているのである。むやみにむくれているばかりでなく、喜びに浸るのはよいとして、それと同時に、周辺諸国の感情も考慮しなければならないというのが、ブランツの訴えであると理解することができよう。

本章では、ブランツの演説中の一つのイディオム表現を取り上げたが、一般に、スポーツ報道と並んで、政治演説にはイディオム表現が多く登場するというのが、筆者の観察である。ドイツ統一は、ドイツ人だけでなく、世界の耳目を引きつけた現代史における大事

件であった。「壁の開放」からさらに「ドイツ統一とイディオム」という具合に視野を広げて、イディオム表現に的を絞って資料を集め、分析することによって、イディオム表現が果たしている意味論的および語用論的な機能をさらに解明することができるであろう。

第4章 ドイツ語イディオム学習における困難性^{*1}

"Warum stehen Sie denn mit einem Stock vor dem Bett?", fragt der Arzt.

"Sie haben mir doch verordnet, das Bett zu hüten!" (Witzebuch : 360)

(「どうして杖を持ってベッドの前に立っているのかね？」と医者が訪ねた。

「だって、先生が、ベッドを守りなさいとおっしゃったじゃないですか？^{*2}」)

4.0 はじめに

イディオムは、言語表現としてみるとき、イメージが豊かで、かつ目標言語圏の文化、歴史、社会、経済に関するランデスクンデを深化する糸口としても極めて有用なものである。しかしながら、学習対象としては、それほど易しいものではない。イディオム学習、とりわけ理解における困難性は、どのようなものであり、その理由はどこにあるのであろうか。

本章では、イディオム表現が有している比喩的イメージに焦点を合わせて、日独のイディオム表現を比較・対照することによって、学習上の困難性がどこに起因するかを考えていく。もちろん、日独両言語におけるイメージを伴った比喩的なイディオム表現のすべてを取り扱うことはできない。例示的に日独のイディオム表現を比較・対照して、日本語を母語とするドイツ語学習者にとって、どのような困難性がイディオム学習において存在するかについて考えることになる。

4.1 イディオム能力

イディオム能力は、母語話者の言語能力の重要な部分をなしている。しかしながら、その能力については、個人差が大きい。さらに、個々人においても、学習対象言語における

*1 本章における論述は次のドイツ語で発表した論文がもとになっている。日本語訳を作成するにあたって、内容にいくぶんか変更を加えた箇所がある。ドイツ語における論述と、日本語における論述では、スタイルにかなりの変化が生じることは、どうしても避けがたい。

Yasunari Ueda, Schwierigkeiten beim Verstehen der deutschen idiomatischen Wendungen. ein Kapitel im Deutschunterricht für japanische Muttersprachler auf einer fortgeschrittenen Stufe. In: Info DaF. Informationen Deutsch als Fremdsprache. Nr. 1, 18. Jahrgang, 1991, S. 3-14.

*2 このウィットの落ちは、"das Bett hüten" (安静にする) というイディオム表現をことば通りに「ベッドを守る」と理解した点にある。この例のように、多くのイディオム表現は、ことば通りに理解することも可能である。

イディオム能力と母語におけるイディオム能力の差は、歴然としている。目標言語におけるイディオム能力は、母語におけるイディオム能力と比較すると、極めて貧弱であるのが普通である。目標言語においても、母語におけるのと同等のイディオム能力を獲得することが、外国語学習における目標であることは間違いないとしても、現実には達成しがたいというのが、経験的事実であるといえよう。

この事実を踏まえるとき、外国語学習において、受動的イディオム能力と能動的イディオム能力を区別することが、目的に適っているという議論が成り立つ。すなわち、目標言語の母語話者と同等のイディオム能力を獲得することが理想であるとしても、現実には、受動的イディオム能力を伸ばすことに努力を傾注することが、外国語教育においては、当面の学習目標としては有意味であるということになる。学習対象言語の母語話者並のイディオム能力を身につけることは、あくまでも願望であるといえる。このことは、とりわけ、出発言語と目標言語が、極めて異なる文化圏に属している場合、たとえば日本語母語話者がドイツ語を学習するという場合について当てはまるだろう。

以下では、ドイツ語を学習する日本語母語話者にとって、ドイツ語のイディオム表現を理解するとき、どのような困難性が生じ得るのか。そして、その困難性は、どのような次元においてみられるのか。そしてまた、そういった困難性が、どのような要因に困っているのかについて、例示的に考察していく。

4.2 一次的言語体系と二次的言語体系

外国語授業の目標は、いうまでもなく、目標言語における言語能力を養成することにある。あらゆる教授法に関する考察や授業における努力は、どのように効率的に目標言語能力の発達を促し、成功に導くことができるかに傾注されている。そして、目標言語の文法規則や、語彙を学習することによって、目標言語における有意味な文を形成し、それによって目的に適ったコミュニケーションが可能になる、という前提で行われているのが通常の外国語授業であろう。

しかしながら、このような「構成原理に基づく仮定」(kompositionelle Annahme)は、「固定的統語表現」(feste Syntagmen)や「イディオム表現」(idiomatische Wendungen)については、当てはまらない。イディオム表現を構成する要素間の結びつきは固定的なものであり、意味的に切り離すことができない。そのような固定的統語表現やイディオム表現は、表現全体でひとつの意味単位をなしており、二次的言語体系をなしていると考えることが

できる。すなわち、それらの意味は、通常の語彙とは別個に習得されなければならない。「メンタル・レキシコン」(mentales Lexikon)において、通常の語彙とは別の引き出しに収められていると考えられる^{*3}。

イディオム表現は、ことば通りの意味とことば通りでない意味、すなわちイディオム(慣用)としての意味を有しているということ、そしてまさにこのことば通りでない意味は二次的意味として別個に学習されなければならないということ、このことが学習者にとっては、克服されるべき大きな課題となる。目標言語におけるイディオム能力を欠いている場合、学習者は、目標言語の一次的体系に関する知識にのみ基づいて、目標言語におけるイディオム表現を理解しようと試みる。すなわち、まずは、構成原理に従って、個々の語彙単位の意味を加算して、イディオム表現を理解しようとする。もし、あるイディオム表現に関して、当該のコンテクストが、ことば通りの意味とことば通りでない意味の双方の解釈を許すものであるならば、学習者は当該の表現の意味を誤って解する可能性が大きい。そのような誤解は、場合によっては、たとえば次の引用にあるようなゆゆしい事態を生み出す原因となることもあるだろう。

「ドイツ人と外国人が危うく殴り合いになりそうになった。というのは、その外国人は"Da hast du aber Schwein gehabt" (きみはラッキーだったんだ) という言い回しの意味が分からず、罵られたと理解したからである。」(Daniels 1985:151)

その外国人は、なぜドイツ人の好意的な発言を罵りだと理解して、激怒したのか。ダニエルズがいつているように、その外国人は、ドイツ人の発言をイディオム表現としてではなく、ことば通りの意味で理解したからである。そしてまた、その外国人の母語において、「豚」という語は通常、罵り言葉として使われているからだと考えることができる。他方、その外国人は、それまでの外国語学習において、この"Schwein"という語を「罵り」という発話行為が行われる場合にのみ聞いたことがあり、罵り言葉であるとのみ理解していたからだ、とも考えられる。

*3 表現の固定性というのは、しかしながら、固定的な統語表現にのみ特徴的なものではない。イディオム表現あるいは固定的統語表現は、固定性のひとつの極を成しているといえる。つまり、固定性に関しては、段階を考えることができる。この段階の一方の極に固定的統語表現やイディオム表現が位置し、他方の極に、構成原理に基づいて文法規則によって構成される通常の表現が位置していると考えられる(Alexander 1987を参照)。

4.3 ドイツ語イディオム理解における困難性

以下、ドイツ語イディオム表現理解に関わる困難性を、日独対照の視点から、いくつかの類型に分けて、その原因について考える糸口としたい。

4.3.1 日独対照の視点からの類型論

日本語とドイツ語は、それぞれ系統の異なる言語族に属している。そしてまた、その言語体系も異なっている。そういった隔たりの大きい2言語を比較・対照するという場合、どのような方法および観点が可能であろうか。

認識論の立場からすると、極めて乱暴な言い方であることを承知でいうならば、われわれが認識する世界は人類にとって普遍的なものである。つまり同一の対象世界を認識していると考えることができる。しかし、その認識を言語化する際に、当該の人間が属している言語共同体によって、差異が生じてくるのである。そのような差異を生じる一番主な要因としては、おそらく当該の言語共同体が位置する地理的条件をあげることができるであろう。

意味成分分析、意味特徴に基づく意味論の立場からいうならば、意味成分、意味特徴のあるものは、おそらく普遍的なものであろう。それは、人間の世界認識のあり方を反映するものと考えてもよいだろう。しかし、その意味成分、意味特徴を組み合わせて、ある言語表現の意味とするという点においては、原則的に言語体系ごとに異なっているといえるだろう（言語記号の恣意性）。そのような差異を規定しているものとして、当該の言語共同体が位置している地理、歴史、文化といった要因がある。端的に言えば、当該言語共同体が外界のどのような点に関心を向けているかが、意味の体系化における差異を生む大きな要因であるといえよう。イディオム表現の基底にある比喩的イメージが由来する分野の相違もそのような関心の相違に基づいていると考えられる。以下では、イディオム表現の意味と内容を区別した上で、比喩的イメージを比較の第三項として、日独両言語における

イディオム表現を比較・対照し、類型化を試みる^{*4}。

4. 3. 2 ケース1：重なり合い（同一の比喩的イメージ）^{*5}

ドイツ語と日本語両言語において、イディオム表現が、ほぼ同じ比喩的イメージに依拠している場合は、当該イディオム表現が持っているイディオムとしての意味をほとんど問題なく理解できるであろう。そしてまた、発話状況と意図に沿って適切なイディオム表現を作り出し、用いることができる。たとえば、"Öl ins Feuer gießen"（火に油を注ぐ）、"die Kastanien aus dem Feuer holen"（火中の栗を拾う）、"ein Auge zudrücken"（目をつぶる）といったドイツ語のイディオム表現は、理解においてほとんど問題ない。実際の使用例として次に引用する新聞の論評記事においては、元々のイディオム表現が受け身の形で使われている^{*6}。

*4 比較・対照の視点からイディオム表現を類型化する試みとして、コラーとグラープのものを紹介することにしよう。

コラー（Koller 1974）による5つのタイプは、以下の通りである。

タイプ1：統語構造と語彙が互いに重なり合っている（翻訳上の等価）："auf großem Fuß leben - vivre sur un grand pied"（大きな足の上で生活する→贅沢三昧に暮らす）

タイプ2：統語構造は重なり合っているが、語彙は異なっている："die Katze im Sack kaufen - buy a pig in a poke"（井勘定で買う、青田買い）

タイプ3：イディオムとしての意味は類似しているが、統語、語彙が異なっている："kein Blatt vor den Mund nehmen - ta bladet fran munnen"（歯に衣着せず）

タイプ4：出発言語のイディオムとは全く異なる統語構造、語彙をもったイディオム："in den sauren Apfel beißen - swallow a bitter pill"（不愉快なことを引き受ける）；"bei jemandem ins Fettnäpfchen treten - trampa i klaveret"（気分を害する）

タイプ5：出発言語のイディオムに対応するものがない（パラフレーズ）："jemandem die kalte Schulter zeigen - faire grise mine à qn"（冷たくあしらう）

また、グラープ（Glaap 1979）は、次の4つのケースを区別している。

1. 出発言語と目標言語のイディオムが対応している："to hit the nail on the head - den Nagel auf den Kopf treffen"（核心をつく）

2. ことば通りには対応しないが、イメージが類似している："a storm in a teacup - ein Sturm im Wasserglas"（コップの中の嵐）

3. 異なったイディオム表現："to pull someone's leg - jemanden auf den Arm fallen"（足を引っ張る）

4. 対応するイディオムが存在しない："highbrow - intellektuell"（知的な）

*5 目標言語の表現形式が出発言語のそれと同一であることは、原理的にあり得ない。そうであるならば、2つの言語は同一言語体系に属するものであるといえる。目標言語の表現が持っている意味内容が、出発言語のそれと同一であるか、ほぼ同一であるかというケースが存在しているといえるだけである。つまり類型化は、イディオム表現が持っている意味内容を比較の第三項として行うことになる。文化的な要因を考慮することによって、さらに詳しい類型化を行うことができるであろう。本章における論述の重点は、ドイツ語を学習する日本語母語話者にとって、言語および文化の差異がドイツ語のイディオム表現の理解において、どのような影響を及ぼすかを、具体例で示していくことにある。

*6 特定のイディオム表現がどのように変形可能であるかを知ることは、重要である。この問題については、次のような論考を参照：Fleischer 1978, Kovenbach 1971, Koller 1974, Glaap 1979, Fleischer 1988。さらに本章の3. 4節を参照。

"Merkt denn keiner, wie da Öl in ein Feuer gegossen wird, das durch pure Fahrlässigkeit entzündet wurde? Hier die Hände in den Schoß legen, läuft auf die Einladung hinaus, auf diesem Feuer parteipolitische Suppen zu kochen". (Badische Zeitung, 2. 1. 1990: 1)

(全くの不注意から燃えだした火に油を注ぐことになるということに誰も気づかないのだろうか。ここで、手を拱いて事態を眺めることは、この燃えさかる火を好機とばかり、政党間の駆け引きに応じることになるのだ。)*7

イディオム表現を構成する主要素としての語彙が、ドイツ語と日本語において、いくらか異なっているとしても、それらの語彙が同一の意味場に属している場合には、やはりそれほど理解において困難性は生じない。たとえば、次の例における"von etwas die Finger lassen" (あるものから手を引く) である。

"Davon sollten übereifrige Bonner Politiker die Finger lassen." (Badische Zeitung, 10.1.1990: S.1)

(やみくもにことを進めようとしている政治家たちは、その件から手を引くべきだ。)

"von etwas die Finger lassen"というドイツ語のイディオム表現には「あるものから手を引く」という日本語の表現が対応する。指は手あるいは腕の一部であるので、手と指は同じ意味場を構成する。しかもドイツ語は"die Finger"となっていて、ひとつの指でなく複数の指ということになっているため、「手」であるという理解が無理なくおこなわれると考えることができる。

次の例における"etwas im Keim ersticken"には、日本語においては「あるものを芽のうちに摘み取る」というイディオム表現が対応する。ドイツ語では"ersticken" (窒息させる) という動詞が使われており、日本語の「摘み取る」とは異なっているが、結果的に、あるものの生命を断つという点において変わりはない。そして日本語、ドイツ語のいずれも"Keim" (芽) という語が、主要構成要素となっていることから、植物がイメージされている。それゆえに理解が容易であるといえよう。ただし、日本語のイディオム表現は、もっぱら否定的な評価をされる対象に対して使われるが、ドイツ語の表現は、例が示しているように、必ずしもそうではない。"Ausverkauf" (投げ売り) という語は、確かに、ネガ

*7 ついでながらいうと、この論評記事においては、台所の比喻が使われている。それは、まず、「火に油を注ぐ」というイディオム表現に触発されているといえる。このテキストにおいては、コノテーションが重要な役割を果たしている。このテキストにおいてはさらにもう一つのイディオム表現が現れている。すなわち"Hände in den Schoß legen" (手をこまねいている、座視する) である。

タイプな意味合いが大きいですが、ドイツ統一がなったあとにおけるかつての DDR 地域の経済を復興するための政策のひとつとして、民営化は、有効なものであったし、社会主義から資本主義へと移行したからには、ある程度必然的な方向であった。

"Dann folgte >kein Ausverkauf<, um jeden Gedanken an eine Privatisierung der Wirtschaft im Keime zu ersticken". (Die Welt, 9.1.1990: 2)

(いかなる投げ売りもあり得ないと言われたが、それは(DDR)経済を民営化するという考えを芽のうちに摘みとらんがためのものであった。)

イメージの重なり合いのもう1つの例は、ドイツ語の"über dem Berg sein"と日本語の「峠を越す(越える)」である。ドイツ語の表現の日本語訳は、直訳すれば、「山を越えた」となる。日本語の表現は「峠を越す」であり、山と峠という違いがある。しかしながら、山も峠も、いずれも同じ意味場、事項分野(Sachbereich)に属しており、日本語でも「山を越える」という表現も可能であるので、日独の表現は重なり合っており、容易に理解可能であろう。ただし、日本語の「峠を越す」を"über dem Hügel sein"と直訳的にドイツ語で表現しても、十分に表現意図、意味が伝わるかどうかは、断言できない。つまり努力、苦勞、安堵の度合いのニュアンスが正確に伝わるかどうかという問題が残ってはいる。

重なり合いの例として、もう2つばかり"eine Gänsehaut bekommen"と「鳥肌が立つ」、"wie Hund und Katze zusammen leben"と「犬猿の仲」をあげることができよう*8。前者については、日本語では「鳥」といって、一般的に表現しているが、ドイツ語では家禽でも鷺鳥と特定の種類をあげている。日本語では鷺鳥も家禽つまり鳥の一種として理解されると

*8 日本語の「犬猿の仲」というイディオム表現は、仲の悪いものの代表として「犬」と「猿」を挙げている。そしてドイツ語では「犬と猫」の関係が最悪のものとされていることがわかる。そうしてみると、日本のおとぎ話「桃太郎」では、「犬」と「猿」、「雉」が連帯して桃太郎に付き従って、悪者とされている鬼退治をすることになっている。他方、ドイツのおとぎ話グリム童話のひとつ「ブレーメンの音楽隊」では、「馬」と「犬」、「猫」、「鶏」が連帯して、盗賊をパニックにおとし入れ、すみかを乗っ取って、平和に暮らすということになっている。その登場人物の組み合わせは、納得できるものといえよう。日独いずれのおとぎ話においても、最悪の仲とされている動物が連帯して悪を排除するという点に、教訓が含まれているといえる。

思われる。鶏、鷺鳥も家禽に属するという点では、それほど大きな隔たりはない*9。

4. 3. 3 ケース2：異なり（異なった比喩イメージ）

第2のケースは、同一の意味内容を表現するのに、目標言語と出発言語において、イディオム表現がそれぞれ異なった比喩的イメージに依拠している場合である。日独両言語のイディオム表現についていえば、多くのイディオム表現がこのケースに属しているといえる。比喩的イメージの重なり合いがないために、この部類のイディオム表現は、理解するのが難しい。文化、歴史の違いによって、日本語母語話者にとって、ドイツ語のイディオム表現が依拠している比喩的イメージを理解するのが、極めて難しいのである。

たとえば、次のようなドイツ語のイディオム表現は、ことば通りの意味は構成原理に基づいて理解し得たとしても、そのイディオムとしての意味に到達するのは、それほど容易ではない。"jemandem einen Bären aufbinden"（誰かに熊を背負わせる→おおぼらを吹く）、"Eulen nach Athen tragen"（梟をアテネに運ぶ→無駄なことをする、屋上屋を架す）、"mit den Wölfen heulen"（狼と一緒にほえる→付和雷同）、"wie die Heringe stehen"（すし詰め状態）。

もちろん、このようなイディオム表現は、それがイディオム表現であるというある種のシグナルを有しているといえるだろう。しかしながら、そのシグナルをキャッチすることは、ドイツ語を学習する日本語母語話者にとってはたやすいことではない。ことば通りに理解してもいい通常の表現と、そうでないイディオム表現との間にある差が、極めて僅少である場合もあるからである。表現に含まれている名詞が単数か、複数かによって、イディオム表現かそうでないかが分かれる場合もある。次に引用する新聞の論評記事における"Dem Reformier Gorbatschow in den Arm fallen"という表現は、イディオム表現であるが、他方、その中の名詞"Arm"（腕）が複数形となった"in die Arme fallen"は、イディオム表現

*9 この重なり合いは、ペトロビッツ (Petrovic 1988) がおこなっているように、さらに細かく分けることができるであろうが、そのような下位分類は、インド・ヨーロッパ語圏においてのみ当てはまるものでもいえよう。

ペトロビッツは、重なり合いを、さらに細かく次の4つに分類している。

1. 全面的な等価："auf dem Pulverfaß sitzen - sjediti na buretu baruta"（火薬樽の上に座っている――触即発の状況にある）
2. ほぼ等価（形態統語的にいくぶんか異なっている）："mit leeren Händen - praznih ruku (leere Hände)"（空手で、手ぶらで）
3. ほぼ等価（語彙が部分的に異なっている）："Wo hast du denn deine Ohren?- Pa gdje su ti usi? (Wo sind dir denn die Ohren?)"（どこに耳を付けているのか？耳がないのか？）
4. ほぼ等価（形態統語、語彙の両面でいくぶんか異なっている）："den Mund halten- drzati jezik za zubima (die Zunge hinter den Zähnen halten)"（口を閉ざす、口をつぐむ）。

ではなく、ことば通りに理解すべき表現なのである。日本語においては、表現としては単数と複数を区別することがないため、そのようなシグナルに気づきにくい。さらに、上のイディオム表現に対応する日本語の表現は、「(誰かの) 足を引っ張る」ということになり、同じ身体部位に関する語を構成要素としているとはいえ、日本語におけるイディオム表現は別の身体部位に関わっているということ、つまり異なった比喩的イメージに依拠しているため、上のドイツ語のイディオム表現を理解するのがいっそう難しいということになる。

"In dieser Ungleichzeitigkeit der Entwicklung lauern Gefahren, stecken aber auch Chancen. Gefahren: vor allem die Gefahr, daß die rechten Gegner der Perestrojka, die der alten Gleichschaltung im Block nachtrauern und wegen der Auflockerung nicht nur militärische Risiken befürchten, sondern auch eine Auflösung des russischen Reiches, **dem Reformler Gorbatschow in den Arm fallen**. Chancen: zumal die Chance, daß der Schwung der osteuropäischen Umgestaltung auch seiner eigenen Umgestaltung neuen Antrieb schafft". (Die Zeit 20.12. 1989: 1)

(それぞれの国で状況が異なったように推移しているということは、危険を孕んでもおり、また変革のチャンスでもある。危険という意味は、とりわけ、ペレストロイカ（民主改革路線）に反対している右派勢力は、かつて東側ブロックにおいて成立していた軍事的同調がゆるんでしまうことは、軍事的に危険な事態をもたらすと考えているだけでなく、ロシア帝国が解体してしまうことを恐れているが、この右派勢力が**改革推進者ゴルバチョフの足を引っ張る**かも知れないということである。チャンスというのは、いうまでもなく、東ヨーロッパにおける改革への動きが、ロシアそのものの変革を新たに推し進めるだろうということである。)

4. 3. 4 ケース3：偽の友だち（同じ比喩的イメージであっても意味内容が異なる）

目標言語におけるイディオム表現が、比喩的イメージの点で、表現として対応するイディオム表現を出発言語において有していても、両言語におけるイディオムとしての意味内容が異なっている場合、目標言語におけるイディオム表現の意味は、誤解されやすい。このようなケースは、「偽の友だち」（faux amis, falsche Freunde）として知られており、数多くの論文がこのテーマを取りあげている。ここでは、2, 3の例を挙げるにとどめておく。

ドイツ語の"**den Gürtel enger schnallen (müssen)**"というイディオム表現は、"in den Ausgaben zurückhalten"（出費を切りつめる）（Friederich 1976: 173）あるいは、"sich in seinen

Bedürfnissen einschränken" (必要なものを制限する) (DUDEN 1989: 643) という意味である。日本語においても、表現上ほぼこれに対応するイディオムがある。すなわち「ふんどしの紐を締め直す」あるいは現代風にいえば「ズボンのベルトを締め直す」という言い回しである。日本語の言い回しは、固い決意でいることを意味しており、ドイツ語のイディオム表現の意味とは異なっている。

また、次の新聞論評記事にある"**Oberwasser bekommen**"も、偽の友だちであり、日本語母語話者が誤解しやすい言い回しである。

"Mit dem plötzlichen lauten Nachdenken in der Union darüber, wie die sozialen Folgen der Maueröffnung zu verkraften sind, **bekommt** der SPD-Vize schneller als gedacht wieder **Oberwasser**". (Badische Zeitung, 15.12. 1989: 2)

(壁の開放がもたらす社会的な結果をどのようにしたら克服できるか、よくよく考えてみるべきだという声が、連立与党内部でも急に大きくなってきた。それによって、社会民主党副党首 (ラフォンテーネ) は、思ったよりも早く、有利な立場になってきた。)

"Oberwasser bekommen" (上から水を得る→有利な状況になる) という表現は、おそらく、南ドイツの各地で多く見られた粉挽きのための水車と関係があるだろう。つまり、上から水が流れてくると、水車は勢いよくまわるということに、この表現の意味は由来していると考えられる。日本語において意味的に対応しているイディオム表現は、ドイツ語のイディオム表現とは異なって、海上交通に由来しているものである。すなわち、「追い風を受ける」である。

ドイツ語の"**Oberwasser bekommen**"というイディオム表現を理解する場合において問題なのは、"**Oberwasser**"という単語、とりわけこの複合語の前半部"**Ober-**"である。"**Ober**"は、「上の方」という意味で理解されている場合が多い。従って、「上の方からくる水」と理解される可能性が大きい。つまり、上の方から大量の水を得る、頭の上から水をかぶる、頭から冷や水を浴びる、という理解の過程をたどることになる。そして、ドイツ語のイディオム表現が持っている意味とは、ほぼ反対の意味で理解してしまうことになる。

本来は、物事が有利な状況になるという意味の言い回しであるのに、日本語母語話者は、頭から冷や水を浴びるという、物事の盛り上がりを沈める、意気消沈させるという反対方向の意味で理解してしまう。頭を冷やすための水であると理解されてしまうことになる。

ドイツ語ではそういう場合、"**eine kalte Dusche bekommen**" (冷たいシャワーを浴びせられ

る)と言う。他方、この日本語の「追い風を受ける」というイディオム表現に対応する "Rückenwind bekommen" という表現もドイツ語には存在している。この場合には、重なり合いということで、理解における問題はない。「頭から冷や水をかける」という日本語の言い回しを "jemandem auf den Kopf Wasser gießen" という風に、ドイツ語で直訳的に表現した場合はどうであろうか。冷たいシャワーというのは、いわば暗喩的な表現ではあるが、それほど誤解は生じないであろう。

ドイツ語のイディオム表現 "wie die Katze um den heißen Brei herumgehen" も、ドイツ語を学習している日本語母語話者にとっては、その表現に災いされて、ドイツ語のイディオム表現が持っている意味とは全く異なる意味理解をしてしまう可能性が大きい。このイディオム表現には、"Katze" (猫)、"heiß" (熱い)、"Brei" (粥) という語が含まれていることから、日本語母語話者がイメージするのは、熱いお粥を食べようにも食べることができないでいる猫であろう。猫はまさに「猫舌」だからである。そして、思いつくのは、「あつものに懲りてなますを吹く」というイディオム表現であろう。しかし、この日本語のイディオム表現は、「用心深い」という意味に重点が置かれており、ドイツ語のイディオム表現が持っている意味とはズレている。ドイツ語のイディオム表現が持っている意味は、"nicht wagen, eine schwierige Sache anzupacken" (Friederich 1976:64)あるいは "nicht wagen, etwas Bestimmtes im Gespräch zur Sprache zu bringen" (DUDEN 1989: 282)、すなわち「困難事に取りかかる勇気がない」あるいは「ある特定のことはっきりという勇気がない」ということであり、決断力に欠けた優柔不断な態度を意味している。「遅疑逡巡」ということである。

4. 3. 5 ケース4：非対応（出発言語には存在しない比喩的イメージ）

目標言語のイディオム表現に対応するイディオム表現が出発言語に存在しない場合、誤解する可能性は存在しない。学習者は、目標言語のイディオム表現を理解する手がかりを何一つ有していないからである。学習者は、目標言語のイディオム表現をそれとして学習するしかない。あとの節で紹介するように、ドイツ語のイディオム表現に関していえば、この部類に属するものが極めて多いと推測される。ということは、学習するべきイディオム表現が数多いということになる。そのようなイディオム表現については、パラフレーズしながら、意味を説明するしかないということになるろう。

たとえば、次の引用例における "Kein Hahn kräht nach ihnen" というイディオム表現は、"niemand kümmert sich um jemanden oder etwas, fragt nach jemandem oder etwas" (DUDEN

1989: 651) (誰も、ある人のことを(あることを)構わない/尋ねたりしない) という意味であるが、日本語にこれに相当するイディオム表現はなさそうである。

"Iwanoff: 'Jahr für Jahr sterben Millionen sinnlos als Opfer von Epidemien und Naturkatastrophen. Und da sollen wir davor zurückschrecken, einige Hunderttausend dem sinnvollsten Experiment der Geschichte zu opfern? Ganz zu schweigen von den Legionen jener, die an Unterernährung und Tuberkulose, in den Kohlengruben und Quecksilberminen zugrunde gehen. **Kein Hahn kräht nach ihnen**, aber wenn wir hier ein paar tausend objektiv schädliche Leute umlegen, **steht den Humanisten in der ganzen Welt der Schaum vor dem Mund**". (Die Zeit, 12.1. 1990: 44)

(イワーノフ:「くる年くる年、何百万もの人が疫病や災害の犠牲者として意味なく死んでいく。それなのに、いく十万ほどの人間を最も有意味な歴史の実験の犠牲にすることに尻込みするべきだということか。栄養不良や結核、炭坑や水銀鉱山で死んでいく大量の人間については言わずもがなのことだ。そういった具合に死んでいく人たちのことなど誰一人としてかまいやしない。」なのに、ここでいく千人かの、誰が見ても有害な人間を殺したとすると、全世界中の人道主義者たちが怒り狂ったかのように非難の声を上げるのだ。)

出発言語(ドイツ語学習をしている日本語母語話者にとっては、日本語)において対応する比喩的イメージが存在しない場合でも、比較的理解しやすいイディオム表現もある。たとえば次の引用における"den Hals brechen"(首を折る)がそうである。誰かの首を折るということは、その人間の生命を断つということで、ここでは使い捨てのビンの首を折るという掛詞になっているが、その言葉遊びが分からなくても、イディオムとしての意味を理解するのはそれほど難しくはない。

"Die von heute an gültige Pfandverordnung hat **den Getränkeflaschen aus Kunststoff den Hals gebrochen**. In den Filialen aller großen Supermarktketten befanden sich schon seit Tagen keine Einweg-Getränkeflaschen aus Plastik mehr, erklärte Klaus Warzecha vom Hauptverband des Deutschen Lebensmittel-Einzelhandels in Bonn". (Badische Zeitung, 1.12. 1989)

(今日から施行されるデポジット法は、人工素材からなる飲料用ビンの命を絶った。すべての系列スーパー各支店では、すでに数日前から、プラスチック製の使い捨てビンはもはや見られなくなっていると、ドイツ食料品小売業組合本部のクラウド・

ワルツェッヒャは、宣言した。)

次の新聞論評記事に出てくる"jemandem die Felle davonschwimmen" (皮が流れてしまう) というイディオム表現も、比較的理解しやすい。ただし、この場合は、皮なめし業についていくらか知っている必要がある。皮なめし職人にとって、時には皮が川の水に流されてしまうこともあるだろう。しかし、そうしばしばあってはならないことである。皮は、製品であり、生活がかかっている。皮は、極めて重要なものである。その重要な皮が流れてしまうということは、貴重なものを失うという意味になる。

"Die deutsch-deutsche Entwicklung ist zum Selbstläufer geworden, und während der Westen immerhin vermerken kann, daß sich die Dinge aus seiner Sicht ganz vorteilhaft entwickeln, muß die UdSSR zur Kenntnis nehmen, daß **ihr die Felle davonschwimmen**: Nicht nur von einer EG-Mitgliedschaft der DDR ist inzwischen die Rede, sondern auch von ihrer Einbeziehung in die Nato". (Badische Zeitung, 31.1. 1990: 1)

(東西ドイツの関係の展開は、一人歩きし始めた。そして西側諸国は、事態が自らに有利に展開していくと見ている。一方、ソ連は、**貴重なものを失う**ということを経験せざるを得ない。つまり、事態の推移の中で、DDR をヨーロッパ共同体の一員に加えるということだけでなく、NATO に編入することも話題になっているのである。)

しかしながら、次のコメント記事に出てくる"jemanden auf die Palme bringen" (誰かを椰子の上に上らせる) というイディオム表現が、どうして"jemanden wütend machen"(DUDEN 1992: 534) (誰かを激怒させる) という意味になるのか、日本語母語話者にとっては、さっぱり分からない。そもそもドイツには椰子の木などないので、なおさらである。辞典には"Wut und Ärger lassen einen Menschen auffahren, hochgehen" (人が腹を立て、怒り狂うと、頭に來たり、気が高揚する) (DUDEN 1992: 534 参照) と説明されている。その説明では"auffahren"、"hochgehen"という語が使われている。人が怒り狂うと、高いところ、高いものに駆け上るということなのであろう。そして「高い」と、怒りで「熱くなる」ということで連想されるのが、熱帯に育つ椰子の木ということなのであろうか。ともかくも椰子の木にのぼることが、どうして激怒するという意味になるのか、よくは分からない。

"Das Gesundheitsreformgesetz, so meinen sie mit Rückendeckung des Bundesgesundheitsministeriums, verbiete eine weitere Vergütung. **Das hat die Zahnärzte auf die Palme gebracht**. Sie sprechen von 'Enteignung' und wollen sich das Geld nun beim Patienten

selbst holen". (Badische Zeitung, 13/14.1.1990)

(歯科医師たちは、健康保険改正法はもう一つのうまみを禁じることになると、連邦労働省に後押しされて、考えている。そのため、歯科医師たちは、激怒したのだ。彼らは「財産没収だ」といい、その没収された分の金を今度は患者たちから取り戻そうとしている。)

出発言語に対応する比喩的イメージが存在しないため、理解が難しいイディオム表現の例を、さらにあと2つばかりみておくことにしよう。

次に引用する論評記事に出てくる"jemandem einen Korb geben" (誰かに籠をあげる) は "jemandes Heiratsantrag ablehnen"(DUDEN 1992: 409) (誰かの求婚を断る) という意味であるが、ここでは記事を読んでいけば分かるように、結婚の申し込みを断っているわけではない。フライブルク市長選に立候補して欲しいという要請を断ったということである。

"Der 44 Jahre alte Paderborner Schul- und Kulturdezernent Ulrich Westerhagen hat **den CDU-Spitzen gremien endgültig einen Korb gegeben**: Er steht nicht mehr als Kandidat des bürgerlichen Lagers für die Oberbürgermeisterwahl im September zur Verfügung". (Badische Zeitung, 5.2.1990, Freiburger Zeitung: 1)

(パーダーボルン市の学校および文化問題担当官であるウルリヒ・ウェスターハーゲン (44 歳) は、CDU 首脳部に最終的に拒否の回答をした。彼は、来る9月の市長選に CDU 陣営の候補者にはならない。)

"jemanden hinters Licht führen" (誰かを明かりの後ろに連れて行く) というイディオム表現は、ことば通りに理解しても、それほど間違いではないと思われるが、いったい何のために明かりの後ろに連れて行くのかがはっきりしない。ドイツ語の表現が持っているイディオムとしての意味は"täuschen" (欺く、だます) であるが、どうしてそうなるのだろうか。日本語あるいは日本人的な感覚では、明かりの後ろに連れて行くということは、人目を避けるということであり、何か悪巧みに関する話をするのではないかと考えてしまう。しかし、ドイツ語では、明かりの後ろに連れて行くということは、暗がりに連れ込むということであり、そこで何が行われても見えないということから、だますという意味になっているようである (DUDEN 1992: 454 参照)。

"Der SPD-Landtagsabgeordnete Peter Reinelt äußerte den bösen Verdacht, daß **die Geldempfänger das Land hinters Licht geführt haben**". (Der Spiegel, 3/1990: 14)

(SPD 州議会議員ペーター・ライネルトは、その金銭を受け取った者は、州を欺

いたのではないかとの疑念を表明した。)

4. 3. 6 ケース5：ことば通りの翻訳

出発言語においてはイディオムとしての意味を持っている表現を、ことば通りに目標言語に翻訳する場合はどうであろうか。その表現が目標言語においてイディオム表現としての意味を有している場合は、重なり合いとしてすでに上で述べた。目標言語においてイディオムとしての意味を有していない表現であった場合は、目標言語話者は、その表現をことば通りには理解するであろうが、当然ながらイディオムとしての意味は理解できないことになる。たとえば、日本語の言い回し「出る杭は打たれる」をドイツ語にほぼことば通りに翻訳した"Der Nagel, der aufragt, muß runtergehämmert werden" (飛び出している釘は、打ち込まなければならない) (Der Spiegel, 51/1989: 134)や、「井の中の蛙」をドイツ語訳した"Frosch im tiefen Brunnen" (深い泉の中の蛙) (Der Spiegel, 14/1989: 191)のような表現である。こういったことば通りの翻訳は、エキゾチックな感じを与えるであろうが、正確にコミュニケーションの意図が伝わるかどうか、疑わしい。後者についていえば、ドイツ語には"Froschperspektive" (蛙の見方) という語が存在しており、これが「井の中の蛙」に対応している。

本章はドイツ語のイディオム表現の理解における困難性について論述しているので、こういった第5のケースは考察の対象から除外してもいいだろう。

4. 4 変形

ドイツ語イディオム表現の理解が難しい理由として、イディオム表現というのは、本来的には、その表現が固定的であるのが言語的特徴のひとつとなっているにもかかわらず、実際の使用例を見ると、表現がさまざまに変形されて現れている場合が多いということが挙げられる。日本語は学習者の母語であるので、そのイディオム能力はかなり大きいものであり、変形されているイディオム表現であっても、もとの形がどのようなものであるかを確定し、その意味を理解することは、それほど難しくはないといえる。たとえば、「箸にも棒にもかかる」という表現が、「箸にも棒にもかからない」を肯定的に表現したものであることを理解することは、容易であろう。そもそも多くのウィットや駄洒落の落ちが、そのような慣用的な言い回しを言い換えることによって成り立っていることに鑑みても、このことは納得できる。

しかしながら、目標言語におけるイディオム表現については、それが様々な形で現れて

いると、理解において困難性が增大することになる。まずは、目にしている表現、聞いた表現がそもそも元来はどのようなものであるかを確定しない限りは、意味が理解できない。たとえば、次の引用にある"**Ist der General Noriega wirklich das Porzellan wert, das George Bush jetzt zerschlägt?**" (本当にノリエガ将軍は、ジョージ・ブッシュが現在ぶち壊そうとしている陶器に値するであろうか) という文章は、"**Porzellan zerschlagen**" (陶器を砕く→貴重なものを台無しにする) というイディオム表現を基本構造とした関係文となっていることが読みとれない限り、意味は了解できないことになる。

"Das ist nämlich Beifall für die Anwendung des Faustrechts in den Beziehungen zwischen den Staaten. Zu leiden haben darunter auch unschuldige Zivilisten, die zwischen den militärischen Fronten zu Tode kommen. **Ist der General Noriega wirklich das Porzellan wert, das George Bush jetzt zerschlägt?** In einer Zeit allgemeiner Friedfertigkeit begeht der US-Präsident mit seiner Interventionspolitik gegenüber Panama einen aufsehenerregenden Stilbruch". (Badische Zeitung 21.12. 1989: 1)

(それはすなわち外交関係においてげんこつをふるうことに賛成するものである。現実にそのもとで苦しみ、軍事的前線の間で死んでいくのは、罪のない一般市民である。本当にノリエガ将軍は、ジョージ・ブッシュが現在ぶち壊そうとしている陶器に値するであろうか。世界中が平和を求めている時代にあって、パナマに対する介入政策によって、アメリカ大統領は、一般的外交スタイルを破壊し、世界の耳目を引きつけることになるのだ。)

"Porzellan zerschlagen" (陶器を破壊する) というこのイディオム表現は、次にあげる2つの新聞論評記事のうち前者においては動詞が"**zerbrechen**"で置きかえられている。後者では、動詞が"**lädieren**"で置きかえられているだけでなく、"**Porzellan**"の前に形容詞"**außenpolitisch**"が、あとに"**der Bundesrepublik**"という名詞が付け加えられている。そして、動詞には"**mutwillig**"という副詞が付加されて、変形の度合いが強まっている。

"Seit Jahren müssen der Bundesaußenminister und gelegentlich sogar der Bundespräsident im Ausland dafür sorgen, daß **das Prozellan, das der Kanzler zerbrochen hat,** wieder geflickt wird". (Badische Zeitung, 14.3. 1990: 4)

(何年も前から、連邦外務大臣と時には連邦大統領自らが外国に出向いて、連邦首相が壊した陶器を再び継ぎ合わせることに尽力せざるを得なかったのである。)

"Aber man muß schon die Abgebrühtheit der im Bonner Treibhaus werkelnden

Staatskünstler besitzen, um sich der zur Schau getragenen Erleichterung anzuschließen. Denn das darf doch wohl nicht wahr sein, daß zuerst einmal **das außenpolitische Porzellan der Bundesrepublik mutwillig lädiert** und der Außenminister vom Kanzler öffentlich bloßgestellt wird, dann **die verbündeten und befreundeten Regierungen vor den Kopf gestoßen werden** und schließlich eine Bonner Koalitionsrunde befindet, **jetzt sei alles wieder in schönster Ordnung**". (Badische Zeitung, 7.3. 1990: 1)

(しかしながら、ボンにある栽培ハウスにいる干からびた国家造形家たち並の厚顔無恥を供えていてこそ、これ見よがしの安堵に同調できるというものだ。**連邦政府の貴重な外交上の陶器は思いっきりよく壊される。**外相は首相によって公然とさらしものにされる。**そして同盟をくんでいる諸政府、友好関係にある政府は不愉快な思いをする。**そして、とどのつまりは、連立政党間の話し合いがもたれ、**すべてが何事もなかったように取りつくろわれる。**そういったことが本当であるとは、とてもいえない。)

次の論評記事に出てくる "Kohls Wanderungen durch die Fettnäpfe der internationalen Politik haben zuerst Erstaunen, dann Befremden und schließlich offenen Ärger hervorgerufen" という文構造の基礎となっているのは、"bei jemandem ins Fettnäpfchen treten: zu jemandem etwas Kränkendes sagen" (Friederich 1976: 124) (誰かを傷つけるようなこと、気分を害するようなことをいう) というイディオム表現である。

"Helmut Kohl hat offensichtlich nicht begriffen, daß das Grenzthema seit dem Umsturz in der DDR eine ganz neue politische Qualität bekommen hat und daß sich die Verbündeten nicht mehr mit Zitaten aus Lehrbüchern des Völkerrechts abspeisen lassen. **Kohls Wanderungen durch die Fettnäpfe der internationalen Politik** haben zuerst Erstaunen, dann Befremden und schließlich offenen Ärger hervorgerufen". (Badische Zeitung, 3./4. 3. 1990: 1)

(明らかにヘルムート・コールは分かっていないと思われるが、国境問題は、DDRが変革されて以来、全く新しい政治的な性質の問題となったのだ。もはや同盟国は、国家主権に関するありきたりの教科書的な文句で満足して引き下がるわけにはいかないのである。**コールは、国際政治の舞台上で次々と相手国に不愉快な思いをさせてきている。**そのことは、当初は人々をびっくりさせ、次にはわけが分からないと疑念を抱かせ、とどのつまりはあらわな怒りを引き起こしているのである。)

変形の最後の例となるが、次の引用に出てくるイディオム表現は、かなり込み入った操作を経ている。当該の文は、"mit dem Zaunpfahl winken"すなわち"etwas grob andeuten, einen unmißverständlichen Hinweis geben"(Friederich 1976: 554) (ぶっきらぼうに指示する、誤解の余地がない指示を与える) という意味のイディオム表現、あるいは"ein Wink mit dem Zaunpfahl"すなわち"ein unmißverständlicher Hinweis" (Friederich 1976: 554) (誤解の余地のない指示) というイディオム表現に基づいている。

"...Die Zaunpfähle fliegen dem Bundeskanzler in diesen Tagen regelrecht um die Ohren. Hatte sich der amerikanische Präsident Bush in Camp David bei der Forderung nach einer verbindlichen Anerkennung der Oder-Neiße-Grenze noch vergleichsweise zurückhaltend geäußert, so hat der französische Außenminister Dumas jetzt in Berlin **Klartext gesprochen.** Die Bundesregierung möge endlich ihre Hinhaltetaktik aufgeben, so lautet die Botschaft aus Paris. Niemand in Bonn sollte davon ausgehen, da habe man es nur wieder mit einem **Alleingang der schnell beleidigten Franzosen**^{*10} zu tun: Was Dumas gesagt hat, ist die Meinung auch der Amerikaner, Briten, Italiener, Niederländer, Belgier, Skandinavien - und der Nachbarn im Osten. Um solche Signale zu überhören, bedarf es schon ganz ausgeprägter Dickfelligkeit".(Badische Zeitung, 2.3. 1990: 1)

(ここしばらく前から、定期的に明白なシグナルが連邦首相の耳もとを飛び交っている。アメリカ大統領ブッシュは、キャンプ・デイビッドで、オーダー・ナイセ・国境線を承認することが必然だということをつめらいがちに要請したが、フランス外相デュマはこのたびベルリンで明言した。連邦政府は、いまこそ小出しの政策を放棄すべきだ、というのが、パリからのメッセージである。ボン政府首脳たちは、またぞろすぐにむくれかえったフランス人の独断行だと考えてはならない。デュマが言ったことは、また、アメリカ、イギリス、イタリア、オランダ、ベルギー、スカンジナビア3国、そして、東側隣国の考えでもあるのだ。そのようなシグナルを聞き捨てにするには、まったくもって鉄面皮といってもいいほど面の皮が厚くなければならないであろう。)

*10 この表現は、すぐ次の節で取り上げるイディオム表現"die Attitüde der beleidigten Leberwurst" (むくれたレバー・ソーセージの態度) を変えたものである。フランス人が「レバー・ソーセージ」にたとえられているのである。"die Attitüde der beleidigten Leberwurst" (むくれたレバー・ソーセージの態度) というイディオム表現の意味機能については、第3章で詳しく取り扱っている。

4.5 文化－歴史的な違い

日独の文化、歴史、経済、政治等の違いといった、そのような事情を踏まえたイディオム表現は、理解するのが極めて難しい。たとえば、例を挙げると、次の引用にある"die Attitüde der beleidigten Leberwurst" (むくれたレバー・ソーセージの態度) という言い回しである。この表現の意味は、辞典によると "aus nichtigem Anlaß beleidigt tun, schmollen"(DUDEN 1998: 937)すなわち「些細なきっかけで気分を害されたという振る舞いをする、むくれる」というものである。共時的な視点からは、ドイツ語のイディオム表現とその意味とを対応させて記憶にとどめればいい、ということになるだろうが、それだけではドイツ語学習は底が浅いものとなってしまい、また記憶にとどめにくいだろう。学習効果を上げるためには、どのような経緯でこのような意味となるのかを、たとえば、レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92)などで調べて了解しておくことが必要となるだろう。

"Wir müssen uns alle miteinander sagen, daß Überheblichkeit ebensowenig angebracht ist, wie **die Attitüde der beleidigten Leberwurst**". (Badische Zeitung, 17.11. 1989: 5)

(われわれはみんな互いに言いきかせなければならない。傲慢な態度も、むやみにむくれた態度も、いずれもふさわしいものではない、と。)

ソーセージというものを日本人が知るようになったのは、それほど昔のことではないだろうと思われる。日本に西洋の食文化が取り込まれるようになってからであろう。故に、どのような種類のソーセージがあり、どのようなソーセージが西洋で好まれるかといったことについては、それほど知られていない。上の引用に現れている"die Attitüde der beleidigten Leberwurst"というイディオム表現の意味が理解しにくいのは、そのような事情も絡んでいる。

似たようなことが、次の引用に現れている"sich nicht die Butter vom Brot nehmen lassen" (パンからバターを取らせない) という言い回しについてもいえる。日本人がバターやパンを知るようになったのは、16世紀以後であり、日常的にバターやパンに接するようになったのは、第2次世界大戦後の最近である。従って、ドイツ語圏で"Butter"がどのような意味合いをもっているかについて知るところは、それほど多くはないといえよう。次の引用については「おいしいところ」という日本語訳を与えたが、パンを食べる際にはバターはなくてはならないと考えられているため、それがなければ、せっかくのパンも味が落

ちるということになる。"jemandem ist die Butter vom Brot gefallen"（誰かのパンからバターが落ちた→がっかりする）という言い回しは、まさにそういった意味である*11。

"Der FDP-Vorsitzende Lambsdorff sprach sich für eine Fortsetzung des gegenwärtigen Regierungsbündnisses in Bonn nach der Bundestagswahl im Dezember aus. Die Koalition lasse zwar gewiß manche Wünsche offen, doch könne man in ihr arbeiten. Als Voraussetzung nannte er Fairneß im Umgang und in der gemeinsamen Teilhabe an gemeinsam erzielten Ergebnissen. Sollte sich die CDU anmaßen, **die Ergebnisse der Deutschlandpolitik allein ihrem Konto gutschreiben zu wollen**, werde die FDP dies nicht hinnehmen. **'Wir lassen uns die Butter nicht vom Brot nehmen,** ' unterstrich er". (Badische Zeitung, 8.11. 1990: 1)

(FDP 党首ラムスドルフは、12月に行われる総選挙後も、これまで通り、ボンにおいて政権同盟を継続することを表明した。連立政権については、確かにいくつか望むべきことは存在するが、それなりに政治を行うことはできる。連立をくむ前提としては、まずフェアなつきあいということである。そして、共同で達成した成果を共に分け合うということである。CDUがドイツ統一に関わる政治の成果を自分たちだけで成し遂げたのだというのであれば、FDPはそれを甘受するものではない。「おいしいところだけをとるがままにさせることはしない」と強調した。)

"Er schwimmt wie eine bleierne Ente"（彼は鉛のあひるのように泳ぐ）という文は、直喩的な言い回し"wie eine bleierne Ente"（鉛のあひるのように）を含む。この意味は日本語でいえば「金づち」ということである。金づちは、家屋建築、大工仕事になくてはならない道具であり、日本でも古くから使用されている。だから、金づちが水に沈むことは誰にでも容易に理解できる。他方、日本では、たとえば、ドイツやオーストリアにおけるほど、あちこちであひるや鴨を見かけることはない。したがって「鉛のあひる」という直喩は、それほど馴染みがない。しかし、"Er schwimmt wie eine bleierne Ente"という文は、確かに日本語とは違う領域に由来する比喩的イメージを含んでいるにもかかわらず、比較的理解しやすいのではないだろうか。鉛のあひるであれば、すぐにも沈んでしまうだろうということは、明らかであるからである。

*11 日本語における「バター臭い」（西洋くさい）という言い回しは、現在では死語であるといえるようであるが（加藤 139 頁）、バターがヨーロッパ由来であることに依拠した表現である。

現在のドイツ語圏文化およびそれを取り巻くヨーロッパ文化が古代ギリシャおよび古代ローマの文化を基礎としていることは、周知のことであろう。他方、日本文化は、圧倒的に中国文化の影響のもとに発達してきた。そのことは、日本語の展開にも大きな影響を与えてきている。そのような文化的な隔たりがドイツ語のイディオムを理解する際にも、大きな困難性を生じることも多い。なぜならば、ドイツ語のイディオム表現には、古代ギリシャやローマの神話や、物語、逸話等に依拠しているものが相当数あるからである。とりわけ、固有名詞や、歴史的イベントを背景にしているイディオム表現について、そのことはあてはまる。たとえば、次の引用に見られる "**Herkulesarbeit**" (ヘラクレスの仕事)、"**Augiasstall**" (アウギアスの牛小屋)、といった表現である。これらの表現は、ギリシャ神話について知らなければ、十全な意味の理解を取り付けることは難しいといえよう。もちろんそれらの表現に「果てしのない艱難辛苦に満ちた仕事」、「汚れに汚れた牛小屋」という意味を対応させるだけでいいともいえようが、ドイツ語学習を深めるためにはやはりギリシャ神話について知っておくことも必要であろう。

"Aber wer Modrows Regierungserklärung gehört hat, der erkennt auch, welche **Herkulesarbeit** auf den wartet, **der den Augiasstall** zerstörten Vertrauens, zerrütteter Wirtschaft, beschädigter Institutionen **auszumisten versucht**. Diese Aufgabe übersteigt die Kräfte eines einzelnen. Sie hat ein wahrhaft erdrückendes Gewicht". (Badische Zeitung, 18./19. 11, 1989: 1)

(モドロウの所信表明演説を聞いた者は、よく理解しただろうが、失われた信頼、がたがたになった経済と制度という **アウギアスの牛小屋の大掃除**をしようとする者を待ちかまえているものは、**際限のない大仕事**であるのだ。その課題は、一個人の力ではどうしようもないものであり、本当に一人の人間など簡単に押しつぶしてしまふほど重いものである。)

ヨーロッパの歴史においてどのような連関でカノッサという地名が登場するのか、それを知らないでは、次の引用に出てくる "**den Gang nach Canossa**" (カノッサ行き) の意味を理解することはできない。辞典によると、この言い回しの意味は "**eine schwerfallende, aber von der Situation geforderte Selbsterniedrigung auf sich nehmen; Kanossagang = demütigender Bußgang**" (DUDEN 1989: 808)、すなわち「しぶしぶ、状況からそうせざるを得ない自己卑下を引き受けること。カノッサ行き=自らをおとしめる悔悟の行脚)」ということになっている。

"Ullman: 'Wir nehmen nichts zurück von dem, was wir gesagt haben' - **im Büßegewand den Gang nach Canossa antreten**, so wie es Bonner Regierungskreise Hans Modrow empfohlen haben, nein, das wollten die Minister auf gar keinen Fall". (Badische Zeitung, 15. 2. 1990: 3)

(ウルマン:「われわれが言ったことのひとつとして取り下げることなどしない。」
—「**懺悔の衣を着てカノッサへと旅立つ**ことを、ボンの政府筋はハンス・モドロウに勧めた。いや、そういったことは、われわれの大臣たちは、決して思っていなかったのだ。)

以上見てきたようなイディオム表現は、ヨーロッパの文化や歴史に関する知識を前提としている。従って、そのような知識を有している場合は、それらのイディオム表現の意味を理解することは比較的容易であるといえよう。逆に、ない場合は、理解が極めて難しいということになる。

視点を変えていけば、イディオム学習は、イディオムを通して、ドイツ文化、ドイツの歴史、そしてヨーロッパの文化と歴史についての知識を深めるための、有効な学習素材でもあるということになる。ドイツ語学習におけるランデスクンデの重要性を裏付けるものでもあるというのが、筆者の考えである。

4. 6 おわりに

ドイツ語を学習する日本語母語話者にとって、ドイツ語のイディオム表現を理解する際に生ずる困難性は、主として比喩的イメージの違いにあるという観点から、5つの類型に分けて、具体的な使用例を提示しながら、論述してきた。以下では、これまでの論述を補強する目的で、筆者が行った小規模な調査結果について報告しておくことにする。

J・ブッシュャ『ドイツ語練習帳』(Deutsches Übungsbuch) (Buscha 1979) には、100の漫画絵が提示されて、それを見て思いつくイディオム表現をあげなさいという練習問題が

ある^{*12}。これら 100 のイディオムに関して、キューネルトによると、ポーランド語には 31 の対応するイディオム表現があり、37 については対応する表現が存在せず、32 のイディオム表現については同一のコミュニケーション意図（意味）を伝えるのに、全く別のイメージが用いられているという（Kühnert 1985: 224）。

筆者の判断によると、これら 100 のうち 9 つに関してのみ、日本語には対応するイディオム表現がある。33 については対応するイディオム表現が存在していない。58 に関しては、別の比喩的イメージが用いられている^{*13}。表現としてほぼ対応するイディオム表現が日本語にあるものは、以下の 9 つである。"Perlen vor die Säue werfen"（豚に真珠）、"sich an einen Strohhalm klammern"（藁にもすがる）、"nach jemandes Pfeife tanzen"（笛吹けど踊らず）、"jemandem die Pistole auf die Brust setzen"（胸に拳銃を突きつける）、"den Kopf in den Sand stecken"（頭隠して尻隠さず）、"jemanden an der Nase herumführen"（牛耳る）、"die Nase hochtragen"（鼻が高い）、"die Ohren spitzen"（聞き耳を立てる）、"jemaden mit offenen Armen aufnehmen/empfangen"（両手を広げて歓迎する）。

訳として付記した日本語のイディオム表現が示しているように、対応しているといっても、ドイツ語とはいくぶん異なる比喩的イメージ、あるいは事項分野に関係している。"nach jemandes Pfeife tanzen"は、中立的な表現であるが、日本語の言い回しは「笛吹けど踊らず」と否定的な表現となっている。また、"jemanden an der Nase herumführen"には「牛耳る」を対応させているが、ドイツ語の方は「鼻」が構成要素となっている。もちろんそ

*12 漫画絵については、"Was ist das?"という問いがなされて、漫画絵が描いているイディオム表現を挙げるのが要求されている問題であると理解する。全体で 100 のイディオム表現は、8 つのグループに分けられている。すなわち、"Tiere" (動物)、"Tiere (Vergleich)" (動物、比較)、"Pflanzen" (植物)、"Berufe (Werkzeug und Waffen)" (職業 (道具および武器))、"Haus und Hof" (家屋敷)、"Kleidung" (衣服)、"Körperteile (Kopf, Nase, Ohr)" (身体部位 (頭、鼻、耳))、"Körperteile (Arm, Hand, Finger, Daumen, Faust, Bein, Knie, Herz)" (身体部位 (腕、手、指、親指、拳、足、膝、心臓)) の 8 つのグループである。一例として、衣服に関するイディオム表現に関する漫画を挙げておこう。右の漫画絵がモチーフとしているイディオム表現は、"seinen Mantel nach dem Winde hängen" (風にマントをかざす→支配的な意見に与する、あらゆる状況にすぐさま順応する) というものである (Buscha 1979: 143)。この課題は、やさしいものばかりではないということも付言しておく。



*13 日独両言語におけるイディオム表現を比較・対照する場合注意すべきことだが、日本は、鎖国を解いて世界に門戸を開いて以来、ヨーロッパ文化の多くの要素を取り入れてきたし、現在も取り入れているのである。これは、現代日本語においてわれわれが普通に使用しているイディオム表現には、多くのヨーロッパ起源のものが存在しているだろうということを意味する。4. 5 節を参照。

の鼻は、牛の鼻であろう。従って意のままに引きずられるのは、ドイツ語、日本語とも「牛」がイメージされていると考えられる。"jemandem die Pistole auf die Brust setzen"は、現在は「胸に拳銃を突きつける」という表現でも可笑しくないとわれ、その表現を対応させてあるが、本来的には「胸に匕首を突きつける」という言い回しになる。

「豚に真珠」という言い回しは、現代日本語においても使われているが、本来は、西洋起源である。これは、新約聖書マタイ伝に由来している。日本語本来の言い回しは、「猫に小判」であろう。また、「胸に拳銃を突きつける」も西洋由来であると考えられる。「頭隠して尻隠さず」は、ドイツ語ではダチョウの行動がイメージされているのであるが、日本語では同じ鳥でも雉の行動に由来している。偶然に同じイディオム表現となっているのであるが、これも含めて、純粋に日本語のイディオム表現としては、6 つということになる。このことは、イディオム表現がいかにか当該の言語共同体を支えている文化に依存しているかを示している。そしてそれゆえに、ドイツ語を学習する日本語母語話者にとって、ドイツ語のイディオム表現およびその比喩的イメージを理解することが難しいのである。逆にいうならば、そのようなイディオム表現を学習することによってこそ、異文化間のコミュニケーションにおいて相互に理解するもう一つの糸口が見いだせるだろうということである。

コラー (Koller 1974: 15) によると、使用頻度の多いイディオム表現は、少なくとも受け身的にはマスターされるべきだという。そのためには、さまざまなテキスト種と、口頭コミュニケーションにおけるイディオムの出現に関する調査が前提として行われなければならない。ダニエルス (Daniels 1985) は、学習対象としての最小限のイディオム表現を確定あるいは選択するための基準として2点を上げている。すなわち、1. コミュニケーション上の価値、2. 頻度である。それ以外にも、ダニエルスによると、分布、難度、コミュニケーションにおける緊急度が考慮されなければならない。しかしながら、これらのいずれの基準も、確定するのがきわめて難しい、というのが筆者の考えである。

筆者自身の確定あるいは選択基準は、あとの第15章で述べるように、現代ドイツ語話者たちにおけるイディオム能力とその認知能力にもとづく"Aktualität" (現実度) というものである。筆者が新聞や雑誌の使用例から用例を拾い上げているのは、そのような考えに基づいてのことである。

現行のドイツ語辞典やドイツ語イディオム辞典における記述も、もっと詳細になされるべきだといえる。そのような方向の指摘はすでに多くの人によってなされているが(たと

えば、Kühn 1985, 1987 および 1989)、とりわけイディオム表現の意味記述がもっと正確になされるべきだし、使用条件についても詳しい説明があつて欲しい。イディオム比較・対照の視点からいえば、比較・対照される両言語において対応するイディオム表現に関して、意味的および語用論的な違いに関する情報も必要であろう。

イディオム表現において、出発言語と目標言語間の深い文化的差異が露わになってくる。そういった文化的差異を意識的に捉えようとしないう限り、母語と異なる言語におけるイディオム表現の学習は、誤解や誤った使用に導く危険を孕んでいるのである。

異言語の語彙を習得することは、最終的には、当該の異文化を理解することであり、自らの文化との違いを認識することである。つまり、日本語母語話者のためのドイツ語授業でイディオム表現を取り扱うには、まずもって、ドイツの文化、国やドイツ語に関する研究、そしてそれらと自らの文化、言語との比較・対照的な研究が必要とされるのである。ドイツ語と日本語の比較・対照研究においては、文化的な側面がとりわけ考慮されなければならない。

最後にもう一つウィットを掲げて、本章の論述を終えることにしよう。

"Haben Sie in Ihrer Familie einen Fall von Geistesgestörtheit gehabt?", fragt der Nervenarzt.

"Ja, meine Schwester hat letztes Jahr einem Millionär **einen Korb gegeben!**" (Witzebuch 1997: 368)

(「ご家族に精神錯乱の症例がありますか？」と精神科医が質問した。

「はい、昨年姉が大金持ちの求婚を断りました!^{*14})

*14 このウィットの落ちは、玉の輿を断るなんて気が狂っているという、家族の利己主義的な考えにある。

第5章 日独イディオム比較・対照の視点^{*1}

5.0 はじめに

本章の狙いは、ドイツ語イディオム先行研究を踏まえて、日独両言語におけるイディオムの具体例をあげながら、日独イディオム比較・対照のための視点を整理することにある。比較・対照における"tertium comparationis"（比較の第三項）としては、当該表現がもっているイディオムとしての意味をあげることができるだろう^{*2}。

本章の結論部分では、具体的な比較・対照、分類・整理のための視点として、イディオム表現の中心的な構成要素の出自、分野といった点から、12の観点が提案され、説明がなされる^{*3}。

5.1 日独イディオム比較・対照学の構想

筆者は、これまでイディオム表現を支えている比喩的イメージに関して、日独両言語における違いや、どのような分野からの比喩が用いられているかについて、具体例に依拠しながら、日独のイディオムを観察してきた（Ueda 1991a）。また、ノンバーバルな行為が持つ比喩的意味の違い、ノンバーバルな行為に関与する身体部位以外の対象の違いに焦点を絞った研究を試み、これについてもいくつかの考察を公にしてきた（Ueda 1991b および Ueda 1993a）。さらに日独対照イディオム学の構築を目指して、日独両言語における固有名詞を構成要素として持つイディオム表現を比較考察の対象とすべく、その手始めとしての作業を行ない、論文として公刊した（Ueda 1993b）。

以下では、これまで筆者が行ってきた以上のような作業に基づき、そしてまた可能な限りこれまでのイディオム研究の追認を行い、それらの成果に依拠しながら、日独両言語におけるイディオム表現に焦点を絞り、比較・対照のための視点を整理していくことにし

*1 本章における論述は、次の既発表論文を基にしているが、事項・分野の設定については、その後における実際の比較・対照作業をふまえて、修正することになった。「日独イディオム対照の視点」、『広島大学文学紀要』第54巻、1994年、193-210頁。

*2 なお、イディオム表現の音声的特徴といった面は、日独両言語のイディオムを比較・対照する場合には、問題とはならないだろう。また、通常のフレーズとイディオム・フレーズの理解の速度差に基づく、言語理解のメカニズムの探求といった心理言語学的な研究についても、直接日独対照研究にかかわるものではないという理由で、ここでは取りあげない。

*3 本来ならばこれら12の事項・分野すべてに関して、日独のイディオム表現を比較・対照すべきであろう。本論文では、筆者が構想する日独イディオム比較・対照がどのようなものであるかを、モデル的に提示するという意味で、8つの事項・分野について論述してある。つまり、本論文の「おわりに」で反省として述べてあるように、すべての事項・分野に関する比較・対照は、将来における課題として残されている。

よう。

5. 2 比較・対照の視点

5. 2. 1 イディオム比較・対照における比較の第3項

日独両言語におけるイディオムを比較・対照するには、比較・対照するための基準、視点、つまり"tertium comparationis"（比較の第三項）を定める必要がある。日独イディオム比較・対照の基本視点は、まずイディオムの意味内容といえよう。文字通りの意味ではなく、比喩的な、すなわち当該の表現がイディオムとしてもっている意味が"tertium comparationis"（比較の第三項）となろう。

日独のイディオムをさらに具体的に比較・対照し、分類・整理していくための視点としては、イディオムの意味を支えている比喩としてのイメージ、意味的付加価値としてのコンnotationを設定することができるであろう。

5. 2. 1. 1 イディオムとイメージ

日独のイディオム表現をそれが依拠している比喩的イメージの点からみると、重なり合っている場合、互いに異なった分野からのイメージに依拠している場合、いずれの言語にも同等の表現があるが意味する内容が異なっている場合、対応する同等のイディオム表現がそれぞれの言語に存在しない場合、という4つのケースが考えられる。

重なり合う場合は、誤解の余地はない。例えば、「火に油を注ぐ」、「火中の栗を拾う」などは、ドイツ語でも"Öl ins Feuer gießen"、"die Kastanien aus dem Feuer holen"といい、ほぼそのまま対応する表現がある

ほぼ同じような意味内容のイディオム表現であっても、そのイディオム表現が依拠している比喩的イメージが、日独両言語で異なる場合が多い。言葉通りの表現が喚起するイメージで意味を想像してしまうと、誤解してしまうことになる。例えば、ドイツ語の"Oberwasser bekommen"は、「有利な状況になる」といった意味であるが、日本人は、おそらく「頭から水をかけられる」あるいは「(冷や)水をかける」と受けとめ、ドイツ語の表現がもっている意味とは、逆の方向で理解するのではないだろうか。日本語では、別の「追風を受ける」という表現の方が対応するといえよう。つまり、日本語とドイツ語では、表現が由来してきた分野が違うのである。ドイツ語の表現は、おそらく水車に由来し、日本語は帆掛船による海上交通に由来している。もちろん、ドイツ語にも"Rückenwind haben"（背後の風を持つ）という言い回しもあるにはある。なお、日本語の「(冷や)水をかけ

られる」に対応するドイツ語の言い回しは、"eine kalte Dusche bekommen"（冷たいシャワーを得る）である。

同じ意味内容を表現するイディオムが日独両言語に存在していても、それぞれ全く異なった分野に由来し、イメージが食い違っている場合がある。日本語ではそれぞれ「法螺をふく」、「寿司詰め」という言い回しになるだろうが、ドイツ語では"jemandem einen Bären aufbinden"（誰かの背に熊をくくりつけ負わせる）、"wie die Heringe stehen"（にしんのように立つ）というわけである。

日独それぞれの言語において、対応するイディオム表現が存在しない場合がある。ドイツ語では、"jemandem einen Korb geben"（誰かに籠をあげる）という表現があるが、これは中世の風習に由来しているものであり、「(求婚などの申し出を)拒否する」という意味である。日本語にこれに対応する表現があるかといえば、「肘鉄を食らわす」が思い浮かぶが、コノテーションに大きな隔りがある。

5. 1. 1. 2 イディオムとコノテーション

なぜ"kritisieren"（批判する）という動詞があるにもかかわらず、"jemandem auf die Finger sehen/schauen/gucken"というイディオム表現を使うのか。それは、イディオム表現には意味的付加価値が備わっているからだ、というのがキューン（Kühn 1985）の説明である。単に"kritisieren"という動詞を使うよりも、「裏で不明朗なことをしているかも知れないから、何をするかをしっかり見届ける」といった意味合いが付け加わり、いわば強烈なアピール力をもった表現となるのである。そして、この理由で、政治的な言説やスポーツに関する報道で、イディオム表現が多用されることにもなっているといえよう^{*4}。

しかし、同じようなイディオム表現でも、日独両言語においては、当該の表現が含意するコノテーションが異なる場合がある。どれほどコノテーションに差があるのか、そういう点から日独両言語のイディオムを比較・対照してみなければならない。

例えば、日本語では「月とスッポン」といった言い回しから、月はなんとなくいいイメージが付きまとっているが、ドイツ語では必ずしもそうではないようである。ドゥーデン（DUDEN 1989:1032-1033）から"Mondkalb: dummer, einfältiger Mensch"(1032)（月の子牛：愚かで、単純な人間）"Mondpreis: willkürlich angesetzter überhöhter Preis"(1033)（月の値段

*4 詳細については第3章を参照されたい。

：好きかってにつけられたべらぼうな値段) という2語を拾い出すことができる。キューパーの辞典 (Küpper 1984:1928-1929) からは、"mondooft: völlig verblödet" (1928) (月にも昇るほどに愚かな：完全に愚かな) といった説明が読み取れる。こういった語から推測するに、ドイツ語における"Mond"は、決してロマンチックな意味合いはもっていない、ネガティブなコンnotationをもっているといえよう。"mondooft" (月にも昇るほどに愚かな、大馬鹿) という語は、そのネガティブな意味を端的に示している。日本語ではむしろ、「月並み」という表現がもっているネガティブなコンnotationに通じ合っているようである。

5. 2. 2. 分類・整理のための視点

また、イディオムを構成している要素が、どのような分野にかかわっているのかという、いわば出自の点からも比較・対照していくことができよう。ここでは、フリーデリヒとフェルデスの分類を取り込むことによって、取りあえず、料理、植物、動物、身体動作 (キネシックス)、空間配置 (プロクセミックス) 等、12の分野を提案しておきたい。

5. 2. 2. 1. フリーデリヒ (Friederich 1966)

イディオム表現を構成している要素の出自、つまりイディオムの中心的な構成要素がどのような分野に由来しているかという点から、比較・対照してみることができよう。

フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Moderne Deutsche Idiomatik.) (Friederich 1966) は、ドイツ語学習にとってはなくてはならないイディオム用例集であるが、ドイツ語のイディオムを"Sachgebiete" (事項分野) に従って分類、配列している。そこでは、最後の"Allgemeine Ausdrücke" (一般的表現) を除いて、29の事項分野が整理のための視点としてあげられている*5。

イディオムとは、複数の要素から成り立っている表現であるのだから、当然ながら、複数の事項分野に属するものとして分類されるイディオムもある。また、29の事項分野の

*5 フリーデリヒが分類原理としてあげ、イディオムを整理している30の視点は、次のようなものである。I. Antike (古代)、II. Buchstaben (アルファベット)、III. Erde, Elemente, Natur (地球、元素、自然)、IV. Familie (家庭)、V. Farben (色彩)、VI. Fischerei und Jagd (漁業、狩猟)、VII. Gesundheit, Krankheit, Tod (健康、病、死)、VIII. Handwerk (工作)、IX. Haus und Wohnungseinrichtung (家、家具)、X. Kleidung (衣服)、XI. Der menschliche Körper (身体)、XII. Kunst, Musik, Theater (芸術、音楽、演劇)、XIII. Landwirtschaft (農業)、XIV. Nahrung und Gerichte (食物、料理)、XV. Orts- und Ländernamen (地名)、XVI. Pflanzen (植物)、XVIII. Rechtsprechung und Gerichtswesen (裁判、司法制度)、XIX. Reise und Verkehr (旅行、交通)、XX. Religion (宗教)、XXI. Ritter, Soldaten, Krieg (騎士、兵士、戦争)、XXII. Schifffahrt (海上交通)、XXIII. Schule und Wissenschaft (学校、学問)、XXIV. Spiel und Sport (遊技、スポーツ)、XXV. Tiere (動物)、XXVI. Wetter (天候)、XXVII. Wirtschaft und Handel (経済、交易)、XXVIII. Zahlen und Mathematik (数字、数学)、XXIX. Zeit (時間)、XXX. Allgemeine Ausdrücke (一般的表現)

中でも子細にみると部分的に重なり合っているものがあり、日独対照という点からは、再検討されなければならないものもある。

あるいは、さらに細かく分けて考えることが必要となる事項分野もある。例えば、第1番目にあげられている **Antike** (古代) には、聖書に由来するイディオム、古代ギリシャ神話、古代ローマ神話に由来するものが含まれている。古代ギリシャ、古代ローマの神話は、古代ローマの文化が古代ギリシャの文化のコピーであるといつてほぼ間違いがないことを思えば、古代として一括してもいいであろうが、聖書に由来するものはその数の多さと、ヨーロッパにおいて聖書が果たしてきた文化的な役割の重要性に鑑みるならば、一つの項目として取り扱う方がいいだろう。

5. 2. 2. 2. フェルデス (Földes 1990)

フェルデスは、ハンガリー語とドイツ語の対照を基底に据えながら、外国語としてのドイツ語の授業の中で、イディオムを取り扱うことが、ランデスクンデとしてどのような意義を有するかを論じている。

フェルデスによると、ドイツ語の授業の中で、イディオムを取り扱う場合、3つの言語レベルでランデスクンデに関与してくるといふ。一つは、**Lexik** (レキシク) つまり語のレベルである。イディオムを構成している語が、そもそも何を意味しているか知らない場合、そのものについて説明する必要が生じてくる。"mit jemandem Fraktur reden"という言い回しは、「単刀直入にはっきりという」といった意味であるが、ここで **Fraktur**^{*6} そのものについて説明を加える必要があるだろう。

もう一つの言語レベルは、比喩としてのイメージである。"(tief) in der Kreide stehen"は、「負債を抱えている」という意味で、このイディオム表現については、そのようなイメージの由来を説明することが必要となるが、それはとりもなおさず、ドイツの社会文化史の一側面を扱うことになる^{*7}。

また、"der blaue Brief"とは「解雇通知」のことであるが、これは、この表現全体でその

*6 丸みのあるラテン文字に比べて、**Fraktur** はドイツ文字と称されているが、ごつごつした角張った文字であるため、"Fraktur reden"という言い回しは「ずけずけものをいう」といった意味となったようである。レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』によると、19世紀半ば頃からこの表現は社会民主党の政治的スローガンとして知られるようになったということである (Röhrich 1991/92: 469-470)。

*7 飲み屋で客の付けを黒板にチョークでメモ書きするという習慣にこの言い回しは由来している。現在でもまだあちこちで見られる。さらに派生した表現として"in die Kreide kommen" (負債を抱える、借りをつくる)、"jemandem etwas ankreiden" (だれかに貸しをつくる) がある (Röhrich 1991/92: 888)。

意味となっているのである。当然のこの表現についても、なぜ「青い手紙」が「解雇通知」を意味するのかについて、ランデスクンデとしての説明を加える必要がでてくる*8。

フェルデスは、ランデスクンデを展開するという視点から、9つの分野を指摘しているが、それを例とともに紹介しておこう。1) 俗信、迷信："er hört den Kuckkuck nicht mehr rufen" (あいつは、来年の春を体験することはないだろう＝来年の春までは生きていないだろう)、2) しぐさ："jemandem den Daumen drücken" (誰かのために親指を押しつける＝誰かの幸運を祈る)、3) 歴史："nach Canossa gehen" (カノッサに行く＝身をおとして慈悲を乞う)、4) 文学："er ist ein Narr auf eigene Hand" (自らの責任で愚か者である＝自ら愚か者の役を買って出た)、5) 固有名詞："nach Adam Riese" (アダム・リーゼに従って＝厳密に計算すれば)、6) 天候："es schneit Kuhjungen" (子牛のように雪が降る＝激しく雪が降る)、7) 貨幣："keinen Pfennig wert sein" (1ペニツヒの価値もない＝何の価値もなく、役立たない)、8) 度量衡単位："alles nach seiner Elle messen" (すべてを自分の肘で計る＝すべてを自分の立場から判断する)、9) 料理："Das ist nicht mein Bier" (それは自分のビールではない＝それは自分とは関わりがない)。

5. 2. 2. 3. まとめ

以上、2つの先行研究を簡単に眺め、検討してみた。それらを参考にして、日独イディオム対照という視点から、最終的には、1. 俗信、迷信、2. 歴史、3. 文学、4. 天候、5. 貨幣尺度、6. 料理、7. 植物、8. 動物、9. 固有名、10. 身体動作(キネシックス)および空間配置(プロクセミックス)、11. 数字、12. 色彩といった、12の項目を設定してみることを提案する。

5. 3 具体例に基づく比較・対照

この節では、これらの項目について、具体例をあげながら、説明を加えていくが、フェルデスが例示しているものについては、紙幅の都合で、なるべく重複を避けて、最少限の例示にとどめたい。

5. 3. 1 俗信、迷信

*8 なぜ「青い手紙」が「解雇通知」を意味するのか。これについては、プロイセンの軍の解雇通知が青い封筒に入れられて送付されたという事実に基づいている、との説明がドゥーデンではなされている(DUDEN 1992:113)。第6章「色彩語彙を構成要素とするイディオム」を参照。

「狐につままれる」といった表現は、俗信あるいは迷信に由来するものといえよう。こういった表現の由来を詮索することは、民俗学の分野に踏み込んでいくことになる。ドイツ語では"ausgehen wie das Hornberger Schießen"（鳴り物入りだったが、成果は何もなく終わること）や"jemandem den Daumen drücken"（だれかのために親指を押しつける：だれかの幸運を祈る）といったものが、この部類に属することになる。"Frau Holle schüttelt die Betten"（ホレおばさんがベットをたたいている：雪が降る）は、「ホレおばさん」のメールヒェンに由来するとなっている。このメールヒェンは、グリム童話の中の一つとして知られているが、言うまでもなく、グリム童話は民間伝承を採集したものである。

5. 3. 2 文学

ドイツ文学からの例ではないが、"Don Quichote"（ドン・キホーテ）といえば、日本語でもすぐに理解可能な語となっており、説明は不要であろう。『グリム童話』は、グリム兄弟による創作ではないが、現在ではドイツ文学を代表するものと見なされている。ドイツ語のイディオムには、『グリム童話』に由来すると考えられているものもいくつかある。「俗信・迷信」の項で上げた"Frau Holle schüttelt die Betten"がそうであるが、"Kreide fressen"（石灰を食べる：やさしいように見せかける）も『グリム童話』に由来するとされている。その物語は、日本でもよく知られている「オオカミと7匹の子ヤギ」である。

5. 3. 3 自然現象、天体、天候

「風向きが変わる」、「雲行きが怪しい」といった天候に関する言い回しがこの事項・分野に属することになる。あるいは「月とすっぽん」、「雲をつかむような話」といった言い回しである。ドイツ語では"der Wind hat sich gedreht"（風向きが変わった）、"hinter dem Mond leben"（月の裏側に住んでいる：世間で何が起きているか知らない）、"etwas in den Mond schreiben"（月に書き付ける：ないもの考える）、"aus allen Wolken fallen"（雲から落ちてくる：びっくり仰天する）といったイディオムが存在する。

5. 3. 4 貨幣尺度

"keinen Pfennig wert sein"（1ペニツヒの価値もない）は、貨幣の単位は異なるが、「一文の価値もない」という日本語の言い回しに対応しているといえよう。日本語の「間尺に合わない」というイディオム表現や、ドイツ語の"mit zweierlei Maß messen"（二通りの尺度で測る：異なった基準を適用する）が、この部類に属することになる。

5. 3. 5 料理

当然のことではあるが、料理の違い、素材の違い、調味料の違いといったことが、比較

・対照のポイントとなろう。日本人なら「朝飯前」にやっつけのけることを、ドイツ人たちは"mit linker Hand" (左手) でいとも簡単に片づけるのである。"es ist alles in Butter" (万事オッケー) とドイツ人はいうが、日本人がバターを知るようになったのは、明治以後であり、日本人にとってただちにその意味が理解できるとは思われない。むしろ「油まみれ」というイメージが浮かぶのではなかろうか⁹。

5. 3. 6 植物

ドイツ語圏文化も歴史の過程でキリスト教化されてきた。従って、ドイツ語のイディオムにもキリスト教的なものも多く存在する。「リンゴ」はその代表的なものだろう。"verbotene Frucht" (禁断の果実) といえ、リンゴのことであり、イディオムとしての意味は"verlockende, aber verbotene Genüsse" (誘われるが、禁じられたもの) ということになる。日本語には「ごまをする」という表現がある。これは、料理に関するものともいえるが、本来的には植物の果実である。議論が分かれるであろうが、果実や野菜も植物の部類に一括して含めることにする。ドイツ語の"den Ast absägen, auf dem man sitzt" (自分が乗っている木の枝を切り落とす：墓穴を掘る) や"der Apfel fällt nicht weit vom Stamm" (リンゴは幹から遠いところには落ちない：瓜の蔓になすびはならぬ) といった表現や、日本語の「瓜二つ」などが、この部類に属することになる。

5. 3. 7 固有名

ドイツ語のイディオム表現には、古代ギリシャや古代ローマの歴史的事件や神話に関する固有名を構成要素とするものが数多い。フェルデスは、歴史という事項分野をもうけているが、ここでは、歴史的な事件等も固有名に含めることにする。実際問題として、当該の歴史的事件が起こった土地の名、関与した人物の名がイディオム表現に取り込まれていることがほとんどだからである。

ドイツ語においては、"Canossagang" (カノッサ行き) や "ein/ seinen Waterloo erleben" (ワートルローを体験する＝敗北する) などがあるが、日本語のイディオムとしては、「天王山」、「いざ鎌倉」といった表現をあげることができよう。こういった言い回しについては、当然、その背景となっている歴史的な事件についての説明が欠かせないだろう。言葉の学習は、単に言葉の次元に留まっているわけにはいかないのである。

*9 バターに関するもう一つのイディオム表現"sich nicht die Butter vom Brot nehmen lassen" (甘んじて不利益を受け入れない) の具体的使用例については、第4章の4. 5節を参照。

本章でいう固有名には、人名、地名、国名を含んでいる。日本語におけるイディオム表現についていえば、日本の固有名とそれ以外（多くは中国の固有名）を区別することができるだろう。ドイツ語におけるイディオム表現についていえば、ドイツの固有名と、外国の固有名（特に、古代ギリシャ、ローマの固有名）を区別しなければならないだろう。

人名を含むイディオム表現としては、日本語においては「弁慶の泣き所」、「元の木阿弥」、「百合若大臣のよう」といった例を挙げることができる。ドイツ語においては"nach Adam Riese"（アダム・リーゼに従って：厳密に計算して）、"dazu hat Buchholz kein Geld"（金がない）といったものがある。一見すると人名であるようだが、実は言葉遊びであるという人名まがいの語を含む表現がいくつかある。「骨川筋右衛門」、「平氣の平左衛門」等である。ドイツ語にも同様なものがある。"Heiliger Sankt Bürokratius"（聖なる官僚様）、"Leberecht Luftikus"（軽はずみもの）といったものである。

5. 3. 8 外来語

日本語には「ピンからキリまで」や「メスを入れる」、「アーチをかける」など、外来語を構成要素としているイディオム表現があり、その数は決して少なくないようである。しかも、そのようなイディオム表現は、新しいものが生み出され、今後も増えていく傾向にあるようである。ドイツ語においてはどうかであろうか。英語の影響を大きく受けている点では、ドイツ語も同じである。それは特に語彙の分野において顕著であるといえる。イディオム表現に関してはどうかであろうか。

とりわけ固有名についていえるが、ドイツ語には古代ギリシャや古代ローマの神話や歴史的イベントに関する語を取り込んだイディオム表現が数多い。それらの表現は固有名に関するものとして取り扱うことができる。それらの固有名をのぞいたギリシャ語やラテン語、そしてそれ以外の外国語を取り込んだイディオム表現を、外来語を含むイディオム表現であると理解することにする。

たとえば、"etwas ad absurdum führen"（矛盾、無意味なことを示す）、"Amok laufen/fahren"（狂気状態で無差別殺人を行う）、"einen Coup landen"（大胆なもくろみを成功裏に遂行する）といったような表現がドイツ語にはある。

こういった外来語を構成要素とする日独のイディオム表現を比較・対照することは、それぞれの言語文化と他言語文化との関わりの異同を考える糸口を与えてくれるであろう。

5. 3. 9 身体動作／空間配置

日本語では「お近づきになる」や「疎遠になる」という表現は、人間関係の距離を表し

ている。ドイツ語でも同様に人間関係を距離的に捉える発想がある。"jemadem nahestehen" (誰かの近くに立っている) というのは、同じような考えをしているということである。あまりにも近づきすぎると、相手の気分を害することになる。相手の個体空間に踏み込むことになるからである。ドイツ語では"jemandem zu nahe treten"という表現になる。

また、身体動作や、しぐさがイディオム表現として固定したものも数多い。日本語では「足を引っ張る」というが、ドイツ語では"in den Arm fallen" (腕の中にたおれる) という。都合の悪いことに対して「目をつぶる」と日本語ではいうが、ドイツ語でも"ein Auge zudrücken" (片目をつぶる) という表現がある。

同様のしぐさを表現していても、そのイディオムとしての意味は必ずしも同じではないものも多い。そのような日独のイディオム表現を比較・対照することは、翻訳上の問題を考えるという点でも、有意義であろう。

5. 3. 10 数字

「一から十まで」、「一か八か」、「四の五のいう」など、日本語では数詞を構成要素としているイディオム表現が非常に多いように思われる。ドイツ語ではどうなっているのだろうか。すぐに思いつく数詞を含むイディオム表現としては"jetzt schlägt's [aber] dreizehn!" (やりすぎだ！それで終わり！) ぐらいのものである。他にはどのようなものがあるのだろうか。詳細は、第7章で論述することにしよう。

5. 3. 11 色彩

色彩については、日独両言語において、それぞれの色彩がもっている意味の違いが問題となろう。日本語では、幼い、未熟者を意味する表現に、「嘴が黄色い」あるいは「青二才」といったものがあるが、ドイツ語では同様の意味内容を"grün hinter den Ohren sein" (耳の後ろが緑である) という。

現代のドイツにおける各政党がシンボルとしている色も、ドイツ語を学習している者としては、一応頭にいれておくべきであろう。黒はキリスト民主同盟(CDU)、青はキリスト社会同盟(CSU)、赤は共産党(ドイツでは非合法) および社会民主党(SPD)の色である。黄色は、ドイツ自由党(FDP)であり、緑はいうまでもなく、緑の党(DIE GRÜNEN)である。また最後に、braun (茶色) はナチの色である。

5. 3. 12 動物

動物に関しては、魚、昆虫、鳥などを含め、日独両言語とも多数のイディオム表現を有している。独自のテーマとして取りあげるべきことであると思われるので、2例をあげる

だけにする。

日本語では「付和雷同」、「長いものにはまかれろ」、「寄らば大樹の陰」という言い回しがあるが、ドイツ語では、"mit den Wölfen heulen"（狼と一緒に吠える）となる。

また、日本語では、「左前になる」といった言い方になろうが、ドイツ語では"auf den Hund kommen"（犬に行き当たる）である。ドイツ語のこの言い回しの由来については、「馬」→「ろば」→「犬」といった順に位が下がってきたというような解釈は、一見面白いが、疑わしいとドゥーデンは説明している（DUDEN 1992:356）。

5.4 おわりに

主にフリーデリヒとフェルデスの分類に依拠しながら、日独両言語におけるイディオムを比較・対照するための視点を整理してみた。次の作業は、この視点に沿って、これまで収集した用例を分類して、それぞれについてランデスクンデとしての情報を付け加えていくことである。

第6章 日独イディオム比較・対照のための資料源について

6.0 はじめに

第7章―第13章においては、第5章において提案された日独イディオム比較・対照の視点に沿って、いくつかの事項・分野における日独のイディオム表現の比較・対照を試みる。その比較・対照に先立って、分析の対象となる資料源について、コメントしておくことにしたい。この章における記述は、日独両言語におけるイディオム辞典あるいは事典に関するコメントという形をとるが、それは両言語におけるイディオム辞典や用例集を通して見た両言語におけるイディオム研究の展開を振り返ることでもある。

6.1 ドイツ語のイディオム辞典、用例集についてのコメント

いうまでもなくイディオムの収集とそれを基にしたイディオム辞典の編纂は、ドイツ語に関してもすでに前世紀のグリム兄弟による『ドイツ語辞典』やワンダーの『ドイツ語諺辞典』(Detusches Sprichwörter-Lexikon. Ein Hausschatz für das deutsche Volk) (Wander 1987)等を初めとして、長い歴史をもっている。これらはイディオムに焦点を合わせたものではないが、当然にイディオム表現についても多くの情報を提供してくれる。ドイツ語辞典の線上にあるものとして、イディオム表現について多様な情報を与えてくれるものに、キューパーの『絵入りドイツ語口語辞典』(Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache) (Küpper 1983)がある。これは、まさに絵入りであるがゆえに、見るだけでも興味があつき辞典であるが、表現がもつコンテクションに関する情報を与えてくれるという点で、非常に有益である。

以下、イディオム表現に焦点を合わせた用例集として、筆者がこれまで収集し得たものうち、主だったものだけを取りあえず紹介してみよう。

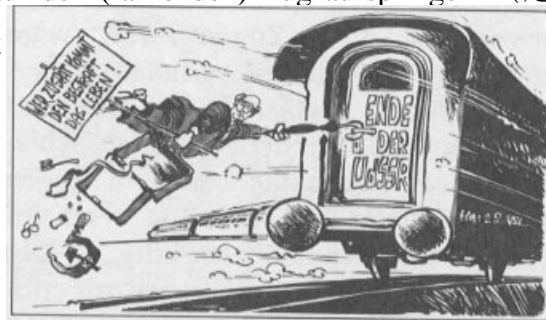
最も古いのは、ラープの用例集『ドイツ語の言い回し』(Deutsche Redewendungen) (Raab 1952)である。表現の出典や起源、意味についての説明を始め、いくつかの図版も挿入したものである。取りあげられている表現の数はそれほど多くはないが、確かな知識を与えてくれる。

外国語としてのドイツ語学習にとって最初の有益なイディオム辞典および用例集としては、1966年に出版されたフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Moderne Deutsche

Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen) (Friederich 1966) をあげなければならないだろう。これは、第5章で紹介したように、イディオムを構成する要素の出自という点から分類・整理したものである。この辞典および用例集は、1976年にキー・ワードのアルファベット順に従って、イディオムを配列しなおした改訂版 (Friederich 1976) が出版され、現在に至っている。ただ、いずれの版においても、あとで紹介するドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992) とは異なって、説明のための用例の出典が記されておらず、その多くが実際の使用例ではないと判断されるのが、難点である。

イディオム表現の意味、起源についての説明と同時に、そのような表現がでてきた時代や文化的背景についての情報をも与えているのが、ディットリヒによるイディオム集『金の天秤の上の言い回し』(Redensarten auf der Goldwaage) (Dittrich 1975) である。これは、ドイツの民俗に関する記述も含まれている点で、1972年に2巻本として出版されたレーリヒの『ことわざ的な言い回しの辞典』(Röhrich 1972) のミニアチュア版とも言えよう。

レーリヒの『ことわざ的な言い回しの辞典』(Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten) (Röhrich 1972) は、ドイツ語を外国語として学習する者にとってのみならず、ドイツ民俗学研究においても必須の文献となっているといえる。単に RÖHRICH といっても通じるこのレキシコンは、1991年から1992年にかけて増補改訂版(Röhrich 1991/92)が出版された。内容的にもそれまで2巻であったのが、大幅な充実が計られ3巻本となった。その充実度を反映して名前も『ことわざ的な言い回しの大辞典』(Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten)と改まった。1972年以後における民俗学、イディオム研究の成果だけでなく、その後の社会情勢を反映する政治的カリカチュアなど、資料的価値も高まっている。イディオム理解、学習という面からも、示唆に富んだ辞典となっている。たとえば Zug に関する慣用表現の項を見ると "Noch auf den (fahrenden) Zug aufspringen" (走っている列車に飛び乗る = 辛うじて間に合って事に参加する) という表現とともに、ゴルバチョフを想わせる人物が描かれているカリカチュア (右) が載せられている。レーリヒのこのレキシコンは、そういった意味で、その中の図版や挿絵、写真を眺めるだけでも飽きることがなく、同時にドイツ



語イディオムの表現世界の広がりを感じさせてくれる。ドイツ語学習者にとっては、一日

も早く廉価な新書版が世にでてほしい*1。

そして、レーリヒのレキシコンの増補改訂版がでたのとほぼ時を同じくして、ドゥーデンの第11巻として『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtlichen Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache) (DUDEN 1992) が出版された。これは、新聞や雑誌、書物からの用例を例として提示し、さらに当該の慣用的な言い回しの由来、起源についての説明をも行なっている*2。

このドゥーデンには、新しく慣用句と見なされるようになった表現も多数収録されている。そのひとつに"die Hunde bellen, und/aber die Karawane zieht weiter" (犬どもは吠え立てる。が、キャラバンは旅を続けていく＝抵抗、批判を押し切って、目標に突き進む) という表現がある。これは、ドイツ統一を押し進めた連邦首相ヘルムート・コールが、野党の批判を突っ返すとき切札の文句としてマスコミに登場するようになったものであるが、トルコ語の言い回しをドイツ語に翻訳したもののようである。

イディオム研究の領域における最近の特筆すべき成果として、シェーマン編集の『ドイツ語イディオム同義語辞典』(Synonymwörterbuch der deutschen Redensarten) (Scheman 1989) を挙げなければならないだろう。これは、イディオムをアクティブに使いこなすという目的で、意味場、語場の視点から、ほぼ同等の意味で使用される慣用句を分類・整理している。

この辞典の編集原理については *Einleitung* (導入部) (XIX-XXXVI) で説明がなされているが、外国語としてのドイツ語学習にとって有用なのは "onomasiologisch" (名義論) の観点から関連表現が手繰り出せるようになっている点であろう。例えば"sterben" (死ぬ) と同等の表現に"ins Gras beißen (müssen) ugs" (草をかむ)、"den Arsch zukneifen vulg" (尻を閉じる)、"den Geist aufgeben ugs" (魂を放棄する) といった慣用表現があること

*1 廉価版は5冊本として1994年に出版された。新書版であるので、タイトルは「ことわざ的な言い回しの大辞典」ではなく、「ことわざ的な言い回しの辞典」(Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. Freiburg/Basel/Wien: Herder, 1994)となっている。そして、これも待ち望まれていたCD-ROM版が2000年に発売された。イディオム研究のみならず、民俗学的研究の資料源として、いっそうその価値を発揮することになるであろう。

*2 この辞典については、出版後まもなくCR-ROM版も発売されたようであるが、残念ながら筆者は購入する機会を失ってしまっており、現在まで現物を確認していない。CD-ROM版が手元があれば、資料収集が格段にはかどるだけでなく、正確を期することができたであろう。手作業にはいくらかの誤認と数値計算上の過ちが避けがたいのは、認めざるを得ない。

がわかるうえに、それがどのような使用域に属しているか、つまりはコノテーションについても情報が得られるようになっている。

「豚に真珠」という言い回しは『新約聖書』「マタイ伝」(7,6)に由来している表現であるが、これは、現代の日本語でも「猫に小判」と並んで普通に使われる言い回しである。この一例からもわかるように、現代日本語には西洋由来の言い回しが多数取り込まれ、使われている。その意味で、日独対照イディオム学にとって、クラウス『人口に膾炙した聖書の言葉。聖書に由来する言い回しのレキシコン』(Geflügelte Bibelworte. Das Lexikon biblischer Redensarten) (Krauss 1933) は、貴重な情報を与えてくれる。

イディオム表現や流行語、あるいは普段使い慣れている表現の意外な由来などを説いた書物は、日本語に関しても様々な趣向のものを見かける。ドイツ語に関して、そういった方向の興味深く読める書物として、多くのイディオム表現を駆使しながら最近のドイツ語の新しい言い回しを紹介しているキューパー『身近なドイツ語』(Deutsch zum Anfassen)(Küpper 1987)を挙げることができる。

以上、ドイツ語に関するいくつかのイディオム用例集、イディオム辞典を眺めてきた。検討の結果、以下における日独イディオム比較・対照のための資料源として、筆者は、基本的にはフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』の1966年と1976年の2つの版を資料源とすることにした。そして、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』を、足りない資料を補うために利用している。意味の説明に関しては、レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』とドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』を大いに参照している。もちろん、上に上げた他の書物も必要に応じて参照していることはいうまでもない。

6. 2 日本語のイディオム辞典、用例集についてのコメント

日本語において、ことわざと慣用句が明確に区別されているかどうか、という点から、手元にあるいくつかの「ことわざ辞典」あるいは「慣用句辞典」をめぐってみよう。

国松俊英著『ことわざおもしろ探偵団1』、同著『ことわざおもしろ探偵団2』、同著『ことわざおもしろ探偵団3』(いずれも童心社)は、「ことわざ」と銘打っている。故に、収録されている表現は、当然ながら、「すずめ百まで踊りわすれず」(1-4)というようなことわざがほとんどなのであるが、しかしながら、ことわざ以外にも「猫をかぶる」(1-16)、「狐につままれたよう」(1-36)、「たらふく食う」(2-8)、「さばを読む」(2-12)、「まめに暮らす」(2-24)、「箸にも棒にもかからぬ」(2-104)、「すずめのぬか喜び」(3-8)、「すずめの

涙」(3-12)、「烏合の衆」(3-20)、「はきだめにつる」(3-52)、「つるの一声」(3-56)、「おしどり夫婦」(3-68)、「さががどじょうを踏むよう」(3-76)、「千鳥足」(3-80)、「うの目たかの目」(3-96)といった慣用句も収録されている。((1-16)と記してあるのは、『ことわざおもしろ探偵団1』の16頁という意味である。以下これにならって記してある。)

針原孝之著『ことわざの基礎知識』(雄山閣、1978年)においても、「一事が万事」(13)、「木で鼻をくくる」(108)等、慣用句がいくつか収録されている。

延原政行編『ことわざ事典』(金園社)には、「はしがき」によると「故事」や「ことわざ」が収録されているとのことである。語義の説明が比較的詳しく、出典も記されているという点で、この辞典は非常に役立つのであるが、「ああ言えばこう言う」(1)、「秋風が吹く」(6)といった慣用表現も収録されている。「ことわざ」、「故事(成句)」、「慣用句」が截然と区別されているとはいえないようである。

『イラストことわざ辞典』(学習研究社、1983年)は、「こんなことば知っているかい?」と疑問をなげかけ、「こんなことば」の例として、「足を奪われる」、「艱難汝を玉にす」、「気が置けない」、「地震、雷、火事、親父」、「蛇足」、「情けは人の為ならず」、「歯が浮く」、「ローマは一日にして成らず」が載っている。これらの表現を見るだけで、この辞典においても、ことわざと慣用句が混在して収録されていることがわかる。

木暮正夫『ことわざランド1』(校正出版社、1993年)においても同様である。「竜頭蛇尾」(24)、「逆鱗にふれる」(25)、「生き馬の目をぬく」(32)、「馬の耳に風」(33)、「とどのつまり」など、慣用句と判断される表現も収録されている。

白石大二監修『まんがことわざ事典』(学習研究社)は、まんがでことわざ(や慣用句)の意味を説明している学習事典であるが、慣用句が取り込まれているのは、他の辞典や事典と同様である。「足が地につかぬ」(18)、「あぶない橋をわたる」(19)、「石橋をたたいてわたる」(19)、「うでによりをかける」(29)等、かなりの数の慣用句が収録されている。

林四郎監修『たのしく学ぶことわざ辞典』(NHK出版、2000年)は、「はじめに」において、「そのほか、きまり文句である慣用句ものせてあります。」とことわり書きがしてある。しかしながら、「ことわざ」と「慣用句」がどのような基準で区別されているのかについては、言及されていない。その判断は、読者にまかされていることになる。(なお、慣用句と直接関連しているわけではないが、「ことわざのうち、故事成語ともいわれるものには、…」とあることから、故事成語がことわざに含まれていることがわかる。)

中には、ことわざと慣用句両者を収録してあるとタイトルに明示している辞典もある。

三省堂編修所編『実用ことわざ・慣用句辞典』（三省堂、1998年）である。

最後に、筆者の知る限り一番大きな辞典である『故事・俗信ことわざ大辞典』（小学館、1982年）においても、事態は変わらない。故事や俗信、ことわざが収録されているのは、もちろんであるが、「愛嬌がこぼれる」(2)、「愛想が尽きる」(3)など、慣用句も収録されている。

以上は、辞典あるいは事典の名前に「ことわざ」としていながら、慣用句も収録されているというものをいくつか挙げてきた。それでは、タイトルとして「慣用句事典」あるいは「慣用句辞典」となっているものについてはどうなっているのでしょうか。

白石大二『国語慣用句辞典』（東京堂出版、1969年）は、慣用句を英語でいう"idiom"の意味で解している。"idiom"とは、本来的にはある言語特有の言葉遣いという意味である。この辞典には従って、いわゆる「イディオム表現」だけではなく、慣れ親しんでいる用法、表現、つまりは諺、コロケーションといったものも収録されている。使用例を文献から拾って収録している点に、この辞典の特色がある。

前沢明著『まんがで攻略 慣用句なんてこわくない』（実業之日本社、1992年）は、小学生および中学生のための学習辞典であるが、まんがを駆使して、イディオム表現の理解を促し、学習効果を上げようとしている。

奥山益朗編『慣用表現辞典』（東京堂出版、1994年）は、「慣用句」は文法上の専門用語と見なし、平たく「言い回し」と言い換えている。「まえがき」において例を挙げながら、慣用句の特徴を説明している。しかしながら、同辞典にはいわゆる人口に膾炙している表現も収録されている。たとえば「人間わずか50年」と言った表現は、慣用句ではないが、おもしろい言い回しとしては値打ちがあるとして、収録されている。

日本語表現研究会〔著〕『使える慣用句事典』（PHP研究所、1997年）には、題名にたがわず、イディオム表現だけが収録されている。そして、「感情・感覚・人の性質」、「思考・能力」といった、使用状況、目的を考慮した意味分野に従って配列されている。

丹野顕『意味から引ける慣用句辞典』（日本実業出版社、1998年）も、『使える慣用句事典』と同じ構想でつくられた辞典である。「行為・態度」、「感覚・感情」といった意味分野に従って、イディオム表現を分類・配列したものであり、一貫した基準が見られる。

最後に、土肥直道『からだ語辞典』（騒人社、1996年）は、慣用句事典と銘打っているわけではないが、内実は慣用句事典である。題名通り、「からだ」に関するイディオムを個別の身体部位に関して、取り上げている。身体部位名のみでなく「気」、「心」、「身」な

どに身体に関するイディオム表現も収録されているので、「からだ語辞典」となっている
のであろう。

以上をまとめて言うならば、「ことわざ」や「故事成句」に関する辞典には、多くのイ
ディオム表現も収録されているが、少なくとも筆者の手元にあるいくつかの「慣用句」に
関する 1992 年以後に出版された辞典を見る限りでは、「ことわざ」は収録されていない。
慣用句に関する定義、規定は明確であるということなのであろう^{*3}。

6.3 おわりに

以上、ドイツ語のイディオム辞典や用例集と、日本語の慣用句辞典あるいは事典を眺め
てきた。その結果として、筆者が本論文における日独イディオム比較・対照研究を行うに
当たって、次のものを資料源とすることにしたい。

ドイツ語に関しては、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』を原則的に資料源
とする。事項分野別にイディオムが分類されており、出発点として非常に便利だからであ
る。不足のデータについては、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』から拾い上げて補
うことにする。

日本語に関しては、慣用句の基準については倉持保男・阪田雪子 [編]『慣用句の辞典』
(三省堂、1997 年)が一貫しているが、用例数が少ないという難がある。従って、本論
文においては、『成語林』を主たる資料源とする。そして、論述の過程で、他の文献から
収集したものを適宜補っていくことにする^{*4}。

*3 イディオム、慣用句の言語学的規定については、第2章を参照。

*4 といいながら、「第8章 数詞を構成要素とするイディオム」における日独比較・対照においては、『成
語林』ではなく、『数のことば辞典』を資料源としている。データを改めて、比較・分析するならば、また
異なった結果が出るだろうが、それは機会を改めておこなうつもりである。

第7章 色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム

Man spricht in der Klasse über die Bedeutung von Farben. Über die Farbe Weiß erzählt die Lehrerin: "Das Brautkleid ist weiß. Weiß ist die Farbe der Unschuld, ein Ausdruck von Freude." - "Aha", überlegt Elvira, "und warum ist der Bräutigam dann schwarz angezogen?" (Valence 1995: 101)

(色の意味に関する授業で、先生が白について説明した。「花嫁衣装は白です。白は、純潔の色です。喜びの色です。」「へー、そうなの」とエルヴィラは考えた。「それじゃ、どうして花婿は黒い服を着ているの?」)

7.0 はじめに

色彩に関する語彙は、言語相対説を証するものとして長らく言語学で論議の対象となっていた。いわく、英語あるいはドイツ語においては虹は6色だが、日本語においては7色であると捉えられている。あるいはドイツ語を母語とする児童たちが太陽を描くと、色は黄金か黄であり、日本語を母語とする児童たちはほぼ例外なく赤い太陽を描く。自然において実際に観察される「虹」あるいは「太陽」は、同じであるにもかかわらずである。

現在では、色彩知覚そのものにおいては違いはなく、ただそのような知覚を言語的にどのように分割して表現するか、特定の言語が色彩を表現するためにどのような語彙を備えているか、その点においてのみ違いがあるということが共通の認識となっている。しかも、色彩に関する語彙の多少については、その分化に関して普遍性がみられるというのが、バーリン/ケイ(Berlin/Kay 1969)やケイ/マックダニエルの研究(Kay/McDaniel 1978)が示していることである。ある言語において色彩を表現する語が2つしかないならば、それは黒と白つまり明るさと暗さを表現する語であり、3つであるならば、それに赤が加わってくるという具合になっているというのである。バーリン/ケイやケイ/マックダニエルたちの研究は、従って、言語相対説に対する強力な反証といえるのである。

言語相対説に対する賛成あるいは反対論議はともかくとして、特定の色彩についての意味づけ、象徴的な意味付与といった点については、かなり文化的な差異が認められるといえよう。たとえば、些細な例ではあるが、道路工事現場やビル建築現場で危険である旨の注意を促すために柵が立てられたり、テープが張られたりしているが、これが、少なく

ともドイツ語圏では、赤と白が交互に入ったテープとなっていることに、筆者はひどく新鮮な驚きを覚えた。日本では、その配色のテープや幕は、祝い事の際に張られるからである。日本で道路工事現場に見られるのは、黒と黄が交互に斜めに塗られたついでである。

あるいは、ドイツ連邦共和国の各政党の色は、それぞれ歴史的な経緯があるのだろうが、ナチを意味する「茶」(braun) がイディオムの世界にも入り込んでいるのは、興味深い。

「キリスト民主同盟」(CDU)は「黒」(schwarz)、バイエルン州独自の保守政党「キリスト社会同盟」(CSU)は「青」(blau)、「社会民主党」(SPD)は「赤」(rot)、「ドイツ自由党」(FDP)は「黄」(gelb)、「緑の党」(Die Grünen)はその名の通り「緑」(grün)である。ブレーメンで1991年に成立した「信号連立」(Ampelkoalition)という表現は、SPD、FDP、Die Grünenの3つの政党による連立のことである*1。

本章では、ドイツ語におけるイディオムの中で、色彩に関する語彙を構成要素として含むものを取り出し、そのような文化的な差異にも目を向けながら、ドイツ語イディオム学習についての示唆を得ることを目指して、日独両言語のイディオムを比較・対照していくことにする。

7. 1 資料について

ドイツ語と日本語においてどれほどの数の色彩に関する語彙が存在しているのかを確定するのは、なかなか難しい。たとえば、講談社『日本語大辞典』巻末の「言葉の資料便覧」にある「色名辞典」(2255-2272)には、カタカナの色彩名を含めて、全部で350が上げられている。カタカナの色彩名を除くと、190となる。これらは和語の色彩名といえるだろう。色彩名には、「カーキ色」や「ライラック色」のように、カタカナと漢字の複合されたものもある。また、「紅」、「紺」といった漢字一字の色彩名もある。ほとんどは「色」との合成によっている。そういった色彩名の作りを子細に検討することも興味深いだが、それは

*1 本来交通信号は「赤、黄、緑」の三色の灯からなっているというのが普通の理解である。しかし、2000年12月29日の『バーデン新聞』インターネット版のバーデン・ビュルテンベルク州に関する記事として、「黒-緑-黄信号」(Schwarz-grün-gelbe Ampel)という見出しがあった。来る2001年3月25日におこなわれる州議会選挙の結果によっては、キリスト民主同盟(CDU)と緑の党(die Grünen)、ドイツ自由党(FDP)3党による連立政権の可能性もあるということを、緑の党州本部長が表明したという記事である。

政治的コンテクストでは、「信号」はもはや本来の「赤、黄、緑」からだけでなく、ともかくも異なる3つの色合いの政党による連立を意味するようになっているようである。「信号」が持っている意味特徴のうち「3つの色からなっている」という特徴だけが取り出されているのである。

本章の主題ではない。

本章において比較・対照するイディオム表現は、日本語については『成語林』から収集したものだが、イディオムの構成要素となっている色彩に関する語彙は、見出し語となっている表現のみで数えると19であり、イディオムの総数は81である。しかし、「顔色」、「気色」、「声色」、「旗色」、「目の色」を「色」にまとめることもできるだろう。そうすると色彩に関する語彙の総数は14ということになる。色彩名の多さに比べると、イディオムの構成要素となっている色彩に関する語彙はきわめて少ないと言えるだろう。

また、イディオムの総数に関しては、以下の点に留意していただきたい。「赤の他人」、「赤貧」の構成要素となっている「赤」は、明らかな、という意味であり、本来色彩に関する語彙ではない。しかしながら、「黄泉の客」と同じく、漢字として色彩に関する語彙が使われているということから、表現だけを問題として、これも色彩に関する語彙であると解釈している。また、「緑の黒髪」等、ひとつのイディオムに複数の色彩に関する語彙が含まれているものを重複して数えると、数は85に増えるが、重複しては数えないことにする。ドイツ語の方では重複して数えていないからである。このような場合は、イディオム表現の冒頭に現れる色彩に関するものとして数えることにした^{*2}。

ドイツ語に関しては、まず最初に、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』の"V. Farben"(S.66-74)に収録されている色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を拾い出した。色彩に関する語彙といっても、実際には色彩形容詞がほとんどである。見出し語となっている語の数は、全部で18であり、イディオムの総数は92である。しかし、"Farben"の項には、"blümerant"（気分が悪い）という見出し語もあがっている。なぜこの語が色に分類されているのか、よくわからないので、この語は対象外とする。また、"Aschgrau"と"grau"は、同じ「灰色」に属していても、色合いが少し違うのであろう。従って、違う別の色として数える。"rosarot"（バラ色）、"rot"（赤）についても、同じである。色彩形容詞、あるいは色彩名ではなく、動詞が見出し語となっているものが5つある。すなわち、"schwarzarbeiten"、"schwarz hören"、"schwarzschlachten"、"schwarzsehen"、"weißwaschen"

*2 「金（きん）」は、色彩に関する語彙と考えていいだろうが、「金」（かね）そのものは、色彩に関する語彙といえるのかどうか。『成語林』には、「金山世帯」（金があれば、派手に使ってしまう暮らし）をはじめ、「金」に関するイディオム表現が22収録されているが（226 - 231頁）、これらのイディオム表現における「金」は、明らかに「貨幣」を意味しており、色彩に関する語彙であるとは考えられない。ドイツ語における"golden"とは、異なっている。

である。前4者は、"schwarz" (黒)、最後者は"weiß"に含めることにする。また、"bunt" (色とりどりの)、"Farbe" (色) は、色彩名とは言えないが、色彩に関する語彙として扱う以外にないであろう。純粹に色彩名 (名詞) であるのは、語頭が大文字からはじまっているという表記からもわかるように、"Aschgrau"と"Zinnober"の2語だけである。しかし、例として挙げられているイディオム表現を詳しく見ていくと、"Zinnober"の方は、「朱色」という意味ではなく、「がらくた」という意味で使われている。従って、これも対象外とせざるを得ない。以上の点を考慮した結果、異なった色彩名の総数は11になる。そして、イディオムの総数は89である。

以上のデータを補うために、さらに"DUDEN: Bildwörterbuch" (594-595頁) で主な色彩に関する語彙を選び出し、次にイディオム辞典でそれぞれの色彩に関する語彙に関するものを搜し出した。そしてまた"DUDEN: Deutsches Universal-Wörterbuch A-Z" (DUDEN 1989) にも当たって2、3補った。その結果"himmelblau"、"braun"、"rosa"の3つを付け加えることにした。そしてさらに"DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomaticsches Wörterbuch der deutschen Sprache" (DUDEN 1992)および"Küpper, Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache" (Küpper 1982) からも色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を拾い出して、データに付け加えることにした。その結果、イディオムの総数は171、色彩に関する語彙の総数は18となった。

7. 2 資料の分析

7. 2. 1 ドイツ語

本章で取り扱うイディオムの構成要素となっている色彩に関する語彙は、ドイツ語に関していうならば、実質的には形容詞であるといつてよい ("Aschgrau"だけが名詞である)。形容詞を構成要素とするという場合、それは形式的に、5つのグループに分けることができよう。1つ目は、色彩に関する語彙が述語的に用いられていて、イディオムとしての意味をもっている場合である。2つ目は、色彩に関する語彙が副詞的に用いられている場合である。3つ目は、色彩に関する語彙が分離動詞の前綴りとなっている場合である。4つ目は、色彩に関する語彙が付加語的に用いられている場合である。5つ目のグループは、色彩に関する語彙が名詞化されている場合である。意味的には、文字どおりの意味か、比喩的な意味かという点からみることができようが、イディオムとしての意味が問題となっているのであるから、当然に比喩的な意味が考察の対象となる。以下それぞれのグループ

に属するイディオムを個別的にみていく。

7. 2. 1. 1 統語的観点から

7. 2. 1. 1. 1 述語形容詞として

blau (青) : "blau sein (oder blau sein wie ein Veilchen)" (泥酔している)

braun (茶) : "das ist mir zu braun" (行きすぎだ)

gelb (黄) : "(grün und) gelb vor Neid (oder Zorn, Wut, Ärger) werden" (妬み、怒り、憤り、腹だち) で顔色が (緑や) 黄になる)"

grün (緑) : "jemandem nicht grün sein" (誰かに我慢がならない)、"grün und gelb werden" (非常に嫉妬深くなる)、"mir wurde grün und gelb vor den Augen" (気分が悪くなる、めまいがする)、"grün hinter den Ohren sein" (未熟である)

himmelblau (空色) : "volltrunken" (ベロンベロンに酔っている)

rosa (ピンク) : "homosexuell" (同性愛の)

schwarz (黒) : "da kannst du warten, bis du schwarz wirst" (いつまでも待ちなさい)、"jemandem schwarz vor (den) Augen werden" (気を失う)

weiß (白) についてはない。日本語には、潔白だという意味で「あいつは白だ」という表現があるが、ドイツ語にはそのような転義あるいは比喩的な意味で、"weiß"を述語形容詞として使うことはないようである。

7. 2. 1. 1. 2 副詞として

blau (青) : "blau machen" (仕事に行かない)、"jemanden blau und grün schlagen" (たたきのめす)、

braun (茶) : "jemanden braun färben" (ナチ思想を吹き込む)、"jemanden braun und blau hauen" (誰かを激しくひっぱたく)、"etwas zu braun machen" (あることを誇張している)

grau (灰色) : "alles grau in grau malen (oder sehen)" (あらゆる物事を絶望的にみる)

grün : "sich grün und blau ärgern" (非常に腹を立てる)、"jemanden grün und blau schlagen" (誰かをたたきのめす)

himmelblau (空色) : "himmelblau kriegen" (終身刑を受ける)

rot (赤) : "etwas im Kalender rot anstreichen" (特記する一皮肉として)、"rot sehen" (すぐさま激昂する)

schwarz (黒) : "mit etwas sieht es schwarz aus" (事態は非常にゆゆしい)、"schwarz

angeschrieben sein (bei jemandem)" (誰かに悪く思われている、嫌われている)、"sich schwarz ärgern" (非常に怒る)、"schwarz auf weiß" (書かれてある、印刷されている)、"aus schwarz weiß machen" (黒を白といいくるめる)

7. 2. 1. 1. 3 分離動詞の前綴りとして

副詞であるか、分離動詞の前綴りであるかは、必ずしも一義的ではない。従って、"blau machen"もこの部類に含めるべきなのかも知れないが、ここでは、1語として書くか、2語として書くかという通常の基準に従っている。

偶然にもこれには白と黒の2つしかない。"schwarzmalen"と"schwarzsehen"の一つの意味「悲観する」を除けば、"schwarz"を前綴りとするその他の動詞は、すべて「無許可に、違法に」という意味をもっているのは面白い。日本語では、無免許運転、もぐりといった言い方になる。ただし日本では「許可無しにテレビを見る」という意味での"schwarzsehen"は、ありえないだろう。法的規制の対象ではないからである。

schwarz : "schwarzarbeiten" (許可無しに働く)、"schwarzfahren" (無免許運転する)、"schwarzhören" (許可無しにラジオを聞く、許可無しに講義を聴く) "schwarzschlachten" (許可無しに動物を殺す)、"schwarzsehen" (悲観する、許可無しにテレビを見る)、"schwarzmalen" (黒く塗る→悲観的にみる)

weiß : "jemanden weißwaschen" (誰かの疑いを晴らす (禊ぎ))、"weißbluten" (金を使い果たす)

7. 2. 1. 1. 4 付加語形容詞として

blau (青) : "blaues Blut" (高貴な素性)、"blaue Jungen (oder Jungs)" (船乗り) "blauer Montag" (勝手に休みにした月曜日のこと)、"mit einem blauen Auge davonkommen" (軽微の損害で難を逃れる)、"den blauen Brief erhalten (oder bekommen, kriegen)" (解雇通知を受け取る)

gelb (黄) : "der gelbe Neid" (あからさまな妬み)

grün (緑) : "die grüne Grenze" (森や牧場によって区切られた境界)、"ein grüner Junge" (若い未熟な人間)、"jemandem grünes Licht geben" (誰かに許可を与える)、"ach, du grüne Neune" (驚きの叫び)

rot (赤) : "rote Zahlen" (赤字)

schwarz (黒) : "das Schwarze Brett" (掲示板)、"schwarze Diamante" (石炭)、"der Schwarze Erdteil" (アフリカ)、"etwas in schwarzen (oder den schwärzesten) Farben schildern (oder

malen, beschreiben)" (何かを非常に悲観的に述べる)、"schwarze Gedanken (besonders schwarzen Gedanken nachhängen)" (悲観的な考えをする)、"die Schwarze Kunst" (印刷技術、魔術)、"der Schwarze Mann" (怖い人(子供を脅すときの言い方))、"der schwarze Markt" (闇市)、"jemandem den Schwarzen Peter zuschieben (oder zuspielen)" (誰かに責任を転嫁する)、"das schwarze Schaf (in der Familie)" (のけ者にされた家族の一員)、"eine schwarze Seele haben" (意地悪な人間、いけず)、"ein schwarzer Tag" (厄日、不幸な日)、"der Schwarze Tod" (ペスト)

weiß (白) : "ein weißer Rabe" (類希な人、極めて異常なこと)、"der Weiße Tod" (雪あるいは氷による死)、"eine weiße Weste haben" (不法なことはなにもしていない、潔白である)

7. 2. 1. 1. 5 名詞として

blau (青) : "jemandem das Blaue vom Himmel (herunter)holen" (できもしないことを約束する)、"das Blaue vom Himmel (herunter)lügen (oder versprechen) (大嘘をつく (不可能事を約束する))、"das Blaue vom Himmel (herunter)reden" (つまらないことを延々としゃべる)、"ins Blaue hineinreden (oder träumen, schießen)" (あてもなくしゃべる、あてもなく夢みる、あてずっぽうに撃つ)、"eine Fahrt ins Blaue" (目的地を定めない気まぐれの旅)

grün (緑) : "bei Mutter Grün (schlagen, übernachten)" (野宿する)、"dasselbe in Grün" (實際上ほとんど何の違いもなく同じもの)

schwarz(黒) : "jemandem nicht das Schwarze unter dem Nagel (oder unter den Nägeln) gönnen" (何も恵まない)、"er hat nicht das Schwarze unter den Nägeln" (すっからかん、文無し、すかんぴん)、"aus schwarz weiß machen" (黒を白といいくるめる)、"ins Schwarze treffen" (的に当てる)、"ein Schuß ins Schwarze" (命中)

最後にグループとしてまとめるほど数がなく、しかもその成り立ちからすると付加語形容詞として用いられている形になっているが、名詞の方が形容詞化されているために、全体として形容詞となっているものがある。例えば"blaublütig" (← blaues Blut (高貴な血筋)) である。もう一つは"blauäugig" (初な、ナイーブな) である。これは、さらに名詞化されて"Blauäugigkeit"という表現もある。

weiß (白) : "jemanden zur Weißglut bringen (oder bis zur Weißglut reizen)" (誰かを非常に怒らせる)

7. 2. 1. 2 意味論的観点から

名詞表現"Aschgrau"を除いたその他の形容詞がイディオム表現の中でどのような意味で使われているかを観察してみよう。

形容詞は、その機能からいって、ある対象が持っている形状や性質を表すものである。従って、形容詞が字義通りの意味を持っているか、比喩的な意味を持っているかという点から、分類することができる。ただし、当該の色彩に関する語彙（形容詞）を構成要素としている表現全体が、イディオムとしての意味を有していることは、言うまでもない。問題としているのは、構成要素となっている色彩に関する語彙（形容詞）が有している意味である。

"blau sein wie ein Veilchen"（堇のように青くなっている）という表現は、その形式がすでに直喩であるが、「アルコールを飲んだ結果、顔色が青くなっている」という状態を言い表している。その意味では、"blau"は、本来の「青」という意味を有していると言える。"j-n blau und grün schlagen"（したたかにぶつ）、"blaue Bohnen"（銃弾）、"blaue Jungen"（船乗り）、"mit einem blauen Auge davonkommen"（軽微の損害で難を逃れる）、"den blauen Brief erhalten"（解雇通知を受け取る）、"j-m das Blaue vom Himmel (herunter)holen"（できもしないことを言う）、"das Blaue vom Himmel (herunter)reden"（できもしない、たわごとを延々としゃべる）が、この部類に属する表現であるといえる。

これに対して"blauer Montag"（青の月曜日）は、月曜日の性質に言及しているわけではない。"blau machen"（仕事をさぼる）というイディオム表現との関連で初めて理解可能な表現である。従って、"blau"は本来的な意味で使われているのではなく、比喩的な意味で使われている。"blaues Blut"（貴族の血統）、"j-m blauen Dunst vormachen"（煙幕を張る）、"sein blaues Wunder erleben"（災難に遭う）、"ins Blaue hinein reden"（たわごとをしゃべる）、"eine Fahrt ins Blaue"（行き先をきめないドライブ）がこの部類に属する^{*3}。

18 の色彩に関する語彙を、比喩的／非比喩的、つまりその色彩に関する語彙が本来の色彩としての意味を有しているか、いないかという観点から分類してみたところ、比喩的な意味で使われているイディオム表現が 61、非比喩的な意味で使われているものが 110

*3 青という色は、ドイツ・ロマン派においては、きわめて象徴的な色でもあったことが思い起こされる。Novalis（ノバーリス）（1772-1801）の代表作"Heinrich von Ofterdingen"（1802）において、清浄な世界へのあこがれを象徴するものが"Blaue Blume"（青い花）であった。日本においては、ノバーリスのこの小説は『青い花』として知られている。また、象徴派に属するベルギーの作家 Maeterlinck（メーテルリンク）（1862-1949）の童話も"L'oiseau Blue"（青い鳥）（1908）であった。

となった。非比喩的つまり字義的な使用が、比喩的な使用の約2倍ほどある。比喩的な意味で使用されているという場合、その比喩の方向が観察するに値するであろう。その点から比喩的な意味で使用されている例を子細に検討していくことにしよう。

"ins Aschgraue hinausschießen"は、遠くの霞んでしまって、灰色となっている彼方という意味で使われている。実際に灰色であるかどうかは、問わない。要するに、見分けがつかないという意味で使われている。

"blau"については、2つの意味の方向が区別できるようである。一つは、不可能、あり得ないという意味、もう一つは明確にできないという意味である。"das Blaue vom Himmel herunterlügen"がこの代表例であり、"j-m blauen Dunst vormachen"が後者の例である。"blau machen"、"blauer Montag"もこの方向の意味から出てきていると考えることができる。

"bunt"は、「色とりどりである」というのが、本来の意味であるが、あまりにも色とりどりになると收拾がつかなくなり、行きすぎだということになる。"bunt"の場合は、完全に本来の意味から離れてしまっているわけではない。

"Farbe bekennen"は、色の意味ではなく、見解、考えという意味になっている。政治的な党派色という意味の用法が、一般化したものと考えられる。

"gelb"がどうして「嫉妬」と結びつくのか、よくわからない。

"golden"（黄金色）は、"Gold"（金）が金属中一番高い価値を持つものとされていることから、「最高の価値を持つ」あるいは「非常に貴重な」という特徴が比喩的な意味の中心をなしている。"jmdm eine goldene Brücke bauen"や"goldene Hochzeit"、"der goldene Mittelweg"における"golden"がそうである。

"silbern"、"kupfern"の比喩的な意味は、この"golden"との関係で、価値が規定されており、それが意味の中心をなしている。"Goldene Hochzeit"、"Silberne Hochzeit"、"Kupferne Hochzeit"と列挙するとき、その価値序列が明白になる。

"Grau, teuer Freund, ist alle Theorie und grün des Lebens goldner Baum"（友よ、すべての理論は灰色で、生命の黄金の木は緑だ）というゲーテ『ファウスト』の中の言葉が明確に述べているように、「無味乾燥」、「生気のないもの」という意味で"grau"は"grün"と対照をなす。"das graue Elend haben"という表現における"grau"は、「救いようのない」という意味を有していて、悲惨の意味を強めている。色彩としての「灰色」の意味はほとんど消失しているといっていいたいだろう。

"grün"については、「未熟な」という意味が比喩的な使い方であるが、もちろんこれは

果実からの連想であろう。"ein grüner Junge"がその代表例といえる。さらに派生して「現実、経験をふまえない」という意味にもなっていく。"am grünen Tisch entscheiden"はこの意味で使われている。"j-m nicht grün sein"（誰かが我慢できない）というのは、逆の方から表現していると考えられる。つまり、誰かに対して経験を積んでおり、よく知っているがゆえに、我慢できないということになっているのだろう。また、「めまいがして目の前が暗くなる」というのは、日本語においてもふつうの表現であり、素直に理解できるが、"mir wurde grün und gelb vor den Augen"（目の前が緑と黄になった）というのは、奇異な感じがする。

"rosarot"（ピンク色）は、イディオム表現に現れている限りでいうならば、"schwarz"（黒）と対照をなしている。"alles in rosarotem Licht sehen"（すべてを楽観的に見る）の反対が"schwarzsehen"（悲観的に見る）である。

"rot sehen"（激怒する）は、怒りのあまり頭、そして目にも血が上り、「赤く見える」ということなのであろう。激怒した結果の状態を表現しているといえる。

"schwarz"については、まず「悲観的」という意味がある。"schwarzsehen"（悲観的に見る）がその代表である。2番目は、「非合法、不法」という意味である。"schwarzarbeiten"（就業許可なしに働く）、"schwarzfahren"（無賃乗車する）がその代表であり、"Schwarzmarkt"（闇市）もこれに属する。第3番目は、「不運な」という意味である。"ein schwarzer Tag"は「運の悪い日」、日本人の発想でいえば、「さんりんぼう」ということになろう。もう一つの意味は、「邪悪な」というものである。"eine schwarze Seele haben"（邪な魂）にその意味が顕現されている。"die Schwarze Kunst"（魔術）も、そもそもはいかがわしいものであったのだろう。

"weiß"（白）が「清潔」、「けがれないもの」と結びついているのは、ドイツ語においても同じである。"weißwaschen"（浄める）は、「洗って、汚れがないようにする」という意味であり、日本語の「みそぎ」にあたる。"eine weiße Weste haben"における"weiß"も同様に、「白い」という意味はなく、「汚れがない」という意味である。

"braun"（茶色）が「行きすぎである」、「耐え難い」という意味を持っているのは、どうしてか。キューパー『絵入りドイツ語口語辞典』（Küpper 1983）によると、どの地方の方言かははっきりしないが、"braun"が"bunt"の意味で使われてもいるからである（Küpper 1983: 471）。すなわち"das ist mir zu braun(=bunt)"というわけである。しかし、どうして"braun"が"bunt"となるのか、という疑問は残る。

以上、比喩的な使用に関して観察してきたのであるが、最後に、共感覚という視点から観察するとどうなるであろうか。ドイツ語の171の用例を眺めるかぎりでは、色彩は視覚によって知覚されるものであるが、18の色彩に関する語彙が視覚以外の感覚について使われているものはひとつもない。"der gelbe Neid" (黄の妬み) や"schwarze Gedanken" (邪な考え) といった使用例はあるが、これは、思考、性格について言及しているのであり、共感覚とは関係がない。

7. 2. 1. 3 語用論的観点から

ほとんどの色彩に関する語彙に関していえると思われるが、色彩には明るいあるいは暗い、清潔か汚れているかといったイメージが伴っている。そのようなイメージがイディオム表現の意味にも反映していると思われる。また、実際にどのようなコンテキストで使用されるのか、当該のイディオム表現がどのような発話行為の遂行において使用されるのかという点から、イディオム表現を観察することができよう。つまり、当該のイディオム表現が、肯定的な意味合いを伴っているか、否定的な意味合いを伴っているかという点から、観察することができるだろう。

たとえば"jemandem blauen Dunst vormachen" (誰かに対して青い霧をつくる) や"das Blaue vom Himmel (herunter) holen" (空の青を引き下ろしてくる) といった表現は、明らかに否定的な価値判断を背景にして使用される。イディオム表現が指示している行為をおこなっている人に対して、否定的な価値判断を話し手は下しているということである。これとは対照的に"jemandem Farbe halten" (誰かの色を守っている) や"jemandem eine goldene Brücke bauen" (誰かのために黄金の橋を築く) は、当該の行為に対して肯定的な判断を話し手が持っていることが前提となっている。"bunte Reihe machen" (色とりどりの列を作る) や"bei Nacht sind alle Katzen grau" (夜には猫はすべて灰色だ) は、そのような価値判断については、中立的であるといえる。使用状況によって、肯定、否定いずれでもありえる。

拾い上げた171のイディオム表現を肯定的、中立的、否定的という3つの部類に分けると、それぞれ9、70、92という数になる^{*4}。半数以上のイディオム表現が、否定的な意味

*4 色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現に伴う価値評価に関する判断は、2001年1月現在ドイツ連邦共和国シュトゥットガルト市から短期留学生として広島大学で日本語を学んでいるオリバー・シュワルツ(Oliver Schwarz)氏によるものである。同氏に協力を感謝する。

合いを持って使われるということが目立つ。肯定、否定のいずれにしる、イディオム表現のほとんどが話し手の主観的な価値判断に関わっていることに注意すべきであろう。このことは、イディオム表現がきわめて感化的な意味内容を伴っているということにも繋がっていく（第3章を参照）。

イディオム表現の構成要素となっている色彩に関する語彙のすべてについて言えるわけではないが、「はじめに」でも述べたように、いくつかの語彙が政治的な意味合いを持っていること、しかも、それが日本語社会におけるのとは異なった意味合いを持っていることに、日本語を母語とするドイツ語学習者は留意する必要がある。とりわけ"braun"は、ドイツ現代史における政治的不幸と密接しており、特別なコノテーションを持っている。"rot"、"grün"、"gelb"、"schwarz"についても、TPO に配慮して使うことが必要になってくると言えるだろう。

7. 2. 2 日本語

日本語における色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現において、いちばん数が多いのは、白に関するイディオム表現である（19）。それに次いでいるのは、ずばり「色」という語そのものを構成要素とするイディオム表現である（14）。「顔色」（2）、「気色」（1）、「声色」（1）を付け加えると、18ということになる。

拾い上げた81のイディオム表現を、ドイツ語に関して行ったように、統語論、意味論、語用論の観点から観察していくことにしよう。

7. 2. 2. 1 統語論的観点から

統語論的（あるいは形態統語的）な視点から、拾い上げた表現は、名詞的表現、動詞的表現、形容詞的表現、形容動詞的表現、副詞的表現の5つの部類に分けることができる。

名詞的表現とは、たとえば「赤い信女」、「赤の他人」等、全部で29の表現がある。

動詞的表現とは、「青くなる」、「青筋を立てる」といったように、最後に動詞を伴っているものである。この部類に属するものは、42ある。

形容詞的表現とは、最後に形容詞を伴っているものである。「顔色無し」、「気色が悪い」、「嘴が黄色い」、「尻が青い」、「朱を注ぐ如し」の5つがこの部類に属する。

形容動詞的表現とは、「青息吐息」、「黒山のように」のように、その表現のあとに「だ」を補うことによって、述部を形成することができるものとする。「白魚を並べたよう」、「明々白々」を加えて、全部で4つということになる。

副詞的表現としては、「目の黒い内」ひとつだけである。

7. 2. 2. 2 意味論的観点から

日本語の 81 のイディオム表現についても、色彩に関する語彙が比喩的あるいは非比喩的な意味で使われているかどうかという観点から、観察してみよう。

筆者の判断では、「青くなる」、「青筋を立てる」といった表現における「青」は、字義通りに対象が「青い」ことを指示していると考えられる。対照的に、「青田を買う」は、もちろん本来的には、麦や大豆、稲が実る以前の状態で買うという意味であったのであろうが、現在では多くの場合比喩的に「完熟する以前に買う」という意味で使われている。その意味で比喩的であると考えられる。「尻が青い」も、本来的には、乳児期には、実際に尻が青いこと（蒙古斑）を指していたのだが、転義的には、精神的に未熟であることを意味するようになってきている。そのような考えに基づいて、比喩的か、非比喩的かに分けると、その数は 46 と 35 となっている。ドイツ語と比較すると、やや日本語の方が比喩的な用法が多いといえるだろうか。

7. 2. 2. 3 語用論的観点から

イディオム表現が肯定的な価値判断をふくんでいるか、否定的な価値判断をふくんでいるかという点から見ると、どうなっているのでしょうか。「青」に関する 9 つの表現のうち、「青くなる」、「尻が青い」のように、否定的な状態を意味しているものが 7 つある。他方、肯定的な状態を意味している表現は、「青眼」、「青天白日」の 2 つだけである。このような観点から、81 の表現を分類してみると、肯定的な意味で使われるものは「紅一点」、「金字塔をうち立てる」等、17 である。明らかに否定的な意味で使われるものは 44 という数に上る。「あけに染まる」等、20 の表現が価値判断に関しては中立的であると判断される。

本章における考察を展開するために拾い上げた資料には含まれていないが、日本語においても色彩に関する語彙が政治的連関で用いられることがないわけではない。しかしながら、すぐにも思いつくのは、「赤に染まる、赤にかぶれる」（共産主義思想、社会主義思想を信奉する）という表現のみである。

以上述べてきた意味論的および語用論的観点からの分類を数値として示したのが、第7章に関する資料の【資料3】である。

7. 3 分析に基づく比較・対照的考察

以上において、日独両言語における色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を観察し、分析してきた。以下、これらの観察、分析結果に基づいて、比較・対照しながら、考察を展開してみたい。

日独両言語において、イディオム表現の構成要素となっている色彩に関する語彙の数は、日本語においては14、ドイツ語においては18となっている。全体の数がそれほど多くはないので、4つの差は大きいといえるだろう。ドイツ語の方が日本語よりも多くの色彩に関する語彙をイディオム表現に取り込んでいるということになるだろう。

日本語の「青」とドイツ語の"blau"は、便宜的に対応させて理解しているが、実際の色彩の認識においては必ずしも一致しない部分があると思われる。たとえば、筆者個人が経験したことでいえば、ウィーン西駅でウィーン郊外に住む知人と待ち合わせしたことがあった。その知人が自動車で迎えに来るということであったが、自動車はベンツで色は「赤」ということであった。しかし、実際の自動車は、筆者の判断では「橙色」あるいは「明るい茶色」であった。

しかし、本章で問題としているのは、そのような認識と言語表現のずれではない。日本語を母語とするドイツ語話者が、「青」という色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を使って伝えようとする意味を、ドイツ語でどのように表現するか、あるいは逆に、ドイツ語において"blau"という色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現で表現される意味内容を、どのように日本語において理解するかという問題である。

いずれの色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現が多いかを、両言語に関して比較するならば、ドイツ語においては、黒が圧倒的に多い(36)。それに次ぐのが、緑である(25)。そして"blau"(18)、"rot"(17)、"weiß"(16)と続く。他方日本語において、一番多いのは、「白」(19)であり、「色」(13)、「青」(9)、「赤」(8)、「黒」(6)と続く。ドイツ語において一番多い「黒」が日本語においてはそれほど多くはないというのが目立つ。逆に日本語において一番多い「白」がドイツ語ではそれほど多くはないというのはおもしろい。とりわけドイツ語においては"golden" (黄金色)に関するイディオム表現が多いのが興味を引く。いずれの色彩に関する語彙が、なじみの深いものであるかという観点から見て、これらのイディオム表現に登場する色彩に関する語彙は、いずれも両言語文化圏の色彩に関する関心を反映しているといえるであろう。

以下、本節では、日本語、ドイツ語両言語に関して双方向的に、個別の色彩に関する語彙を含むイディオム表現を比較・対照して、ドイツ語のイディオムを学習する際に留意す

るべき点について考えていくことにしたい。上で述べたような認識と言語表現上のずれの問題はあるとしても、イディオム表現の構成要素となっている色彩に関する語彙で、日独両言語において出現しているものは、「青」、「赤」、「黄」、「金」、「緑」、「白」、「色」、「黒」の8つである。これらの色彩に関する語彙について、個別的に見ていくことにしよう。

1. 「青」と"blau"

「青くなる」と"blau sein" (酔っている) は、表現はほぼ同一であるといえるが、意味は異なっている。「偽の友だち」関係にある表現である。厳密に言えば、ドイツ語の方は、「青くなる」ではなく、「青くなっている」という状態を表現している。日本語においては「青くなっている」といっても、意味は変わらないので、「偽の友だち」関係にあると考えてもいい。意味的に「青くなる」に対応するドイツ語の表現は、"blass werden"である。"das Blaue vom Himmel (herunter)holen" (空の青をとってくる)、"mit einem blauen Augen davonkommen" (青い片目で逃れる、青あざの片目で逃れる) という2つの表現における"blau"は、「青」に対応しているが、それ以外は「青」には対応していない。"sein blaues Wunder erleben" (青の奇跡を体験する) における"blau"は、予期しなかった悪いことにめぐり合っ「青ざめる」という意味でも理解可能である。その場合は、日本語の「青」に対応しているといえるだろうが、ドイツ語の発想では、「予期しなかった、通常ではあり得ない」という意味の方が意味の核をなしていると考えられる。

日本語の「青」は、ドイツ語の"blau"が持っている「不可能な、不確実な」という意味は持っていない。そしてドイツ語の"blau"には、「未熟な」という意味はない。その意味での「尻が青い」に対応するドイツ語の表現は"ein grüner Junge" (緑の若者) である。

ドイツ語では"der blaue Planet" (青の惑星) と表現しているが、日本語では「緑の惑星」である。また、交通信号は日本の道路交通法では「赤、黄、青」ということになっているが、国際的には「赤、黄、緑」である。認識と言語表現のずれがからんでいるのであろうが、日本語の「青」、「緑」、ドイツ語の"blau"、"grün"は、両者を合わせて、対応関係を考えた方がよさそうである。

2. 「赤」と"rot"

日本語の「赤」は、「明らかな」という意味を有している。「赤の他人」、「赤恥をかく」、「赤貧」がこれに属している。また「赤」といってもその色合いにはかなりの幅があるようである。「赤犬が狐を追う」という表現から、そのことが推測される。「狐色」に近い「赤」も存在するということである。ただし、現在の日本語の感覚としては、このイディオム表

現は理解しにくいものとなっているのではないだろうか（上述した筆者の経験のくだりを参照）。

興奮したときや怒ったときに「顔を真っ赤にする」のは、日本人でもドイツ人でも同じであるだろう。ただその「顔色」を「赤」と表現するか、「黒」と表現するかの違いは、認識の違いでもあるし、言語の意味体系の違いでもあるといえるだろう。ドイツ語では"sich schwarz ärgern"（黒く怒る）あるいは"sich grün und blau ärgern"（怒りで緑になったり、青くなったりする）と表現しているからである。血液が集まりすぎて、青、そしては黒となるのであろう。従って「顔を真っ赤にする」を素直にドイツ語で"das Gesicht rot machen"あるいは"das Gesicht wird rot vor Wut"と表現しても、おおよその意味は伝わるだろうが、怒りの度合いは薄まって伝わることになるような気がする。"mit roten Ohren abziehen"（赤い耳で引き下がる）にあるように、ドイツ人は恥じ入ったとき、耳が赤くなるようであるが、日本人は「顔を真っ赤にする」か「顔から火が出る」。

ドイツ語の"rote Zahlen"（赤字）という表現は、問題なく理解できる。しかし、"der rote Faden"（赤い糸）は、「偽の友だち」である。ドイツ語の方は、「指導的な考え、基本動機」といった意味だが、日本語においては男女関係について「縁」という意味で使われる。"die rote Laterne"（赤提灯）も「偽の友だち」である。ドイツ語の方は、「どん尻」を意味するが、日本語では「居酒屋」を意味している。「どん尻」の意味では"Schlußlicht"（後尾灯）の方が日本語を母語とするものにも理解しやすい。

日本語においては対応するイディオム表現は存在していないが、"sich die Augen rot weinen"（目を赤く泣きはらす）という表現は、比較的理解しやすいといえよう。"ein rotes Tuch für jemanden sein/wie ein rotes Tuch auf jemanden wirken"（誰かにとって赤いタオルの効果を持つ）という表現も、赤い色が牛を興奮させるということ、スペインにおける闘牛との連関で思い浮かべるならば、理解可能となるだろう。日本語では「痛い目にあうぞ!」と喋って脅しても、どのようにして痛い目にあわせるのか明白ではない。ドイツ語の方はもっと具体的に"es gibt gleich rote Ohren"（すぐに赤い耳になるぞ）と表現している。つまり、「耳」を引っ張るか、耳を含めた横っ面を張るかするだろうと想像することができる。

3. 「黄」と"gelb"

日独両言語において"gelb"（黄）を構成要素とするイディオムは、数少ない。"grün und gelb (vor Neid usw.) werden"（妬み等で緑になったり黄になったりする）と"mir wurde grün und

gelb vor den Augen" (目の前が緑と黄になる) は"grün" (緑) として数えたのだが、それを含めても、ドイツ語でも4つということになる。

イディオム表現の意味から単純に考えて、ドイツ語では「黄」は「妬み」の色であるといえよう。他方、「嘴が黄色い」、「黄色い声」、「黄泉の客」という表現に共通する意味特徴があるようには思えない。「尻が青い」に見られるように、「未熟、未経験」という意味が「黄」にもあることが確認できる。イディオム表現に見られる限りで言えば、ドイツ語の色彩に関する語彙には存在しないのだが、「黄色い声」は、本来視覚対象に言及する語彙を聴覚現象へと転用しているという、いわゆる共感覚現象に関わっている。

4. 「金」と"golden"

日本語の「かね」という音には、「金」、「銀」（さらに「鉄」）という漢字を当てることができるが、まさにそれらの漢字が示しているように、「金」は金属の中で一番価値があるものとされ、貨幣制度の根本である。ドイツ語の"Geld" (おかね) も"Gold" (金) に関連があるかと思われるかも知れないが、残念ながら語源的にはそうではない。"gelten" (通用する) という動詞と語源的には結びついている。語源はともかくとして、ドイツ語のイディオムを見る限りでは、"Gold" (金) がお金と密接していることに疑いを差し挟む余地はないようである。「高い価値のある」という意味を持ったイディオム表現がほとんどすべてである。その意味は「金」が持っている価値から派生したものであると見なすことができる。

ただし、"in einem goldenen Käfig sitzen" (黄金の籠に座っている)、"das Goldene Kalb anbeten" (黄金の牛に祈りを捧げる)、"der Tanz um das Goldene Kalb" (黄金の牛のまわりで踊る) といった表現が示しているように、金の価値をあまりにも盲信するとき、人間は富んでいてもその富に束縛され不自由になり、強欲、吝嗇となり、その人間性に疑問符がつくことになる。「金看板を掲げる」という日本語の言い回しも、高価値の金の見せかけだけをまねた愚かしさを批判的に捉えている。

"goldene Hochzeit" (金婚式) は、現在では日本でも普通に使われているので、誤解の余地はないであろう。しかしながら、日本においては普通に使われる「ゴールデン・ウィーク」との連想で"Goldener Sonntag" (金の日曜日) を捉えると、大きな誤解をしてしまうことになる。黄金の日曜日とは、クリスマス直前の日曜日をいうのである。

7. 「緑」と"grün"

日本語においては「緑」に関するイディオム表現は2つしかない。「緑林」は、転義的

に「盗賊」を意味する。「緑の黒髪」は、「つやのある黒髪」という意味だが、この場合の「緑」は、若々しいという意味合いが込められていると考えられる。中国由来の転義的な「盗賊」という意味を除外して考えると、緑は、日本語において、否定的な意味合いは持っていないといえる。日本語において2つしかイディオム表現がないのであれば、以下は、ドイツ語の表現を観察しながら、論述することになる。

ドイツ語においては、"grün"に関するイディオム表現は 25 と数多いが、これは森の国ドイツ、牧草地帯（序論 「はじめに」を参照）ドイツを象徴しているものといえるのだろうか。

"grüne Minna"（緑のミンナ→警察の護送車）は警官の制服やパトロール・カー等がドイツでは緑であることに由来している。"grüne Welle"と合わせて、警察関係が2つあるというのは、ドイツの特徴であろうか。そもそもなぜ警官の制服は緑なのであろうか。緑の多いドイツでは、背景と一体化して、目立ちにくいと思われるが、それはプラスにもマイナスにも作用し得るのではないだろうか。

"gelb"の項で言及したように、"grün und gelb"という具合に対句として使われるが、"grün und blau"と同じように、肯定的な意味では使われていない。妬みや、腹立ち、殴打、失神に関連して使われている。

"eine grüne Hand haben"（緑の手を持っている）、"grüne Hochzeit"（緑の結婚式）が肯定的な意味の代表例である。

"jemandes grüne Seite"（誰かの緑の側）が「誰かの左側」を意味するのは、なぜなのか。左手が一般に不器用であるのと、緑が持っている未経験、未熟という意味がつながったのであろうか。

6. 「白」と"weiß"

「白」は一般には清潔、純粋といったイメージと結びついていると考えられるが、イディオム表現を見る限りでは、その意味を有しているものはない。「白を切る」、「白紙に返す」、「明々白々」に共通しているのは、なにも書かれていないという「白い」の本来的な意味だけである。「白を切る」というのは、脳になにも銘記されていないということである。「白い歯を見せる」は、微笑んだときの結果を意味内容としていることになる。「白い目で見ると」いうのは、横目で見るとき、白い部分が目立つということに依っている。これも結果を意味内容としている。「白寿」というのは、漢字のつくりには依っているのだが、ことば遊びともいえる。

一方、ドイツ語には「潔白、清潔、純粹」という意味内容を顕現しているイディオム表現が存在している。"jemanden weißwaschen"（誰かを洗って白くする→誰かの嫌疑を晴らす）、"eine weiße Weste haben"（白いベストを着ている→潔白である）がそうである。"der weiße Tod"（凍死）、"weiße Weihnachten"（雪のクリスマス）は、ドイツの気候を反映しているといえよう。酔ったときや、精神が錯乱状態に陥ったとき、ドイツの人は"weiße Mäuse sehen"（白い鼠を見る）ようである^{*5}。

"ein weißer Fleck auf der Landkarte"（地図の上の白い部分→処女地）という表現は、日本語としても馴染みのものであるが、本来は外来のものであるのだろう。

7. 「色」と"Farbe"

日本語、ドイツ語いずれの言語においても「色」と"Farbe"が、具体的にどの色を指しているのかは明らかではない。まず日本語の「色」は、「男女関係」、「偏見」、「(とりわけ顔の)皮膚の色」、「手段、方法」という意味を持っている。「男女関係」に関して「色」が使われている表現が多い反面、具体的な「色彩」の意味で使われる例がないというのが目立っている。ドイツ語において"Farbe"がそのような意味で使われることはない。ドイツ語の"Farbe"は、「信条、思想」、「皮膚の色」、「色彩」という3つの意味に分かれる。

「色を失う」は、ドイツ語においては逆の方から表現しているが、"Farbe bekommen"（色を取り戻す）に対応させることができよう。表現も意味も重なり合っていると考えてよい。

日本語の「色眼鏡で見る」は、具体的にどの「色」であるかがわからないので、「偏見でものを見る」という抽象的な意味で理解するしかない。ドイツ語では色が具体化されて"durch eine rosarote Brille sehen"（ピンクのメガネを通してみる→非常に楽観的に判断する）となっている。楽観的な見方以外はどうするか。悲観的な見方という場合は、"schwarz"という形容詞を"Brille"の前に付加して、"durch eine schwarze Brille sehen"と表現してもほぼ理解可能ということになるだろうが、「色眼鏡」="Farb(en)brille"と考えると、"durch eine Farb(en)brille sehen"というわけにはいかない。日本語でいう「色眼鏡」は、ドイツ語では

*5 "Wer mit einem Kater Auto fährt, sollte sich vor weißen Mäusen hüten!" (Witzebuch 1997:486) (二日酔いで車を運転する者は、白いネズミに気をつけなければならない!) "mit einem Kater"という表現は、"einen Kater haben" (二日酔いしている) というイディオム表現との連関で理解されるべきである。"Kater"には、いうまでもなく「牡猫」という意味もある。"weiße Mäuse" (白いネズミ) は、実際は道路の白い車線をさしているのだろうが、二日酔いしている者には、白いネズミに見えるのだろう。「猫」から「ネズミ」という連想にこのウィットの落ちは依拠している。

"Sonnenbrille" (サングラス) だからである。ドイツ語で表現するときには、どのような方向の色合いかを具体的に形容詞や副詞で表現することが必要になる。

8. 「黒」 "schwarz"

日本語においては「黒白」あるいは「白黒」というように、対照的に使われる例が多いといえるが、ドイツ語においては"schwarz auf weiß" (白の上に黒く)、"aus schwarz weiß machen" (黒から白をつくる) の2つが対比を強調している。後者については、日本語でも「黒を白と言いくるめる」という言い回しがある。前者に対応するのは「明々白々」であろうが、この日本語の表現には「黒」は登場していない。

ドイツ語における"schwarz"は「不法に」という意味で使われているが、"Schwarzmarkt" (闇市)、"schwarzarbeiten" (もぐりで働く) に見られるように、その意味に対応しているのは、日本語では「闇」あるいは「もぐり」である。

"in die schwarze Zahlen kommen" (黒字になる) 等、黒字に関する表現は、日本語としても容易に理解できるものであり、ほとんど重なり合っている。"das Schwarze Brett" (黒板) も、重なり合っている表現といえるが、必ずしも「黒板」とは限らないことも頭に入れておく必要がある。要するに「掲示板」である。日本語で「黒板」といえば、教室の「黒板」を思い浮かべるが、ドイツ語では"Tafel" (板) というのがふつうである。

"die schwarze Liste" (ブラック・リスト) は、英語からの借用翻訳であり、日本語においては外来語として通用している。

日本語における「黒」に関するイディオム表現のうち2つが人間に関するものであること、しかもとりわけ日本人の人種的特徴に関わっているということは、面白い。当然ながら、「黒山のように」、「目の黒いうち」といったような表現は、ドイツ語においてはそれに対応する表現は存在しない。「黒山の人だかり」は、ドイツ語では"Menschentrauben" (人間の房)、「目の黒い内」は"solange man lebt"とでも表現するしかないであろう。

7. 4 おわりに

以上、日独両言語における色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を、日本語母語話者がドイツ語を学習するということを念頭において、比較・対照してきた。理解および産出において問題となるのは、「偽の友だち」関係にある表現であるといえるが、色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現に関しては、それほど数多くはない。

「青くなる」と"blau sein"、「赤い糸」と"rote Faden"、「赤提灯」と"die rote Laterne"、「黒

板」と"das Schwarze Brett"が、「偽の友だち」関係にある表現として抽出できたにすぎない。

「偽の友だち」関係にある表現が学習上注意すべきであることはいままでの間でもないが、色彩に関する語彙を構成要素とするイディオムに関しては、それ以上に、日独両言語文化圏における色彩そのものが持っている政治的な意味合いにもっと注意を払うべきであろう。あるいは特定の感情表現が日本語を母語とする学習者にとっては思いもつかないような色彩と結びついているということを銘記すべきであろう（たとえば"(grün und)gelb vor Neid werden"（妬みで緑になったり黄になったりする））。

「はじめに」で述べたように、政治的な連関以外で、色彩が象徴的な意味を持っていることはいままでの間でもない。赤白の幕は、日本ではおめでたいことを意味しているが、ドイツ語圏では危険を意味する。黒が喪の色であるのは、ドイツ語圏でも日本でも同じである。しかし、そのような社会的、文化的な象徴的意味合いについての比較・対照は、言語分析の範囲を超えるものといえよう。

本論文はドイツ語イディオム学習について考察することを主題としているものであり、その主題と直接的な関連はないが、ひとつだけ言語学的関心から付言すると、バーリン／ケイ（Berlin/Kay 1969）あるいはケイ／マックダニエル（Kay/McDaniel 1978）の研究によると、"schwarz und weiß"（黒と白）→"rot"（赤）→"grün und gelb"（緑と黄）→"blau"（青）→"braun"（茶）→"violett, rosa, orange und grau"（堇色、バラ色、橙色、灰色）というのが、色彩に関する語彙分化の方向ということが確認されている。その事実は、日独両言語のイディオム表現に現われる色彩に関する語彙にかぎっていても、ある程度うなずけるのではなかろうか。いずれの言語においても基本的には、「白」と「黒」に関するイディオム表現が多い。そして「赤」、「青」が比較的多い。しかしながら、"braun"（茶色）は、ドイツ語においては4つ、日本語においては存在しない。ドイツ語において「茶色」に関するイディオム表現が少ないのは、歴史的な経緯に起因していると考えられないこともないが、しかし、それは20世紀における出来事であった。「茶色」に関するイディオム表現が両言語においてほとんど存在しないのは、一体どのような理由からであろうか。

最後にウィットをひとつ掲げて、色彩に関する語彙を構成要素とする日独のイディオムに関する本章を締めくくりたい。

Deutsches Eintopfgericht in den vierziger Jahren: Wenig Hirn, sehr viel Kohl, **mit brauner Sauce** aufgewärmt. (Kunz 1999: 106)

第7章 色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム

(40年代におけるドイツの鍋料理：わずかの脳味噌、キャベツはたっぷり、そして茶色のソースでぐつぐつ煮る^{*6})

*6 40年代とあるが、意味されているのはナチが政権を握っていた時代である。茶色のソースとあるのは、ナチを暗示している。

第 8 章 数詞を構成要素とするイディオム

"Mein Mann hat mir einen tollen Papagei geschenkt. Der war vorher bei einem Stasi-Mann und weiß alles."

"Und was kostet so ein Tier?"

"Dreitausend Mark."

"Was, dreitausend für einen Papagei aus zweiter Hand?"

"Nein, tausend für den Vogel - der Rest ist Schweigegeld." (Dieckmann 1996: 65)

(「うちの人が凄いオウムをプレゼントしてくれたのよ！。そのオウムは前にシュタージ勤務の人に飼われていて、何でも知っているのよ。」

「で、そのオウム、いくらしたの？」

「3000 マルクよ。」

「うそー！ 人が飼っていたオウムが 3000 マルクもするの？」

「そうじゃないの。オウムは 1000 マルクなの。あとの 2000 マルクは、口封じというわけよ。」^{*1)}

8. 0 はじめに

日独の数詞を構成要素とするイディオム表現を比較・対照するという場合思いつくのは、それぞれの言語文化圏でタブーとなっている数詞の違いが、イディオム表現にも反映しているのではないかということである。すなわち、日本語においては「4」、「9」に関するイディオム表現が少ないか、あるいは存在しないのではないか。また、ドイツ語においては、キリスト教文化圏であることから「13」を含むイディオム表現は存在しないのではないか、ということである。

本章では、そのような疑問から、数詞を構成要素とする日独のイディオム表現を比較・

*1 DDR における「国家保安省」(Ministerium für Staatssicherheit) は、国民のスパイ活動を監視するための武装警察組織であった。DDR の恐怖政治を支えていた組織であり、それがため、1989 年に起こった民主化運動の過程で DDR 国民の憎悪的となった。「シュタージ」(Stasi) と略して呼ばれる。シュタージが残した国民一人一人についての記録文書は、膨大な量に上り、統一後 10 年が過ぎた現在でも整理作業は完了していない。シュタージに勤務していたということは、個々の人について何でも知っているということであり、その人が飼っていたオウムだから、何でも知っている。だから、そのオウムがしゃべることを口外しないように、2000 マルクの口封じのための代金を上乗せしたということである。

対照してみる。そして、ドイツ語イディオム学習・教授法にとって、何らかの示唆が引き出させるとしたら、本章の論述の目的は達成されたことになる。

8.1 資料源について

日本語については、『数のことば辞典』（パラキハウス、講談社ことばの新書、1999年）から主として拾った。また適宜、他のイディオム辞典や国語辞典も参照している。とりわけ『数のつく日本語辞典』（森睦彦、東京堂出版、1999年）を、大いに助けとしている。ただし、この辞典は、タイトルが示しているように、数のつくイディオム表現だけを収録しているわけではない。「凡例」によると、収録語数は1670語となっているが、その中からイディオム表現を抽出する必要がある。説明文からイディオム表現と判断されるものを拾い出して、参考とした。

日本語の数詞を構成要素とするイディオム表現を収集する場合、数詞をどう捉えるかという問題がある。筆者は、本章における論述のための資料収集に際して、次のような考えから出発した。

数詞かそうでないかをどのように判定するか。「一般」、「一緒」に含まれている「一」は、数詞か、どうか。「一泡吹かせる」、「一押し二押し」に出現する「一」や「二」は数詞かどうか。「二般」や「二緒」という表現はあり得ない。しかし、「二泡を吹かせる」や「三押し四押し」は、シャレや言葉遊びとして可能な表現である。「一意専心」は辞典に載っている表現であるが、場合によっては「^{にいせんしん}二意専心」と表現しても、「一意専心」との関連で理解可能であるといえよう。

「一門の面汚し」に含まれている「一」はどうか。「一門」は、親族の意味であり、「二門」という表現は不可能である。また、「^{しご}四股」に含まれる「四」も本来は数詞であったのであろうが、現在では数詞という意識はなくなっている。「^{さんご}三股」や「^{にご}二股」という表現はあり得ない。「一途」、「一徹」、「百姓」、「一定」「贅沢三昧」に含まれる「一」、「三」、「百」も、他の数詞に置き換えることはできない。

つまり、イディオム表現一般に当てはまる特徴としての表現の固定性には段階があるということが、数詞を構成要素とするイディオム表現については、非常にわかりやすい形で検証できる。「一門」、「四股」、「一徹」、「贅沢三昧」といった表現における数詞は、もはや数詞という意識がなくなり、完全にイディオム化している。他方、「一意専心」、「一押し二押し」における数詞は、他の数詞に置き換えることによって、バリエーションを作る

ことができる。従って、本章におけるデータ収集の基準としては、表現として数詞を含むイディオム表現は、すべて対象とするということにする。

ドイツ語における数詞を構成要素とするイディオム表現との比較・対照を念頭において、日本語の数詞を含むイディオム表現を見るとき気づくのは、日本語における「一」がドイツ語では不定冠詞に対応している場合が多いということである。ドイツ語の不定冠詞は、定冠詞との対比で理解されるべきものであり、ある集合から取り出された任意の一つのメンバーを指示するという意味機能を持っているため、必然的に1という数詞の意味が伴っている。しかしながら、本来は、数詞としての"eins"と不定冠詞としての"ein"は区別されており、基数の1は"eins"である。「一時に」という時間表現は、"um ein Uhr"あるいは"um eins"であり、"Uhr"（時計）が文法的に"feminin"（女性名詞）だからとあって、"um eine Uhr"とはならないことから、数詞と不定冠詞は区別されて考えられていることがわかる。

ドイツ語については、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』（Friederich 1976）に当たって、数詞が見出し語となっているイディオムをまず収集した。さらに、たとえば"die erste Geige spielen"（指導的な役を果たす、音頭をとる）のように、数詞が含まれていながら、他の見出し語の下であげられているイディオム表現も数多い。そういったイディオム表現を拾うために、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』（DUDEN 1992）を参照した。ドゥーデンでは、語義の説明や用例は、この数詞が含まれているイディオム表現の中心的構成要素を見出し語とする項で与えられている。

他方、ドイツ語の数詞"eins"と不定冠詞"ein"は、上述したように、形態上区別しがたい。とりわけ語形変化した場合は、そうである。"eine Rolle spielen"という言い回しにおける"eine"は、数詞なのか不定冠詞なのか、判断が難しい。この表現に対応する日本語のイディオム表現には「一枚噛む」、「一翼を担う」、「一肩入れる」、「一肌脱ぐ」、「一役買う」など、いくつかのバリエーションがある。ドイツ語の表現と重なり合っているのは、「一役買う」であろう。

この言い回しは通常、"Rolle"を見出し語とする項であげられている。従って、不定冠詞を伴った名詞を構成要素とするイディオム表現は相当数存在する。しかしそれらのすべてを本章の考察の対象とすることはしない。あくまでも上述した2つのドイツ語イディオム辞典で数詞"eins"（1）に関連するものとしてあげられている表現に限定する。上述した"die erste Geige spielen"は、"erste"が序数詞であるため、数詞であることが明らかである。従っ

て、数詞を構成要素とするイディオム表現と見なすことができると考える。

もちろんドイツ語のイディオム辞典は、見出し語がアルファベット順に配列されている。従って、拾いあげたイディオム表現を数詞に従って、日本語との比較・対照を容易にする目的で、数の小さい方から順に配列し直した。

数詞そのものについて言うならば、ドイツ語には基数と序数の区別があるが、序数もそれに対応する基数に含めて考えることにする。また、"einmal"といったような数詞から派生した副詞が存在するが、これらも対応する基数に含めて考えることにする。

他方、日本語には基数と序数の区別はない。しかし、数詞の読みについては、漢式と和式が区別されている。実際は、日本式に読む数詞がイディオム表現に含まれている場合は、本章のために収集した例に限るならば、5つしかなかった(今一(ひと)つ、七転び八(や)起き、十把一(ひと)絡げ、十人十(と)色、十年一(ひと)昔)。残りはすべて漢式の読みである。

8. 2 統計的数値とそれに基づく観察

ドイツ語の2つのイディオム辞典から拾った数詞を含むイディオム表現の数は、全部で157である。単純な数値の比較は、それほど意味がないと思われるが、たとえば、上であげた『数のことば辞典』では349の表現(そのほとんどはことわざ)が収録されている。その中から拾い上げた78の表現は、一般書というこの書物の性格から判断して、日本語話者の受動的語彙を反映していると考えてもよからう。ドイツ語の2つのイディオム辞典についても同様のことが言える。それらの辞典に載っている表現の全てが普段しばしば使われているとは考えられない。しかしながら、ドイツ語話者の少なくとも受動的語彙をある程度反映しているとは言えるであろう。以上のことを前置きとして、統計数値を眺めてみよう。

8. 2. 1 日本語にあつてドイツ語にはない、数詞を含むイディオム表現

まず、当該の数詞を含むイディオム表現が日本語にはあるが、ドイツ語にはないという数詞は9、60、1000となっている。それぞれ、9については「九死に一生を得る」であり、60は「六十の手習い」、1000は「千に一つ」、「千変万化」、「千載一遇」といった表現である。

ドイツ語にはこれらに直接対応するようなイディオム表現はなさそうである。パラフレーズ的に翻訳して説明するしかないであろう。「九死に一生を得る」は、"im allerletzten

Augenblick gerettet werden"、「千に一つ」は"mit einem Tausendstel Wahrscheinlichkeit"、「千変万化」は"in allerverschiedendlichen Variationen"、「千載一遇」は"eine höchstseltene Chance"あるいは"eine einmalige Chance"とでもいうしかないであろう。

『数のことば辞典』には、日本文化を反映していると思われる数詞を含むイディオム表現があるので、それについて言及しておくことにしよう。

18 に関しては、「一八番」という言い回しをすぐに思いつくことであろう。この言い回しは、「おはこ」と共に、歌舞伎の世界に由来しているようである。ドイツ語では"Steckenpferd"というのがこれに対応する表現になるが、この語は、一見日本語母語話者にとっては「竹馬の友」という表現を想起させるのではなかろうか。幼少の頃の遊びに関係しているという点で、その連想の方向自体は全くの見当違いでもないとはいえるが、意味するところは異なる。

20 に関しては、どのような言い回しがあるだろうか。『数のことば辞典』には、「今参り二十日」という表現があがっている。意味は、「奉公人は、来たばかりの時はよく働くが、まもなく怠けるようになるということ」（同書 155 頁）とある。ドイツ語には同じような意味の表現として"neue Besen kehren gut"（新しい箒はよく掃ける）というものがある^{*2}。

「うかうか三十きよろきよろ四十」、「人の意見は四十まで」、「五十にして四十九の非を知る」、「悪妻は六十年の不作」、「産屋の癖は八十まで直らぬ」と言ったように、区切りの良い数詞については人生上の教えを含んだ表現が多いようである。最後の言い回しは「三つ子の魂百まで」と同じ教えを伝えているのだが、ドイツ語で言えば"Was Hänschen nicht lernt, lernt Hans nimmermehr."（子供の時に学ばなかったことは、大人になっても学ばない）ということになる。

300 という数詞を含んだ言い回しには「食後の三百歩」というのがあがっているが、これは「食後の百歩」と同義である。面白いのは「触り三百」という表現である。これは、「触らぬ神にたたりなし」ということであるが、「物言えば唇寒し」、「出づれば費えあり」といった表現と同じ方向の教えを含んでいる。

3000 という数詞で誰もが思いつく表現は「白髪三千丈」であろう。誇大な表現を好む中国の発想をそのまま受け入れているわけであるが、「針小棒大」についても同様である。

*2 第15章冒頭のウィットとカリカチュアを参照。

いずれもドイツ語では" aus einer Mücke einen Elefanten machen" (虻から象を造る) という表現を対応させることになろう^{*3}。

8. 2. 2 ドイツ語にあって日本語にはない、数詞を含むイディオム表現

逆に、ドイツ語には当該の数詞を含むイディオム表現があるが、日本語には存在しないという数詞は、"sechs"(6)、"elf"(11)、"zwölf"(12)、"dreizehn"(13)、"fünfzehn"(15)、"siebzehn"(16)、"neunundneunzig" (99)、"hundertachtzig"(180)である。それぞれの数詞に関してどのようなイディオム表現があるかは資料を見れば分かることであるが、日独比較・対照という視点から、興味深い表現について、以下コメントしていくことにしたい。

6に関するイディオム表現"einen sechsten Sinn (für etwas) haben"は、すでに日本語においても「第六感」として知られている。「第六感が働いた」というようなイディオム表現としてよく使われている。現在では、西欧起源なのか、そもそも日本語に古くからあったイディオム表現なのか、はっきりしなくなっている。

何故 11 という数詞が、ドイツ語ではイディオム表現の中で使われているのだろうか。"von elf bis es läutet"(11 から正午の時報が鳴るまで) という表現を基にして考えると、短時間ということになるようである。時計をイメージしている表現である。しかし"das elfte Gebot" (つかまらないように) という言い回しは、モーゼの十戒を踏まえていわれている。つまり悪事をなしても捕まるなということであろう。

日独両文化の違いから、ドイツ語には 13 という数詞を含むイディオム表現はないのではないかと「はじめに」で述べたが、事実、そうであった。他方、確かにドイツ語には 13 という数詞を含むイディオム表現が存在するが、しかしながら、その表現はキリスト教文化と密接しているタブーとは関係していない。当該の 13 を含むイディオム表現は"jetzt schlägt's (aber) dreizehn!: so e-e Frechheit, das ist ja unerhört!, das ist unglaublich!" (Friederich 1976: 92)というものである。ドゥーデンによると、時計は最大限 12 回鳴るのが普通であり、13 回鳴るということはあり得ない。従って、それは行き過ぎだ、通常を越えているという意味 (DUDEN 1992: 160 参照) であり、不吉なことを意味するということはない

*3 第15章15. 6. 2. 3節のウィットとカリカチュアを参照。

ようである*4。

15 に関する "Fuffzehn machen" という言い回しは、とりわけベルリン地方という表示がなされているが*5、日本語では「一服する」というような意味である。仕事中の休憩が大体十五分ぐらいであることに由来した言い回しであろう。日本語の場合、煙管を使ってたばこを吸うという場合と、現在のように、ほとんどが巻きたばこを吸うという場合は、同じ一服でも要する時間に差があるように思われるが、イディオム表現が持っている意味は、「休憩する」という意味であることに変わりない。

"Trick siebzehn" (トリッカー七) という言い回しは、日本語でいえば「ひけつ」あるいは「奥の手」ということになろうか。何故、十七なのかはよく分からないが、トランプ遊びに由来しており、英語からドイツ語に入ってきたとレーリヒは説明している (Röhrich 1991/91: 1639)。

"auf neunundneunzig kommen" は、"auf hundert kommen" (激怒する) というイディオム表現が先にあって、それにほぼ近い状態だという意味を持たされた表現であろう。しかし、どうして「100 まで至る」と激怒するという意味になるのか。レーリヒによると、自動車の速度に関係しているということである。自動車の性能が向上するにつれて、イディオム辞典による限りでは、まず "achtzig" (80) から始まり "hundert" (あるいは neunundneunzig)、"hundertzehn" とエスカレートし、そして "hundertachtzig" になると、爆発寸前ということになる。しかし、現在では、すでに時速 180 キロメートルというのは、ドイツの "Autobahn" (自動車専用道路) 上では、普通とも言えるスピードであり、時速 200 キロメートル以上で飛ぶようにして走っている乗用車がほとんどであるのではなかろうか。ドイツにおける自動車普及と自動車工業技術の進歩によって、自動車の最高速度が上がるにつれて、言語表現においても怒りの度合いを示す数字が大きくなってきているのである。現実社会の変

*4 次のウィットは、このイディオム表現を落ちとしている。

"Dreizehn Ohrfeige hat Papa gestern von unserm Hausmädchen bekommen", berichtet der Steppke seiner vierjährigen Freundin. "Dreizehn Ohrfeige?" "Ja, als ich gestern abend hinzukam, sagte das Mädchen: 'Jetzt schlägt's dreizehn' und gab ihm die letzte." (Asmussen) (「昨日パパは、お手伝いさんに 13 回もビンタを喰らったんだ」と生意気盛りの小僧が、4 歳の女の子の友達に言う。「13 回もビンタを?」「そうなんだ、昨日 2 人がいるところに居合わせたら、お手伝いさんが「これで 13 回目ですよ」と言って、パパに最後のビンタを喰らわしたんだ。)」

*5 "Fuffzehn" は、ベルリン方言を表記したものである。標準ドイツ語では "Fünfzehn" である。

化が如実に言語に反映している例である。

"sich um hundertachtzig Grad drehen" (180度回転する)は、日本語においても用いられている表現であるが、元々はヨーロッパ起源であるのだろう。「180度の方向転換」という言い方もある。

8. 2. 3 日独においてほぼ対応する、数詞を含んだイディオム表現

同じ数詞を含んでいて、ほぼ同じ意味を持ったイディオム表現が、どれほど日独両言語には存在するのだろうか。

日独両言語において、数詞1を含むイディオム表現は、極めて多い。ドイツ語においては、全体の約四分の一を占めている。日本語においては半数以上を占めている*6。2と3を含むイディオム表現は、ほぼ同数である。数詞4と7に関するイディオム表現が、それぞれ10と11である。

"mit jemandem eins werden"には日本語の「一致する」という表現が対応しているといえるであろう。また"sich eins mit jemandem fühlen"という表現には、「一心同体」が対応している。"Nummer eins"は、日本語では、英語を借用した「ナンバー・ワン」が定着している。"in erster Linie" (まず第一に)も、理解するのにほとんど問題はない。ドイツ語では「第一番目の線」という表現になっている。

"wie kein zweiter"は、日本語でも「二人といない」という言い方をすることから、この場合は、重なり合っているといえる。どちらの表現も「誰にもまねができない」という意味で使う。

"zur zweiten Natur werden" (習い性となる)は、フランスの哲学者ボーヴォワールの著書『第二の性』を思いつく者でなければ、日本語においてもドイツ語の表現が意味しているのと同じ意味で理解されるのではないだろうか。

"jedes Ding hat zwei Seiten" (すべて物事には二面がある)は、日本語にそのまま対応している。

"zwei Fliegen mit einer Klappe schlagen"は、構成要素としての名詞は異なるものの"Fliegen" (蠅)、"Klappe" (はたき)、"schlagen" (叩く)をそれぞれ「鳥」、「石」、「当てて

*6 日本語において「一」を含むイディオム表現が非常に多数存在するという理由については、すでに「資料源について」(6. 1節)で触れた。

落とす」に置きかえて、「一石二鳥」という意味に至るのはそれほど難しくはないと思われる。「zwei」(2)と「einer」(1)の並びが日本語のイディオム表現とは逆になっているが、それほど問題とはならないだろう。このイディオム表現は、厳密に言えば、部分的に重なり合っているといえる。

"aus zweiter Hand"は、日本語というよりも英語からの借用で「セコハン」という表現で慣用されている。意味は「お古」、「二番煎じ」ということである。

"ein dreieckiges Verhältnis" (三角関係)は、いずれの言語においてもほとんどもっぱら男女関係のもつれについて使われる。第二次世界大戦中の日独伊三国間の同盟関係についてこの表現が使われることは、考えられない。

"dreimal darfst du raten" (三べん当ててごらん!)というものは、「いとも簡単に理解できることだ」という意味である。

"auf allen vieren" (四つん這いで)という表現の後には"gehen"、"kriechen"といった、前進を意味する動詞が続く。"vier" (4)というものは、両手、両足ということである。ただし、人間以外の動物は、元来が四足歩行であるので、この表現はもっぱら人間に対して使われる。

"in alle vier Winde"は、日本語でいえば、「四方八方に」ということになる。この場合は、日独で共通している構成要素は数詞「四」だけであるが、日本語の「八」が「あらゆる」、「たくさん」という意味を持っているので、部分的な重なり合いであると見なすことができるだろう。

"fünf Minuten vor zwölf" (12時5分前)という表現は、核戦争の危機に関連して日本語においても使われるようになった。「不幸が起ころうとする寸前の瞬間」という意味である。

"seinen sieben Sachen packen" (7つ道具をつめる)というものは、引っ越しをするという意味である。日本語でも「7つ道具」というが、それぞれの職業によって重要な7つ道具のうちわけは異なるであろう。日本語では「引っ越し」という意味で使われることはそれほどないと思われるが、ドイツ語のイディオム表現の意味を理解することはそれほど困難ではないだろう。

"sich alle zehn Finger lecken nach etwas."は、「ある物をほしがる」という意味の言い回しだが、日本語では「指をくわえる」ということになる。厳密に言えば"lecken"は「なめる、しゃぶる」という意味であるので、「偽の友だち」関係にある表現と見なすことも可能で

あろう。部分的に重なり合っているといえる。

8. 2. 4 「偽の友だち」関係にある、数詞を含んだ日独のイディオム表現

"das zweite Gesicht"は、そのまま日本語に置きかえると「第二の顔」あるいは「もう一つの顔」ということになるが、その日本語の意味するところと、ドイツ語の表現の意味するところとは、全く異なる。「偽の友だち」関係にある表現といえる。ドイツ語の表現の意味は、"die Gabe der Prophetie"（予言の才能）ということであるが、日本語は「ある人がもっている別の性質、性格」ということであり、多くは悪い意味で使われる。

"sich alle zehn Finger lecken nach etwas."は、2. 3節で述べたように、「指をしゃぶる」という意味で理解する可能性があるが、この場合は、「偽の友だち」関係ということになる。ドイツ語の表現は、第11章で取り扱うキネグラムでもある。実際にドイツでは見られる仕草である。

8. 3 おわりに

以上、日独両言語における数詞を構成要素として含むイディオム表現を、主として『数のことば辞典』から拾って比較・対照してみた。ドイツ語にはあって日本語にはないイディオム表現(8.2.1)、逆の場合(8.2.2)、日独のイディオム表現が重なり合っている場合(8.2.3)、表現が同じであっても意味内容が異なるもの(8.2.4)という、4つのケースに分けて比較・対照してきた。ドイツ語学習という視点から見ると、重なり合っているイディオム表現については、それほど説明を要しないだろう。それ以外のケースは、理解(8.2.1)、産出(8.2.2)の面において注意すべきである。とくに「偽の友だち」関係にある日独のイディオム表現については、本章においては2例しか取り上げていないが、理解、産出両面において注意すべきであろう。

「はじめに」で述べた疑問、日本語においては4と9に関するイディオム表現がないか、少ないのではないかということについては、「四方八方」という表現が示しているように、「四」は方位と関係して、あらゆるという意味がある。「四苦八苦」という表現も、従って、様々な苦しみということになる。「死」に関連しているわけではないが、否定的な意味の表現である。9については、「九死に一生を得る」があるが、表現全体は、「幸運に恵まれる」という意味になる。ただ「九死」そのものは、否定的な意味である。おもしろいのは、「死」につながる「四」は、「苦」と結びついた表現を構成しており、「苦」につな

がる「九」は「死」と一緒になった表現を構成していることである。

本論文では『数のことば辞典』を資料源として用いたが、さらにデータを拡大することによって、考察を深めることができるだろう。

第9章 "Zunge"と「舌」を構成要素とするイディオム^{*1}

A zu B: "Haben S' schon g'hört? Unsere Hausmeisterin, die Frau Beißzangl, hat eine Fleischvergiftung bekommen!"

B: "Was Sie net sagen! Wie ist denn das möglich?"

A: "Sie hat sich in ihre eigene Zunge einibiß'n!"(Kunz 1995: 198)

(AがBに言う：聞いたかね？家主さんのバイスツァングル婦人は、肉中毒になったんだって！

B：ほんとかい！どうしてそんなことになったんだ？

A：自分の舌を噛んだそうだ！^{*2})

9.0 はじめに

金田一春彦によると日本語は肉体に関する語彙が他に比べて少ないという。しかしながら、語彙が少ないからといって、肉体に関心が薄いというわけではなかろう。塩田丸男『人体表現読本』（白水社、1998年）では、実際に日本語にはどのような人体に関する表現があるのか、頭のとっぺんから足の先まで人体に関する語彙を追求して、軽妙なエッセイに仕立てている。

日本語とドイツ語両言語に人体、肉体に関する語彙がどれだけ存在するのか。いずれの言語がより多くの身体に関する語彙を有しているのか。まずは、両言語の辞典に当たって調査してみる必要がある。本論文は、日独のイディオム表現を比較・対照することを主眼としているので、まず第一に、日独両言語において、身体に関する語彙を構成要素とするイディオム表現にはどのようなものが、どれだけ存在するかを確認せねばならないだろう。そこで、日独両言語のイディオム表現辞典に当たって、身体に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を拾い上げてみることにする。

ドイツ語に関しては、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』（MODERNE

*1 本章における論述の一部を削除し、書き改めたものが、下記の場所に発表される予定である。『ニダバ』（西日本言語学会）第30号、2001年3月（刊行予定）。

*2 このウィットの落ちは、「Beißzangl」（やっこ）が、罵り言葉として「giftige Zunge」（とりわけ高齢の女性の毒舌家）として使われるという点にある。自分自身の毒のある舌を噛んで、その毒で中毒になったというわけである。

DEUTSCHE IDIOMATIK Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber 1966) を資料源とすることにする。この辞典の"XI. der Menschliche Körper"(S.147-261)に見出し語としてあげられている身体に関する語を数え上げることになる。

他方、日本語に関しては、『成語林』（尾上兼英監修、旺文社、1992年）を資料源とすることにする。日本語については、いくらか表記の上での考慮をする必要がある。すなわち、「頭」には「あたま」と「おつむ」、「かしら」、「こうべ」といった読み方が存在する。これら4つの読み方をすべて「あたま」に関するものとして取り扱うことにするか、別々に数え上げるか、という判断をしなければならない。ドイツ語の場合を見てみると、「Haupt」と「Kopf」を別項目としてあげてある。従って、日本語においても、「あたま」、「おつむ」、「かしら」、「こうべ」と別々に数えることにした。結果としては、本論文においては、かなり折衷的な考えで、数が多いと思われるものは、別々に数え上げ、少ないものは一緒にまとめて数え上げるという方法を採用している。たとえば、「股」と「もも」は、まとめて数えている。また「足」には「片足」、「足下」を含めている、という具合である。そのような数え方をするについては、『からだ語辞典』（土肥直道、騒人社、1996年）の項目のたてかたを基本的に参考に行っているが、部分的には異なっている。たとえば「しり」に「しっぽ」は含めていない。

さらに、ドイツ語では身体に関する語彙がイディオム表現の構成要素となっている場合、イディオム表現のどの位置に当該の身体に関する語彙が現れているかは問題としていない。従って、日本語のデータの収集においても、身体に関する語彙がイディオム表現のどの位置に現れているかを問わず集める必要がある。『成語林』には、イディオム表現の最初の位置に当該の身体に関する語彙が現れている場合は、見出し語として載っている。それ以外の位置に当該の身体に関する語彙が現れている場合は、巻末の「語中キーワード索引」にあげられている。従って、当該の身体に関する語彙に関するイディオム表現の全体の数としては、見出し語としてあがっているイディオム表現の数と、語中索引で上げられている数の合計を、当該イディオム表現の数と見なすのが妥当であろう。第9章に関する資料における【資料1】のリストの最後の数が、その合計を示している。ドイツ語のイディオム表現との比較においては、この数値に基づいておこなう。

さらに日本語における身体に関する語彙についての注意点は、漢字について複数の読み方があるということである。たとえば、「汗」については、「あせ」と「かん」の2通りの

読みがあり、それぞれについてイディオム表現が存在している。リストではまず、それぞれの読みについて存在するイディオム表現を別々に数え上げてあるが、ドイツ語との比較においては、いずれも「汗」を構成要素とするイディオム表現であると考えて、合計した数値を基にする。

そのような基準で拾い上げた身体に関する語彙と、それを構成要素とするイディオム表現の数は、どうなっているか。ドイツ語では、全部で123の身体に関する語彙があげられている（【資料1】）。そして日本語においては、64である（【資料2】）。単純に言って、ドイツ語には日本語の約2倍近い数の身体に関する語彙が存在しており、イディオム表現の構成要素となっている。どの身体に関する語彙を含むイディオム表現が一番多いか。日独両言語におけるベスト・テンをあげてみよう。日本語においては手[163]、目[155]、口[104]、身[87]、心[80]、気[70]、腹（腸）[63]、耳[46]、尻[45]、鼻[44]の順になっている*3。ドイツ語においては"Hand"(116)、“Kopf”(109)、“Herz”(92)、“Auge”(88)、“Ohr”(57)、“Fuß”(46)、“Hals”(44)、“Nase”(42)、“Finger”(40)、“Mund”(39)となっている。日独両言語において共通してベスト・テンに入っているのは、“Hand”（手）、“Herz”（心）、“Auge”（目）、“Ohr”（耳）、“Mund”（口）、“Nase”（鼻）の6つである。日本語においてのみベスト・テンに入っているのは、「身」、「気」、「腹（腸）」、「尻」である。他方、ドイツ語においてのみベスト・テンに入っているのは、“Kopf”（頭）、“Fuß”（足）、“Hals”（首）、“Finger”（指）である。それぞれの言語においてのみベスト・テンに入っている語についていえることは、身体に関する語彙そのものについてもいえることだが、日本語においては、「身」という身体そのものに関わるイディオム表現が多いということである。（ついでながら、命[26]、体（からだ、たい）[12]となっている。）他方、ドイツ語においては、身体部位個々の名称に関するイディオム表現は存在するが、人間の身体（Körper）、生命（Leben）そのものを表す語に関するイディオム表現はないということである。また極めて日本語（従って日本文化）に特徴的であると考えられるのは、気[70]や腹（腸）[63]に関するイディオム表現が多いということである。逆にドイツ語において多いのは“Fuß”、“Hals”、“Finger”であるが、それぞれに対応する日本語を見ると[41]、[36]、[10]という数になっている。足、首について

*3 厳密には「身」、「心」、「気」は身体部位名ではないが、身体に関する語彙として、本論文の対象とすることにした。それは、ドイツ語で“Atem”、“Herz”が「人間の身体」の項に属するものとしてあげられていることに対応させようと考えたからである。

は、日独両言語においてほぼ同数のイディオム表現が存在しているのに、差異を問題とすることは意味がないであろうが、指についてはドイツ語に圧倒的に多数のイディオム表現が存在する。日本語においては指に関するイディオム表現の数は[10]となっており、ドイツ語に比して極端に少ない。理由はどこにあるのだろうか。逆にいえば、なぜドイツ語においては指に関するイディオム表現が日本語に比べて極端に多いのであろうか。

以上のような統計的な数値に基づいて考察を展開することもそれなりに興味深く、日独両言語および文化に関する理解の糸口を与えるものではあろう。しかし、日独両言語における身体に関する語彙を構成要素とするイディオム表現のリストを作成した本当の目的は、日独両言語における比較・対照をおこなうという本論文の意図に沿って、比較・対照すべき対象を限定するための手がかりを得たいからであった。特定の身体に関する語彙に関して、日独両言語のイディオムを比較・対照して、比較・対照の方法、手順を提示したいというのが、目的である。

本来はこれらのすべての身体に関する語彙について、日独のイディオムを比較・対照すべきであろうが、本論文では、特にドイツ語のリストの最後の"Zunge"と、日本語の「舌」に関するイディオム表現を取り上げて、比較・対照することにする^{*4}。ドイツ語において"Zunge"は「言葉」の意味で使われる場合が多く、外国語習得についての論考を目標としている本論文において、言葉というものについて考える契機を与えてくれると思われるからである。身体に関する語彙を含むイディオム表現のすべてに関する比較・対照およびそれに基づく考察は、将来の課題としておく^{*5}。

*4 本章における比較・対照および考察の視点、方法については、その多くを小林の論文(小林 2000)を参考にしている。ここにその旨を記して、謝意を表する次第である。小林の論考は、スペイン語と日本語における身体部位名を構成要素とするイディオム表現を、五感を代表するもの5つ(目、耳、鼻、口、手)に限定して、比較・対照し、考察したものである。日本語とスペイン語の目、耳、鼻、口、手に関するイディオム表現を、その統語論的構造と機能の観点から分類している。さらに、名辞論的(onomasiologisch)および意義論的(semasiologisch)観点から比較・対照し、スペイン語学習における留意点について言及している。小林が採った方法は、日独イディオム比較・対照にも適用可能である。もちろん、以下において展開される考察においては、小林の論とは異なる。なお付言するならば、小林の論考は、筆者の指導の下で作成された修士論文(1999年1月提出)の内容を要約したものである。

なお、小林の論では、味覚を口に代表させているが、筆者は「舌」の方がもっと深く味覚に関与していると考え。もちろん摂食行為において「口」はなくてはならないものではあるが、味覚自体に関しては「舌」のほうがより大きな役割を果たしている。「口」は、呼吸活動の目的である酸素をふくむ空気および栄養物の取り入れ口であり、発話の主たる出口としての機能を担っていると考える。さらに、第10章を参照。

*5 本論文「内容目次」からわかるように、「舌」との関連で、第10章において「"Mund"と「口」を構成要素とするイディオム表現」についても論述を試みる。

なお、ドイツ語イディオム学習・教授法に関する示唆を得ることも、本章における論述の目標であることは、いうまでもない。

9.1 資料について

フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)には、"Zunge"に関して38のイディオムがあがっている(S.258-261)。しかし"jemandem die Zunge herausstrecken"というようなイディオム表現は、"Zunge"を構成要素としていながら見出し語"Zunge"のもとではなく、動詞"herausstrecken"の項であげられている。そのため、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』の"Zunge"の項(DUDEN 1992: 839-841)を参照して、フリーデリヒの辞典に収録されていない表現を付け加え、データを補充した(【資料3】)。

日本語における「舌」を構成要素とするイディオム表現は、『成語林』から拾い出した。その数は、語頭および語中に「舌」を構成要素として含むイディオム表現両者を合わせて16である(【資料4】)。

9.2 資料の分類と観察

以下、収集したドイツ語および日本語の"Zunge"および「舌」を構成要素とするイディオム表現を、統語論的、意味論的、語用論的な観点から分類、観察することを試みる。

9.2.1 ドイツ語における"Zunge"を構成要素とするイディオム

9.2.1.1 統語論の観点から

(i)"Zunge"が主語となる：

(a)"Zunge"単独：

"böse Zungen behaupten"(3)^{*6}

(b)間接目的語を伴う：

"die Zunge hängt mir zum Halse heraus"(1)

(ii)"Zunge"が直接目的語となる：

(a)"Zunge"単独：用例なし

(b)"Zunge"に形容詞が付加される：

"eine beredte(oder feurige)/ boshafte/ böse/ giftige/ falsche/ freche(oder lose)/ feine/ glatte/

*6 ()内の数字は、第9章に関する資料の【資料3】の用例番号である。

scharfe/ schwere/ Zunge haben"(16-23)

(c)"Zunge"に所有代名詞が付加される：

"seine Zunge hüten" (14)

(d)"Zunge"が再帰動詞の目的語となる：

"sich die Zunge ausrenken" (7), "sich die Zunge abbrechen"(8)

(e)間接目的語を伴う：

"jemandem die Zunge lösen"(12)

(iii)"Zunge"が間接目的語となる：

"der Zunge freien Lauf lassen"(24)

(iv) "Zunge"が前置詞句を構成する：

"das Herz auf der Zunge haben/tragen" (5)

前置詞の種類を上げると、"auf", "mit", "über", "von"の4つが確認できる。

9. 2. 1. 2 意味論の観点から

基本的には身体器官としての"Zunge"が持っている機能に基づいて意味が分化していると考えられる。まず、いわば第一次的機能として舌が持っている機能に関与しているものがある。この機能には、さらに2つを区別することができる。ひとつは摂食行為に関与する器官として舌が持っている味覚を意味内容としている表現である(a-1)。もう一つは、次の第二次的機能にも関連しているが、呼吸に伴う空気の流れを調節する機能である(a-2)。舌の持っている第二次的機能とは、すなわち発声に関わる器官として舌が持っている機能であるが、この機能についても、さらに2つを区別することができるようである。すなわち、ことばを発するという行為そのものを指す場合(b-1)と、発言行為の結果として産出された発言を指す場合(b-2)である。それぞれに属する用例数を示すと次のようになる。

a-1):4、a-2):2、b-1):26、b-2):6

人間の生命活動を維持するという点では、摂食および呼吸活動に関与する機能がより重要であると考えられる。にもかかわらず、ことばの世界では舌の持っている第二次的機能に関連する表現が圧倒的に多いということは、人間が「話す動物」(homo loquens)であることを証するものといえよう。"böse Zungen" (口さがない人々)という言い方は、換喩的表現である。"mit gespaltener Zunge reden"(38)は、明らかに暗喩である。"sich die Zunge verbrennen"(13)については、"Zunge"が発言を意味するという点では暗喩的であるが、発言した人そのものが被害を被ったという意味では、換喩的でもあり、暗喩的でもある。

9. 2. 1. 3 語用論の観点から

イディオム表現の表現効果は、そのイメージ性にある。"genießend etwas nachempfinden"あるいは単に"genießen"というよりも、"sich etwas auf der Zunge zergehen lassen"という方が、じっくりと味わっている様子が目に浮かぶ。そのような意味で、イディオム表現は、極めて感化的な意味を有しているといえる。

9. 2. 2 日本語における「舌」を構成要素とするイディオム

9. 2. 2. 1 統語論の観点から

(i) 「舌」が主語となって述語（動詞、形容詞）を伴うもの：

「舌」＋「が」＋動詞：2^{*7}

「舌」＋「が」＋形容詞：1

「舌」＋副詞＋動詞：6

(ii) 「舌」が目的語となって動詞を伴うもの：

「舌」＋「を」＋動詞：5, 8, 9, 10, 11, 12, 15

連用修飾語＋「舌」＋「を」：15

連体修飾語＋「舌」＋「を」：16

(iii) 「舌」＋「の」＋名詞：7

(iv) 「舌」＋「名詞」＋「に」：4, 14

(v) 省略的表現：3, 4

(vi) 複合語：

主語：13

目的語：5

連用修飾語：14

『成語林』から拾い上げた16の表現についていうならば、「舌」が語中に含まれている場合、そのほとんどが諺的な表現であった（たとえば、舌の剣は命を断つ、舌は禍の根等）。また省略的な表現があるというのも、日本語における特徴といえるだろう。「舌先三寸」は、本来は「舌（の）先（が）三寸（ある／だ）」であると考えられる。同様に、「舌三寸に胸三寸」も、「舌（が）三寸に胸（が）三寸」であると考えられる。助詞が省略されるのも、特に古い日本語にはしばしば見られる。イディオム表現は、過去の言語遺産という

*7 コロン(:)のあとの数字は、第9章に関する資料の【資料4】の用例番号である。

側面が強いからであろう。その典型が、諺ではあるが、「歌の返しせねば舌無き者に生まる」という表現であろう。現在は、和歌を贈ったり、贈られた和歌に対して返歌をするなどということは、習慣としてはないといえる。過去の遺物的な表現といってよい。

9. 2. 2. 2 意味論の観点から

日本語の表現についても、上でドイツ語の表現についておこなったように、4つの観点から観察して、分類してみよう。すなわち、まず第一次的機能として舌が持っている機能に関与しており、摂食行為に関与する器官として舌が持っている味覚を意味内容としている表現(a-1)と、呼吸に伴う空気の流れを調節する機能である(a-2)。そして、舌の持っている第二次的機能として、発声に関わる機能を考えることができる。さらに、ドイツ語についておこなったのと同様に、この第二次的機能に関して、ことばを発するという行為そのものを指す場合(b-1)と、発言行為の結果として産出された発言を指す場合(b-2)とを区別することができる。その数は次のようである。

a-1): 1、a-2): 5、b-1): 9、b-2): 1

この分類からあきらかなように、日本語においても、「舌」は第二次的機能を意味内容とするイディオム表現において多く用いられていると言える。これは、ドイツ語においても同じ傾向が見られた。ドイツ語と比較するとき目立つのは、発言行為の産出物としての発言を意味内容とする表現がひとつしかないということである。

9. 2. 2. 3 語用論の観点から

「舌鼓を打つ」(5)と「舌を巻く」(12)、「舌頭に千転する」(14)を除いて、それ以外はすべて否定的な意味内容を持っているようである。「舌尚存す」(6)や「舌を振るう」(11)、「三寸の舌を振るう」(16)にしても、中立的な表現というよりは、弁舌だけで世渡りをするということから、積極的な評価を含んでいるとは思われない。以上の6つを除いた残り10は、すべて否定的な価値判断を表現している。すなわち、饒舌、多言を戒める内容の表現である。この点において、第一次的機能よりも、第二次的機能に重点がおかれているといながらも、発言行為に対して、日本語はドイツ語とは逆の価値判断を表明している。

9. 3 分類と観察に基づく考察

以上の分類と観察に基づいて、日独両言語における表現を比較してみよう。

統語論的には、両言語の言語構造が異なるので、比較・対照は、それほど意味がないかもしれないが、いずれの言語においても、「舌」が目的語となって動詞と結合している表

現が多いということが見てとれる。日本語の「舌」+「を」という構造は、ドイツ語における"Zunge"が直接目的語となる構造とほぼ並行的に捉えることができよう。しかし、その場合必ずしも意味的に重なっているというわけではない。

意味論の次元においては、次のことが言えるだろう。いずれの言語においても、身体器官としての「舌」が持っている第一次的機能に焦点を当てた表現は少ない。そのことは、とりわけ味覚器官としての「舌」について当てはまる。ドイツ語は $4/38=0.11$ 、日本語は $1/16=0.06$ という割合である。日本語においては、身体器官そのものとしての「舌」に焦点を当てた表現が $5/16=0.31$ となっているのが、ドイツ語との比較で注目し得るであろう。ドイツ語は、 $2/38=0.05$ となっている。いずれの言語においても、「舌」が持っている「第二次的機能」つまり、発言行為に関わる器官としての機能に焦点を合わせた表現が極めて多い。ドイツ語においては $26/38=0.68$ 、日本語においては $9/16=0.56$ となっている。割合からすると、ドイツ語の方が日本語よりもやや多いと言える。「舌」が発言行為の結果としての発言、ことばという意味で使われている表現は、ドイツ語では6、日本語では1となっている。両者合わせた割合を比較すると、ドイツ語では $32/38=0.84$ 、日本語では $10/16=0.63$ となり、ドイツ語の方が多い。以上のことから、ドイツ語の方が「舌」の機能をより発言行為と関連づけて捉えているといえる。

両言語における表現を統語論的、意味論的な観点から比較・対照してみよう。表現形式、意味内容ともに重なり合っているものは、"jemandem die Zunge herausstrecken"（誰かに向かって舌を突き出す）"sich die Zunge (ab-)beißen"（舌を噛んでしまう）の2つのみである。この後者の表現については、そもそも日本語に存在していた表現なのか、外来のものであるのか判然としないが、『成語林』に載っていないことからすると、外来のものである蓋然性が高い。"einen feurige Zunge haben"には、日本語においては「舌」そのものではなく、「舌端」を含む表現「舌端火を吐く」が意味的に対応している。この場合は、容易というわけではないが、理解が全く不可能というわけではない。部分的に重なり合っている表現であるといえよう。"mit gespaltener Zunge reden"は、日本語では「二枚舌」ということになると考えられるが、「二枚舌」という日本語そのものに対応する表現"Doppelzunge"や"doppelzüngig"という表現は、1989年以後のドイツ統一へと向かう過程で一般にも知られるようになった。その他の表現については、両言語における意味内容が異なっている。つまり、ドイツ語の「舌」を構成要素とするイディオム表現に、意味的に対応する日本語の表現には「舌」が含まれていないということである。あるいは、その逆も言えるというこ

とである。対応関係をまず、ドイツ語の方から見ていくことにしよう。

資料でドイツ語の表現に付してある日本語訳からわかるように、直訳しただけではその表現が持っているイディオムとしての意味を理解することは難しい。たとえば「非常に喉が渴いている」という意味では、日本語では、それ以外の表現法がない。せいぜい程度を強調するために「からからに」という連用修飾句を付加することができるだけである。また**"böse Zungen behaupten"**(3)や**"jemandem die Zunge lösen"**(12)のように、ドイツ語では「舌」を構成要素としている表現に、日本語では「口」が対応しているものがいくつかある。**"eine freche (oder lose) Zunge haben"** (生意気な口を利く)もそうである。あるいは**"etwas liegt auf der Zunge"** (喉まで出かかっている)のように、日本語では「喉」が関与している場合がある。**"eine scharfe(oder spitze) Zunge haben"**に対応している日本語の表現は、「舌鋒鋭い」あるいは「鋭い舌鋒」という表現であろう。この日本語の表現は『成語林』には収録されていないので、資料とはしていないが、日本語の表現からドイツ語の表現を思いつくのはそれほど難しくはない。

逆に日本語の方から見たときはどうであろうか。たとえば、おしゃべり、口数が多い、雄弁という意味の表現である「舌が長い」や「舌が回る」、「舌を振るう」、「三寸の舌をふるう」に対応する表現は、ドイツ語では**"eine beredte Zunge haben"** (16)ということになる。ドイツ語では**"beredt"** (雄弁な) という形容詞そのものが**"Zunge"**の前に付加されている。その意味では、日本語の方が換喩的な表現をしており、ドイツ語は暗喩的だといえる。どのような「舌」を持っているのか、**"Zunge"**の前にそれを限定する形容詞 (**beredte/ feurige/ boshafte/ böse/ giftige/ falsche/ freche/ feine/ glatte/ scharfe/ schwere**) を付加することによって、さまざまな意味を表現している。ここで注意しなければならないのは、付加される形容詞が発言者の性格、性質に関わっているのか、発言された内容に関わっているかということである。そのいずれであるかは、**"Zunge"**が身体器官としての意味を持っているのか、発言行為、あるいは発言行為の結果産出された発言の意味で使われているのかに依っている。**"eine falsche Zunge haben"**は、明らかに発言内容に関わっている。他方、**"eine feine Zunge haben"**は当該の味覚器官としての「舌」を持った人の性質に言及している。

「舌鼓を打つ」は、暗喩的な表現であるが、ドイツ語では単一の動詞**"schmatzen"**を対応させるしかない。ほとんどの日本語の表現は、ドイツ語ではパラフレーズ式に表現するか、説明的に表現していくしかないということになる。あるいは「舌」とは関係のない表現を用いることになる。

語用論的な観点から比較・対照してみるとどうか。日本語の言い回しは、上述したように、ほとんどが饒舌、多言を戒める内容の表現であった。それに対して、ドイツ語の場合はどうであろうか。饒舌、失言を戒める言い回しは、筆者の判断によると、"sich die Zunge ausrenken"(7)や"sich die Zunge verbrennen"(13)、"mit gespaltener Zunge reden"(38)等9つである。生命維持に関わる身体器官としての「舌」が持っている第一次的機能に関する表現を除けば、ほとんどの言い回しは、多くを話すことを必ずしも否定的には捉えていない。逆に"jemandem die Zunge lähmen"(11)や"etwas schwebt jemandem auf der Zunge"(28)のように、話せないことを否定的に捉えている表現さえ存在している。言説、話すということに対する文化的な捉え方の違いがイディオム表現にも現れていると言えるだろう。摂食行為の機能にのみ焦点を合わせた「口」を意味する語はないが、「口」が持っている発声器官としての機能に焦点を合わせた"Mundwerk"という語がドイツ語には存在していることが思い起こされる。

9.4 まとめ

以上、「Zunge」(舌)を構成要素とする日独のイディオム表現に関して比較・対照を試みた。筆者が構想する日独イディオム比較・対照が、身体部位名を構成要素とするイディオム表現についてはどのようなものとなり得るのかは、提示しえたのではなかろうか。

「舌」以外の身体部位名を構成要素とするイディオムに関する比較・対照研究は、将来の課題として残されている。

最後にウィットを一つ掲げて、「Zunge」と「舌」を構成要素とするイディオムに関する本章を終えることにしたい。

"Kennen Sie die ostdeutsche Nationalspeise?"

Gedämpfte Zunge. " (Kunz 1999: 197)

(東ドイツの国民食を知っているか?)

蒸した舌だよ。*)

*8 "gedämpft"という語は、"dämpfen"という動詞の過去分詞であるが、"dämpfen"は、「蒸す」という意味の他に、「声をひそめる、押し殺す」という意味もある。"dämpfen"という語の二義性が落ちとなっている。

第10章 "Mund"と「口」を構成要素とするイディオム

Geographiestunde. An der Wand hängt eine Landkarte.

"Klaus-Peter", ruft die Lehrerin, "zeig uns, wo Amerika liegt."

Klaus-Peter geht zur Landkarte, zeigt auf Amerika und setzt sich wieder.

Daraufhin fragt die Lehrerin: "Und wer hat Amerika entdeckt?"

Da rufen alle wie aus einem Mund: "Klaus-Peter !" (Gambusch(Hrsg.) 1991: 32)

(地理の時間：壁に地図が掛かっている。

「クラウド・ペーター」と先生が質問する：「アメリカはどこにありますか？」

クラウド・ペーターは、地図のところに行って、アメリカの位置を示して、席に戻って座る。

そこで先生が質問する：「誰がアメリカを発見しましたか？」

クラス全員が異口同音に答える：「クラウド・ペーターで一す！」)

10.0 はじめに

「"Zunge"と「舌」を構成要素とするイディオム」に関する日独のイディオム表現を比較・対照した際に述べたが、ドイツ語では"Zunge"が構成要素となっているイディオム表現に、日本語では「口」が対応している場合が少なくないようである。本章では、その逆の場合、つまりドイツ語では"Mund"を構成要素とするイディオム表現に日本語では「舌」が対応しているものがあるのかどうか、という疑問を出発点に、"Mund"と「口」を構成要素とする日独のイディオム表現を比較・対照してみよう。

「"Zunge"と「舌」を構成要素とするイディオム」に関しては、十分に実証的には確認できなかったが、本章においてはイディオム表現に関する語用論的な側面すなわちコンテクションについて、可能な限り日独のイディオム表現を比較・対照してみよう。それは、前章における結論を検証するためでもある。

10.1 資料源について

本章における資料源は、ドイツ語に関しては、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992)から"Mund"に関するイディオム表現を拾い上げる。そしてさらにフリーデ

リヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)の"XI. Menschliche Körper"(S. 147-261)の章から、口を構成要素とするイディオム表現を拾い上げる。そしてだぶっているものは省く。結果として合計は61となった。(【資料1】)

日本語に関しては『成語林』から「口」を構成要素とするイディオム表現を拾い上げることにした。その総数は82である。(【資料2】)。

10.2 資料の分類と分析

10.2.1 ドイツ語における"Mund"を構成要素とするイディオム

10.2.1.1 統語論的分類

日本語における「口」を構成要素とする82のイディオム表現を一瞥してわかることだが、すべてのイディオム表現において主構成要素としての「口」は一度だけ出現している。ドイツ語における"Mund"を構成要素とするイディオム表現においては、"Mund"が2回出現しているものがある。すなわち"von Mund zu Mund gehen" (人から人へと次々に話が広まる)である。また"Mund und Nase aufreißen" (非常に驚く)といったように、2つの名詞が出現しているものが16ある。3つ以上の名詞が出現する表現はない。"Mundwerk"を構成要素とするイディオム表現(46-49)と、"mundgerecht"および"mundtot"を構成要素とするイディオム表現は、"Mund"から派生されたものであるため、データとして取り込んだ*1。主構成要素としての"Mund"あるいは"Mundwerk"が主語となっている表現は"jmds. Mundwerk steht nicht still" (絶えずしゃべる) (46)だけである。残りの60の表現においては、すべて、動詞の目的語か前置詞句において前置詞に伴われている。つまり、主格以外の形で出現している。出現している前置詞は、"über"(jmdm. über den Mund fahren(29))、"von"(von der Hand in den Mund leben(38))、"zu"(von Mund zu Mund gehen(30))、"in"(jmdm. etwas in den Mund legen(25))、"aus"(aus berufenem Mund(34))、"vor"(kein Blatt vor den Mund nehmen(36))、"um"(jmdm. Honig um den Mund schmieren(40))、"mit"(mit dem Mund vorneweg sein(27))、"auf"(nicht auf den Mund gefallen sein(21))、"an"(an jmds. Mund hängen(20))、"nach"(jmdm. nach dem Munde reden(28))の11が確認できる()の中の表現は一例として

*1 "mundtot"は、歴史的にいうならば、"Mund"から派生された形容詞ではない。しかし、フリーデリヒの『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)には、"Mund"の項にあげられている。民間語源による誤った理解ではあるが、多くの現代ドイツ人は"Mund"と関連づけて理解しているのであろう。

あげてある)。**"Mund"**が空気や栄養物を体内に取り入れる身体器官であるということから、前置詞**"in"**が一番多いのは、当然といえようか。その数は12となっている。逆に出す方の**"aus"**あるいは**"von"**が同数ぐらいあっても良さそうであるが、そうはなっていない。**"aus"**は4、**"von"**は3となっている。

10.2.1.2 意味論的分類

"Zunge"を構成要素とするイディオムと同じように、身体器官としての**"Mund"**、つまり空気や食物を身体内に取り込むための器官(a-1)、味覚に関わる機能(a-2)、発言行為に関わる機能(b-1)、発言行為による言語的産出物(b-2)という4つの意味論的観点から、61のイディオム表現を分類すると、その結果は次のようになった(分類の詳細については、【資料1】)。すなわち、(a-1)、(a-2)、(b-1)、(b-2)のそれぞれに属するものが13(21%)、4(7%)、17(28%)、27(44%)という数になった。

発言行為およびその結果としての言明、発言に関するイディオム表現が44にものぼっていることが目立つ($44 \div 61 = 0.72$)。そして味覚に関する機能を意味内容とするイディオム表現が4つしかないという結果と考え合わせると、口を構成要素とするイディオム表現の多くが発言行為に関するものであるということが言える。

次にイディオム表現の主構成要素となっている**"Mund"**が字義通りの「口」を指示しているのか、換喩的に用いられているのか、あるいは暗喩的に用いられているのか、という点から、分類することができる。たとえば**"von Mund zu Mund gehen"**(人から人へと広まる)(30)という表現に出てくる**"Mund"**は、日本語訳が示唆しているように、人を意味しており、換喩的に用いられている。**"kein Blatt vor den Mund nehmen"**(口の前に葉を取らない)(36)における**"Mund"**は、字義通りに「口」を意味している。**"Mund"**が発言行為や発言を意味している場合は、暗喩的であると考えられる。つまり、上で述べた4つの意味論的観点からの分類における(a-1)、(a-2)の2つに分類できるものは、字義通りの意味で用いられていることになる。そして(b-1)、(b-2)に属する表現に出現する**"Mund"**は、暗喩的に用いられていると考えることができる。

10.2.1.3 語用論的分類

たとえば**"Ausdrücke im Munde führen"**(33)(ぞんざいな言い方をする、ののしり言葉を用いる)というイディオム表現は、否定的に評価される事態について適用される。あるいはその表現が意味している事柄自体が否定的に評価される。ののしり言葉を使うというのは、一般的には良いこととは見なされていない。それに対して**"reinen Mund halten"**(11)(口

が堅い) という表現は、肯定的な評価を伴っている。こういった価値評価は、表現に伴うコンテクストに関わっているが、そういった表現の使用条件の一部でもある。そのような、いわば語用論的な観点から、61の表現を分類してみると、どうなるであろうか。

1) 表現が意味している事態が肯定的に評価される、あるいは肯定的な価値評価で使われる (+)、2) イディオム表現が意味している事態が否定的に評価される、あるいは否定的な価値評価で使われる (-)、3) そのいずれでもなく中立的 (±)、という3つの語用論的な観点に従って分類してみた結果、プラス評価を伴う表現は 14(23%)、マイナス評価を伴うものは 33(54%)、中立的な評価を伴うものは 14(23%)となった^{*2}。61のイディオム表現ひとつひとつについて、当該の表現が肯定的、否定的、中立的のいずれの価値評価を伴っているかの詳細については、【資料1】をみていただきたい。

分類結果についていうと、発言行為と発言行為による産出物としての発言が肯定的に評価される表現が意外に少ないという感じがする。それに反して、マイナス評価を伴う表現が半数以上の33もあるのが目を引く。

10.2.2 日本語における「口」を構成要素とするイディオム

10.2.2.1 統語論的分類

日本語の「口」を構成要素とするイディオム表現には、すべてにおいて「口」が一度だけ出現している。主要な構成のタイプを多い順から上げると、1. 「口」+「を」+「述語」(25)、2. 「口」+「が」+「述語」(18)、3. 「口」+「に」+「述語」(10)となる。述語となっているものは、主に動詞と形容詞である。形容詞は「旨い」、「うるさい」、「多い」、「重たい」、「堅い」、「軽い」、「悪い」の6つが確認できる。

「口」が複合語を形成しているものがいくつかある。すなわち、「口裏」、「口数」、「口

*2 ドイツ語のイディオム表現に伴う価値評価に関する判断は、広島大学文学部ドイツ語学・ドイツ文学専攻におけるかつての同僚U・ヤーンケ (Dr. Uwe Jahnke) 氏と、現在 (2001年1月) 時点における広島大学文学部における同僚であるB・エーリンガー (Dr. Bernhard Öhlinger) 氏に行っていた。助力に感謝する次第である。両氏による解答結果は、14の表現に関して、異なった価値評価を下している。ヤーンケ氏は、ドイツ連邦共和国ニーダー・ザクセン州の生まれで、現在も同州で生活している。エーリンガー氏は、オーストリア共和国、ザルツブルクの出身である。個人的な語感の違い、使用状況に関する解釈の違いもあるが、ドイツとオーストリアのドイツ語の違いを反映しているとも解釈できるのではなかろうか。"den Mund halten"については、ヤーンケ氏はポジティブな評価を下し、エーリンガー氏はネガティブな評価を下している。その他については、(+)あるいは(-)に対して(±)という判断になっており、極端に異なっているとはいえない。ともあれ発音や語彙についてだけでなく、イディオム表現についても、ドイツ連邦共和国とオーストリアにおける国家変種の枠組みにおける研究の展開が望まれる。

車」、「口三味線」、「口幅」、「口火」、「口弁慶」、「口頭」、「口吻」といったものである。「口の端」のような「口+の+名詞」という形の名詞句が4、それとは逆に「口」があとの方に来る「名詞+の+口」という構成が2（狼の口、序の口）、「用言の連体形+口」という構成が「開いた口」と「あたら口」、「大きな口」、「綺麗な口」、「立派な口」の5つである。「言う口の下から」は、「用言の連体形+口+の+名詞」という複合のタイプである。

10.2.2.2 意味論的分類

まず、前節で確認した形容詞6つのうち、意味そのものが否定的な価値判断を示しているものは、「うるさい」、「悪い」である。「うまい」は本来的には肯定的な価値判断を示している形容詞であるので、「口が旨い」が否定的な意味で使われているのは、反語的といえるだろう。

次に、ドイツ語の"Zunge"を構成要素とするイディオムについてみたように、日本語の「口」を構成要素とするイディオムについても、4つの観点から、分類することが可能であろう。すなわち、身体器官としての「口」、つまり空気や食物を身体内に取り込むための器官(a-1)、味覚に関わる機能(a-2)、発言行為に関わる機能(b-1)、発言行為による言語的産物(b-2)という4つの意味論的観点から、82のイディオム表現を分類すると、次のようになる。(a-1)に属するものが14(17%)、(a-2)に属するものが4(5%)、(b-1)に分類できるものが37(45%)、そして(b-2)が27(33%)となっている。

イディオム表現の主構成要素となっている「口」が字義通りに「口」を指示しているのか、換喩的に用いられているのか、あるいは暗喩的に用いられているのか、という点から、分類することができる。たとえば「口の端にかかる」(38)という表現に出てくる「口」は、換喩的に用いられている。「口あんぐり」や「口が腐っても」における「口」は、字義通りに「口」を意味している。「口」が発言行為や発言を意味している場合は、暗喩的であると考えられる。つまり、上述した4つの意味論的観点からの分類における(a-1)、(a-2)の2つに分類できるものは、字義通りの意味で用いられていることになる。そして(b-1)、(b-2)に属する表現に出現する「口」は、暗喩的に用いられていると考えることができる。

10.2.2.3 語用論的分類

1) 表現が意味している事態が肯定的に評価される、あるいは肯定的な価値評価で使われる(+)、2) イディオム表現が意味している事態が否定的に評価される、あるいは否定的な価値評価で使われる(-)、3) そのいずれでもなく中立的(±)という語用論的観点から分類すると、次のようになる。プラス評価を伴う表現が8(10%)、マイナス評価

を伴う表現が 55(67%)、どちらでもなく中立的な評価、つまり状況や対象によってプラスにもマイナスにもなり得る表現が 19(23%)という数になった。

10.2.3 分類結果

以上の意味論的分类と語用論的分类個々の結果と、両者を重ね合わせたものをまとめて示すと次のようになる。

意味論的および語用論的分类の結果

ドイツ語：

意味論的分类： a-1: 13, a-2: 4, b-1: 17, b-2: 27

語用論的分析： (+) : 14, (-) : 33, (±) : 15

両者を重ね合わせたもの： (+) : 14(a-1: 2, a-2: 2, b-1: 4, b-2: 6)

(-) : 33(a-1: 5, a-2: 2, b-1:10, b-2:16)

(±) : 14(a-1: 6, a-2: 0, b-1: 3, b-2: 5)

日本語：

意味論的分类： a-1: 14, a-2:4, b-1: 37, b-2: 27

語用論的分类： (+) : 8, (-) : 55, (±) : 19

両者を重ね合わせたもの： (+) : 8(a-1 : 1, a-2: 1, b-1:1, b-2: 5)

(-) : 55(a-1:10, a-2:3, b-1:24, b-2:18)

(±) : 19(a-1:3, a-2:0, b-1:12, b-2:4)

意味論的分类と語用論的分类の両者を重ね合わせたものがなにを意味するのかというと、これらの数値は、プラス評価、マイナス評価、中立的な評価のうちわけを示していることになる。

10.3 分類に基づく考察

日本語の「口」を構成要素とするイディオム表現についていうと、プラス評価のうち、発言行為に関するものは「口が堅い」(9)だけである。発言そのものがプラスに評価されているものは、たとえば「口が掛かる」(8)、「口を掛ける」(50)、「口を利く」(51)、「口を極める」(53)、「口を添える」(54)の5つである。プラス評価されているものは全部で8(10%)であり、その中でも発言行為、発言そのものが肯定的に評価されているものは全部で6(7%)であり、きわめて少ない。

ドイツ語についてはどうか。プラス評価されている表現は全部で14(23%)であり、その

うち発言行為および発言に関する表現両者を合わせた数は 10(16%)である。日本語もドイツ語も数自体はそれほど多いとはいえないが、ドイツ語の方が、発言行為および発言をプラスに評価している表現が日本語の2倍以上存在しているということがいえる。

発言行為に関するものは"den Mund aufmachen"(8)、"den Mund halten"(9)、"reinen Mund halten"(11)、"ein gutes/flinkes Mundwerk haben"(48)という4つの表現である。これらの表現を見ると、発言行為が肯定的に評価されているといっても、半分は発言しないことがプラスに評価されている。"Reden ist Silber, Schweigen ist Gold"(弁舌は銀なり、沈黙は金なり)という教訓が反映しているかのようである。その点では、日本語の場合と同じである。日本語はまさしく「口が堅い」と発言しないことをプラスに評価している。他方、ドイツ語には発言行為そのものをプラスに評価しているものがあるが、日本語にはないということが目に付く。

逆に日本語に関してマイナス評価を伴う表現を見ると、全体で 55(67%)という数である。内訳をみると、発言行為、発言に関するものがそれぞれ 24(29%)、18(22%)と多数存在する。両者あわせて 42(51%)であり、「口」を構成要素とするイディオム表現 82 の中の半数を越えている。ドイツ語の方は、全体で 33(54%)である。その内訳を見ると、発言行為、発言に関するものがそれぞれ 10(16%)、16(26%)であり、両者合わせて 26(43%)となる。割合から見ると、日本語の方が、マイナス評価をしている表現が 12%ほど多いということになる。マイナス評価を伴う表現 55 のうち、発言行為が 24 (44%) であり、ドイツ語と比較すると (ドイツ語は 10 (30%))、日本語においては発言行為そのものをマイナス評価している表現が多いといえそうである。

身体器官としての口(a-1)、味覚に関する機能(a-2)については、日独両言語とも、ほぼ同じ数のイディオム表現が存在する。両言語とも発言行為(b-1)と、発言行為の結果としての発言に関するイディオム表現が半数以上を占めている。このことは、「口」が持っているいわば生命維持に必要な空気、栄養物の取り入れ口としての機能よりも、第二次的機能である発言行為に関する機能が重視されていると見なすことができる^{*3}。舌に関するイデ

*3 第9章において、「口」を味覚器官として捉えている小林(小林 2000)の考えに異議を唱えたが、ここでも同様の異議を唱えることができる。日独の「口」に関するイディオム表現を見る限りでは、「口」が持っている第二次的機能が優勢であり、「口」に味覚機能を代表させるのは、妥当ではないといえる。「口」はむしろ発話器官としての機能として捉えるべきといえよう。

イディオム表現についてと同様のことが確認できる。舌に関するイディオム表現と異なるのは、発言行為、発言そのものを否定的に評価しているイディオム表現が半数以上を占めているということである。このことは、予想外の結果であった。

以上の結果をまとめると、日独両言語における"Mund"と「口」に関するイディオム表現に関するかぎりでは、発言行為、発話に関する表現をマイナスに評価しているものが多い。ドイツ語と比較すると日本語の方が、より多く発言行為をマイナス評価している表現が多い。逆にドイツ語の方は、日本語よりも発言行為による言語的産出物としての発言そのものを否定的に捉えている表現が日本語よりもいくらか多いということがいえる（ドイツ語は $16 \div 33 = 48\%$ 、日本語は $18 \div 55 = 33\%$ ）。状況と対象によって、肯定的にも否定的にも使われる表現は、日独両言語において同じ割合である（ドイツ語は $14 \div 61 = 23\%$ 、日本語は $19 \div 82 = 23\%$ ）。

10.4 イディオム学習・教授法の視点から

まずドイツ語イディオム表現を理解するという観点から見ていこう。

"von Mund zu Mund gehen"（次から次へと話が広まっていく）という表現は、「口移し」という日本語の表現を想起させるが、使用域が異なる。日本語の「口移し」は、主として母子の間に適用される表現であると考えられ、イディオム表現ではない。または「口伝」、「口授」ということを意味する。この場合は、直に伝えるという意味である。ドイツ語の表現は、人間の身体の一部である"Mund"を人間の意味で使用している。つまり換喩的表現である。ドイツ語の表現を理解するにおいては、構成要素としての"Mund"が字義通りの意味で用いられているのか、比喩（換喩、暗喩）的に用いられているかということにまず留意することが必要だということである。もちろんイディオム表現としての意味は、比喩的である場合が多い。

ドイツ語の表現が日本語の表現と重なっている場合は、基本的意味の理解においてほとんど問題はないであろう。たとえば、"mit dem Mund vorneweg sein"（口が先にある→やかましい）というドイツ語のイディオムに、表現と意味内容両面でほぼ対応しているのは「口から先に生まれる」である。そして表現に伴っている価値判断の点においてもマイナスに評価されるという点で、同じである。"den Mund halten"（口を閉ざす）、"den Mund aufmachen"（口を開く）、"den Mund stopfen"（口を塞ぐ）、"den großen Mund führen/haben"（大口を叩く）、これらの表現は、ほとんど重なり合っている。従って、理解においてそ

れほど問題はないといえるだろう。

ただし、表現と意味内容がほぼ重なり合っている、表現に伴う価値判断、表現の使用域の差といった点には十分に留意する必要がある。たとえば"jemandem das Wort im Mund herumdrehen"（誰かの言葉を口の中でひね回す→誰かの発言をねじ曲げる）という表現を日本語母語話者は、「舌頭に千転する（繰り返し何度も口ずさむ→十分に推敲する）」という方向で理解する可能性が大きい。その時にはドイツ語の表現が持っている否定的な意味が全く逆になってしまう。その意味では、価値判断に関して両者は「偽の友だち」関係にあることになる。

ドイツ語の"einen schiefen Mund/ein schiefes Maul ziehen"（不満足、不機嫌な顔をする）は日本語に直訳すると「口をゆがめる」ということになるが、その日本語の表情は苦痛を表現する。一見「偽の友だち」関係にある表現であるといいたくなるが、日本語の「口をゆがめる」は、イディオム表現、つまりキネグラムではない。従って「偽の友だち」関係にあるとは言えない。ドイツ語の"einen schiefen Mund/ein schiefes Maul ziehen"という表現に対応する日本語の表現は、「口を尖らす」である。つまり、同じ口の形を変化させるといっても、その変化のさせ方がドイツ語と日本語は異なるのである。

本当の意味での「偽の友だち」関係にあるといえるのが"sich den Mund/das Maul wischen können"（口を拭うことができる：何も得ない結果となる）と「口を拭う」である。ドイツ語の表現が持っている意味は、説明的に与えた日本語訳の通りだが、直訳して「口を拭う」であると理解すると、意味を取り違えることになってしまう。日本語の「口を拭う」は「悪いことややましいことをしながら、何食わぬ顔をする」という意味の表現である。

"reinen Mund halten"（清潔な口を保つ）と「綺麗な口をきく」も「偽の友だち」関係にある表現である。ドイツ語の表現は、「人を裏切ったり、密告したり、悪口を言ったりしない」という意味である。他方日本語の「綺麗な口をきく」は、「自分には偽りやごまかしながらのような、体裁のよいことを言う」である。

"sich den Mund/das Maul verbrennen"（口をやけどする：不用意な発言で害を被る）は、日本語においては、イディオムというよりはことわざで「口は禍の門」という表現に思い至るならば、理解は正しく行われることになるだろう。

次に産出の面から考えていくことにしよう。

「口あんぐり」や「大きな口をきく」といったほぼ重なり合っている表現は、日本語からドイツ語にほぼ直訳的に表現しても、"mit offenem Mund dastehen"と"einen großen Mund

führen/haben"という、ドイツ語における対応表現にいたる可能性は大きいといえる。つまり日本語においては「口」、ドイツ語においては"Mund"を構成要素とするイディオム表現間の対応付けを学習することによって、適切な表現が産出できることになるだろう。

しかしながら、日本語では「口」を構成要素とするイディオム表現であるが、ドイツ語で「口」以外の身体部位名を主構成要素とするイディオム表現が対応している場合もある。たとえば、日本語では「口が旨い」と表現するが、ドイツ語では"Mund"ではなく、"Zunge"を構成要素とする"eine beredte Zunge haben"というイディオム表現が対応している。「口」に対応する"Mund"を構成要素とする"nicht auf den Mund gefallen sein"という表現を思い浮かぶのは、かなり難しい。

「口が旨い」の「口」を"Zunge"におきかえて"eine beredet Zunge haben"に到達するのと同じように、日本語では「口が重い」と表現するからといって、口を"Zunge"に置きかえて、"eine schwere Zunge haben"と表現すると、日本語の表現が持っている意味とは違う意味で理解されてしまうことになる。ドイツ語の表現は、アルコールで舌が重い、つまり「ろれつが回らない」という意味なのである。

日本語のイディオム表現「歯に衣着せぬ」には、ドイツ語の"kein Blatt vor den Mund nehmen"（口の前に葉を取らない）という表現を対応させるということになるだろう。口の一部である「歯」から口全体に視点を転ずることはそれほど難しくはなく、「歯」を"Mund"、「衣」を"Blatt"と置きかえるならば、ドイツ語の表現にほぼ到達することができるかもしれない。しかし、注意しなければならないのは、ドイツ語と日本語の表現に伴っている価値評価が、逆になっているということである。ドイツ語の表現は、日本語の表現とは異なって、プラス評価を伴っているのである。直言することは、ドイツ語においては勧められるべきことなのである。反対に、日本語においては直言することは、やむを得ない場合にするのであり、通常は勧められるべきこととは捉えられてはいない。むしろ控えるべきことなのである。

10.5 おわりに

日本語でもドイツ語でも驚いたとき、呆気にとられたときは「口をあぐり」開ける("den Mund aufreißen") ようであるが、ドイツ語圏の人々は"Mund und Nase aufreißen"(4) という表現が示しているように、さらに鼻の穴も広げるようである。顔の表情全体は同一であろうが、どこに焦点を当てて言語的に表現するかという言語化における違いであると

いえる。

「舌」に関するイディオム表現においても観察されたことだが、「口」に関しても饒舌、おしゃべりをネガティブにとらえている表現が多い。他方、全く沈黙してしまうことについても、否定的にとらえている表現がいくつかある。そもそも、日本語においては、発言行為をどのようにあるべきだと捉えているのだろうか。「舌」と「口」に関するイディオム表現を観察する限りでは、結局、儒教の精神に沿っているともいえるが、中庸が一番好ましいということのようである。ドイツ語においては、どちらかという、発言行為をポジティブに評価している表現が、日本語に比較すると、多いということが確認できた。

最後に「口」に関するウィットを掲げて、本章の論述を終えることにしたい。

Ein Kunde bei einem Torgauer Metzger: "Haben Sie Rindfleisch?" - "Nein." - "Kalbsfleisch?" - "Nein." - "Schweinefleisch?" - "Nein." - "Leber?" - "Nein." - "Schafffleisch?" - "Nein." - Plötzlich ruft ein SED-Genossen aus der Reihe heraus: "Was hat der so wählerisch zu sein? **Geben Sie ihm eins aufs Maul!**" (Schlechte/Schlechte 1991: 54)

(トールガウの肉屋で客が訪ねる:「牛肉ありますか?」-「ありません。」-「子牛の肉は?」-「ありません。」-「豚肉は?」-「ありません。」-「レバーは?」-「ありません。」-「マトンは?」-「ありません。」-と、突然、並んでいた SED 党員が叫んだ:「なんとえり好みの多いやつなんだ? 口先に^{*4}一発食らわしてやれ!」)

*4 "Geben Sie ihm eins aufs Maul!"を「口先に一発食らわしてやれ!」と日本語訳したが、これは直訳である。日本語としては「鼻先に」となるのがふつうであろうか。その場合は、「Mund」あるいは「Maul」と「鼻」が対応することになる。また、このウィットの落ちは、次のような点にある。かつての DDR においては食糧事情がきわめて悪く、肉屋は開店休業状態であった。おそらく SED 党員には、一般国民とは異なって、優先的に肉が販売されていたのではなかろうか。そのような事情を知らない SED 党員が、店主と応答している普通の国民がえり好みしていると勘違いしているのである。

第 1 1 章 身体動作に関するイディオム (プロクセグラムとキネグラム)

Der Papa hockt ständig vor dem Fernseher und ist nicht sehr unternehmungslustig. Als er am Freitag von der Arbeit kommt, hat er vierzig Pfund Spinat vom Gemüsemarkt mitgebracht. **Mama schlägt die Hände über dem Kopf zusammen** und nörgerlt: "Um Himmels Willen, was soll ich mit so viel Spinat." Meint der Papa: "Du wolltest doch schon immer einmal mit uns ein Wochenende **im Grünen** verbringen." (Witzebuch 1997: 490)

(お父さんはテレビの前にすわってばかりで、家族と一緒に何かをしようという気はまるでない。しかし、ある金曜日に仕事から帰ってきたとき、野菜市から 20 キロのほうれんそうを買ってきた。**お母さんはびっくりして頭の上で両手を打ち合わせて**、文句を言った。「これはいったいどういうこと？こんなにたくさんほうれんそうをどうしろというの？」お父さんは答えていった。「あんたは一度週末を**緑の中で**家族と一緒に過ごしたいといつも言っていたじゃないか。」*)

1 1 . 0 はじめに

動物行動学のめざましい展開によって、いかに人間が他の動物と同じように、その行動次元でも生物学的な条件づけを受けているかということが明らかにされてきている。

同じ人間という種に属しているのであるから、その身体動作は異なる文化圏であっても同一であってもよさそうなものである。しかし、生物学的に同一の制限を受けていると思われる身体動作に関しても、文化的差異が極めて大きく、場合によってはコミュニケーションを妨げる要因となっていることを、プロクセミックス、あるいはキネシックスとよばれる分野の研究は明らかにしている。

言語学の分野では、そのようなプロクセミックス、あるいはキネシックスに関わる要因は、「ノンバーバル・コミュニケーション」(Nichtverbale Kommunikation) の名の下で取り扱われてきている。そのようなノンバーバルな要素の中でも、とりわけ言語の中にコード化されているものを、ブルガー (Burger 1976) は、「キネグラム」(Kinegramme)とよん

*1 "Mama schlägt die Hände über dem Kopf zusammen"にある「頭の上で両手を打ち合わせる」というのは、驚いたときのしぐさである。

でいる。厳密に言えば、ブルガーがキネグラムと呼んでいるものは、上述のプロクセミックス、キネシックス両分野に関わるノンバーバルなコミュニケーション要因を含んでいる。従って、キネグラムだけでなく、「プロクセグラム」(Proxegramme)という部類ももうけることが可能である。

言語において表現される身体表現は、形式の面からみるならば、一個の辞書単位で表現されているか、複数の辞書単位の結合から成っているかという点で分けることができよう。複数の辞書単位の結合から成っている表現は、さらにそれがまったく自由な組合せであるか、固定した表現形式となっているかという点で分かれる。後者がいわゆるイディオムとなるわけである。

意味の面からみるならば、身体動作そのものを描写しているだけの表現なのか、つまり言葉通りの意味しか持たない表現なのか、あるいは文字どおりの意味以外に転義的、慣用的な意味をもった表現なのかという点からみることができる。

身体動作そのものについて比較・対照という観点から言えば、同じ身体動作であっても、母語の世界でのみ有意味であるもの(ケース1)、学習対象言語(目的言語)の世界でのみ有意味であるもの(ケース2)、両方の言語で有意味であって、かつ両方の言語世界で同一の意味を有するもの(ケース3)、両方の言語で有意味であるが、同じ身体動作であっても意味が異なるもの(ケース4)、いずれの言語でも有意味でないもの(ケース5)という5つの場合が区別できよう。この5つのケースは、本章が考察の対象とするイディオム化された身体表現についても、当てはまる。

プロクセグラム、キネグラムいずれについても、表現上の類似、相違よりも、もっと重要なのは、表現されている身体動作が、具体的にどのようなものであるか、学習者の母語と学習対象言語(目標言語)の両言語が話される社会において、具体的にどのような違いがあるのかを、明確に意識することであろう。表現は同じであっても、具体的な身体動作においてはかなり異なっている場合が多いからである。たとえば"Lippen"の語をはじめとする身体部位を表わす語が、その"Referenz"(指示対象)を微妙に違えている場合が多いことも考え合わせるとき、単に1対1の置き換えがいかにか誤解に導きやすいか、わかつたつもりでもそれはまるでわかっていないという事態にいたる場合が多いことを肝に銘ずるべきなのである。

11.1 プロクセグラム

ミヒェル (Michel 1980) およびブルガーの論文 (Burger 1976) では、プロクセミック
スに属するイディオムだけを一つのグループとして取り出すことはしていない。これに属
するものには、たとえば、次のようなものがある：

"jemandem nahekommen/näherkommen" (近づきになる)、"jemandem nahestehen"
(親しい、考えが近い)、"jemandem zu nahe treten" ((ある人に近づきすぎて)
感情を害する)、"von jemandem Abstand halten" (ある人と (一定の) 距離をお
く)、"sich von jemandem/etwas distanzieren" (ある人 (もの) と距離をおく、敬遠
する)、"einer Sache (oder jemandem) zu Leibe rücken (oder gehen)" (あること (あ
るいはある人) に攻めかかる)。

たとえば、一番最後のイディオム表現の実際の使用例を見てみよう。

"Wer sich aber erhofft hatte, daß der ehrgeizige Aufsteiger aus der FDP den
Subventionen grundsätzlich zu Leibe rückt, sah sich schnell getäuscht..." (Badische
Zeitung, 11.7. 1991,S.4)

(FDP 出身の野心に満ちた成り上がり者 (連邦経済大臣ユルゲン・メレマン) が、
補助金をやり玉に挙げて、根本的になくするだろうとの希望を抱いていた者は、あ
っさりと失望させられた。)

プロクセグラムに関しては、2つの種類の問題があるように思われる。第1の問題は、
表現そのものを言葉通りに理解することは可能だが、意味することが大きく違っている場
合である。たとえば次の引用例にある"**Kohl stellt sich vor Krause**"という文は、ある新聞の
見出しにあるものである。これを「コールはクラウゼの前に立つ」と日本語に置き換える
こと自体に一見問題はないようだが、日本語でそのように言った時「コールはクラウゼの
前に立ちほだかる」という意味で理解する可能性が高い。しかし実際には、「(コールは
クラウゼをかばうために) クラウゼの前に立つ」のである。

"...Bundesverkehrsminister Krause (CDU) denkt trotz Negativschlagzeilen weder an
Rücktritt noch hat er das Vertrauen von Bundeskanzler Kohl verloren. Dies machte Kohl
am Montag vor der Presse in Bonn unmißverständlich deutlich, als er sich demonstrativ
vor seinen Minister stellte." (Badische Zeitung, Dienstag, 2. Juli 1991, S.2)

(連邦運輸大臣クラウゼ (CDU) は、新聞で否定的なことが報道されているにも
かかわらず、辞職することなど考えていないし、連邦総理大臣コールの信頼を失っ
ているわけでもない。コールは、月曜日ボンでの記者会見において、このことを明

言し、これ見よがしに運輸大臣をかばった。)

もう一つの問題は、意味そのものが確定しにくいというものである。つまり、プロクセミックスの分野における諸研究が明らかにしているように、どれほどの絶対的な空間的隔たりを「近い」あるいは「遠い」と認めるかは、文化による差が大きいということである。個体距離、親密距離、社会距離、公衆距離それぞれの内容は、文化によって異なっているということを知ることが重要になる。たとえば、ホールのいうところによれば、ドイツ人の個体距離、自己の領分に対する捉え方は、かなり広い範囲をなわばりとして捉えているようである（『かくれた次元』182-191 頁）。もちろん、卵が先か、鶏が先かという論議になる恐れがなきにしもあらずではあるが、そのようなドイツ人の個体距離に対する意識が、家屋だけでなく、会社などの事務室のつくりにも反映している。ドイツの会社などにおける事務室のつくりについていえば、大部屋主義をとるところは現在でも希であるように思われる。

そのような違いは、空間に関してだけでなく、さらには時間に対する意識にも反映してくる。さまざまな時間に関する副詞—たとえば、*sofort*、*bald* 等—が具体的にはどれほどのタイム・スパンを意味するのか、彼我の間にかかなりの違いがあるように見受けられる。

1 1 . 2 キネグラム

ブルガーの類型化にならって、自由な結合による身体動作の表現と、表現が固定化されたもの、つまりイディオムについて、それぞれの言葉通りの意味と転義的な意味、すなわちイディオム的な意味を、対照的な観点から考察していこう。

1 1 . 2 . 1 自由な表現としてのキネグラム

まず非常にとるに足りない例であるかも知れないが、次の引用例中の"...und **macht mit der rechten Hand eine Geste, um zu zeigen, bis wohin ihm die ganze Sache steht...**"という一文を読んで頂きたい。これは、ドイツ連邦共和国の首都をボンからベルリンへ移すということがドイツ連邦議会で決定された翌日、ボン市内のタクシーの運転手と交わされた会話中に、タクシーの運転手が行なったしぐさを描写したものだが、一体具体的にはどのようなしぐさなのか。確かにこのドイツ文を「彼は、もういっさいの件にうんざりだというしぐさを右手でした」といった日本語に置き換えることはできよう。しかし、そこで行なわれているしぐさそのものがイメージできていないならば、果してそのような置き換えはこのドイツ語を理解したうえでなされたものだといえるのだろうか。

"...Mir reicht's jetzt, sollen sie doch gehen", sagt der Taxifahrer bei der Fahrt durch den morgendlichen Berufsverkehr und **macht mit der rechten Hand eine Geste, um zu zeigen, bis wohin ihm die ganze Sache steht.** Für sie, die Taxifahrer, sei der Ausgang schon schlimm, schließlich lebten sie zum guten Teil vom politischen Bonn." Aber für wen ist das nicht schlimm hier in der Gegend?..." (Badische Zeitung, Samstag/Sonntag, 22./23. Juni 1991, S.3)

(. . . 「もう十分だ。連中には（ベルリンに）行って欲しいね。」と朝のラッシュの中を走りながら、タクシーの運転手は言った。そして、**その件すべてが彼にとってどうであるかを、あるしぐさを右手でしながら、示した。**彼ら、タクシー運転手たちにとっては、首都移転論議の結果は歓迎すべきものではない。つまりは、ボンが政治の中心であるということに生計の大部分を依存している。ボン近辺に住む人たちにとって、ベルリンへ首都が移転するという決定が、好ましいということがあるのだろうか。)

"**die Hände schütteln**"は、確かに握手することであるが、ここで注意すべきは、日本人の常として、すぐに頭を下げてしまっはいけないということである。以下の2例は、ブルガーの論文からとったものだが、文化的差異を考慮しないと、学習者の母語（ここでは日本語）の経験世界で理解されてしまうことになるだろう。そして、その理解はドイツ語が意味している指示対象としての具体的行為とは異なってくるのである。ここでも、単にこれらのドイツ語の表現を日本語に置き換えるだけでは、理解したことにはつながらないというべきであろう。"**...mit erhobenem Finger, wie ein Schüler, der etwas sagen möchte**"（何かをいいたがっている生徒のように指を挙げて—ここでは、日本のように、指をそろえて手を挙げるのではなく、人差し指だけをのばして、手をあげる）、"**Man sitzt in gläubiger Haltung da**"（信心深い態度で座っていた—いったいどのような姿勢で座っていたというのだろうか？）

自由な表現としてのキネグラムは、その定義からいって、身体動作をいわば客観的に述べたものであるが、日独の文化の差異が原因となって、具体的にどのような身体動作であるかが即座には了解できないものも多い。そのような身体動作表現に関しては、目標言語文化圏における身体動作を具体的に理解することが難しく、容易に出発言語つまり母語の文化における身体動作をイメージして理解してしまう危険性が大きい。言葉通りに対応する翻訳をおこなって、それで間違いというわけではないが、それだけでは不十分なのであ

る。

1 1. 2. 2 固定した表現としてのキネグラム (イディオム)

キネシックスの分野における現象が、言語化され慣用的表現となったものがある。それぞれの分野における具体的な違いが意識されている必要がある。さらに具体的な身体動作の違いだけでなく、その慣用的な意味が大きくずれているものがあることに、特に注意すべきであり、そういったキネグラムに関しては、学習者の母語におきかえて理解することは、単に誤解を導くことにしかない。以下、身体各部位の名称を構成要素として含むイディオム表現を例としてとりあげて、理解における困難がどこにあるのかを考えていくことにしよう。

以下で取り上げる身体動作に関する表現は、厳密に見るならば、2種類に分けることができよう。すなわち、ブルガーのいう真のキネグラムと疑似キネグラムの2種類である。真のキネグラムとは、表現された身体動作を現実に行うことができるというものである。疑似キネグラムとは、現実にはそのような行為を行うことができないものであり、行うとすれば、きわめてグロテスクな行為になるようなものである。疑似キネグラムは、比喩的な意味だけを持っている。

1. "Achseln, Schulter" (肩)

肩については、ドイツ語は、"Schulter"と"Achseln"の2語がある。しかし、身体部位の名称として使われるのは"Schulter"であり、"Achseln"はイディオム表現に登場するのみである。

"jemandem auf die Schulter klopfen" (喜び、満足の意味で、相手の肩をポンとたたく) は、日本語においても同様の意味を持っている。

"die Achseln zucken" (肩をすくめる) は、多義的な身体動作であるといえるが、基本的には「どういっていいかわからない」といった当惑を意味している表現である。この身体動作は、近年は、欧米文化の影響で日本の若者の間においてもしばしば見られるようになってきている。日本語には「お手上げ」という表現があるが、これは"die Achseln zucken"が持っている意味の一部にだけ対応していると言える。次の引用例では、目的語と動詞が一体となった現在分詞が使われている。

"... doch je mehr Attentate es gibt, desto **achselzuckender** die Reaktion der Bonner Politiker: Abscheu, Empörung, und dann der resignierende Hinweis, den perfekten Schutz gebe es eben nicht. Damit machen es sich die Verantwortlichen zu leicht..."

(Badische Zeitung, 4.4. 1991, S.1)

(. . . しかしながら、殺害事件件数が増加の傾向にあるのに、ボンの政治家たちはただ肩をすくめるだけである。嫌悪し、腹を立てたあとは、あきらめの口調で言うだけである。完全なガードなどあり得ないのだ. . .)

"etwas auf die leichte Schulter nehmen" (あることを軽く考える、ないがしろにする)

このドイツ語のイディオム表現に意味的に対応するもう一つの日本語の表現は、「安請け合いする」、「甘く考える」ということになるろう。

2. "Arm" (腕)

"jemandem in den Arm fallen"という表現は"energisch (aggressive) Handlung durchkreuzen" (Friederich 1976: 27) (誰かの(攻撃的な)行為を激しく遮る)という意味である。日本語では、敢えて言えば「誰かの足を引っ張る」というのが、対応するイディオム表現となるろう。

"...Die eigenen Leute werden ihm nämlich in den Arm fallen, wenn ihnen diese Ermächtigung nicht weit genug geht: also bis zur möglichen Teilnahme deutscher Soldaten an einem Krieg wie dem eben erst beendeten..." (Badische Zeitung, 2./3. 3. 1991: 1)

(. . . つまり、自分の傘下にある者たちが彼の足を引っ張ることになるだろうということである。というのは、(ドイツ防衛軍の権限に関する)その法律が彼らの意に満たないものであるかも知れないからだ。つまり、先ほど終結した(ボスニア・ヘルツゴビナをめぐる)ユーゴ内戦のような戦争にドイツ兵を参加させるという可能性を含むのでない場合は、そうなるかも知れない。)

"jemandem unter die Arm greifen"は"jemandem (besonders) finanziell helfen" (Friederich 1976: 27)という意味であり、もっぱら、財政、経済的援助に関して使われる。日本語でいえば「テコ入れする」あるいは「後押しする」ということになるろう。同じ経済、財政援助あるいは財政政策といった意味では、「カンフル注射」という言い方がある。ドイツ語で

も"die finanzielle Spritze" (財政上の注射) という表現があるが*2、これはまた別の比喩的言い回しであり、あとで述べる小道具を用いた身体動作に分類できるものであろう。

"...Sollte der neue Bahn-Chef Heinz Dürr an diesem Konzept festhalten, oder die Politiker der Bahn nicht endlich tatkräftig unter die Arm greifen, droht nicht nur in Frankfurt eine (nah-)verkehrspolitische Katastrophe..." (Badische Zeitung, 31.3.1991: 22)

(新鉄道総裁ハインツ・デュルがこの構想に固執するならば、あるいは政治家たちが重い腰を上げて鉄道の腕を強固に支えないのであれば、(近距離) 鉄道交通政策が破局を迎えるのは、フランクフルトだけでない。)

3. "Auge" (目)

ドイツ語の"die Augen vor etwas verschließen" (都合の悪いことを見ないようにする) というイディオム表現には、日本語においても同一の意味をもった対応するイディオム表現がある。すなわち「目をつぶる」である。ドイツ語がそうであるように、日本語でもおそらく両目をつぶるものと考えられる。ドイツ語では、片目をつぶるときには動詞が"verschließen"ではなく"zudrücken"が使われる。すなわち"ein Auge zudrücken"という。同じような意味の言い回しが両言語にはさらにもう一つずつ存在する。それは"die Vogel-Strauß-Politik" (ダチョウの政策) と「頭隠して尻隠さず」である。ドイツ語の方は、明らかにダチョウの習性に由来しているが、日本語の方は、同じ鳥でも雉の習性に由来している。雉は尾が長いので、頭の方だけ藪や草むらに隠れても、尻尾は見えてしまうということである。

次の引用文では、ドイツ統一以後、とりわけかつての東ドイツ地域で顕著になってきたネオナチの胎動、外国人敵視の社会状況に対して、コール首相が目を閉ざしてはいけないと訴えている。

"...Die Bundeskanzler Kohl hat die Aktionen von Neonazis in Ostdeutschland scharf verurteilt. Er mahnte am Sonntag beim Diözesan-Katholikentag in Speyer, nicht die

*2 右のカリカチュアはこの「財政上の注射」をモチーフとしている。景気を向上させるため、財政によるてこ入れのため、"Gnä'(dige) Frau, können Sie mir nicht mit Ihrem Boom etwas entgegenkommen?" (奥様、もうすこし景気をこちらにもよこして下さいますか?) と哀願しながら、カンフル注射をしようとしているのは、当時の連邦大蔵大臣シラーである。注射をしようにもなかなか針が届かない、つまり思ったように、経済対策がとれないという状況を描いている。(1970年6月11日『バーデン新聞』)



Augen vor der Gefahr zu verschließen, "daß mancherorts die alten Dämonen - Nationalismus, Fremdenfeindlichkeit oder Antisemitismus - zu neuem Leben erwachen..." (Badische Zeitung, 24.6. 1991: 2)

(. . . 連邦首相コールは、東部ドイツにおけるネオ・ナチの行動を厳しく断罪した。コールは、日曜日、シュパイヤーにおけるカトリック教区集会で、**危険に目をつぶらないように**と警告した。「あちこちで、かつての悪魔—ナショナリズム、外国人敵視、ユダヤ人敵視—が蘇っている。」. . .)

日本人が目をこするのは、眠気に襲われたときというのが普通であろう。しかし、ドイツ人が"die Augen reiben" (目をこする) 時は、眠いときではない。次の引用例に見るように、信じがたいことを目にするときドイツ人は目をこするのである。日本人は、実際にそうするかどうかは別として、「ほっぺたをつねる」か「眉に唾つける」ということになる。

"...Verwundern kann es den Bundeskanzler eigentlich nicht, und doch **wird er sich** beim Studium der Nachrichten der letzten beiden Tage **die Augen gerieben haben**: In Leipzig und anderen Städten füllen Zehntausende von Menschen Plätze und Straßen, nicht um wie vor Jahresfrist - gegen den realen Sozialismus, sondern um gegen den realen Kapitalismus zu protestieren..."(Badische Zeitung, 20. 3. 1991:1)

(. . . 本来そのことは、連邦首相を驚愕させるようなことではないといえよう。しかしながら、ここ 2 日間の報道を読むとき、**目をこすった**ことであろう。ライブチヒその他の都市で、広場や通りに満ちあふれている何万という人々は、昨年未がそうであったように、実在の社会主義にではなく、実在の資本主義に抗議しているのである。)

4. "Bein" (足)

次の例文はドイツの青少年向けの小説 (Jugendliteratur) から拾ったものだが、そこに描かれている「交互に足に体重をかける」という動作は、日本語では特別な意味は持っていないと思われる。ドイツ語ではウェイトレスの苛立ちを描写しているのである。

"..."Ja", sagt Paulek und sieht die Kellnerin an, die **ihr Gewicht von einem Bein auf das andere verlagert**. "Haben Sie Kakao?" fragt sie..." (Chidolue 1990: 10)

(. . . 「そうよ」といって、パウレクは、**かわるがわる足に体重をかけている**ウェイトレスを見た。「ココア、ありますか？」とパウレクは尋ねた。)

このドイツ語の表現を日本語母語話者が目にするとき、おそらく、「地団駄を踏む」というイディオム表現を想起するのではなかろうか。しかし、そう捉えると意味を誤解することになる。というのは、日本語の表現は、「悔しさ」、「怒り」を意味しているからである。

5. "Daumen" (親指)

"jemandem den Daumen drücken" (誰かのために親指を押しつける) という表現は、ブルガーによると、疑似キネグラムである。すなわち、この表現が描いているしぐさは、実際上は実行不可能か、現在ではほとんどなされないという。しかしながら、筆者の経験では、"toitoitoi"というまじない言葉を口にしながら、左手の手のひらに右手の親指を押しつけるしぐさをドイツの友人がするのをいくどか見ている。だから、真のキネグラムであるといってもいいだろう。日本では、誰かの無事、幸運を祈るという場合は、現在ではほとんど行われることはないといえるが、かつては火打ち石を打って、家から送り出すことが行われていた。

"...Anja Fichtel, die Doppel-Olympiasiegerin von Seoul, saß gestern auf der Tribüne des Mailänder Meazza-Stadions **und drückte der deutschen Mannschaft die Daumen...**"(Badische Zeitung, 11. Juni 1990, S.7 (WM-Gespräch))

(. . . アーニャ・フィヒテル (ソウル・オリンピックで2つの金メダルを獲得した) は、昨日、ミラノ・メアツァ競技場の観客席に座って、ドイツ・チームが勝つようにと願った。)

"Däumchen drehen" (親指を回す) というしぐさは、なにもすることなく自分の順番が来るのを待つ」という意味であるが、実際に待合室のベンチに座っている人がそのしぐさをしているのはよく見かける。

"...Der Arbeitnehmer kann nämlich in seinem Betrieb bleiben, also in der gewohnten Arbeitswelt, **und muß nicht zu Hause tatenlos Däumchen drehen...**"(Badische Zeitung, 9./10. 6. 1999: 1)

(. . . つまり、被雇用者は、企業すなわち従来 of 職場にとどまることができるのだ。自宅で待機し、無為に時を過ごす必要はないのだ。 . . .)

6. "Faust" (拳)

"sich ins Fäustchen lachen"に出てくる"Fäustchen"は、日本語で言う意味での拳 (こぶし) ではなく、そろえた指を軽く内側に丸めた感じである。実際にその手で口を覆い隠す

ように笑うのかどうかは別として、この表現の意味は"heimlich und schadenfroh lachen" (Friederich 1976: 116) (こっそりといい気味だという風に笑う) あるいは"voll heimlicher Schadenfreude oder Genugtuung sein"(DUDEN 1992: 489) (人の失敗をざまあみろと心の中で満足して喜ぶ) となっている。日本の若い女性が歯を出して笑うのははしたないと、よく手で口をおおうしぐさをするが、ドイツではそのしぐさは、誤解を招くおそれがある。

次の引用例では、偶然にも日本が話題になっているが、そこでは日本は「漁夫の利」を得て喜んでいるとされている。

"...Die Weltwirtschaftskonferenz der 107 Industrie- und Entwicklungsländer ist an den zwei "Industriegroßmächten" - der Europäischen Gemeinschaft und den USA - gescheitert, während **Japan sich ins Fäustchen lachen kann**. Dabei hätten Washington und die Westeuropäer viele gemeinsame Interessen gegen die fernöstlichen Markteroberer zu vertreten..." (Badische Zeitung, 8./9. 12. 1990: 1)

(. . . 工業国および発展途上国 107 カ国が集った世界経済会議は、2つの「巨大工業国」－ヨーロッパ共同体とアメリカ合衆国－によって、失敗に終わった。そして、日本はしめたとほくそ笑んでいる。ワシントンと西ヨーロッパ諸国は、極東の市場征服者に対して共通の利害があることを主張すべきであったのに、である。)

7. "Gesicht" (顔)

ドイツ語ではがっかりしたとき"**ein langes Gesicht machen**" (顔を長くする) ようである。日本語では、「がっくりと肩を落とす」。もちろんドイツ語にも日本語と同じように、幻滅、期待外れ、意気消沈と言うことを表現する"mit hängenden Schultern" (肩を落として)、あるいは"den Kopf hängen lassen" (うなだれる) というイディオムがある。ドイツ語では表現の可能性が3つあることになるが、"ein langes Gesicht machen"は日本人が誤解しやすいのではなかろうか。「顔を長くする」ということから、日本語母語話者は容易に「鼻の下を長くする」と理解する可能性がある。"den Kopf hängen lassen"に「うなだれる」を対応させたが、日本語において「うなだれる」のは「首」であり、"Kopf" (頭) ではないことにも注意すべきである。

"Zu Gast in der Region Rhone-Alpes - oder auch nicht

Lange Gesichter bei den Partnern..." (Badische Zeitung, 29./30. 5 1991: 8)

(ローヌ・アルプ地域の客人となるか－あるいはならないか。姉妹提携相手は落胆した...)

8. "Haar(e)" (髪)

絶望的な状況に陥ったとき**"sich die Haare raufen/reißen"** (髪をかきむしる) ということになるようである。このようなしぐさは、基本的に女性特有のものというイメージがある。実際にレーリヒの辞典にも女性が描かれている (Röhrich 1991/92: 604)。そもそもはギリシャ悲劇に由来するしぐさであり、嘆きを表している。日本語では「髪をかきむしる」というのが対応することになるだろうが、日本語のほうは「怒っている」という状態を表現する場合が多い。従って、ドイツ語の表現の方が、意味する範囲は広いということになるろう。

同じように頭髪に関する表現に**"haarsträubend"** というのがあるが、こちらは、怒り心頭に発したときの表現である。**"Die Haare stehen einem zu Berge"** (怒髪冠をつく) という意味である。

"Staufen rauft sich ob Rauf der Haare"

Der Breisacher schießt mit fünf Toren sein Team zur Meisterschaft - Kreisliga A..."
(Badische Zeitung, 18.6.1991: 26)

(シュタウフェンの人々は、絶望で髪をかきむしった。)

ブライザッハ・チームは、5つのゴールをあげて、地域Aリーグのチャンピオンとなった。)

9. "Hand" (手)

日本語においてもドイツ語においても手に関するイディオム表現は数多い。手に関するイディオム表現だけを比較・対照するだけでも長大な論述を必要とすることになるろう。しかし、ここでは、実際の使用例が見つかったひとつの表現だけを取り上げることにする。

"sich die Hände reiben" (手をすりあわせる) というドイツ語のイディオム表現に対応する日本語の表現は、典型的には商業の世界で見られると言える。売り手が買い手に言い値でものを売りつけようとしている場合に用いるしぐさである、というのが一般的な理解であろう。あるいはおべっかを使う、ごまをするという意味のしぐさであると理解されることだろう。しかし、ドイツ語では、喜びや安堵を意味する。従って、同じ手をすり合わせるというしぐさ表現ではあるが、日本語とドイツ語においては、それぞれ意味が異なる。「偽の友だち」である。

次の引用例では、このイディオム表現は相手の失敗を心の中で喜んでいるという意味で使われている。どのような意味で手をすりあわせているのか、意味をはっきりさせるため

に、さらに副詞を付け加えることも可能である。

"...Viele in seiner Partei, in München oder in Bonn, würden sich nun die Hände reiben, weil sie den Unbequemen endlich und endgültig los waren, jetzt würden sich die smarten Jungs viel lautloser nach vorn schieben, die weder Straß' politischen Instinkt noch sein Statur hatten, von seinem Temperament ganz zu schweigen..." (Grün 1990: 133)

(. . . 多くの黨員たちは、ミュンヘンにおろうが、ボンにおろうが、うまくいったと手をこすり合わせるだろう。というのは、今度こそ最終的に厄介者を片づけることができたからである。そしてやり手の若い者たちは、声を落として前に進み出ていくことだろう。そういった自称やり手たちは、シュトラウスと同等の政治的な本能も才覚も持ち合わせていない。政治家としての気質についてはなおのことである. . .)

"...Die politischen Gegner der Freiburger SPD reiben sich genußlich die Hände: "Das ist verkehrspolitischer Betrug, das ist die Straßenlüge der Sozialdemokraten", wetterte FDP-Fraktionssprecher Patrick Evers; und auch Peter Weiß, der stellvertretende Kreisvorsitzende der CDU, schlug mit Worten in die gleiche Kerbe: "politikunfähig", "verantwortungslos", "Verkehrslüge"..." (Badische Zeitung, 18./19.5. 1991: 17)

(. . . フライブルクの社会民主党の政敵たちは、してやったと手をこすっている。「これは、社会民主党による、欺瞞に満ちた交通政策であり、道路政策に関する嘘である。」と、FDP スポークスマン、パトリック・エヴァースは、非難している。そしてまた、CDU 支部長代理ペーター・ワイスも、同趣旨の発言をおこない、「政策能力なし」、「無責任」、「運輸政策に関する嘘」だと言っている。)

1 0. "Knie" (膝)

ドイツ語では、懇願するとき**"auf Knien gehen"** (膝を屈して歩む) と表現する。実際にそのようにして前に進むのは苦痛きわまりないと思われる。日本語では、膝を屈して座って、頭を下げをお願いすることになる。懇願するときには、土下座、つまり頭 (額) を地面にすりつける姿勢をとる。これは極めて日本的な姿勢である。他方、ドイツ語の方は、キリスト教の伝統と関連している。ドイツ人は次の引用例を目にするとき、中世においてドイツ皇帝がカノッサ参りをしたことを想起するであろう。

"...Gorbatschow machte vor Journalisten deutlich, daß er seine Erwartungen nicht zu

hochgeschraubt hat. "Es ist kein Treffen der Finanzminister, sondern der Staatführer", unterstreicht er. **"Ich gehe nicht auf Knien nach London,** um die Führer der führenden Staaten um Hilfe zu bitten." Er wolle vielmehr die Fragen erörtern, die mit "einem normalen und organischen Übergang der UdSSR in die Weltwirtschaft" verbunden seien..." (Badische Zeitung, Samstag/Sonntag, 13./14. Juli 1991, S.2)

(. . . ゴルバチョフは、それほど大きな期待は抱いていないと言うことを、記者たちの前で明らかにした。「今回の会議は、大蔵大臣の集まりではなく、国家首脳を集まりだ。」と強調した。「私は、主要先進国の首脳たちに、助力をお願いするために、膝を屈してロンドンに行くことはしない。)

"**etwas übers Knie brechen**"は、無思慮で性急な行為を指すイディオム表現である。膝に棒を当てて折るというイメージである。日本語では「せっかちな行為」ということになるが、そのような行為を行う人間の性格を表現している。ドイツ語は行為そのものの特徴付けに関連している。

"...Bundeskanzleramtsminister Seiters (CDU) sicherte zu, das Bundeskabinett werde sich sehr bald mit den Folgen der Parlamentsentscheidung befassen. Bundesregierung und Parlament müßten nun viele weitere Entscheidungen treffen. Dazu gehörten Bauplanungen, Ausgleichsmaßnahmen für die Bonner Region sowie Beschlüsse über die Verteilung von Behörden und Institutionen auf die Bundesländer. Dies müsse rasch und zügig erfolgen, aber **es wird nichts übers Knie gebrochen**".(Badische Zeitung, 24. 6. 1991: 1)

(連邦首相府大臣ザイターズ(CDU)が確言したことだが、連邦政府と連邦議会は、さらに多くの決定を行わなければならない。たとえば、ボン地域のための建築計画、調整施策ならびに官庁諸機関を各連邦州に配置するための決定といったものがある。これらの施策は速やかに行われなければならない。とはいえ、がむしゃらなやり方をしていいというものではない。 . . .)

1 1 . "Kopf" (頭)

次の引用例に出てくる "**kopfstehen**"は、分離動詞ではあるが、比喩的な言い方である。その意味では、ブルガーのいう疑似キネグラムである。驚いたときに倒立するというようなことは、まず実際には考えられない。"Hand" (手)に関するイディオム表現であるが "**die Hände über dem Kopf zusammenschlagen**"というのがあるが、こちらの方は実行可能であると思われるし、実際にも見かけられるしぐさである。日本語では「びっくり仰天」と

いうことになる^{*3}。

"...38 Jahre mußten ins Land ziehen, ehe die Nachfolger des großen alten Fritz (Walter), ehe die "Roten Teufel" die Pfalz wieder einmal zur "Hölle" machten. Die mit 100 000 Einwohnern kleinste Stadt der Bundesliga feiert ihren Fußballtriumph mit einer Inbrunst, die an den Karneval von Rio erinnert, und 120 000 Menschen jubelten beim triumphalen Empfang des deutschen Meisters. **Die ganze Pfalz steht kopf** und feiert einen Titel, der für diese Region weit mehr als irgendeinen Erfolg in irgendeinem sportlichen Wettkampf bedeutet..." (Badische Zeitung, 17. 6. 1991: 1)

(. . . 38 年が過ぎ去った今ようやく、かの偉大なフリッツ（ワルター）の後継者たち、「赤い悪魔たち」がファルツを今一度てんやわんやの大騒ぎをさせることになった。連邦一部リーグに属する人口 10 万人の小都市は、熱狂的に勝利を祝っている。その様子は、まるでリオのカーニバルを思わせる。そして 12 万の人間が、ドイツチャンピオンの勝利を祝福した。ファルツ州全体が気も狂ったかのように沸きたち、チャンピオンタイトルを祝っている。それは、この地域にとっては、他のどんなスポーツ競技における勝利よりも意味のあるものである. . .)

1 2. "Mund" (口)

"den Mund voll nehmen"というドイツ語のイディオム表現は、日本語でいえば「大口を叩く」ということになる。実現、実行不可能なことを約束することや、はったりをかますことである。"angeben"、"prahlen"といった一語の動詞もあるが、このイディオム表現の方が、インパクトがある。政治に関する記事でしばしば見かける。政治家が、いかに嘘、偽りを言っているかということの証拠であろうか。次の例では"voll"だけでなく、さらに"reichlich"（十分に）が付け加わって、どれほどの大口を叩いているかということが強調されている。

"Betrachtet man das Ergebnis der Streichaktion jedoch genauer, muß man zum Schluß kommen, daß Möllemann zwar den Mund reichlich voll genommen hat, sich dafür aber beinahe noch verschluckt hätte..."(Badische Zeitung, 11. 7. 1991: 4)

(引っかけ回し行為の成果なるものをより子細に見るならば、以下のような結論に至らざるを得ない。メレマンは、十分すぎるほどの大口を叩いてはいるが、本当に

*3 本章冒頭のウィットを参照。

言いたいことは、今にも口から出かかっている、飲み込んでしまっているのだ。)

この言い回しは、副詞の形で使われることも多い。

"...Man kann auch davon ausgehen, daß er die Hürde bewußt tiefgehalten hat, damit ihm kein politischer Schaden entsteht. Zum anderen hat er beim Zusammenrechnen noch geschummelt: Denn nur mit Hilfe bereits früher beschlossener Kürzungen hat er das **vollmundig** angekündigte Einsparziel erreicht. Dabei kann kein Zweifel herrschen an der Notwendigkeit, **eine Bresche in den Subventionsdschungel zu schlagen**. (Badische Zeitung, 10. 7. 1991: 1)

(. . . . また次のような考えもできるであろう。メレマンは、意識的にハードルを低くしておいて、政治的な傷が生じないようにしたのだ。他方、彼は、意識的に計算をごまかしたのだ。というのも、すでに以前に決定された削減を組み込むことによつてのみ、**声高に喧伝された歳費節減の目標を達成することができるのだから**。しかしながら、疑いもなく、**ジャングルのようににはびこっている助成金政策に風穴をあける**ことは必要なことである。)

1 3. "Nase" (鼻)

"**jemandem eine lange Nase machen**"は、ブルガーのいう意味での真のキネグラムである。具体的には、両手（あるいは片手）を開いて、親指を鼻先につけるというしぐさであ

る (下図参照*)。これは、ドイツ語 (文化圏) においては、人を馬鹿にするしぐさである



を持っているとは思われない。せいぜいのところ、鼻が高い、高慢という意味でしか理解されないとえよう。日本語において誰かを馬鹿にするという場合は、舌を突き出しながら、あっかんべーをすることになる。ドイツ語においても "jemandem/nach jemandem die Zunge herausstecken" (舌を突き出す) ことは、日本語におけるのと同様の意味を持っている。

"... Der SPD-Bundestagsabgeordnete Klaus Lennartz riet unterdessen in Bonn den Autofahrern, dem Finanzminister "eine lange Nase zu zeigen"..." (Badische Zeitung, 2.6.1991: 13)

(. . . SPD 連邦議会議員クラウス・レンアルツは、その間に、自動車を運転する人たちに、大蔵大臣をからかうことを勧めている。)

"jemanden an der Nase herumführen" (ある人をだます) という言い回しは、日本語の「鼻面を引き回す」というイディオム表現を想起させるが、日本語の言い回しが、ある人を意のままに扱うという意味であるのに対して、ドイツ語の方はどちらかという、行為の意図あるいは結果の方に焦点を合わせた表現となっている。あちこち引き回した結果、騙されたということになるようである。その意味では、表現は似ているが、意味はずれているということで、「偽の友だち」関係にあるといえる。次の引用例では、ああでもない、こうでもないというような説明の仕方に、議員たちが騙されていると感じている、と述べ

*4 この漫画は『バーデン新聞』(Badische Zeitung)2000年11月15日から取ったものである。"Beelzebub"とは悪魔の大將である。あの世にいて悪魔に出会った男が、悪魔の大將に愛想よく挨拶して、だまらしたというふうに、鼻の上に広げた左手の親指を立てている。これが「鼻を長くする」というしぐさである。

られている。

"Putschgerüchte in der Sowjetunion und die Erklärungsversuche des Ministers Jasow

Die Abgeordneten fühlen sich an der Nase herumgeführt

Sollen Demonstrationen militärischer Macht die landesweit um sich greifende Destabilisierung eindämmen?..."(Badische Zeitung, 13./14.10. 1990: 5)

(ソ連におけるクーデターの噂と大臣ヤゾフの釈明の試み

議員たちは、だまされたと感じている。

軍事力の誇示は、国中に広がりつつある社会不安をせき止めることができるのか。)

また"**über jemanden die Nase ziehen/kräuseln/rümpfen**" (鼻にしわを寄せて、ある人を軽蔑する) という表現は存在していても、どのようなしぐさであるのかは鮮明ではない。他方、日本語では「鼻つまみ者」という表現が意味的にほぼ対応していると思われるが、日本では実際に鼻をつまんでにおいを嗅ぐまいというしぐさをする。その意味では、真のキネグラムである。

1 4. "Ohr" (耳)

ドイツ語においては"**jemanden beim Ohr nehmen**" (誰かの片耳を引っ張る)、"**jemanden bei den Ohren nehmen**" (誰かの両耳を引っ張る)、"**jemandem die Ohren langziehen**" (誰かの両耳を引っ張る) という表現は、いずれも、イディオム表現であり、「警告する、罰する」という意味を持っている。実際に誰かの耳を引っ張るかどうかには関係ない。つまり疑似キネグラムということになる。日本語の場合は、その表現が意味する行為を、たとえば、子供がいたずらをしたときに、親が懲らしめのためにするということはしばしばあるが、イディオム表現となっているわけではない。

何かを忘れないように記憶にとどめるという場合、日本語では「肝に銘ずる」ということになるが、ドイツ語では"**etwas hinter die Ohren schreiben**" (耳の後ろに書く) ということになる。どのような行為であるかは、思い描くのが難しい。日本人は、照れ隠しか、自分の失敗を少しばかり反省するというしぐさを想像してしまうだろう。

"...Spätestens jetzt **müßte** Wirtschaftsminister Möllemann eigentlich **seinen Hut nehmen**.

Daß der von ihm angepeilte Subventionsabbau wenig Substanz hat, haben viele kritisiert. Nun aber kommt der Rüffel aus unzweifelhaft berufenem Munde: Die Bundesbank teilt zu Recht schlechte Noten aus. **Dies freilich müssen sich alle Wirtschafts- und**

Finanzpolitiker der Republik hinter die Ohren schreiben..."(Badische Zeitung, 19. 7.1991: 1)

(. . . おそきに失した感があるが、今こそ本当に、経済大臣メレマンは、**(帽子を脱いで) 辞職するべきであろう。**彼が目指した補助金廃止政策は、中身がないということは多くの人々が批判してきている。このたびまた、疑いもなくその任にふさわしい人の口から批判がでてきている。連邦銀行は、経済施策に対して悪い点を付けたが、それは正当である。このことを、連邦共和国の経済および財政に關与している政治家たちは、全て、**肝に銘じるべきである。**)

1 5. "Rücken" (背)

日本語の「背を向ける」に対応するのが、**"jemandem den Rücken kehren"**というドイツ語の表現である。この場合は、表現、意味とも重なり合っている。理解、産出両方において、問題はないと思われる。

"...Was bisher ein relativ fernes Ereignis war, wird nun zur direkten Erfahrung: Die Fluchtwelle aus Albanien, zunächst abgefangen in den Botschaftsgebäuden Tiranas, erreicht die Bundesrepublik. Tausende, die sich nur in ihrer Heimatsprache verständigen können, die nichts mitbringen als **das sprichwörtliche Hemd auf dem Leibe** und einen großen Drang zur Freiheit, **haben der Diktatur den Rücken gekehrt...**" (Badische Zeitung, 14./15. 7. 1990)

(. . . これまでのところ、比較的遠方の出来事であったものが、今や、直に経験できることとなってきた。アルバニアからの避難民の波は、当初はティラナの大統領館に収容されていたが、連邦共和国に到達した。生まれ故郷の言葉でしか意志を伝えることができず、**ことわざにもあるように着の身着のままで、**自由を求める大きな衝動に突き動かされて、**独裁に背を向けて**逃れてきたのだ。)

1 6. "Zahn" (歯)

日本語の「歯ぎしりして悔しがる」という表現には、ドイツ語の**"mit den Zähnen knirschen"**が対応している。表現している感情も、同じく、悔しさ、腹立ち、怒りということである。次の 2 番目の引用例からすると、ドイツ語の場合はさらに、耐えがたきを耐えるといった意味合いも強いようである。従って、日本語の表現よりも、意味範囲が少しばかり広いと言える。ドイツ語においては、動詞を現在分詞にしてフレーズ全体を副詞的に使うことも可能である。

"...Tief verärgert reagierte gestern der japanische Regierungschef. "Das Verhalten der USA läßt **mich mit den Zähnen knirschen**", sagte Kaifu dem halbstaatlichen Fernsehsender NHK in einem bislang unbekanntem Tonfall. "Ich glaube, Japan wird in den USA nicht richtig wertgeschätzt..."(Badische Zeitung, 14.3. 1991: 6)

(. . . 腹の底から怒って、昨日、日本政府の長は反応した。「アメリカ合衆国の振る舞いには、**歯がみせざるを得ない**。」と、海部首相は、これまでにない調子で NHK に対して言った。「日本はアメリカにおいて正しく理解されていない」と。)

"...Für eine derartige Rücksichtnahme würde Waigel in der Bundesrepublik aber kaum Verständnis finden. Nur **zähneknirschend** haben die Bundesbürger die Steuererhöhungen akzeptiert. Und auch nicht mit Blick auf den Golfkrieg, sondern wegen der Probleme in den neuen Bundesländern..." (Badische Zeitung, 26. 3.1991: 4)

(. . . アメリカに対してそのような思いやりを示しても、ワイゲルは連邦共和国内でほとんど理解されないであろう。**歯ざしりしながら**連邦市民は税金引き上げを受け入れたのだ。それも、湾岸戦争を視野に入れてのことではなく、新連邦州におけるさまざまな問題を理由としてのことであったのだ。)

また"**die Zähne zusammenbeißen**"には「歯をくいしばる」が対応している。日独両言語における表現のいずれも、苦しみ、辛さに耐えるという意味である。

たまたま「歯」に関するイディオム表現は、重なり合っているものであった。いずれの表現も真のキネグラムである。なお、ついでながら、"jemandem die Zähne zeigen" (歯を剥く) という表現も、重なり合っているが、これは、本来的には動物の習性に由来する表現である。それを人間に転用しているのである。従って、キネグラムには属さないことになる。

1 1 . 3 身体動作が外界における事物に関係するもの

以下では、身体動作に関する表現でも、人間の身体部位だけに関わっているのではなく、身体以外の身の回りの対象物にその行為が及んでいるという表現を取り扱う。これらの表現もキネグラムと称することも可能であろうが、本論文では「拡張キネグラム」と呼ぶことにする。人間の身体動作に関与する事物に従って、どのような「拡張キネグラム」があ

るかを見ていくことにしよう。

1. "Glas" (コップ)

"**tief ins Glas gucken**" (グラスの底深くのぞき込む) というイディオム表現は、酒飲みがよくする行為でもあるといえるだろう。コップあるいはグラスの底をじっとのぞき込みながら、まだ酒 (ビールあるいはワイン) が入っているかどうかを確認しているという図である。この行為は泥酔に近い状態になるとよく見られる行為のような気がする。日本語では「深酒をする」ということになるが、この言い回しに含まれている「深い」は、「深入りする」という場合の「深い」であると考えられる。言うまでもなく、ドイツ語では "Glas" は、グラス、あるいはジョッキ、コップを意味するが、日本語では杯ということになろう。

"...Der Lastwagenfahrer, der den jungen Tamilen zu Tode schlägt, der Ostschweizer, der aus dem Auto auf Asylbewerber schießt, und all die anderen - sie haben **einfach nur einmal tief ins Glas geguckt** und nicht richtig auf den kleinen Faschisten in ihrem Herzen achtgeben..." (Badische Zeitung, 15.8. 1991: 8)

(. . . タミールの若者を殴り殺した貨物自動車運転手、自動車の中から庇護申請者を撃ち殺した東部スイス人、そしてこれに類することをを行ったその他のものたち - そういったものたちは、全て、単に深酒をしすぎていたのだ。そして本当に小さなファシストが胸の中にいるということに注意を払っていなかったのだ。)

2. "Handtuch" (タオル)

東欧諸国において政治的転換の動きが高まって以来、多くの政府が倒れ、タオルが投げ込まれる状況が続いた。"**das Handtuch werfen**" (タオルを投げる) という言い回しは、ボクシング競技に由来するものであり、ほぼインターナショナルであると言えよう。本来的には、リング外のコーナーにいるセコンドが状況を判断してタオルをリング内に投げ込み、試合をストップさせ、敗北を認めるというものであるが、イディオム表現では主語となる人物がタオルを投げて、辞任するという意味で使われる。日本語では実際にはそれほどこの言い回しは使われないようである。降参するという意味では、「白旗を掲げる」という言い回しの方がなじみ深い。

"...Die zweite rot-grüne Koalition in Hessen, am Wochenende besiegelt, ist noch gar nicht im Amt, da hat sie - indirekt - ihr erstes Opfer: Volker Hauff, von dem man nicht sagen kann, daß er zwei Jahre nach Amtsantritt ein populärer Frankfurter Oberbürgermeister

geworden war, **hat das Handtuch geworfen...**" (Badische Zeitung, 12. 3. 1991: 1)

(. . . ヘッセン州における第二次赤と緑の連立は、先週末に調印が行われて確実なものとなったが、任務について間もないというのに、すでに一間接的にはあるが—最初の犠牲者フォルカー・ハウフを出すことになった。ハウフは、2年間在職した後、フランクフルトの市長として人気があったというわけではないということもあって、ついにタオルが投げ込まれ、辞職することになった。)

「白旗を掲げる」と同じような方向にあるのが「匙を投げる」という言い回しであるが、この言い回しは、ある事柄を断念するという意味である。「白旗を掲げる」というのが戦闘や試合に関連して使われるのに対して、「匙を投げる」は、病気の治療、人の行動を改めようとする努力などについて使われる。ここでいう「匙」は、医療で薬をはかる「匙」であり、「匙加減」の「匙」と同じである。

3. "Hut" (帽子)

日本の奇術、手品に相当するものを西洋では"**schwarze Kunst**" (黒の芸術) と呼んでいる。日本語の手品や奇術と比べると、おどろおどろしい感じがする。魔術師の衣装が、多くの場合黒装束であり、シリンダーハットをかぶっているというのも、そのようなイメージの形成に一役買っていると言える。日本の奇術、手品は、それほど人々を恐怖に陥れるようなものという感じはしない。日本の奇術、手品の場合は、明るい色の普段着であるのが普通である。日本では「帽子から何かを取り出す」というような言い回しは存在しない。おとぎ話には、「打ち出の小槌」なるものが登場するが、これはヨーロッパでは"**Zauberstab**" (魔法の杖) に相当するものといえよう。

"...Zur allgemeinen Verblüffung **hat** Eberhard Diepgen nun noch **einen dritten Vorschlag aus dem Hut gezaubert**. Danach soll es wie bisher 22 Berliner Bundestagsabgeordnete geben, die nicht über Wahlkreise und Landeslisten, sondern ausschließlich über Listen gewählt werden sollen..."(Badische Zeitung, 4./5. 5, 1990: 5)

(. . . 誰もがびっくりしたのだが、エーバーハルト・ディーピングは、第3番目の提案を帽子からマジックで取り出した。彼の提案によると、これまで通り、22人ベルリンから連邦議会議員が選出されることになるが、それらの議員は、選挙区と州被選挙人名簿からではなく、被選挙人名簿からのみ選出されるというものである。)

"**seinen Hut nehmen (müssen)**" (帽子を脱がざるを得ない) という言い回しは、日本人

が誤解しやすい。というのは、日本語には「脱帽せざるを得ない」という、ほぼ同じような言い回しが存在するからである。しかしながら、この日本語のイディオム表現とドイツ語の言い回しとは、意味が異なっている。ドイツ語の言い回しの意味するところは、「辞任する、職を退く」という意味であるが、日本語の言い回しは、「賞賛する、敬意を表する」という意味である。日本語の「脱帽する」に対応しているドイツ語のイディオム表現は"Hut ab!"である。

"SPD fordert Waigels Rücktritt... Der außenpolitische Sprecher der SPD, Karsten Voigt, sagte dagegen, die jüngsten Äußerungen des Bundesfinanzministers kosteten den deutschen Steuerzahlern viele Millionen Mark. Wenn politische Verantwortung noch gelte, **müsse Waigel jetzt eigentlich seinen Hut nehmen**

(SPD は、ワイゲルの退陣を求めている。SPD の外交専門報道官、カルステン・フォイクトは、これに対して、連邦大蔵大臣の最近の発言は、ドイツの納税者たちにとって、何百万マルクにもつくことになった、と言った。政治的責任ということがまだ言えるとするならば、**そもそもワイゲルは、(いま帽子を脱いで) 退陣しなければならない。**)

4. "Horn" (笛)

ホルンといえば、現在ではほとんどが金属製の楽器を思い浮かべるだろう。しかし、本来は、アルプス・ホルンは、木製である。"in jemandes Horn blasen" (誰かの笛を吹く) あるいは "in das gleiche Horn blasen" (同じ笛を吹く) ということは、同じ音程の同じ音を出すということである。そこから同じことを言うという意味になる。

"...So geschehen dieser Tage beim Vorschlag des baden-württembergischen Regierungschefs Erwin Teufel(CDU), auf die Zinsbesteuerung privater Anleger vorübergehend ganz zu verzichten, und beim Votum des bayerischen Landeszentralbankchefs Lothar Müller (CSU) für eine endgültige Abschaffung der Kapitalertragsteuer auf Zinseinkommen. **In das gleichen Horn bläst** jetzt auch noch der Bankenverband..."(Frankfurter Rundschau, 3.8. 1991: 3)

(. . . こういう理由から、バーデン・ビュルテンベルク州総理大臣エルウィン・トイフェル(CDU)は最近、個人投資家が得る利子に課税するのを一時的に断念した方がいいという提案を行ったのである。そしてまた、バイエルン州中央銀行総裁ロター・ミュラー(CSU)が、利子収入に対する元金課税を最終的に廃止することに賛

成の意を表明したのである。同じ趣旨のことを今また銀行連盟も表明している。)

5. "Tasche" (財布)

"Tasche"は、"Geldtasche" (財布) の意味である。"**tief in die Tasche greifen müssen**"は、財布の底深くまで手を突っ込んで金を取り出す必要がある、つまり多くの出費を余儀なくされるという意味である。"Tasche"は、ポケットであってもいいのかも知れない。ポケットに無造作に金を入れている人も多いからである。

ドイツ統一以来、ドイツ国民の財布からは非常にしばしば金を取り出されることになった。度重なる余り、財布の革も擦り切れ、ぼろぼろになって、あちこち穴が空きそうになっているのかも知れない。実際にドイツ統一によってドイツ経済は一次的に景気が上向いたが、その後は深い不況に落ち込み、ドイツ国民の財布には金がたまることはないという嘆きもある。ドイツ統一の付けの大きさに喘いできた 10 年であったともいえる。

次の引用例は、同じように、ドイツ統一以後社会問題となってきた妊娠中絶をめぐる新聞記事である。論説子は、墮胎に及ばざるを得ない女性を刑法で罰するよりも、社会保障を充実することこそ、国家がなすべきことだということを主張している。

"...Kann man sagen: "Will der Staat es der Schwangeren ernsthaft erleichtern, ihr Kind auszutragen, muß er **in die Tasche** und darf nicht zum Strafrecht **greifen**?"

Auch wenn der Staat sich nicht ganz einer strafrechtlichen Regelung enthält(wenngleich es einige aus grundsätzlichen Erwägungen fordern, was aber wohl im Bundestag nicht konsensfähig ist), **muß er tief, viel tiefer als bisher, in die Taschen greifen**, wenn denn die erklärte Absicht des Lebensschutzes verwirklicht werden soll..."(Badische Zeitung, 10./11.8.1991: 4)

(. . . 次のように言えるだろう：「女性が子供を身ごもり、出産する苦勞を、国家が本当にまじめになって軽減しようとするつもりならば、そのための金を引き出す方策を考えるべきであり、刑法を持ち出すべきではないのではないか。」たとえ、国家は刑法による規制を全面的に手控えることがないとしても（刑法の原則に依拠して刑罰を科すべきだと要請している人々もいるが、連邦議会ではおそらく賛同を得ることはないであろう）、生命を保護するという明言された意図を実現しようとするのであれば、これまで以上にずっと深く国民の財布に手を入れて金を引き出さざるを得ないであろう。)

6. "Ärmel" (袖)

身体動作が及ぶ対象は、衣服の一部でもあり得る。次の引用に出てくる"die Ärmel hochkrepeln" は、日本語でいえば「腕をまくりあげる」ということになる。気合いを入れて仕事に取りかかろうとするときにする行為である。日本語は「腕」となっているが、実際は服の袖をまくり上げるしかない。「腕の袖をまくりあげる」の「の袖」が省略されて、「腕をまくり上げる」となったものであろう。日独の表現は、ほぼ重なり合っているため、理解および産出において困難は生じないであろう。

"...Mit einem Appell an die Solidarität aller Deutschen und einem Bekenntnis für ein geeintes Europa hat sich Bundeskanzler Helmut Kohl gestern am späten Nachmittag an 7000 Osnabrückerinnen und Osnabrücker gewandt...Gefragt sei jetzt die offene Hand des Partners und nicht die geballte Faust des politischen Gegners: "**Wenn wir alle die Ärmel hochkrepeln**, werden wir es schaffen"..."(Die Neue Osnabrücker Zeitung, 2.3.1991: 9)

(. . . 全ドイツ人が連帯し、ヨーロッパが一つにならなければならないと、連邦首相ヘルムート・コールは、昨日夕方、7000人のオスナブルック市民に訴えた. . . 求められているのは、パートナーとして手を広げることであり、政治的な敵としてこぶしを突き出すことではない。「われわれ全てが腕まくりしてがんばれば、やり遂げることができるだろう。)

1 1 . 4 まとめ

本章の「はじめに」において、身体動作そのものを日独比較・対照の視点から、5つのケースに分けて観察することを提案した。本節では、これまでの論述のまとめとして、これらの5つのグループについて、例を挙げながら、説明していくことにしたい。

まず第1のグループは、同じ身体動作であっても、母語の世界でのみ有意味であるもの(ケース1)であるが、日本におけるお辞儀がその典型例であるといえよう。ドイツ語圏では、東洋人が行う挨拶行為としては理解されるが、自らはお辞儀をすることはしない。通常は、握手である。口をぬぐう行為もそうである。「口をぬぐう」という表現はイディオムとしての意味も有しているが、口をぬぐうしぐさをして、ドイツ語文化圏では「自らの不都合な行為について知らん顔をする」という意味は伝わらない。

第2のケースは、学習対象言語(目的言語)の世界でのみ有意味であるものである。第1のケースとは逆になるわけであるが、本来的には握手がこの部類に属するということになる。西洋文化との接触で、現在では日本人も握手をすることが多くなってきてはいる

が。もっと分かりやすい例として十字を切るしぐさがある。これはキリスト教文化圏においてのみ意味を有するしぐさである。同じ宗教的な連関で意味を有しているのが、左胸に右の手を当てるというしぐさである。日本においてはそのようなしぐさは、胸が痛いというような意味でしか理解されないだろうが、ドイツ語文化圏を含むキリスト教文化圏では、懺悔のしぐさ、私に罪があります、というしぐさなのである。

第3のケースは、両方の言語世界で同一の意味を有するものである。舌を突き出すというしぐさは、日独において同一の意味を有する。言葉が通じなくてもある程度のコミュニケーションが可能なのは、この部類に属する身体動作やしぐさがかなり存在するからであろう。

第4のケースは、両方の言語で有意味であるが、同じ身体動作であっても意味が異なるものである。「角を生やす」というしぐさは、日本では怒っているという意味のしぐさであるが、ドイツ語圏ではそうではない。妻を寝取られた旦那を意味する。日本人が思いもよらない意味で理解されることになる。逆に、本文でも取り上げているが、ドイツ人はもうんざりだという意味で、よく首を切るしぐさをするが、まさに日本人は「首を切る」（解雇する）という意味で理解する。お互いに注意すべき、「偽の友だち」関係にある身体動作、しぐさである。

第5のケースは、いずれの言語でも有意味でないものということになるが、この第5のケースは、本章の考察の対象外ということになる。日独両言語文化圏以外の文化との比較において意味を持つ身体動作を指しているからである。

本章においては、身体動作、しぐさが言語表現として固定され、イディオムとしての意味を有しているものを、日独両言語のイディオム辞典から拾い上げて、比較・対照してきた。ノンバーバルな身体動作、しぐさに関する日独比較・対照研究もまだそれほど多くなされていないわけではない。ましてや、本章で取り上げたプロクセグラム、キネグラムを、包括的に比較・対照した研究は、筆者の知る限り、ドイツ語に関してはブルガーによるものがあるだけである。日独の比較・対照については、ミヒェルが研究の先鞭をつけ、筆者がそのミヒェルの考えを敷衍して、日独イディオム対照研究という枠組みの中で取り扱ってきているというのが、研究の現状である。この分野における研究がさらに進展し、深化することを願うものである。最後にウィットを2つ掲げて、「プロクセグラムとキネグラム」に関する本章の論述を終えることにする。

Beim Friseur.

Der Kunde beschwert sich, daß das Rasieren teurer geworden ist.

"Tut mir leid", entschuldigt sich der Friseur,

"aber bei den Preissteigerungen werden die Gesichter ja auch immer länger."

(Witzebuch 1997: 479)

(散髪屋さんで。ひげ剃り代が前よりも高くなると、客がこぼした。

「すみませんね」と、散髪さんは申し訳なく言った。

「でもこの物価高では、顔もいよいよ長くなるばかりですからね。」^{*5)}

"Sag mal, warum machst du immer die Augen zu, wenn du trinkst? Schmeckt dir das Bier

nicht?" "Doch, aber mein Arzt hat mir verboten, **zu tief ins Gras zu schauen.**"(Gambsch

(Hrsg.) 1998: 31)

(「飲むたびに目をつぶるのはどうしてなんだ？ビールがまずいのか？」「いや、そうじゃないんだ。医者にはコップの底をのぞくのを禁じられているんだよ。」^{*6)}

*5 "bei den Preissteigerungen werden die Gesichter ja auch immer länger" (物価高の時勢、顔は長くなっていくばかりだ)にある「顔が長くなる」というのは、諦め、落胆の表情である。顔が長くなって、剃る面積が広がるので、かみそり代が高くなるという落ちである。

*6 "zu tief ins Gras zu schauen"は、イディオム表現としての意味は「深酒をする」であるが、この男はこのイディオム表現を文字通りに解して、コップの底を見ないようにしているというわけである。

第12章 外来語を構成要素とするイディオム表現

"Das sind wohl ein Hähnchen à la Röntgen", sagt der Gast.

"Wie meinen Sie, mein Herr?"

"Man sieht nur Knochen." (E. Gamsch(Hrsg.) 1998: 71)

(「これがレントゲン式のロースト・チキンというものかな？」と客の言葉。

「それはどういう意味ですか、お客さん？」

「骨しか見えないじゃないか。」)

12.0 はじめに

「ピンハネ」あるいは「ピンを撥ねる」といった表現は、時々目にしたり、聞いたりする。国語辞典や外来語辞典などに当たると、もともと「ピン」はポルトガル語であるとなっている。

また、ドイツ語においても"last but not least"（最後に言及するが、決して取るに足りないことではない）といったきまり文句や"Amok laufen"（狂気に駆られて、盲目的に殺人をおこなう）といったイディオム表現は、決してなじみのないものではない。前者は、英語から借用されたものであり、後者は、マレー語から借用されたものであると、辞典には記されている。

本章では、日本語においては「ピンを撥ねる」、ドイツ語においては上述の"Amok laufen"といった、外来語を構成要素とするイディオム表現を、比較・対照することを試みる。

日本語およびドイツ語が、どのような言語からどれだけの表現を借用して、いわば使い込むことによって、それぞれの言語の統語体系、意味体系のなかに取り込んで、表現を豊かにしているかを見ていく。

日本語およびドイツ語が他の言語および文化と、どのような関わりを持ってきているか、そしてまた、その関わり方の異同を、イディオム表現を通して確認することが、もう一つの目標である。

12.1 資料について

12.1.1 日本語における外来語を構成要素とするイディオム表現

本章で対象とする日本語における外来語には、中国語、朝鮮語は含めていない。現代において借用、移入されたものは事情が異なるであろうが、これらの2言語から近代以前に借用されたものは、おそらく、もはや本来の日本語の表現から判然と区別することはできない状態になっているであろうからである。

従って、ここで問題となる外来語とは、日本語がヨーロッパの近代諸言語と接触することによって、日本語に取り込まれてきたものであると、取りあえずは限定的に考えたい。

問題となるイディオム表現はどのようなものであるかという、たとえば、「メスを入れる」といった表現である。もちろん、手術用のメスを手術のため身体に切り込むという本来の字義通りの意味として使用することは可能である。しかし、この表現は「悪いものを取り除く」というイディオムとしての意味で使われるのが普通であろう。日本語のイディオム表現の中に、このような外来語を構成要素とするものが、どれくらいあるのだろうか。

たとえば、尾上兼英監修『成語林 故事ことわざ慣用句』（旺文社、1992）に当たってみると、【資料1】としてあげた43のイディオム表現が見つかる^{*1}。

外来語が構成要素となっているのであれば、当然ながら、イディオム表現全体が外来のものである可能性が高いといえよう。しかし、イディオム表現全体が外来のものとして取り込まれたものは、ここでは直接の対象とはしていない。

いうまでもなく、外来のイディオム表現は、現在の日本語において多数存在していると考えられる。たとえば「豚に真珠」といった表現は、外来のものではあるが、その表現自体の中に、外来語を含んでいないため、ここで取り扱う対象とはしていない。

12.1.2 ドイツ語における外来語を構成要素とするイディオム表現

ドイツ語にはラテン語、ギリシャ語を始めとして、多数の外来語が取り込まれていることは、いまさら言うまでもない。手元にあるだけでも"DUDEN 5 Das Fremdwörterbuch"を始めとして、いくつかの（ドイツ語にとっての）外来語辞典がある。もちろん、それらの辞典に収録されている外来語の全てが一般に知られているものとは言えないし、また日常よく用いられる外来語だけを収録しているわけでもない。

次に挙げるゼルナー編集の3冊の辞典は、タイトルが示しているように、日常生活でよ

*1 【資料1】を見ればわかるように、他の辞典から拾ったものも資料として付け加えてある。総計は74となっている。

く使われている外来語（ラテン語、フランス語、英語）といった観点から拾い上げられた表現が収録されている。ただし、ゼルナー編集のこれらの3つの辞典には、サブ・タイトルが示しているように、イディオム表現だけが収録されているわけではない。

1) Alfred Sellner : Latein im Alltag. Sätze Sprichwörter Phrasen Redewendungen Formeln Zitate. Wiesbaden: VMA-Verlag. (日常におけるラテン語 格言、ことわざ、固定的表現、慣用的言い回し、きまり表現、引用)

2) Alfred Sellner, Französisch im Alltag. Alphabetisch geordnetes Nachschlagewerk von französischen Sätzen, Sprichwörtern, Phrasen, Floskeln, Redewendungen, Zitaten und Formeln sowie deren Abkürzungen mit rund 1500 Stichwörtern aus allen Lebensbereichen. Wiesbaden: VMA-Verlag. (日常におけるフランス語 フランス語のあらゆる生活領域における格言、ことわざ、固定的表現、きまり文句、慣用的言い回し、引用、きまり表現およびそれらの省略表現 1500 をアルファベット順に配列した辞書参照図書)

3) Alfred Sellner, Englisch im Alltag. Floskeln Redewendungen Sprichwörter Zitate Formeln Phrasen. Wiesbaden: VMA-Verlag, 1988. (日常における英語 きまり文句、慣用的言い回し、引用、きまり表現、固定的表現)

ドイツ語における外来語を構成要素とするイディオム表現、あるいはそれに類するものとして使われている外来語という意味では、イディオム辞典から外来語を構成要素として含むものを拾い上げることが必要になってくる。従って、本章における論述のための資料源としてはドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992)を利用することにする。なお、付言すると、フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966 および 1976)には、外来語を構成要素とするイディオム表現は、収録されていない。フリーデリヒは「ドイツ語」の範囲を厳格に捉えているためであろう。

ここで外来語というのは、共時的に外来語であると認識されているものである。そもそもはドイツ語にとって外来語であったのだが、長い年月を経る中で、現在ではもはや外来語であるとは意識されていないものは、対象外とする。たとえば"das ist so sicher wie das Amen in der Kirche" (教会におけるアーメンのように確実だ) という言い回しにおける"Kirche"はその語源をたどればギリシャ語に行き着く。また、"das Geld zum Fenster hinauswerfen" (窓から金を投げ出す→金をどぶに捨てる) という表現に含まれている"Fenster" (窓) は、ラテン語の"fenestra"に由来する。しかし、現代ドイツ語母語話者にとっては、もはやそのようなことは意識されていない。ドイツ語の語彙に完全にとけ込んで

いると言える。上述のイディオム辞典においても「ギリシャ語」もしくは「ラテン語」といった標示はなされていない。

以下の論述の対象となる「外来語を構成要素とするイディオム表現」とは、従って、本来的には外来語ではあるが、上述のイディオム辞典において、ドイツ語表記に従っていて、そして、ほとんどドイツ語の語彙として定着しているような外来語を構成要素とするイディオム表現を除いたものということになる。逆にいうと、上述の辞典において、依然として原語の表記に従っており、発音においてもドイツ語の発音体系には従っていないものということになる。たとえば"ein Gang nach Kanossa"（カノッサへ行くこと）という表現における"Kanossa"は、本来イタリアの地名であるので、"Canossa"と表記されるべきであろうが、ドイツ語表記に従っている。確かにイタリア語としての音声は保持しているであろうが、ドイツ語表記に従っているという理由で、すでにドイツ語の語彙としてとけ込んでいるものとする。

他方、ドイツ語には、文化的、歴史的な経緯から、多くのギリシャ語、ラテン語の表現が取り込まれている。それらの多くは、"bildungsspr."(bildungssprachlich)（教養語的）という標示がなされているが、"Umgangssprache"（口語）においても使われなければならない。ギリシャ語の場合は、ラテン文字表記に移されていても、ギリシャ語であるという意識は残っているものが多いようである。ラテン語から取り込まれた表現についても同様である。従って、「教養語的」という標示がなされている表現（その多くはラテン語である）も、考察の対象とする。多くの人々の能動的なイディオム語彙を形成しているとは考えにくいですが、社会言語学的な観点から見ると、社会的威信を有しており、学問言語であるがゆえにそういった表現を使う話し手の教養レベルを示唆するという機能を持っている、と考えることができるからである。とりわけそのような社会言語学的な機能は、学問言語に特徴的であるといえよう。政治的言説にそのような語彙が取り込まれるならば、学問的という権威付けの機能を帯びることさえあるだろう。そのような側面に関する考察は、しかしながら、一般意味論、言語批判の領域に属することになる。

また、"Amors Pfeil"（突然恋に落ちる）や"den Augiasstall ausmisten"（腐敗した状態を除去する）といった言い回しに含まれている"Amor"や"Augias"等は、固有名詞であると考え、外来語ではあるが、別のテーマのもとで取り扱うのが合理的であると考え。従って、本章の対象外とする。"babylonisch"（バビロンの）という形容詞は、Babylon という地名から派生された形容詞である。従って、固有名に準じて考え、本章の対象とはしない。

ドイツ語のイディオム表現の構成要素としての外来語をどのように限定するかについての以上の考察は、日本語における外来語を構成要素とするイディオム表現を観察することによって、側面から支持することができよう。日本語においては、外来語は、原則として、表記そのものがカタカナでなされているため、一見して外来語であることがわかるようになっている。もちろん、中には、たとえば、「ピンからキリまで」という表現にある「ピン」や「キリ」が、カタカナ表記されているのを見るまでは外来語であるとは意識されていなかったというような語もあるだろうが、辞典では明らかに外来語として取り扱っている。従って、外来語は、日本語においては表記のうえでマークされているのである。日本語におけるそのような外来語の標示は、ドイツ語においては、原語に従った発音、表記をするか、ドイツ語の発音および表記体系に従った発音あるいは表記をするか、という区別に対応するものと考えられる。ただし、"Amok laufen/fahren" (精神が錯乱して、無差別殺人を行う) という表現に見られる"Amok"のように、名詞を大文字表記するというドイツ語の正書法に従っていても、外来語であることが辞典の記述から明白なものは、対象としている。

そのような基準で、上述のイディオム辞典から拾い上げたものが、【資料2】として付した141の表現である*2。

12.2 資料の分類と観察

12.2.1 日本語の資料の分類と観察

『成語林』を主たる資料源として拾い上げた74のイディオム表現を、まず、借用先言語に従って分類する。次に、統語論、意味論、語用論の観点から観察する。

*2 ドイツ語母語話者である同僚B・エーリンガー (Dr. Bernhard Öhlinger) 氏に、すぐに思いつく外来語表現をいくつか上げてもらうように依頼したところ、次のようなリストを作成してくれた。当の同僚は、中世ドイツ語の研究者であるということを考慮すべきはあるが、共時的な言語意識における外来語の一部を提示してくれたものと理解できるだろう。

Input, Output, Revue passieren lassen, Redoute, en masse, vis a via, in praxi, de facto, a priori, a posteriori, Superlative, Peergroup, Phantasmagorie, Renomee, Intermezzo, Deal, in cognito, nolens volens, in spe, Persona non grata, Persona ingrate, Aide-memoire, Sit-com, Deus ex Machina, Mobbing, Soap, Track, Borderline-Persönlichkeit, Cash, Cashflow, Rentabilität, Globalisierung, Plot, cool, neocool, megacool, Traumboy, Traumgirl, hipp, Sound, Single, Dinks (double income no kid), Yuppie, Generation X, Outfit, Feeling, en gros, en detail

筆者が辞典から拾い上げたイディオム表現のうち、8つに英語が含まれていたのだが、上のリストには英語の語彙が19含まれている。ラテン語は12、フランス語は7となっている。ドイツ語と英語の合成語が3つあるのが興味を引く ("Borderline-Persönlichkeit", "Traumboy", "Traumgirl")。

12.2.1.1 借用先言語による分類

拾い上げた74の表現の内、56が英語由来の語を構成要素としているイディオム表現である。オランダ語からの借用が6、フランス語由来の語が5、ポルトガル語が3、中国語が2、ギリシャ語1、ギリシャ語と英語の合成が1ということになる。なおついでながら、借用の時期については、『大きな活字のコンサイス カタカナ語辞典』（三省堂、1998年）で調べると、次のようである。〈江〉（江戸時代）：6、〈明〉（明治時代）：21、〈大〉（大正時代）：6、〈昭〉（第二次世界大戦終結まで）：27、〈現〉（第二次世界大戦以後）：12となっている。「パンドラの箱」と「ピンを撥ねる」（あるいは「ピン撥ねする」という表現については、借用時期は不明である。

英語由来の56のカタカナ語に関して、それがいつ頃から日本語において使用されるようになったかを、『大きな活字のコンサイス カタカナ語辞典』（三省堂、1998年）に当たって調べてみると、〈江〉（江戸時代）は0、〈明〉（明治時代）は16、〈大〉（大正時代）は6、〈昭〉（第二次世界大戦終結まで）が26、〈現〉（第二次世界大戦以後）が7となっている。大正時代から昭和初期において、多くの英語が借用されているというのは、時代を考えると腑に落ちないものを感じるが、昭和初期においては、英米との外交関係はそれほど険悪なものではなかったということなのであろう。

ただし、イディオム表現の構成要素となっている語が借用された時期と、イディオム表現そのものが借用された時期が異なるとされているものもある。たとえば、「メートルを上げる」に含まれている「メートル」は明治時代に移入されたものであるが、イディオム表現自体は昭和時代と記されている。また、「レットル」は明治時代に借用されていると記されているが、「レットルを貼る」というイディオム表現は、昭和（第二次世界大戦終結まで）に借用されたと記されている。また、「コンマ以下」における「コンマ」は明治時代に借用されたことがわかるが、「コンマ以下」という表現は昭和時代と記されている。

筆者の考えでは、このような例こそ、外来語を構成要素とするイディオム表現に関して日独両言語を比較・対照とする本論文にとって一番興味深いものといえる。なぜならば、問題となる外来語が借用されて、日常的に使用され、日本語の語彙に取り込まれて初めて、日本語の統語論、意味論両体系において、イディオム表現が形成されると考えられるからである。

従って、イディオム表現の構成要素となっている語が借用された時点と、当該のイディオム表現が借用あるいは形成された時点は、多くの場合ズレていると考えられるが、本章

においては、いささか乱暴ではあるが、当該の外来語を構成要素とするイディオム表現もその外来語の借用と共に成立したものと考えることにする。『大きな活字のコンサイスカタカナ語辞典』等によって、ある外来語の借用時期とその語を含むイディオム表現の成立（あるいは借用）時期のズレが確認できたものは、【資料1】にその旨注記してある。

12.2.1.2 統語論的観察

日本語における外来語を構成要素とするイディオム表現における外来語は、そのすべてが名詞である。従って、イディオム表現としては、ほとんどが「名詞+動詞」という形の述部を形成する形となっている。その数は62となる。ただし、「プラスアルファ」は、「プラスアルファする」というように、動詞としても、また「プラスアルファで妥結する」のように名詞としても用いられる。62という数は、「プラスアルファ」を動詞として数えた時の数である。「ダッシュする」、「プラスアルファ(する)」の2つは、助詞が含まれていないで、「する」が続いて動詞となっていることから、本来、動詞であると考えられることができる。後者の「プラスアルファ」についていうと、「アルファ」は名詞であるが、「プラス」が「プラスする」という形で動詞として用いられるために「プラスアルファ」が動詞を形成することになるのであろう。つまり、動詞句として分類した62の表現は、厳密に言えば、助詞が介在する動詞句と、「する」が付加されて動詞句となる2つの部類に分かれていることになる。

動詞句：62^{*3}

形容詞句：2：ガードが固い(8)、プライドが高い(27)、

副詞句：2：アルファからオメガまで(2)、ピンからキリまで(24)、

名詞句：8：コップの中の嵐(10)、コペルニクスの転回(11)、コロンブスの卵(12)、スープの冷めない距離(13)、絶好のチャンス(17)、パンドラの箱(23)、コンマ以下(45)、タッチの差(51)

名詞句が8つ拾い出されたが、これらの名詞句のうち「コップの中の嵐」や「コペルニクスの転回」、「コロンブスの卵」、「パンドラの箱」の4つは、そのままの形で他の付属語を伴って主部や述部を形成し、日本語の構文に組み込まれた形でイディオム表現を形成することはない。それ自体が固定的で比喩的な表現である。

*3 コロン(:)のあとの数字は用例数である。また、()のなかの数は第12章に関する資料の【資料1】における用例番号である。

12.2.1.3 意味論的観察

「アーチをかける」は、野球で「ホームランを打つ」ということであるが、これは、ホームラン・ボールが弧を描いてスタンドに飛んでいくようすを比喩的に表現している。「エンジンが掛かる」は、字義通りには機械に関する言及であるが、イディオム表現としては「能率が上がる、調子が上がる」という意味である。また「アドバルーンを上げる」の場合、本来アドバルーンは、宣伝用の気球を意味することから、「前宣伝する」という意味で使われる。それから転じてさらに、「相手の出方をうかがう」という意味でも使われる。

このように、イディオム表現は、比喩的イメージを伴い、元来の意味領域から他の意味領域へと転用されているというのが通常である。「アーチ」は、本来建築の領域における用語であったものが、野球の領域に転用されている。そして、「エンジンが掛かる」は、機械に関する用語であったものが、肉体および精神的活動あるいは労働に関して使われるようになっている。

74の表現を眺めて気づくのは、スポーツに関する語が比較的多いということである。「ガードが堅い」、「タオルを投げる」、「マットに沈む」、「パンチがきく」、「パンチを食う」の5つがボクシング、「スタートを切る」、「トップを切る」、「バトンを渡す」、「タッチの差」、「ピッチを上げる」、「ラストスパートをかける」、「ダッシュする」の7つが陸上競技に関係している。「アーチをかける」、「ベンチを暖める」、「ヒットを飛ばす」の3つは野球に関して使われる表現である。

しかしながら、イディオム表現の全てに関して、元々の意味領域と転用されている意味領域が明白であるとは言えない。「イニシアチブを取る」は、「主導権を握る」といった意味以外では使われないようである。そのようなイディオム表現としての意味でしか使われないものもある。

また外来語を構成要素とするイディオムと同義の、外来語を含まないイディオム表現が存在するケースがいくつかある。「アルファからオメガまで」⇔「最初から最後まで」、「イニシアチブを取る」⇔「主導権を取る」、「プライドが高い」⇔「気位が高い」、「ペンを折る」⇔「筆を折る」、「リーチを掛ける」⇔「王手を掛ける」等である。これらの表現を子細に検討すると、次のようなことに気づく。1)「イニシアチブを取る」⇔「主導権を取る」のように、イディオム表現の構成要素としての外来語を、その日本語訳と置き換えた表現。2)「ペンを折る」⇔「筆を折る」のように、本来的には日本語にあったイディオム表現の構成要素を外来語で置き換えたと考えられるもの。「シャッポを脱ぐ」について

は、『大きな活字のコンサイス カタカナ語辞典』には、「兜を脱ぐ」のいいかえであると記述されている。3)「リーチを掛ける」⇔「王手を掛ける」のように、外来語の構成要素と日本語の構成要素は意味的に対応していないが、イディオム表現全体としてほぼ同じ意味を有しているものがある。4)「レットルを貼る」や「ペテンに掛ける」は、それ以外の表現がないと思われる。

「コンマ以下」は、それに対応する「小数点以下」という表現が存在するが、「コンマ」と「小数点」は、必ずしも意味が同じではない。小数点は、コンマの使用法の一つではない。その意味では、日本語におけるイディオム表現としての「コンマ以下」は、意味が狭くなっているといえる。

「一目置く」と「ハンディをつける」とは、基本的には同じ意味だといってよい。しかし、立場が逆転しているようである。「一目置く」は、相手の力量がこちらよりも上であることを認める表現であるが、「ハンディをつける」は、相手の力量を低く見積もって、優越的な態度にでているともいえよう。

12.2.1.4 語用論的観察

「兜を脱ぐ」⇔「シャッポを脱ぐ」、「終止符を打つ」⇔「ピリオドを打つ」、「突進する」⇔「ダッシュする」、「タッチの差」⇔「鼻の差」等、外来語を構成要素とするイディオム表現と、そうでないイディオム表現があるとき、外来語を構成要素とするイディオム表現を使うことの意味はどこにあるのであろうか。その理由の一つとして、外来語は、日本語に比較すると、音声的に識別可能な語構成になっているということが考えられる。日本語は、それに反して、目に依存しており、文字を見ない限りは、同音異義語の区別が容易でない。「タッチの差」⇔「鼻の差」あるいは「僅差」と対比すれば、そのことが納得できるのではないだろうか。

趣味、レジャー、娯楽が多様化するにつれ、さまざまな分野における語や言い回しが一般にも使われるようになっていくであろう。そのような新しい語や言い回しが、似たような意味を持った旧来の表現に置き換わる場合もあるだろうし、併存しつつ、ニュアンスを微妙に異にするということになるかもしれない。たとえば、「リーチをかける」は麻雀に由来する表現であるが、似たような表現に「王手をかける」という将棋用語がある。ドイツ語においてはチェスに由来する"etwas in Schach halten"（封じ込める）という表現がある。日本語訳としては将棋用語である「王手」を対応させているが、ゲームの進行からいって似たような意味を持っているからであろう。ドイツ語の表現はさておくとしても、「リ

一ちをかける」と「王手をかける」いずれの表現を用いるかは、どちらのゲームに通じているかに拠るといことになろうか。どの表現を用いるかが、話し手の趣味、関心の方向を示唆することもあり得るのである。

多くが英語からの借用語を構成要素としているのであるが、「心を捉える」というよりも「ハートを捉える」という表現の方が、話し手の英語能力、ひいては教養の程度を示唆するということもあるだろう。

12.2.2 ドイツ語の資料の分類と観察

141の表現を、まず、借用先言語によって、分類する。そして日本語の場合と同様、統語論、意味論、語用論の視点から観察していく。

12.2.2.1 借用先言語による分類

141のイディオム表現を、その借用先言語に従って分けると、次のようになっている。ラテン語：86、イタリア語：4、フランス語：37、英語：8、ヘブライ語：2、マレー語：1、スペイン語：1、ハンガリー語：1。"paletti"については、借用語なのかどうか、借用語であるとしても、どの言語から借用されたものなのか、判明していない。ラテン語、フランス語からの借用が圧倒的多数を占めている。ラテン語のほとんどは、ある意味で専門用語的な意味合いが強いものである。

日本語との対比を容易にするため、12.2.1節で日本語について分類した結果をあわせて、表にまとめると、次のようになる。

借用先言語の種類と数

	日本語	ドイツ語
1. ラテン語	0	86
2. フランス語	5	37
3. 英語	55	8
4. イタリア語	0	4
5. ヘブライ語	0	2
6. マレー語	0	1
7. スペイン語	0	1
8. ハンガリー語	0	1
9. オランダ語	6	0

10. ポルトガル語	3	0
11. 中国語	2	0
12. ギリシャ語	2	0
	74	140

(ドイツ語については"paletti"の借用先が不明であるため総数が140となっている。)

12.3.2.2 統語論的観察

統語論の観点から借用された表現を分類してみよう。まず、借用された表現が文であるものが17ある。そしてフレーズであるものはさらに、名詞的表現(指示代名詞を含む)(51)、副詞的表現(65)、形容詞的表現(5)、間投詞(2)の6つに分類することができる。

"alea jacta est" (賽は投げられた)のように、文表現そのものが借用されたものは、きまり文句として使われるものであり、本来的にはイディオム表現とはいえない。食事を始めるときや、乾杯、新年の挨拶言葉 (prosit/prost Mahlzeit! prosit/prost Neujahr!)は、フレーズとして借用されていても、イディオム表現ではなく、きまり文句である。従って、純粹にイディオム表現であると理解できるものは、141から文表現(17)と間投詞(2)を減じた121ということになる。

名詞的表現は、主語あるいは目的語となり得るものである。もちろん前置詞に伴って出現する名詞もあるが、それは前置詞句表現となって、実際にドイツ語において使われる場合には、副詞句の役割を果たしている。たとえば"ad absurdum"という表現は、借用先のラテン語では前置詞句であるが、ドイツ語においては"etwas ad absurdum führen" (矛盾に導く) というように、副詞句的に用いられる。他方、たとえば"vice versa" (逆に) は、ラテン語においても副詞的な表現であり、ドイツ語においても副詞的に用いられている。本節で副詞的表現と見なしているものは、この両者を含んでいる。形容詞的表現は"franko" (無料の)、"en vogue" (流行の)、"in spe" (将来の)、"paletti" (ちゃんとしている) と"quitt" (負債がない、果たすべき義務がない) の5つである。"in spe"の場合は、修飾する名詞の後におかれて名詞を限定する。フランス語から借用された"laisser faire" (自由にしておけ!) は動詞的表現とみなすことができるが、命令文でもある。辞典に載っている例文から判断すると、そのまま引用の形で用いられることが多いようである。日本語においても「レッセ・フェール」という形で歴史の専門用語として知られている。従って、文に属するものとして分類する。分類としては名詞的表現としてあるが、指示代名詞がひとつ借用されている。それは、ラテン語の"semper idem" (いつでも同一人物) という表現である。

たとえば、悪さをするのが決まって同一人物であるような場合に発せられる文句であるようである。

名詞的表現および副詞的表現として分類したものをさらに詳しく見ていこう。

名詞的表現については、まず、名詞として自立的に用いられるものがある。"Advocatus Diaboli" (相手側の立場を弁護する人)、"Alter ego" (第2の自己)、"Chambre séparée" (レストランなどの別室)、"Crème de la crème" (社会の上層の人) といった表現である。この部類に属する名詞的表現が30ある。次に、"Amok laufen" (狂気に駆られて盲目的に殺人を犯す)、"jmdm. Avance machen" (気を持たせる、好意を示す)、"einen Coup landen" (大胆な企画で成功を収める) のように、動詞と結合して動詞句を形成している名詞的表現が14ある。前置詞と名詞だけで前置詞句を構成しているものが2つある。動詞が前置詞句を伴うものが4つある。"scharf wie Paprika sein" (セックスに飢えている) ひとつだけであるが、接続詞を含む表現がある。以上51の名詞的表現は、最終的には、次のようなタイプに区別できるであろう。

1) 名詞(N)のみ、2) 前置詞+名詞(PRA+N)、3) 名詞+動詞(N+V)、4) 形容詞+接続詞+名詞+動詞(ADJ+KON+N+V)。さらに2) 前置詞+名詞は、前置詞+名詞(PRA+N)と前置詞+名詞+動詞(PRA+N+V)の2つに分けることができる。3) 名詞+動詞は、名詞が主格(n)、与格(d)、対格(a)のいずれであるかによって、区分できる。

また65の副詞的表現を、それがどのような要素と結合するかによって大きく4つのタイプが区別できる。ひとつは、副詞的表現(ADV)のみのも、副詞的表現と動詞(ADV+V)が結びついているもの、3つめは(名詞)+副詞的表現+動詞((N)+ADV+V)という結合、4つめはそのいずれにも入らないものである。以上の分類を表にしたものが、【資料3】である。

ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992)から拾い上げた141の表現を以上のように分類してみたが、日本語の資料と比較・対照し得るためには、さらに対象を絞る必要があるだろう。つまり、日本語における外来語は、完全に日本語の構文のなかに取り込まれて、イディオム表現を構成している。従って、ドイツ語に関しても、ドイツ語のシンタックスに取り込まれてイディオム表現を構成しているものを対象とすべきであろう。すなわち、"alea jacta est" (賽は投げられた)、"ad infinitum" (無限に) といった表現は、きまり文句であり、ドイツ語のシンタックスにおいては、ある意味で、孤立した形で出現するものといえる。そのような意味で、さらに分類していくと、最終的には35の表現が

抽出できることになる。そのリストが【資料4】である。

12.3.2.3 意味論的観察

外来の語が取り込まれる時には、当該の語が借用先言語において有していた意味がそのまま取り込まれるというケースは、余りなく、何らかの意味変化が生じている。意味が狭くなったり、広くなったり、ずれて取り込まれるといった現象が起こる。

たとえば"sein Amen zu etwas geben"（同意する）の場合は、「同意」という意味特徴だけが取り出されて、名詞としてドイツ語の構文に組み込まれてイディオム表現を形成している。"in der Pampa"においては、「人の住んでいない広大な地域」という意味だけが持ち込まれてきていると考えられる。南米アルゼンチンにおいて「パンパ」と呼ばれる地域は、放牧に適した牧草地帯であり、ドイツ語の"in menschenleerer Gegend"という説明にある"menschenleer"という語が喚起するイメージとは隔たりがある。"menschenleer"というのはいむしろ"Wüste"（荒野、砂漠）に伴っているイメージであると思われる。

"scharf wie Paprika sein"についても同様のことがいえる。ドイツ各地の市場で見かける限りでいえば、「ピーマン」には少なくとも黄色、緑、赤の3つがある。しかし、イディオム表現には"scharf"（ぴりっと辛い）という特徴だけが取り込まれている。唐辛子の辛さと比較するならば、ピーマンの辛さはそれほどのもとは思われないにもかかわらず、ドイツ人の舌にとってはやはり辛いと感じられたのであろう。

12.3.2.4 語用論的観察

ドイツ語で表現し得るにもかかわらず、あえて、外来語を構成要素とするイディオム表現を使うのはなぜか。ラテン語の決まり文句や、ラテン語を構成要素とするイディオム表現を使う場合は、明らかに学問言語としてのラテン語が現在においてなお持っている威信が大きく作用している^{*4}。英語やフランス語を構成要素とする表現についても同様のことがいえるだろう。"Amok laufen"のように、現象そのものの特徴付けと密接している表現の場合は、それ以外に表現の可能性は考えられないということもある。イディオム表現ではないが、たとえば"Tabu"という語が持つ意味内容は、この外来語でしか表現できないの

*4 本章最後に掲げるウィットを参照。

と同じであるといえる^{*5}。"sein Amen zu etwas geben"の場合は、教会における祈祷の状況と重なって、無条件的に肯定するというような意味合いが伴っている。

もちろん、ニュアンスの違いを表現するという意味では効果があることはもちろんである。"Glück haben"では通常表現だが、"Schwein haben"といったときには「労せずして、幸運に恵まれる」という意味合いが強調され、"Fortuna lächlet"といったときには、"Schwein haben"に伴っているいくらかネガティブな意味合いは全く消えて、「幸運だ」ということが本当に賞賛の気持ちを込めていわれていることになる。

12.4 分類と観察に基づく考察

借用先言語別にみると、日本語は74,3%が英語からの借用語である。英語以外の言語からの借用語は、一桁台となっていて、きわめて少ない。ドイツ語においては、ラテン語からの借用語が86(61,4%)で一番多い。それに次いでいるのが、フランス語からの借用語で、37(26,4%)となっている。それ以外の言語からの借用は、きわめて少ない。ドイツ語にとって、古典ギリシャ語や古典ラテン語は、日本語にとっての中国語と同じような位置づけができるといえるであろう。もし日本語において、漢語を構成要素とするイディオム表現も資料とするならば、それが圧倒的 majority を占めるであろうことが想像される。本章においては、漢語は対象外としたので、日本語においては、英語からの借用語が圧倒的な数を占めることになった。それにしても、日本語が英語文化圏と接触するようになってから130年ほどがすぎたが、その間に日本語に借入され、イディオム表現を形成するまでにいたった語がそれほど多いことは、ドイツ語における英語からの借用語数8と比較すると、特筆すべき事実であろう。ドイツ語においてラテン語からの借用語を構成要素とするイディオム表現が多いのは、長い間ヨーロッパにおいてラテン語が占めていた教養語としての地位を考えるならば、当然といえる。英語からの借用語を構成要素とするイディオム表現が少ないのが、日本語と比較すると、逆に目立つ。第二次世界大戦後の現代ドイツ語において、洪水のように英語が流入してきているのは明白な事実であるが、ドイツ

*5 「タブー」は、現在では通常「触れてはならないもの」という意味で理解されている。しかし本来的には、ポリネシアの住民の風習に由来する語であり、カリスマ的な存在が有しているとされている魔力と密接している概念である。タブーというものはポリネシアの住民の社会で特定の社会的機能、エコロジー的な機能を果たしているということがいえるようである(Röhrich 1991/92: 1592-1593 及び Pfister 1936/37 を参照)。

語においてイディオム表現を形成し得るほどまでには、ドイツ語に取り込まれ、とけ込んでいるものは少ないということであろうか。ギリシャ語からの借用語を構成要素とするイディオム表現が存在しないというのも不思議であるが、これは、ギリシャ語がラテン語を経由しているという歴史的事情が絡んでいるからであろう。事実、固有名詞を含むイディオム表現には、ギリシャ語の固有名が多数存在している。

日独両言語とも、既存の統語構文に借用語を取り込む形で、イディオム表現を形成している。日本語においては、既存のイディオム表現の対応構成要素を外来語と置き換える形でイディオム表現が作り出されている（「シャッポを脱ぐ」⇔「兜を脱ぐ」）。あるいは外来語の日本語訳を外来語と置き換えた表現もイディオム表現として通用している（「ガードが堅い」⇔「守りが堅い」）。日本語においては「名詞＋動詞」という統語構造に組み込まれる場合が多い(62/74=83,8%)。ドイツ語の場合は、「名詞句＋動詞」が20(全体の14,2%)、「副詞句＋動詞」が8(全体の5,7%)、両者合わせて動詞句となる場合として両者をまとめると、20%という割合になる。日本語は明らかに動詞句を形成する場合が圧倒的多数であり、ドイツ語の場合は、動詞句を形成する場合が5分の1ということになる。その意味で、日本語は動詞中心のイディオム形成の言語であるといえよう。ドイツ語の場合は名詞的なイディオム表現として取り込まれている場合が30(21,3%)あり、動詞句の場合とほぼ同じである。日本語において名詞句となっているのが、8つ(10,8%)であったのと比較すると、名詞的なイディオム表現形成の割合が多いと言える。現代ドイツ語は、名詞的構文が増加してきていると指摘されているが*6、外来語を構成要素とするイディオム表現においても、その傾向は確認できたと言えるだろう。そしてイディオム表現が傾向としては時代的には現在時点よりも過去の状態を反映していると考えられることから、ドイツ語の名詞的表現愛好の傾向は、かなり以前から存在していたといえよう。

最後に、イディオム学習という視点からどのようなことが言えるか、考えてみたい。まず産出の面、つまり日本語の表現からドイツ語を眺めてみる。

ドイツ語においても対応する表現があるものについては、問題はない。"Sturm im Glas" (コップの中の嵐)、"eine kopernikanische Umwälzung" (コペルニクスの転回)、"das Ei des Kolumbus" (コロンブスの卵)、"die Büchse der Pandora" (パンドラの箱)、"das Handtuch werfen" (タオルを投げる)、"sein Bestes machen" (ベストを尽くす)等。もちろんその場

*6 たとえば、Polenz 1985: 113-115 や Braun 1998: 119ff.等を参照。

合、日本語においては英語からの借用語が構成要素となっているものについては、それに対応するドイツ語を探し当てる必要はある。"die Initiative ergreifen" (イニシアチブをとる) も、それほど問題がない。

日本語の表現を英語を介してドイツ語で表現するだけでは不十分な場合もある。たとえば、「ピリオドを打つ」は、ドイツ語では"einen Punkt machen" (ピリオドをつくる) であり、「ベンチを暖める」、「ヒットを飛ばす」は、ドイツ語ではそれぞれ"auf der Bank sitzen" (ベンチに座っている)、「einen Hit landen" (ヒットになる) である。連語関係 (コロケーション) が日本語とは異なっていることに注意する必要がある。日本語の「トンネルを抜ける」に対応するドイツ語の表現は"Licht am Ende des Tunnels sehen"であろうが、正確にはドイツ語の方はまだトンネル内の地点から発想されている。日本語の方は、トンネルを抜けた時点における事態を意味している。話し手の想定上の位置が異なっている。「兜を脱ぐ」、「シャッポを脱ぐ」はドイツ語では"den Hut nehmen" (帽子を取る) が対応する表現である。逆に"den Hut nehmen"を「脱帽する」と理解してはならない。日本語の「脱帽する」に対応するドイツ語の表現は"Hut ab!"である。

また、日本語とドイツ語では表現が同じでも意味が異なっている場合もある。たとえばドイツ語の"Akzente setzen"という表現は、"richtungsweisend sein" (方向を示す) という意味であるが、日本語の「アクセントをおく」は、「強調する」という意味である。従って、「偽の友だち」関係にあるといえる。「コネを付ける」はドイツ語では"den Kontakt herstellen"と表現することになるだろうが、日本語の表現が持っている、どこことなく非合法的な意味合いは失われることになる。その意味では、「偽の友だち」と見なしでもいいであろう。

ドイツ語においては、日本語の表現とは全く異なるイメージに基づいた表現をする場合もある。「バスに乗り遅れる」に対応するドイツ語の表現は、"der Zug ist abgefahren" (列車は出ていった) である。この表現は、1989年11月におけるベルリンの壁の開放からドイツ統一に至る過程で幾度となく目にし、耳にした人も多いだろう^{*7}。

また「サンドイッチになる」という日本語の表現に直接対応する表現はドイツ語にはな

*7 この言い回しはすでに1930年代にE・ケストナーが詩の中で使っている。ドイツ統一に至る過程で、作家のG・グラスと"DER SPIEGEL"編集者R・アウグスタインのARD放送の討論番組の中で、アウグスタインが繰り返し使って、事態はドイツ統一に向かって動き出したのであり、もはや引き戻すことはできないという主張を強調した(Augstein 1990)。

い。そもそもサンドイッチなるものがドイツ語文化圏においては存在しなかった。いわゆるオープン・サンドイッチ（ドイツ語では"belegtes Brot"）しかなかったのであれば、「サンドイッチ」をイメージすることは事実上不可能であろう。ドイツ語では"in der Klemme sein"（板挟みになっている）という表現が意味的には対応する。従って、英語を介するのではなく、日本語から直接ドイツ語に移した方が発想しやすいといえる。

日本語ではイディオム表現となっているが、ドイツ語には対応するイディオム表現がなく、単一の動詞で表現することになる場合もいくつかある。たとえば、「ブレーキをかける」には"bremsen"が対応するし、「ブレーキがかかる」は"gebremst werden"ということになる。「スタートを切る」(starten)、「キャスティングボードを握る」(ausschlaggebend)等がこういった部類に属する。「レッテルを貼る」は"etikettieren"ということになるだろうが、日本語においても否定的な価値判断を伴う「烙印を押す」という表現には、ドイツ語では"stigmatisieren"あるいは"brandmarken"という単一動詞が対応することになる。「モーションをかける」もドイツ語では"anmachen"という動詞が対応する。

次に理解の面においてはどうか。多くのラテン語表現は、日本語においてそれほどなじみがあるものではない。そしてまた、その他の言語からドイツ語に借用された語についてもそうである。わずかの表現が日本においても知られているにすぎない。筆者の判断では、以下のような語がそういったものと思われる。"ad hoc"（アド・ホック）、"à la carte"（アラカルト）、"amen"（アーメン）、"a posteriori"（アポステリオリ）、"Avec"（アベック）、"Corpus"（コーパス）、"Crème de la crème"（クリーム）、"sein Debut geben"（デビューする）、"Enfant terrible"（アンファン・テラブル）、"First Lady"（ファースト・レディ）、"nicht jmds. Genre sein"（ジャンル）、"laisser faire"（レッセ・フェール）、"das Tempo machen"（テンポ）、"up to date"（アップ・デイト）。

しかしながら、これらの外来語を構成要素とするドイツ語におけるイディオム表現の理解において問題がないわけではない。いくつかの語については、誤解の可能性がある。たとえば「アーメン」は、確かに教会における祈祷の終わりに唱和される言葉として日本でも知られているが、ドイツ語のイディオム表現にあるような使い方については知られていない。そもそもヘブライ語としての元々の意味^{*8}を知っている人も少ないであろう。「ア

*8 ドイツ語でいえば"es geschehe!"（そう、あれかし、つまり神の御意志の通りになって欲しい!）というのが、ヘブライ語における元々の意味である（DUDEN 1998: 99）。

ベック」は、特に、日本語では非常に狭い意味で使われているので、「元気よく」といった意味で使われているドイツ語のイディオム表現にはとまどう。「コーパス」も日本語においては「資料」、しかも電算機処理された資料といった意味で使われる場合が多いが、ドイツ語では裁判に関する表現となっている。「デビュー」も、日本語では「デビューする」といった使い方がされるので、"Debüt machen"と表現しそうになる。「ジャンル」も日本語では「分野」の意味でしか使われないので、「好み、タイプ」という意味でのドイツ語のイディオム表現は理解しにくい。「テンポ」は、日本語では「テンポを速くする／遅くする」と、早くも遅くもできるが、ドイツ語の方は一方向の意味でしか使われないようである。すなわち"das Tempo machen"といえ、ば、「テンポを速くする」という意味になる。

12.5 おわりに

世界はインターネットを通じて結ばれ、グローバル化が叫ばれている。情報伝達は、いよいよ同時化されつつある。そして、そのことはとりもなおさず、英語が世界的に広まるスピードを速めている。ドイツ語においても、日本語においても、情報通信社会化とともに、英語の移入はいよいよ加速化され、とどめようもない。

そのような時代にあつて、辞典に取り込まれた外来語は、現状を反映しているものでないことは明らかである。ドイツ語においても日本語においても、外来の語がそれぞれの言語の統語および意味体系に取り込まれ、イディオム表現として成立するまでにはそれなりに時の経過が必要と考えられるからである。

しかしながら、グローバリゼーションおよび同時的情報化社会という現実において、日独両言語において、外来語、とりわけ英語からの借用語はいよいよと増加していくであろう。と同時に、外来のイディオム表現、そして外来語を取り込んだ新しいイディオム表現が作り出されていくことであろう。

日独両言語に外来の語が取り込まれるとき、それぞれの言語に同一の意味で取り込まれるとは限らない。その意味で、国際的語彙 (Internationalismen) といえるようなものでも、鵜呑みは禁物であるといえよう。

最後にラテン語が持つ社会言語学的意味を落ちとしているウィットを掲げて本章の論述を終えることにしよう。

Eichhofer will den Kopf nicht in den Sand stecken. "Herr Doktor, ich kann die

Wahrheit vertragen. Sagen Sie mir ehrlich und offen, was mir fehlt."

"Na gut: Sie saufen und futtern zuviel, haben zuwenig Schlaf und zuwenig Bewegung. Das ist alles."

Eichhofer atmet auf. "Da bin ich ja beruhigt - und könnten Sie mir das jetzt noch einmal auf lateinisch sagen, damit ich meinen Chef informieren kann?" (Gamsch(Hrsg.) 1989: 35)

(アイヒホーファーは、真実に目を閉ざすつもりはない。「先生、本当のことをおっしゃってください。どこが悪いのですか。」

「よろしい。あなたは、飲み過ぎ、食べ過ぎです。そして寝不足、運動不足です。それだけのことです。」

アイヒホーファーは大きく息をした。「それで安心しましたが、いまおっしゃったことをもう一度ラテン語でお願いできますでしょうか。社長に報告しなければならないもので。^{*9)}

*9 飲み過ぎ、食べ過ぎ、寝不足、運動不足は、病気といえるようなものではないが、ラテン語で表現した場合、いかにも重い病気であるかのように聞こえるというわけであろう。ラテン語の学問言語としての社会的威信を示しているウィットである。

第13章 固有名を構成要素とするイディオム^{*1}

"Huber, wann wurde Rom erbaut?" fragt der Lehrer.

"Bei der Nacht, Herr Lehrer", weiß der Huber prompt.

"Wie kommst du denn darauf?"

"Sie ham ja neulich selber g'sagt: **Rom wurde auch nicht an einem Tag erbaut!**" (Heute schon gelacht?:176)

(「フーバー、ローマは何時つくられたのか？」と先生が質問した。

「夜につくられたんだ、先生」と、フーバーは即座に答えた。

「どうしてそうなるのかね？」

「先生がこのまえ言ったじゃない：**ローマはあるひと昼につくられたのではない**^{*2}、と。)」

13.0 はじめに

イディオム表現の背後にあるイメージ、たとえば日独両言語において大きく異なっていることが、時としては思わぬ誤解を生じることがある。そのことは、日独両言語がそれぞれ困ってきたる文化圏を異にしていることの現れであるともいえる。

日本語の場合は、文字そのものがそうであるように、中国文化圏にどっぷりとつかっており、他方ドイツ語の場合は、ギリシャ、ローマの文化の圧倒的影響のもとにある。そのことを顕著に示すのが、固有名詞を構成要素とするイディオムだといえる。固有名詞を構成要素とするイディオムに関しては、さらにそれぞれの言語がたどってきた歴史の痕跡がみて取れる。

イディオムの学習は、従って、共時的には表現全体の意味をそっくり理解すれば事足り

*1 本章における論述は、ドイツ語における固有名を構成要素とするイディオムに関しては、次の論文を基にしている。「固有名詞を構成要素とするイディオム—日独対照イディオム学を目指して—」、『かいろす』31、1993年、42-81頁。日本語における固有名を構成要素とするイディオムに関する論述を加えて、日独イディオム比較・対照研究として実のあるものを目指した。

*2 このウィットの落ちは、"an einem Tag"というフレーズが2通りに解せるという点に基づいている。一つは「1日」という意味であり、もう一つは「ある昼に」という意味である。つまり、"Tag"が"Nacht"（夜）と対立的に用いられる場合と、夜を含めて1日24時間を意味する場合があるということである。フーバー君は、「昼間」の意味で理解したのである。

るといえようが、言語学習の面でいえば、やはりその文化的、歴史的由来に思いをはせることが、学習を大いに助けることになるし、広い意味での"Landeskunde" (ランデスクンデ) を学ぶための興味ある素材を提供するものといえよう。

本章では、日独両言語における固有名を構成要素とするイディオムについて、比較・対照を試みる。日独両言語の中に取り込まれ、両言語文化をつくりあげてきている過去の言語遺産、歴史に対する理解がいくらかでも深まるならば、本章の狙いは果たされたものといえよう。

そして本論文全体の中で言えば、本章は、日独のイディオム比較・対照研究を踏まえたうえで、ドイツ語イディオム学習・教授法に関する考察への橋渡しとなる章という性格を持つ。実際のイディオム表現の使用例として、ドイツの新聞から拾った論評文を掲載するのは、そのような意味合いを持たせているためである。どのようなコンテキストでどのようなイディオムが使用されているのかを知ることは、生きたドイツ語学習にとっては、必要不可欠だと考えるからである。

13.1 資料について

日本語における固有名を構成要素とするイディオム表現は、『成語林』から拾いだしたものである。その数は148となった(【資料1】)。『成語林』以外のイディオム辞典からも拾い出した表現があるが、それらの表現は、本文の論述において言及する際に出所を明記する。

当然ながら辞典には編者の考えが反映されている。従って、辞典が異なれば、収録されている項目にも異なりがあるのが普通であろう。『成語林』以外の慣用句を収録した辞典をのぞいてみよう。たとえば、『慣用句の辞典』(倉持保男・阪田雪子[編]、三省堂、1997年)には、全部で10個の固有名を構成要素とするイディオム表現が収録されている。『成語林』と重なっているものを除くと、「お釈迦になる」、「お陀仏になる」、「関ヶ原の戦い」という3つの表現が新たに加わる。また、『意味から引ける慣用句事典』(丹野顕著、日本実業出版社、1998年)には、固有名を含んだイディオム表現は2つしか収録されていない。『成語林』とダブっている「いざ鎌倉」を除外すると「弁慶の立ち往生」が付け加わることになる。

さらに『慣用表現辞典』(奥山益朗編、東京堂出版、1994年)には、21の固有名を構成要素とするイディオム表現が収録されている。『成語林』と重なっている表現を省くと、「勝

てば官軍」、「口から高野へ行く」、「塞翁が馬」、「阿修羅の巷」、「知らぬが仏」、「天神を決め込む」、「蒙古高句麗」、「八幡の藪知らず」の8つが新たに加わることになる。

ドイツ語に関しては、基本的には、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』(DUDEN 1992)から拾い出した。そして、補いとして、他のイディオム辞典からも収集した。フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』からは、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』とダブっている表現を除いたものは、43となっている。【資料2】にはドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』から拾い上げた132の表現をリスト・アップしてある。その他の辞典から拾い上げた表現については、本文で引用する際に出所を明記する。

固有名を構成要素とするイディオム表現の日独比較・対照を行うについては、『成語林』とドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』から拾い上げた資料に基づいて行う。

13.2 資料の分類

13.2.1 日本語の資料の分類

固有名をその出自によって、分類してみよう。仏教や儒教の受容とともに多くのインド、中国のことが日本語に取り込まれていることは周知のことである。イディオム表現の中にもその影響が見て取れる。インドから取り込まれた固有名が6、中国古典に由来する固有名が72ある。インド由来の固有名については、言うまでもなく、「釈迦に説法」や「釈迦も御存じない」をはじめとして、いずれも仏教に関係している。中国古典に由来する固有名を、さらに地名と、人名に分けると、前者は43、後者は29となっている。「越俎(えっそ)の罪」、「会稽の恥」等が前者の例であり、「猗頓(いとん)の富」や「孔子に論語」が後者の例である。人名については、儒教に関するもの(孔子6, 孟子3)が9つと多いのが目を引く。地名については、中国一の山である「泰山」を構成要素とするイディオム表現が多い(「泰山北斗」をはじめ、7つある)。

日本の固有名は、全部で68である。「有馬の道連れ」、「江戸からも立ち序」をはじめとする地名を構成要素とするイディオム表現が38ある。人名は30であるが、歴史上の人物(14)、文学上の人物(1)、神話(仏教)(5)、ことば遊び的な名前(8)の5つに分けることができる。寺院の名前を含むイディオム表現が2つあるのが興味深い(「敵は本能寺にあり」、「敵本主義」)。いずれも戦国時代の出来事に由来している表現である。「随徳寺を決める」は、一見寺院の名前のように見えるが、「ずいと [=そのまますぐに] 逃げ出す」などの「ずいと」を、寺の名のようにしゃれていったもの(『成語林』569頁)とある。しゃれ、こ

とば遊びの発想に基づく人名まがいのものがあるが、これは笑いを求める人々の思いがつくりだしたものといえよう（「遅かりし由良之助」、「知らぬ顔の半兵衛」、「名無しの権兵衛」、「平気の平左衛門」、「骨川筋右衛門」等）。地名を含んだものにもしやれ、ことば遊びに基づくものがある（「その手は桑名の焼き蛤」「木曾の深山で木が多い」、「長崎からの強飯」等）。文学作品に由来するイディオム表現は「桐壺源氏」である。「筑波の道」は、地名として分類したが、意味しているのは「連歌」のことであるので、文学に関係している。イディオム表現において日本文学を代表するのは「源氏物語」と「連歌」ということになる。

歴史上の人物名を構成要素とするイディオム表現には、どのようなものがあるかという点、「源氏の共食い」、「口弁慶」といったものが挙げられる。弁慶の名前を含むものが5つあるのが目立つ。「平家を滅ぼすは平家」、「義経の八艘飛び」と合わせて、源平に関わる表現が8つあるのは、日本の歴史において平安から鎌倉時代への移行期は、まさに中世から近世、貴族社会から武士社会への移行という大きな転換がなされたということを示しているであろう。ことばにもその跡が記されていると見ることができる。

13.2.2 ドイツ語の資料の分類

ドイツ語における固有名を構成要素とするイディオム表現については、すでにフェルデス (Földes 1987) が分類を試みている。日独比較・対照をおこなう都合上、フェルデスの分類を参考にしながら、日本語の資料を分類していくことにする。

一見固有名詞と思われるものでも、語源的にはそうでないものがある。例えば"Heidi gehen" (失われる) である。また固有名詞からの派生形容詞の形となっているものがある。例えば"panischer Schrecken" (びっくり仰天)。これは、ギリシャ神話のパンの神からきている。

人名の場合、歴史上実在の人物に由来するものと架空の人名に由来するものに分けることができる。架空の人名は、次の3)、4)、5)にあるように、さまざまな文献に由来している。また、不特定多数の存在としての人名に関わるものがある。"zum Otto machen" (誰かを笑う、しかる) や"frech wie Oskar" (ひじょうに生意気な) の構成要素としてのオットーやオスカーは、特定の人物を指しているわけではない。また、普通の庶民といった意味合いで使われる"Lieschen Müller"などもそうである。

歴史上の実在の人間に由来するものとしては"nach Adam Riese" (厳密に計算すると) という言い回しが現在でもしばしば使われる。アダム・リーゼ (1492-1559) は、ドイツの

算術の大家であるが、ローマ数字をアラビア数字に置き換えたこと、"Einmaleins-Schema" (かけ算九九の表) を考案したことで有名である。「ドイツ人の典型」として挙げられる "Deutscher Michel" (ドイツのミヒェル) については、30年戦争で連合軍を率い、1625年に弾に倒れた "Hans Michael von Obentraut" (ハンス・ミヒャエル・フォン・オーベントラウト) に由来しているのだが、ドイツ人一般を指すものとなった。当初は、ポジティブな意味合いで使われていたが、歴史の経過の中でカリカチュア的な存在となってしまった。ナポレオンが、ウィーン会議でドイツをどん底につき落として以来、カリカチュアの世界ではナイト・キャップをかぶったミヒェルがドイツ人の代表として固定している (KLDR:713)。

フェルデスによると、イディオムを構成する固有名は次のように分類できるようである。(例はフェルデスが挙げているものだけではなく、筆者が調べたものをいくつか補った。)

- 1) ドイツの固有名を含むもの : "den dicken Wilhelm spielen" (ほらを吹く)
- 2) 外国由来の固有名を含むもの : "Winston Churchill besuchen" (WCに行く)
- 3) 古代の神話や伝説に由来する固有名 (とりわけ古代ギリシャおよび古代ローマ) : "von Amors Pfeil getroffen sein" (だれかに恋している)、"jemanden hat die Muse geküßt" (誰かは詩人としての靈感を得た)
- 4) 聖書の中の登場人物の名に由来するもの : "der wahre Jakob" (本当の善人)、"seit Adams Zeiten" (大昔から)、"jemanden von Pontius bis zu Pilatus schicken" (たらいまわしにする)、"Ägyptische Finsternis" (真つ暗闇)、"babylonische Verwirrung" (バビロンの混乱)、"den alten Adam ausziehen" (生まれ変わる)
- 5) 世界文学に由来するもの : "Onkel Toms Hütte" (きれいな山小屋)、"Don-Quichote" (ドン・キホーテ)、シェークスピアの悲劇『ハムレット』の中の道化 Yorick に由来する "Er ist ein echter Yorick" (あいつは、本当にユーモアに富んだ人間) という表現など。文学ではないが、映画の主人公の名からきた言い回し、はったり屋の代名詞としての "Zampano" (ツァムパーノは、フェリーニの映画『道路』(La Strada) の主人公) もある。
- 6) 世界史上の事件、逸話に由来するもの : "drakonische Maßnahmen treffen" (厳罰主義で対処する : ドラコンは、紀元前 621 年のアテネの政治家。厳しい刑法をつくったので有名。例えば、果物の窃盗は死刑となっていた。刑法家としては、初めて "Mord" (計画的殺人) と "Totschlag" (過失致死) を区別した (KLDR:388))、"das Ei des Kolumbus" (コロンブスの卵)。

- 7) 特殊用語から生じたもの："wie Stuck fahren" (自動車を運転するのがうまい：シュトゥックはかつてのドイツの自動車レーサー)
- 8) 地域的なバリエーション (オーストリア、スイスにおける表現)："dar isch en Joggel" (スイス：愚かである、馬鹿げたことをいう)
- 9) 他言語から取り込まれた固有名がドイツ語化されたもの："Frau Blaschke" (素朴で、信じやすい女性)

上記の1)のドイツの固有名を含むイディオムは、さらに次のように分けることができる。

- i) ドイツ史上の人物に由来するもの："rangehen wie Blücher" (勇猛に突進する：ブリュッヒャー将軍 (1742-1819) に由来する)、"dazu hat Buchholtz kein Geld" (金がない：フリードリッヒ大王の下で財務大臣をつとめたブーフホルツ (1706-1800) に由来する - 「うちの大蔵大臣は金をだしてくれない」といった感じの言い方)
- ii) ドイツ文学に由来するもの："die Kraniche des Ibykus" (復讐の象徴：シラーの同名のバラードに由来する)、"Rinaldo Rinaldini" (泥棒の代名詞：ヴルピウス (1762 - 1827) が書いた盗賊小説の主人公の名に由来する)
- iii) 民間伝承、伝説、おとぎ話などに由来するもの："Frau Holle schüttelt ihre Betten aus" (雪が降る：おとぎ話から)、"jemandem den schwarzen Peter zuschieben" (ある人に罪をきせる：トランプ遊びから)
- iv) 本来、固有名ではないが、ことば遊びとして生じたもの："jemand ist ein Baron von Habenichts" (高貴な素性の生まれだが貧乏な人：「一文無右衛門」のような言葉遊びによる言い方)。**"Hinz und Kunz"** (ヒンツとクンツ) に関しては、かつてのDDRの作家**Volker Braun**に同名のタイトルを冠した作品があるが、一般市民を代表する名前であり、普通の庶民という意味合いの言い回しである。同じような言い回しとしての**"Otto und Anna Normalverbraucher"** (普通の消費者、オットーとアンナ)、**"Otto Normalbürger"** (普通の市民オットー) となると、多分に言葉遊び、語呂合わせ的な要素が強くなる。**"auf den St. Nimmerleins-Tag verschieben"** (いつとも知れない将来に物事を先おくりする)、**"Heiliger Sankt Bürokratus"** (聖なる官僚様)、**"Leberecht Luftikus"** (軽はずみ者) などは完全に言葉遊び、語呂合わせとしか言い様がない。こういった表現や間投詞としての**"Jesus, Maria und Josef"** (びっくりしたな、もう!)、**"Zetermordio!"** (助けてくれ!) には、語呂合わせや言葉遊び的な要素が含まれている点で、同一の集合に含めることも可能であろう。

以上の日独両言語におけるイディオム表現に含まれる固有名をその出自によって分類した結果を表にまとめると【資料3】ようになる。ただし、ドイツ語に関しては、フェルデスの分類通りにはなっていない。フェルデスの分類において「2)外国由来の固有名」、「9)他言語から取り込まれた固有名」という2つの項目となっているものを、「その他の外国語」として1つにまとめてある。そして、「特殊用語から生じたもの」は、省いている。というのは、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』には、それに分類できるものは収録されていなかったからである。

13.3 分類に基づく考察

予想されたことではあるが、日本語においては、とりわけ中国古典に由来する固有名が多い。そしてインド、というよりも仏教に関する固有名がいくつかある。これは、日本文化の基層をなしている2つの文化ということになる。イディオム表現においてもそれが確認されたということになる。逆に、ドイツ語においては、古代ギリシャ・ローマ、そして聖書に由来する固有名が多いと言えよう。約3分の1を占めている(43/131=0.328)。

人名についてみるならば、日本語には中国古典に由来する人名が29、日本の人名が27となっている。ドイツ語においてはドイツ語の人名が45となっている。イディオム表現に登場する比率は、ドイツ語の方が約2倍ほど高いということになる(日本語においては0.185、ドイツ語においては0.344)。

ことば遊び、しゃれに基づく固有名まがいの表現がいずれの言語においても7つある。ドイツ語の実例は、以下にその使用例とともにあげたようなものであるが、いずれの国においても、人々は笑いの心を大切にしているということであろうか。

イディオム学習という点から見ると、どのようなことが言えるであろうか。

唯一「いざ鎌倉！」と"ab nach Kassel!"が誤解を招く可能性がある。「いざ鎌倉！」は、鎌倉に向けていくということであり、ドイツ語では"auf Kamakura zu!"という表現することになる。前置詞が異なるだけの微妙な違いだが、"ab nach Kassel!"は、その場から立ち去れ！という意味である。この両者が強いていえば、「偽の友だち」関係にあるといえるかも知れない。

表現の点からいうならば、ほとんど全ての場合において共通するものはないのだから、真の意味で「偽の友だち」関係にある表現はない。従って、理解においては、誤解する可能性はまずないといえるが、そもそもの意味の理解が難しい。"nach Adam Riese" (アダム

・リーゼ)が"richtig gerechnet" (正確に計算して) という意味であるということを知っただけでは、理解は半ばに終わるであろう。どうしても、なぜそのような意味になるのか、説明が必要となる。必然的にランデスクンデの領域に入って行かざるを得ない。"in Adamskostüm" (アダムの衣装を着て) が"nackt" (裸で) という意味であることが比較的理解しやすいのは、すでに旧約聖書における「楽園追放」の物語をいくらかでも知っているという前提の上でのことである。「楽園追放」について知っているならば、"der alte Adam regt sich wieder: die alten Fehler, Ansichten usw. brechen wieder durch" (昔の過ちがぶり返す、昔の考えを蒸し返す) や"den alten Adam ausziehen: die alten Fehler usw. ablegen, ein neuer Mensch werden" (昔の過ちをぬぐい去る、新しい人間になる) において、"Adam"が"Fehler" (過ち) を意味することが了解できるだろう。そしてまた、"bei Adam und Eva anfangen: ganz vom allerersten Anfang beginnen" (最初の最初から始める) において、"bei Adam und Eva"が「最初から」という意味になることもわかるだろう。"von Adam und Eva (ab)stammen"(4例とも Friederich 1966: 306 から)という表現も、その方向で捉えるならば"uralt sein"(大昔からの人である)という意味に到達できるであろう。

日本語における、とりわけ野球に関してしばしば聞かれる表現に「天王山」がある。あるいは天下分け目の関ヶ原の合戦に由来する「関ヶ原」という表現も耳にすることが多い。これをドイツ語を話す人々に理解して貰うためには、表現をそのままドイツ語に置き換えただけではまず駄目であることは自明である。どうしても、説明的な置き換えをせざるを得ない。たとえば"das entscheidende Spiel"とでもいうしかない。敗北した時点でいうならば"sein Waterloo erleben: vernichtende Niederlage" (ワーテルローを体験する: 決定的な敗北を喫する) という表現が対応することになる。その場合でも、現在のベルギーのワーテルローにおけるナポレオンの敗北 (1815年6月18日) に一言も言及しないわけにはいかないだろう。そして、「天王山」、「関ヶ原」が日本の戦国時代の終わりを告げる歴史的な戦いに関連していることを説明する必要があるだろう。

13.4 論評記事における実際の使用例

これまでの論述から、とりわけ固有名を構成要素とするイディオム表現については、ランデスクンデが必然的に伴ってくるのが納得できたのではないだろうか。以下では、可能な限りこれまで筆者が新聞や雑誌から収集した実際の使用例を挙げていくことにしたい。もちろん、上の分類の各項目すべてに対応する使用例が見つからないわけではない。

また、使用例の多くが政治的な内容の報道に関わっているため、注釈的なコメントを付す必要がある。結果として、以下の使用例は、ドイツの情勢についてのランデスクンデとしても役立つことになろう。(ただし、1例だけは、オーストリアの新聞からのものであるが。) また、実際のドイツ語授業における教材を提供するという意図から、日本語訳は付していない。

1 3 . 4 . 1 ギリシャ神話に由来するイディオム

"den Augiasstall ausmisten" (アウギアスの牛舎を掃除する：腐敗した状態を除去する)

エリスのヘラクレスは、3000頭の牛が30年間にため込んだアウギアス王の牛舎の肥を1日の内に掃除しなければならなかった。長年にわたった汚濁を掃除することから、誰もがいやがって放っておいた困難な仕事をするという意味で使われる。当のヘラクレスは、牛舎の壁に2つの穴を開けて、アルフェウスとペネウス両河川の水を導き入れて、肥を流して、掃除したのである。動詞を入れ替えて、"den Augiasstall reinigen"とも表現する。

次の例は、ドイツ統一にいたる過程で短命内閣に終わったハンス・モドゥローが成し遂げなければならない課題がどのように大変なものであるかについてのコメントである。

Aber wer Modrows Regierungserklärung gehört hat, der erkennt auch, welche **Herkulesarbeit** auf den wartet, der **den Augiasstall zerstörten Vertrauens, zerrüttelter Wirtschaft, beschädigter Institutionen auszumisten** versucht. Diese Aufgabe übersteigt die Kräfte eines einzelnen. Sie hat ein wahrhaft erdrückendes Gewicht". (Badische Zeitung, 18./19. 11. 1989:1)

"Damoklesschwert" (ダモクレスの剣：絶えざる脅威)

シラクス王に仕えるダモクレスが、王をうらやましい限りの身分であると讃えた。すると王は、ダモクレスと座を交換して、ダモクレスを王座につかせた。王は、しかし、天井から剣を馬の毛でつりさげさせてあった。支配者の地位にあるものは、常に危険と隣合わせであることを王は言いたかったのである。表現そのものは、刃の上を歩くような、あるいは綱渡り、一触即発の危うい状態を言う。

次の例は、1991年1月湾岸戦争勃発直前、ジュネーブで開かれていたアメリカとイラクの交渉について報じたものである。湾岸戦争は、一体なんであったのか。ブッシュにとっては、新世界秩序構築の試金石、手始めとして位置づけられていたことが、その後徐々に明らかになってきたといえる。とりわけソ連が崩壊した後の世界において、アメリカは、

世界の警察として自らを位置づけようとしてきている。国際連合は、アメリカが軍事力を行行使するための隠れ蓑、あるいは"Hampelmann"（操り人形）となった感がある。湾岸戦争は、終わったのではなく、後出の「ルーカスを打て！」に見られるように、イディオムの世界でもなお続いているというべきであろう。

Ein Hoffnung weniger

Von Gerhard de Groot

Die Welt wurde an diesem Tag in ein Wechselbad gestürzt. Zuerst, angesichts der unerwartet langen Dauer der Gespräche zwischen den Außenministern Baker und Asis, keimte Hoffnung auf: Da konnte doch nicht nur Bekanntes vorgetragen worden sein, da deutete alles auf den Beginn eines wirklichen Dialogs hin, wenngleich in Washington zuvor klargestellt worden war, man werde nicht verhandeln. Dann, am Abend, die Enttäuschung: Die Fronten sind nicht in Bewegung geraten, und der Termin 15. Januar, an dem das vom UN-Sicherheitsrat festgelegte Ultimatum für den Abzug der irakischen Truppen aus dem besetzten Kuwait abläuft, hängt weiter wie **ein drohendes Damokles-Schwert** über der internationalen Gemeinschaft (...)" (Badische Zeitung, 10. Januar 1991, S.1, Tagesspiegel)

"den gordischen Knoten durchschlagen" (ゴルディアスの結び目を断ち切る：難問を一刀両断で解決する)

ドイツ連邦共和国の刑法 218 条には、妊娠中絶に関する規定がある。長年来、この条項の改正について、論議されてきている。ドイツ統一がなった時点で、かつての DDR と BRD での規定の違いが表面化することになった。

かつての DDR の規定は、「期限付き解決」(Fristenlösung) と呼ばれるもので、妊娠 12 週間以内であれば、当の女性の主体的な判断によって、妊娠を中絶するか、子供を出産するかを決めることが法で保障されていた。他方、BRD の法規定は、「指示モデル」(Indikationsmodell) と呼ばれるもので、医師の指示があつて初めて、妊娠中絶を行なうことが許される。つまり、出産することによって、母親となる女性が社会的に不利を被るときは、中絶が許される。その判断は、しかし医師が行なうことになっている。

法の適用に当たっては、州によって厳格さに違いがある。このことが「墮胎旅行」(Abtreibungstourismus) とでもいふべき人の移動を引き起こしているという現実がある。

比較的容易に妊娠中絶ができるかつての DDR 諸州、BRD のヘッセン州、ブレーメン、ノルトライン・ウェストファーレン州や、外国であるオランダに中絶に出かけるドイツ女性が多くいるというのは、暗黙の了解となっている。

次のコメントにあるように、バイエルン州では、妊娠中絶はほぼ不可能で、犯罪扱いとなる。一例として、その後マスコミでしばしば取りあげられることになり、テレビ・ドラマ化さえされたのだが、バイエルン南西端にあるメミンゲン市の産婦人科医ホルスト・タイセン (Horst Theissen) は、79 人の女性に対して、不法に妊娠中絶の手術を行なったということで、1989 年 5 月 5 日に下された一審判決で、2 年半の自由剥奪と 3 年の営業停止を宣告されている。(なお、この法廷闘争は、連邦最高裁判所まで争われたのだが、そこで起訴された 79 件のうち、20 件がすでに時効であることが判明し、差し戻し審理となり、1994 年 1 月 12 日、アウグスブルク地方裁判所で 1 年半の執行猶予判決がタイセンに宣告されている。そして、これがこの法廷闘争の最終判決となっている。現在タイセンは、メミンゲンを去り、ヘッセン州で、「自然療法医師」(Naturheilkundler) として生計を営んでいるとのことである。)

かつての DDR と BRD の法規定の違い、そしてまた州ごとに異なった適用の実態。これらを調整して、法規定を一本化することは困難を極める。それほどまでに複雑な問題となっている。ゴルディアスの結び目とは、そのことをいっている。

妊娠中絶を認めない論拠は、「生まれてくる生命の保護」である。論議の焦点は、これから生まれてくる生命の保護か、現に生きている者の生の保護か。産むか、産まないかを女性自ら判断するか、当事者の女性以外の、例えば国が判断するかという点にある。

歴史的にみると、国家権力は、人口政策という名目で、常に女性の産む権利を剥奪し、コントロールしてきている。魔女裁判は、国家による人口政策の一環でもあった。出産に関する知識を有していた女性を抹殺することによって、支配者権力のみがその知識を占有することによって、生および性をコントロールしようとしたのである (Heinsohn u.a. 1979)。

Keine Lösung

a. Daß es sich die CSU beim Thema Abteibung schwer gemacht hat, ist nicht zu bestreiten. Ebenso wenig die Glaubwürdigkeit der Beteuerung, auch ihr komme es in erster Linie auf Hilfe und nicht auf Strafe an. Die "Ansbacher Erklärung" enthält hier viele konkrete Forderungen. Liest man das Papier genauer, ist es aber mitnichten **der Schlag durch den gordischen Knoten**, wie die Parteiführung glauben machen möchte.

Im Grunde sind die CSU-Leitlinien zur Abtreibung eine taktisch klug komponierte Sammlung, um die Fundis in den eigenen Reihen ruhigzustellen und das Eingeständnis zu kaschieren, daß mehr als die jetzt praktizierte Regelung nicht zu erreichen ist. Genau dagegen war die Partei aber jahrelang angerannt. (...) (Badische Zeitung, 15. Juli 1991, S.1, Tagesspiegel)

"Herkulesaufgabe" (ヘラクレスの難題：簡単には解決できない問題)

これは、また **Herkulesarbeit** (ヘラクレスの大仕事) という表現でも使われる。その難題とは、上でみたように、アウギアスの牛舎の掃除のことであった。

ドイツ統一は、CDU/CSU/FDP 連立与党が振りまいた期待通りには、かつての DDR の経済状態を上向かせることはなかった。統一前から、そして統一後の 1990 年 12 月の総選挙の過程でひとり統一のつけの大きさを予測し、悲観的な論を展開したオスカー・ラフォンテーヌ (Oskar Lafontaine) を押し立てて選挙をたたかった SPD は、当然のように敗れた。しかし、いまとなつては、そのラフォンテーヌの予測こそが正しかったことにドイツ国民はいやでも気づいている。しかし、すべてはあとの祭りである。

ドイツ統一のつけは、経済的次元に留まらず、ネオ・ナチの台頭、外国人排斥運動の高まりという社会情勢の不安をももたらしている。まさにドイツは統一のつけの重さに喘いでいる。Solidarpakt (連帯契約) という名の増税を伴うかつての DDR 振興策は、果して成功するのだろうか。ドイツの国家財政は、ほとんど破産寸前ともいえるのである。

Kein Pakt - aber ein Fahrplan

Von Ansgar Fürst

Soviel Erleichterung hat man schon lange nicht mehr gesehen in Bonn. Aber es stand ja auch selten soviel auf dem Spiel im Fall des Scheiterns. Und das Scheitern lag in der Luft nach dem monatelangen Gezerre, dem Schleifenlassen der Dinge durch den Kanzler und angesichts des Bergs von Problemen. Ging es doch nicht nur um eine der größten Finanztransaktionen in der Geschichte der Republik, sondern überdies um **eine politische Herkulesarbeit**: Finanzierung der deutschen Einheit, Schaffung eines neuen Länderfinanzausgleichs, Verteilung der Lasten auf alle - auch auf die Bürger. Aber seit der Wahl in Hessen standen alle Beteiligten unter einem Druck, dem sie sich vorher leichtfertig entziehen wollten. Seither ist allen klar: Der Wähler ist es leid, daß die Politik

auf einen anschwellenden Problemstau mit anhaltender Entscheidungsunfähigkeit reagiert - und er wirft bei seinem grassierenden Ärger alle großen Parteien in einen Topf. Vorbei die Zeiten, in denen einer auf Kosten des anderen profitieren konnte.(...) (Badische Zeitung, 15. März 1993, S.1, Tagesspiegel)

1993 年 8 月 13 日付け『バーデン新聞』によれば、「連邦運輸省」(Bundesverkehrsministerium)は、ドイツで発行された自動車運転免許証をすべて、1995 年までにヨーロッパ共同体共通のものに切り換えるという決定を公にした。次のコメントは、その決定に関するものである。(コメントそのものは、『シュトゥットガルト通信』に掲載されているものであるが、『バーデン新聞』のコラムで紹介されている。)

ドイツ連邦共和国の自動車免許証は、日本とは違って、2 年おきとか 3 年おきとかという更新期間がなく、いったん取得してしまえば、事故を起こして免許没収にならない限り、終身有効である。数年前からは、ヨーロッパ共同体共通の書式で発行されているが、それ以前のものとはそうではない。どれだけの数の免許証を切り換えることになるか、その仕事の量は計り知れない。ドイツの人口 8 千万の半数が自動車免許を取得しているとして、3 千万から 4 千万の免許証を書き換えるということになるのだろうか。

ちなみに、新しいヨーロッパ共同体共通の免許の種類と書式については、新聞記事によると、次のようである。これまで免許の種類は、1 から 5 までの 5 種類であったが、この種類の分類が A ~ E ということになる。A は、自動 2 輪車、B は乗用車 (3,5 トンまで)、C は貨物自動車 (3,5 トン以上)、D は 8 人乗り以上のバス、E は 750 キロ以上の牽引車ということになるとのことである。免許証そのものは、これもまた日本とは異なって、プラスチック・カード 1 枚というのではなく、車検証のように横長のもの 1 枚が、折り込んで 3 枚重ねになったものになるようである。

Herkulesaufgabe

Die "Stuttgarter Nachrichten" zu den neuen EG-Führerschein:

"Auf die Führerscheinstellen kommt **eine Herkulesaufgabe** zu: An die 44 Millionen Fahrerlaubnisse müssen demnächst in EG-einheitliche Papiere umgetauscht werden... Bei Licht besehen profitieren auch die Deutschen von der... Umtauschaktion - zumindest die Masse, die ihre Fahrerlaubnis nach Recht und Gesetz erworben hat. Für gefälschte Papiere oder 'vorsorglich' beschaffte Ersatzlizenzen sind dagegen die Tage gezählt. Schon das wäre ein Gewinn für die Verkehrssicherheit... Ohnehin ist das deutsche

Führerscheinsystem nicht eben das effizienteste. Sechs verschiedene Muster sind nebeneinander gültig. Es gibt keine zentrale Erfassung der aktuellen Daten, etwa über Auflagen oder Fahrbeschränkungen...(Badische Zeitung, 4. August 1992, S.4, Pressestimmen)

"Odyssee" (オデュッセイア：漂泊の旅)

いうまでもなくホーマー（紀元前 8 世紀）の叙事詩の『オデュッセイア』にもとづく。イタカ（Ithaca）の王、オデュッセイアは、トロイア戦争に勝利を収め、長い苦難の航海を経て故郷に帰る。放浪の旅、長い航海などについて言われる。

ヨハネス・マリオ・ジンメル（Johannes Mario Simmel）の小説『ミーシャ・カーファンケの泣き笑い人生』（Simmel 1993）の、次の一節に出てくるオデュッセイアは、本来の意義、つまりホメロスの『オデュッセイア』を念頭においた使い方といえよう。それは、またヨーロッパの歴史の中でのユダヤ人の運命をも象徴する表現なのである。

Auf dieser muffigen Polizeiwache also, da weht ihn jetzt zum erstenmal wie ein sanfter Wind die Ahnung an, daß er wohl bald Deutschland verlassen müssen wird, wenn er am Leben bleiben will...Ganz deutlich hat er da dieses Gefühl zum erstenmal, wenn auch noch ganz zart, und es ist ein richtiges Gefühl, genau so wird es sein, in ein anderes Land wird er gehen müssen, der Mischa, um nicht erschlagen zu werden. Und dann nicht nur von diesem anderen Land in ein drittes, ach nein, dem kleinen Mischa mit den Basset-Augen und dem stillen Wesen steht eine Reise um die ganze Welt bevor voll immer neuer Abenteuer und Gefahren. Sehr komisch wird das sein, was er erleben soll, und sehr tragisch und total irrsinnig - so komisch und tragisch und total irrsinning, wie es die Zeit ist, in der wir leben am Ende des 20. Jahrhunderts. Unbeantwortet allein bleibt die Frage, ob er **diese Odyssee** überleben oder an ihr zugrunde gehen wird. Von all dem weiß Mischa natürlich nichts am Nachmittag des 10. Mai 1991, aber jener Wind weiß es, der sechstausend Jahre lang gereist ist über Meere und Kontinente, um die ganze Welt. (Simmel 1993:54)

しかし、オデュッセイアは、行き先の定まらない長い航海という意味で転義的にも使われる。1992 年の 11 月にフランスから 1,7 トンのプルトニウムを積んで、2 カ月以上の長い航海に乗り出した「あかつき丸」についての次の新聞記事の見出しは、そのような使用

例である。本来は、長い航海をするオデュッセイアがさまざまな危険に出会うのだが、この場合は、航海している「あかつき丸」自身が危険物を積んでいるわけで、いわば攻守を逆にしている。

さらに言えば、世界で唯一高速増殖炉の営業運転をめざす「日本丸」そのものが、核兵器製造にもつながる多量のプルトニウムを抱え込み、世界政治の中をオデュッセイアのように漂うことにもなりかねない。イラクや朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が核査察を受けたように、いつか日本がその対象になる可能性もないとは言えない。すでに北朝鮮と中国は、日本が核兵器製造を計画していると非難している。

Nach 35 000 Seemeilen löscht die "Akatsuki Maru" in Japan ihre radioaktive Fracht

Das Ende einer Plutonium-Odyssee

...Die "Akatsuki Maru" hat den gefährlichen "gelben Kuchen" vor zwei Monaten nahe der französischen Wiederaufbereitungsanlage La Hague an Bord genommen und seither rund 35 000 Seemeilen zurückgelegt. Zahlreiche Staaten wollten das Schiff mit der tödlichen Ladung nicht durch ihre Gewässer fahren lassen, deshalb mußte die "Akatsuki Maru" einen großen Umweg durch internationale Gewässer fahren...Wenn Japan jetzt große Mengen des "gelben Kuchens" hortet, setzt es sich dem Verdacht aus, Atomwaffen besitzen zu wollen. Nordkorea und China haben Japan bereits vorgeworfen, es plane den Bau einer Atombombe... Regierungssprecher Kono verkündete, Japan werde an seinem Atomprogramm festhalten und 30 weitere Tonnen Plutonium aus Frankreich und Großbritannien holen...(Badische Zeitung, 7. Januar 1993, S.16, Aus Aller Welt)

"Pyrrhussieg" (ピュルスの勝利：多大な犠牲を払っての勝利)

エピルス (Epirus) のピュルス王 (Pyrrhus) は、アウスクルム (Ausculum) におけるローマとの戦い (紀元前 279 年) に勝利を収めた。しかし、損害も甚大であった。「このような戦いをもう一度して、勝ったとしても、おしまいだ」(Noch ein solcher Sieg, und wir sind verloren) と、王は言ったと伝えられている。戦争を損得計算という経済次元の問題として捉えたのは、クラウゼヴィッツであるが、戦争に限らず、得るよりも失うものが多いことを意味する表現となった。

なお、湾岸戦争に関わって使われたイディオム 3 つが本論では取り上げられているが、湾岸戦争そのものの是非をめぐって、アメリカで展開された論議の中で使われたメタファ

一を、ウラウゼヴィッツのメタファーも含めて言語学者の目から分析したレイコフの論文 (Lakoff 1991) があることを注記しておきたい。

Pyrrhussieg

hwn. Der Schweizer Verkehrsminister Adolf Ogi kann sich erleichtert die Stirne wischen: Mit einem überraschend klaren Votum gaben die Schweizer grünes Licht für die zigmilliarden Franken teure "Neue Eisenbahn-Alpentransversale"(Neat).(…) Mit der Neat hat sich die Schweiz für zwölf Jahre davon "freigekauft", 40Tonner durch die Alpen donnern zu lassen. Aber: Wenn der Transitvertrag im Jahr 2005 ausläuft, wird die Neat noch nicht fertiggebaut sein. Und dann wird neu über einen 40-Tonnen-Korridor verhandelt werden müssen. Die Schweizer haben die Gelegenheit verpaßt, ein Zeichen gegen die ständig steigende Transport-Lawine und den zum Teil unsinnigen Güter-Tourismus in der EG zu setzen. **Ein Pyrrhussieg** für den Verkehrsminister: Nicht die Bahn muß billiger, sondern die Straße muß teuer werden. (Badische Zeitung, 26. September 1992, S.1, Tagesspiegel)

"Sisyphusarbeit" (シーシッポスの難事業：いつ果てるとも知れない難行)

コリントの王であるシーシッポスは、ゼウスから罰を受け、山頂に岩を押し上げなければならぬ。しかし、頂上に達する寸前に岩はまた転げ落ちてしまう。いつ果てるとも知れない苦行、無益な行いを意味する。日本語では、「賽の河原の石積み」ということであろうか。

次のコメントは、直接的には南西ドイツの小都市ラールにある化学工業会社が、農薬工場をつくるためと称して、有毒ガス製造のノウハウをリビアに提供していたと告発された事件に関するものである。湾岸戦争との絡みで言えば、ドイツの鉄鋼会社トュッセンが水道管と偽って、大砲の砲身をイラクに輸出していたということも湾岸戦争後に明らかになり、多くのドイツ国民の怒りをかった。

Sisyphusarbeit

ggt. Über Jahrzehnte hinweg gehörte es zu den schwierigsten Aufgaben in der ohnehin schwierigen Abrüstungsdiplomatie, über die Beseitigung der chemischen Waffen zu verhandeln. (...) Zu den Aufgaben der Genfer Experten gehörte deshalb nicht nur die Registrierung einer immensen Menge von chemischen Materialien. Hinzu kam die

Ausarbeitung eines "wasserdichten" Inspektionsverfahrens, das Manipulationen wie im Irak (oder Libyen) für die Zukunft ausschließen soll. **Eine Sisyphusarbeit**, die bei den ehrgeizigen "Schwellenländern", aber auch bei den Chemie-Firmengiganten in Europa und den USA zeitweilig mehr Argwohn als Beifall auslöste, da dort zunächst einmal an die Gefahr der Industriespionage und erst in zweiter Linie an das hehre Ziel der Abrüstung gedacht wurde. Darum hat es in Genf sehr lange gedauert; und darum sollte der Beifall jetzt um so größer sein. Auch wenn noch weitere Hürden zu überwinden sind, bis der Vertrag endlich wirksam wird. (Badische Zeitung, 4. September 1992, S.1, Tagesspiegel)

次の例はオーストリアの日刊紙『ノイエ・クロネン・ツァイトウング』から拾ったものであるが、記事の中で"Sisyphusarbeit"という表現がギリシャ神話に由来しているという説明がなされていることから、この新聞がそれほどの高等教育を受けてはいない人々を読者層として想定していることをうかがわせる。

日本でも政治家の汚職は歴代の政府の強い意志表明にもかかわらず、一向に根絶できない。政界浄化がこのたび連立内閣を成立させることにつながったのであるのに、政治献金根絶、政界腐敗根絶の課題は、いつのまにか選挙制度改革の問題のみに還元されてしまった。

表面上は特定の政党に属さない法務大臣が細川内閣の下では誕生したわけだが、この点は、オーストリアよりもいいといえようか。従来政治家の汚職に関する裁判は、あからさまな司法への干渉が行なわれてきており、それを避けたいという判断が細川氏にはあったのであろう。

Die Aufarbeitung der Polit-Altlasten wird zur **Sisyphusarbeit**

Die Skandallawine rollt weiter: Neue Affären, neue Verurteilungen

Wien. - In der griechischen Mythologie gibt es die Gestalt des Sisyphus, der zu einem nie endenden Steinewälzen verurteilt ist. Der Abbau politischer Altlasten scheint ebenfalls **eine Sisyphusarbeit** zu sein, weil immer neue Skandale aufbrechen. Dennoch glaubt man allen Ernstes, auf einen parteilosen Justizminister verzichten zu können. (Neue Kronen Zeitung, 28. Oktober 1990, S.20)

1 3 . 4 . 2 世界史上の事件に由来するイディオム

"Canossagang" (カノッサ行き：屈辱の旅)

歴史上の事件に由来するイディオムの代表は、「カノッサの屈辱」に依拠する Canossagang (カノッサ行き) という言い回しであろう。ハインリヒ4世 (Heinrich IV.) はローマ法王グレゴリオ7世 (Papst Gregor VII.) によって、1077年北イタリアのカノッサで破門から解かれた。日本では「カノッサの屈辱」と呼ばれているが、実際はハインリヒ王の方が、政治的、人間的に法王に勝利したことが最近の歴史研究では明らかになっている。しかし、「カノッサ行き」という表現は、依然として屈辱の旅という意味で使われている。

"Nur einer dringt noch durch in diesem Saal, in dem sich alles auf Kohl und Modrow konzentriert: Wolfgang Ullmann, Minister der Gruppe "Demokratie Jetzt". Er dringt durch, als gefragt wird nach den zehn oder 15 Milliarden Mark Soforthilfe, die der Runde Tisch in Ost-Berlin gefordert, die Helmut Kohl aber verweigert hat. Ullmann: "Wir nehmen nichts zurück von dem, was wir gesagt haben" - **im Büßergewand den Gang nach Canossa antreten**, so wie es Bonner Regierungskreise Hans Modrow empfohlen hatten, nein, das wollten die Minister auf gar keinen Fall." (Badische Zeitung, 15. Februar 1990, S.3)

実際の使用例は挙げていないが、ワーテルローの戦いに関わる "ein/seinen Waterloo erleben" (壊滅的な敗北を喫する) という言い回しもよく使われるようである。勝敗を決する戦いという意味では、日本では天下分け目の「関ヶ原の戦い」が "ein/seinen Waterloo erleben" に相当するといえるだろう。

"das Ei des Kolumbus" (コロンブスの卵)：事後的には簡単に見えることでも最初に実行するのは難しいというたとえ)

ヨーロッパ連合が実現した現時点においては、既に解決済みのことなのかも知れないが、次の新聞論評記事は、ヨーロッパ連合内における物流の統制に関する議論である。1993年1月からは、個々の企業内部でチェックすることによって、物流の統制がはかられるシステムになることが合意されていた。ヨーロッパ連合という一つの市場においては当然そうなるべきであろう。しかしながら、何ごとも総論賛成、各論反対というのが現実である。加盟各国の財政当局は、チェックが充分におこなわれず、税収が減ることを恐れているという。スタートするまではあれこれ議論百出であるが、動き出せば、それほど問題はなかったということになるだろう (ein Ei des Kolumbus) というのがこの論評記事の趣旨であ

る。加盟各国の財政当局が持ち出している「目くらましの論」(Augenwischerei)に惑わされてはいけないと注意を呼びかけている。

Augenwischerei

eh. Gibt es nun ab Januar 1993 den echten EG-Binnenmarkt, oder gibt es ihn nicht? Nach unzähligen Diskussionen der Finanzminister hat die Brüsseler Kommission jetzt ein Schema entworfen, das wie **ein Ei des Kolumbus** aussieht. Von 1993 an fallen die Grenzkontrollen zwischen den zwölf Ländern weg, die Papierarbeit der Unternehmen für die Finanzbehörden soll auch verringert werden, und die Kontrollen finden nur noch in den Betrieben statt. Dem Anschein nach wird damit der Binnenmarkt termingerecht hergestellt. **Die Sache hat zwei Pferdefüße**. Sobald die Vorlage in den EG-Ministerrat kommt, werden alle führenden nationalen Steuerbeamten aufschreien: bei dem Stichprobensystem in den Betrieben und ohne Grenzkontrollen "gehen uns jährlich Milliardenbeträge verloren". Was immer die Minister informell an Zustimmung genickt haben mögen, wird in formellen Ministerratssitzungen zurückgeschraubt werden. Und auch von der "bürokratischen Entlastung" der Unternehmen dürfte im Endergebnis kaum noch die Rede sein. Zweitens geht die EG-Kommissarin Scrivener davon aus, das Übergangssystem werde die Mitgliedstaaten bis Ende 1996 praktisch zu jener Harmonisierung der Mehrwertsteuersätze zwingen. **Blauäugiger** geht es fast nicht. Wer glaubt denn, daß eine dänische Minderheitsregierung es in der verlängerten Frist fertigbringt, ihre Hochsteuersätze herabzuschrauben, aus denen sie bisher den größten Teil der nationalen Sozialversicherung finanziert? Was zwischen 1985 und 1990 nicht möglich war, wird auch bis Ende 1996 politisch nicht machbar sein. Es sei denn, die entscheidenden Wirtschaftskräfte und die EG-Verbraucher würden jetzt energisch monieren, daß sie **diese Augenwischerei** nicht mehr länger gutheißen" (Badische Zeitung, 9. Mai 1990, S.11, Der Kommentar).

1 3 . 4 . 3 世界文学に由来するもの

"Don Quichote" (ドン・キホーテ: とてもかなわない相手に猛進するもの)

ドン・キホーテについては、今更言うまでもないことであろう。はなから勝負にならない強大な敵に猛進していく非力な者のイメージである。

ローライで知られるライン川であるが、実態はその沿岸に立ち並ぶ原子力発電所、化学薬品工場等によって、汚染がすすみ、ヨーロッパのどぶ川に近い。また、汚染については、ドナウ川やエルベ川についてもかなり進んでいるようである。自然保護、環境保全の運動は、国境という壁に突き当たるのである。ここでもヨーロッパ共同の視点が必須と言えるが、ヨーロッパ共同体の実現そのものが現時点では危うくなりかけている。景気の後退とともに、自然保護が置き去りにされてしまいそうである。

Der geplante Bau einer Altholzverbrennungsanlage im schweizerischen Rekingen erzürnt die Umweltschützer diesseits des Rheins

Umwelt-Don-Quichote kämpft gegen Gesetzers-Mühlen

Von unserem Redakteur Mathias Bury

...(Franz) Weber (international bekannter Schweizer Naturschützer) ist ein Meister im Umgang mit den Medien: Der ehemalige Journalist, der Schriftsteller wie Friedrich Dürrenmatt und Adolf Muschg zu seinen Unterstützern zählte, vom verstorbenen Verhaltensforscher Konrad Lorenz zur Hilfe gerufen wurde und mit Brigitte Bardot gegen das Robbenschlachten vorging, wurde berühmt, als er 1988 mit seinem "Internationalen Gerichtshof für Tierrechte" der grausamen Jagd von Wildpferden in Australien ein Ende setzte.(...)

Was für den Öko-Kämpfer, der schon seit langem den "Untertanengeist" im Grenzkanton geißelt, aber weit schwerer wiegt: Im Juni stimmten die Aargauer Bürger mit großer Mehrheit für ein neues Baugesetz, das einige fragwürdige Passagen enthält, die der Abwehr deutscher Einsprecher dienen sollen. Diese sorgten jenseits des Rheins für erheblichen politischen Unmut und wurden von der Aargauer Kantonsregierung unmißverständlich als "mißbräuchliche Prozeßführung" eingestuft...(Badische Zeitung, 29. Juli 1993, S.8)

"Zampano" (ツァムパーノ：声高に叫き散らす人、はったり屋)

次のイディオムは、ドイツ連邦共和国における新ナチズムの台頭と過激化、そして他方における反体制運動としての新左翼の過激分子「ドイツ赤軍派」(RAF)によるゲリラ活動の取締りという左右両方向に対するドイツ警察当局の対処の仕方に関わっている。

直接的には、1993年6月下旬ドイツ北東部の州メクレンブルク・フォアポムマーンの

町バート・クライネン (Bad Kleinen) で起こったドイツ赤軍派幹部とみられるウォルフガング・グラームス (Wolfgang Grams) の逮捕劇の過程で、当のグラームスが凶弾に倒れ、死んだ事件の真相解明をめぐる連邦検察局、連邦憲法擁護局といった関連当局の対応をコメントしたものである。

この事件には、長い前史がある。そしてまた、他方における新ナチズムに対する警察当局のこれまでとってきた態度をも考え合わせる必要がある。

国家の中における国家の存在という、法治国家にとっての危機的状況という認識も背後に据えられていることを、知っておくべきであろう。

Die Spitzenquelle

b. Wieder ist ein Zipfel der Wahrheit sichtbar geworden. Aber was wirklich vor über drei Wochen in Bad Kleinen geschah, bleibt weiter im dunkeln. Immerhin kann jetzt als gesicherte Erkenntnis gelten, daß der mysteriöse "Klaus" tatsächlich V-Mann des Verfassungsschutzes war und die Polizei auf die Spur der Terroristin Hogefeld gebracht hat. (...) Aber nun ist die Quelle Klaus für den Verfassungsschutz versiegt und von RAF bis "Spiegel" und "Panorama" ist seine Anonymität gelüftet. Nur für die ermittelnden Behörden bleibt er verschwunden. Und der Staatsanwalt in Schwerin tappt im dunkeln und fühlt sich von den großen **Zampanos** im Bundeskriminalamt **an der Nase herumgeführt**. Da bleibt zu fragen: Wie autonom und selbtherrlich sind eigentlich Geheimdienste und Polizeiapparate in diesem Land, daß sie seinen Tatzeugen einfach aus dem Verkehr ziehen dürfen? Und wer will jetzt noch bestreiten, daß bei der Aufklärung gemauert wird? (Badische Zeitung, 21.Juli 1993, S.1, Tagesspiegel)

イディオム的な使い方として問題となるのは、上のコメントに出てくる "Zampano" である。ドゥーデン (DUDEN 1989:1765) には、フェリーニ (Fellini) の映画 "La Strada" (道路) (1954) のなかの同名 (ツァンパーノ) の主人公に由来するとして、大声でわめきたて、大言壮語と大仰な身ぶりによって周りのものを圧倒するような男、あるいはそのような言動によって、不可能事を可能事と思わせるような男のこと、と説明されている。

13.4.4 伝説、民俗、聖書 (宗教) に由来するもの

"Haut den Lukas!" (ルーカスを打て! : ここぞとばかりにたたけ!)

世界の耳目がユーゴスラビアの内戦、カンボジア民主化のための総選挙、ソマリアの内

戦といったことに向けられている間に、湾岸戦争があったこと、そしてそれ以前も以後もアメリカ軍を中心とする連合軍によって、イラク制裁が続けられていることが、忘れ去られてしまったかのようである。

しかし、アメリカは、突発的に1993年6月26日の夜、イラク問題、フセインの存在を忘れてはいけなるとばかりに、イラクのバグダッドを空爆した。理由は、イラクの秘密諜報員が前大統領ブッシュの暗殺を計画していたというものであった。

「ルーカスを打て！」とは、お祭りや"Messe"（見本市）などの場で、余興として力試しをする装置で、客を呼ぶときの呼び込み文句である。つまり、「ここぞとばかりに攻撃を加えろ！」といった意味である。

Haut den Lukas

gg. Mit der Strafaktion gegen den Irak ist Clintons Außenpolitik auf einem absoluten Tiefpunkt angelangt. Um von seinem Zickzack-Kurs auf dem Balkan, diversen Ungeschicklichkeiten im Umgang mit wichtigen Verbündeten und konzeptionellen Schwächen abzulenken, prügelt sich der Präsident ausgerechnet mit Saddam Hussein, jenem Watschenmann, den schon sein Vorgänger Bush bevorzugt hatte. Und gab es früher noch rational nachvollziehbare Gründe, den Diktator zu züchtigen, so ist die offizielle Erklärung für den neuerlichen US-Angriff nur noch fadenscheinig: Wenn Mutmaßungen über Attentatspläne eines Geheimdienstes als Anlaß zu Raketenangriffen ausreichen, dann hätten Washington und die dortige CIA-Zentrale in den vergangenen Jahrzehnten gleich mehrfach bombardiert werden müssen. Man erinnere sich nur der offiziell bestätigten amerikanischen Mordpläne gegen diverse unliebsame Staatsführer, an vorderster Stelle der Kubaner Fidel Castro.(...) (Badische Zeitung, 28. Juni 1993, S.1, Tagesspiegel)

"Sankt. Florian"（聖者フローリアン：人々にもてるものすべてを平等に分け与える人）

聖フローリアンは、消防の神様として崇められている。しかし、消火活動の際、冗談めかして言われる"Zünde andere an!"（他の家にも火をつけろ!）ということをも拡大解釈することから"Nach dem St. Florianprinzip handeln"（損害を他のものに転嫁する）という言い回しが成立した（Röhrich 1991/92: 463）。次のコメントの中の"St. Florian läßt sich aus Freiburg grüßen"（フライブルクから聖フローリアンが挨拶を送る）という表現は、このイディオムのバリエーションである。

Florian grüßt

Während in Europa allenhalben die Grenzen durchlässiger werden oder demnächst ganz fallen, baut die Stadt Freiburg eine neue Barriere zum Umland auf: Pförtnerampel heißt das Wunderwerk, das den östlichen Zugang zur Stadt erschweren soll. Die offizielle Leseart lautet zwar anders, doch wenn der "Pförtner" seine wirklich gemeinte Absicht erfüllen soll, dann muß er den Verkehr drosseln. Da die Zahl der Autos und Lastwagen aber nicht einfach abnimmt, bloß weil die Freiburger Bächle-Strategen dies gerne so hätten, wird das Problem nur verlagert: der Stau nach Zarten oder gar nach Falkensteig und der in den kommenden Jahren sicher weiter wachsende Verkehr auf die Schleichwege. Über mehr Autos dürfen sich voraussichtlich freuen: Kirchzarten im Ortskern, das Münstertal, Glottertal, Simonswälder- und Prechtal mit allen Gemeinden, die da an den schmalen Straßen liegen - **St. Florian läßt aus Freiburg grüßen**. Immerhin hätte das Umland einige Möglichkeiten, "zurückzuschlagen". Rolf Müller (Badische Zeitung, 20. August 1992, S.25, Der Kommentar)

"pharisäische Selbstgerechtigkeit" (パリサイ人の独善主義：法に適ってさえいたらいいと言う考え)

パリサイ人は、また律法主義者たちとも呼ばれる。本来は、「敬虔な人々」という意味である。しかし、新約聖書でみる限りは、イエスによって、偽善者の代名詞呼ばわりされている (Röhrich 1991/92:1179)。それも、ただ法に従って、信仰が保てるという考えをしていたからである。

また、下の記事にあるサヴォナローラ (Girolamo Savonarola) は、イタリアの宗教改革者。フィレンツェの修道院長であった。メディチ家の腐敗を徹底追求したが、1497 年法王から破門にされ、火刑に処された。「サヴォナローラのやり方」とは、不正を徹底追求するという意味。

ドイツ政府は、たとえば不正に失業保険を受け取ることなどをはじめとして、社会福祉政策をうまく利用するものを厳に戒めているにもかかわらず、連邦運輸大臣クラウゼが家政婦の手当を公費で賄っていたことを見逃していた。たとえ法的な手続きに反していなくても、国民感情としては、とても許せないであろう。クラウゼは、結局この「家政婦事件」(Putzfrauen-Story) のため大臣を辞することになった。

Moralische Ohrfeige

clu. Hat man etwas anderes erwartet? Günther Krause bleibt uns also als Minister erhalten und läßt zugleich per Presseerklärung wissen, wie sehr er es bedauert, Anlaß zu öffentlicher Kritik gegeben zu haben. Dies war vielleicht kein Fall für einen Ministerrücktritt, wohl aber eine moralische Ohrfeige für die ganze Regierung. Und dies wird weder durch die routinierte Erweckung von Reue und Leid, um mit dem katholischen Beichtspiegel zu sprechen, ausgeräumt, noch durch den Hinweis, alles sei doch rechtlich ganz korrekt zugegangen. Auch wenn man beiseite läßt, wieviel **pharisäische Selbstgerechtigkeit** bei der Aufdeckung dieser Putzfrauen-Story im Spiel war, legt sie doch am banalen Detail bloß, wie es um die Glaubwürdigkeit der Politik bestellt ist. Daß nämlich eine Regierung, die das Teilen predigt und nicht davor zurückschreckt, die kleinen Leute mit dem Ausdruck des Bedauerns um ein paar Mark zu schröpfen, die überdies **nach Savonarola-Art** gegen den Mißbrauch sozialer Leistungen wettet - daß diese Regierung ziemlich dumm dasteht, wenn einer der Ihren sich so ungiert aus dem Topf öffentlicher Wohltaten bedient. (Badische Zeitung, 23. März 1993, S.1, Tagesspiegel)

1 3 . 4 . 5 ドイツの固有名

"nach Adam Riese" (アダム・リーゼに従えば：厳密に計算すれば)

アダム・リーゼは人名であり、世界史上のできごとというわけではないが、歴史上の人物ということで、この項で取り挙げることにする。これは、上掲のコロンブスも同様である。アダム・リーゼその人については、第 1 節ですでに述べた通りである。

次のコメントは、Telekom (ドイツの電電公社) のあくどい営業を批判したものである。ドイツの電電公社も、そのことの善し悪しはあるが、連邦政府の財政難解消の決め手として、民営化が論議されている。コメントでは、独占企業体であるがゆえの欠点が指摘されている。

Fernmeldeamt

Umsonst?

Umsonst ist im Leben (fast) nichts - schon gar nicht bei der Bundespost. Umso erstaunter dürften die Freiburger sein, die in den vergangenen Tagen vom Fernmeldeamt

ein freundliches Schreiben erhalten haben, worin ein kostenloses Auswechseln des Telefons angeboten wird.

Die Freude dürfte in den meisten Fällen nicht lange anhalten. Im Telefonladen stehen nämlich beim Besuch bereits ein paar erboste Postkunden, die mit dem **Pferdefuß des Angebots** schon vertraut gemacht worden sind. Das Auswechseln ist kostenlos - aber anschließend rasselt die Telefonkasse. 90 Pfennig kostet das einfachste Telefon im Monat an zusätzlichen Gebühren. Und das macht **nach Adam Riese** 10,80 Mark im Jahr. Wenn genügend **Kunden der Post auf den Leim gehen**, kommt sicherlich ein erkleckliches Sümmchen dabei heraus. (Badische Zeitung, 13./14. Januar 1990, Übrigens)

1 3 . 4 . 6 言葉遊び、語呂合わせ的なもの

"etwas auf den St. Nimmerleins-Tag verschieben" (聖者ニンマーラインの日まで先送りする : 永遠に先送りして、何もしない)

ドン・キホーテの項で述べたことが、ここでもいえる。つまり、次のコメントは、経済を優先することによって、環境保護の問題（世界規模の自然環境破壊がリオデジャネイロで開催された世界環境会議のテーマであった）が、将来に先送りされたことを批判している。

Reife Insel

clu. Das wird Freunde kosten. Wenn das Schweizer Parlament die Lenkungsabgaben passieren läßt, tritt die kleine Insel gegen das Meer des Gemeinsamen Marktes an, um zu beweisen, daß marktwirtschaftliche Instrumente und Umweltschutz sich doch vertragen. Das lieben jene Herren der Wirtschaft gar nicht, die seit Jahr und Tag zum Gotterbarmen klagen, wenn mit fiskalischen Mitteln dem Wettbewerb um die umweltschonendste Produktion aufgeholfen werden soll. Nun strafen die Berner die Herstellung und den Verbrauch der jeweils schädlicheren Produkte mit höheren Preisen. Noch dazu lassen sie mit ihrer Erstattungsregelung auch diejenigen ins Leere laufen, die andernfalls dem Fiskus reine Habgier unterstellten. So wie diese das bei der Debatte um die Energiersteuer in der EG zur Genüge praktizierten. Mit dem zweifelhaften Ergebnis, daß beinahe gleichzeitig mit dem Schweizer Erfolg **das Brüsseler Versprechen von Rio auf den St.-Nimmerleins-Tag verschoben wurde**. Was für eine

Blamage für Kohl und Töpfer, die selbsternannten Helden von Rio, aber auch für Hans-Peter Stihl, seines Zeichens Präsident des Deutschen Industrie- und Handlestages, Mitglied der deutschen Rio-Vorbereitungskommission und vor wie hinter den Kulissen einer der lautesten Schreihälse gegen den Einsatz der Ökonomie für die Ökologie. (Badische Zeitung, 9. Juni 1993, S.11, Der Kommentar)

"Heiliger Sankt Bürokratius" (聖なる官僚様：何ごとも規定通りにことを進め、融通が利かないお役人)

お役所仕事というものは、どこでも一緒という感じがするが、とりわけ、ドイツの官僚、役人は融通がきかないので、悪評が高い。ドイツの郵便局や、役所で1、2時間待たされた経験を持つ日本人も少なくないであろう。

Post-Erfahrungen

Beamtenlogik

Oh, heiliger Sankt Bürokratius: Was wäre das Beamtenleben ohne Vorschriften, vor allem aber ohne Vordrucke? Diese Frage stellt sich ein Freiburger, der dieser Tage ein neues Domizil bezog. So ein Umzug ist mit allerhand Schreiarbeiten verbunden, schließlich muß **Hinz und Kunz** mitgeteilt werden, daß man nicht mehr am alten, sondern nur noch am neuen Ort erreichbar ist. Ganz oben auf die Erledigungsliste setzte der Freiburger deshalb die Deutsche Bundespost - der Nachsendeantrag sollte dafür sorgen, daß Briefe und Pakete gleich zur neuen Adresse umgeleitet werden.

Weil besagter Freiburger ein ordentlicher Mensch ist, teilte er auch dem Postgiroamt, das für die Verwaltung seines Postgirokontos zuständig ist, mit, daß die alte Anschrift nicht mehr gilt. Auf eigenem Briefpapier und in einem schlichten, verständlichen Satz schrieb der Freiburger seinen Postbänkern: "Ab dem soundsovielten lautet unsere neue Adresse soundso." Doch was **Hinz und Kunz**, etliche Versicherungen, Banken, die Sparkasse, die Stadwerke und andere Institutionen, die Briefe mit gleichem Inhalt erhielten, sogleich kapierten und richtig registrierten, löste beim Postgiroamt einen bürokratischen Akt aus. Ganz cool kreuzte der zuständige Sachbearbeiter auf dem Formblatt...an den "sehr geehrten Postgirokunden" das Kästle an: "Dem anliegenden Antrag kann nicht entsprochen werden, weil die Unterschrift fehlt." Aha, dachte sich

der ordentliche Freiburger mit neuer Adresse, beim Postgiroamt nehmen sie es aber ganz genau. Er hatte mit seinem schlichten Durchschnittsverstand nicht erwartet, daß die Mitteilung einer Adressenänderung bei der Postbank mit einem "Antrag" verbunden ist. (...) Joachim Sterz (Badische Zeitung, 29. Juli 1992, S.22, Übrigens)

"Leberecht Luftikus" (ケ・セ・ラ、つまり、なるようになるさ主義の人間)

難民、亡命者問題は、きわめて重大な社会問題であるのに、連邦政府は何もしないできた。保守層、しかもきわめて右寄りの支持者を失うまいとする政府与党 (CDU/CSU/FDP) の選挙戦略のため、何の手も打たずに放置してきたのだ。そのことが結果として、ドイツにおける新ナチズムの台頭に拍車をかけたともいえよう。

Frau Funcke は、外国人問題担当であったが、あまりの政府の無策に匙を投げたのである。なお、いわずもがなのことではあるが、その報告書は、まさに "Funk-Signal" (無線による信号) とも取れるという言葉遊びもこのコラムのタイトルは含んでいる。

Das Funcke-Signal

gl. Mit den Politikern ist es manchmal wie mit dem **Bürger Leberecht Luftikus**, der vor dem Berg vor ihm liegender Aufgaben stöhnt: "Es gibt viel zu tun, lassen wir's sein." ("Es wird schon gut gehen.") So auch auf dem ganz sensiblen, für den inneren Frieden nicht eben unwichtigen Feld der Ausländerpolitik. Da haben die Politiker lange Zeit alles laufen lassen, ohne vorsorgende Begleitung. Nichts ist gutgegangen. Man hat die Ängste der Leute wachsen lassen, bis eine Ausländerfeindlichkeit häßlichen Ausmaßes sich entwickelt hatte, auch Mord und Totschlag. Und manche Politiker, "christliche" vor allem, benutzten, wie in der Asylfrage, die verbreiteten Ressentiments als Mittel für ihren Zweck - und beflügelten sie dadurch. Wie gewohnt: Statt vorbeugende Politik nach einem aufklärenden, menschenrechtlichen Konzept nur ein paar Feuerwehrmaßnahmen, die den Schaden noch vergrößerten. Eine der unzulänglichen Ersatzhandlungen: die Schaffung des Amtes des/der "Ausländerbeauftragten", zuletzt, zehn Jahre lang, bekleidet von Liselotte Funcke, die es nun satt hat, das Feigenblatt auf der Blöße des Unterlassens und Falschhandelns zu sein. Sie hat sich redlich abgerackert, hat gemahnt und gewarnt, hat damit auch persönliches Ansehen gewonnen. Aber das Entscheidende: Einfluß hatte sie keinen, die Regierung hat ihr Mahnen und Warnen ignoriert, ihre ganze

Arbeit sabottiert. Nun wirft sie sie hin: Auf ihren letzten Bericht und die darin enthaltenen begründeten Forderungen haben die Regierung und die Parteien wieder nicht reagiert. Eine verständliche Reaktion auf die unverzeihliche Gleichgültigkeit. Und ein richtiges, hörbares Signal, angesichts der immer bedrohlicher werdenden Zustände." (Badische Zeitung, 20. Juni 1991, S.1, Tagespiegel)

"Hinz und Kunz" (ヒンツとクンツ : 庶民の代表)

以下、一般庶民という意味の言い回しが続くことになる (第 13.2.2 節の iv) を参照)。
スイスと言えば、アルプス、そして世界の富が集まる銀行の国というイメージだが、そこには必ずしも真つ当な手段で得られた金ばかりが集まってくるわけではない。汚れたお金の洗浄が盛んに行なわれているのである。少しでもそのクリーニングを防ごうとすれば、顧客のプライバシーに関与することになり、秘密保持と信用をモットーとする銀行としては頭の痛い問題ではある。

Vom 1. Juli an sind anonyme Bankkonten in der Schweiz verboten

Schmutziges Geld sorgte für deftige Skandale

In der Vergangenheit halfen Strafparagrafen gegen die "Geldwäscherei" nicht - Keine Barrieren gegen Steuerhinterzieher

Von unserm Korrespondenten Hans-Walter Neunzig

(...)

Das "Formular B" hat im übrigens mit dem vielzitierten Nummerkonto nichts zu tun. Das Nummernkonto stellt lediglich sicher, daß die Identität des Bankkunden nicht **Hinz und Kunz** hinter dem Bankschalter, sondern nur einem erlauchten kleinen Kreis auf Direktionsebene bekannt ist. Beim "Formular B" kannte jedoch nicht einmal die Bank, sondern nur der Anwalt oder Treuhänder die Person des Kunden. "Es geht doch nicht um die Aufhebung des Bankgeheimnisses", stellt Daniel Zuberbühler klar, "sondern nur darum, daß die Bank künftig mehr über ihren Kunden weiß." (Badische Zeitung, 24. Juni 1991, S.3)

"Normalverdiener" (普通のサラリーマン)

いわゆるバブルが崩壊するまでは、日本のいたるところ、とりわけ都市部で地上げ屋と

呼ばれる人種が暗躍した。ドイツでも改築することによって、都市中心部の住居の家賃がどんどん吊り上げられていっている。一種の地上げともいえる憂うべき現象であり、このことが結果としてドイツの住宅問題をさらに厳しいものにしていく。

結果として、普通のサラリーマンは、職場に近い都市部に住居を持つことは不可能になり、郊外に住まわざるをえない。郊外の自然は住宅建築用地として取り壊され、遠距離通勤のため多くの人々は自動車に頼ることになり、このことが公害を引き起こし、交通事故によって多くの人命が失われることにもなる。日本が歩んできた道をいまドイツが歩もうとしている。

Wohnungs-Urteil

Verheerend

uk. Nein, es sind diesmal nicht die ewigen Sozialromantiker, die die Eigentumsentscheidung der Bundesgerichte für verheerend halten. Es sind die Oberbürgermeister der Großstädte und - man höre und staune - die bayerische CSU höchstselbst, die Eingreifen der Politik auf dem Wohnungsmarkt verlangt. Bereits vor der jetzigen Entscheidung rief die FDP-Bundesbauministerin Irmgard Schwaetzer auf, ein Gesetz vorzubereiten, wodurch die Umwandlung des Altbaubestandes in edelsanierte Eigentumswohnungen gestoppt wird. Denn durch diese Umwandlung wird keine einzige Wohnung neu geschaffen. Im Gegenteil, nicht selten werden mehrere Altbauwohnungen zu einer schicken Maisonettewohnung verbunden, und die können selbst betuchte Familien oft nicht mehr bezahlen. Die Folge: **Normalverdiener** können sich das Leben in der Großstadt nicht mehr leisten. So mancher Arbeitgeber in der Republik weiß ein Lied davon zu singen, daß er wegen der unbezahlbaren Mieten keine Arbeitskräfte mehr findet, es sei denn, er zahlt etwas drauf. Der Trost von Justizministerin Leutheusser-Schnarrenberger, Mieter seien doch vor Eigenbedarfskündigungen geschützt, ist da bestenfalls naiv. Die Bauarbeiten in der eigenen Wohnung und die drohende Mieterhöhung sorgen dafür, daß Altm Mieter das Feld räumen. Und während die Innenstädte immer schnuckeliger werden, entwickelt sich in öden Außenbezirken sozialer Sprengstoff. Wenn die Politik dieser Entwicklung noch lange zusieht, werden die Großstädte bald vor allem eines brauchen: mehr Polizei. (Badische Zeitung, 1. Juli 1992, S.4, Zum Thema)

"Otto und Anna Normalverbraucher" (普通の消費者、オットーとアンナ)

例えば、清掃局の職員たちが、賃上げ闘争を行なったならば、当然にゴミ収集が滞る。闘争が長い間続くと、ゴミはたまるばかりである。そういった場合、連帯に基づく市民の忍耐はどこまで続くのだろうか。

Arbeitskampf

Es wird ernst

Nach dem Streikprogramm, das die Gewerkschaft ÖTV für die kommenden Tage für Freiburg angekündigt hat, kann man die Aktionen der abgelaufenen Woche nur als Vorgeplänkel bezeichnen. Nun wird es also richtig ernst, wenn neben dem öffentlichen Nahverkehr weitere sensible Bereiche vom Streik betroffen sein werden. Bäder werden geschlossen; Spielplätze und Anlagen werden nicht mehr gepflegt; Theatervorfürungen müssen ausfallen; Häuslebauer kommen in ihren Zeitplänen nicht voran, weil die FEW keine Anschlüsse mehr legt; im Universitätsklinikum wird mehr oder minder nur ein Notbetrieb möglich sein, weil das Personal ein größeres Stück Lohnkuchen haben will. Dem Vernehmen nach wird auch bei der Post in Freiburg in den kommenden Tagen nicht mehr allzu viel funktionieren. Außerdem werden sich bestimmt auch die Arbeiter und Angestellten der Bundesbahn wieder etwas einfallen lassen, um ihre Lohnforderung drastisch zu dokumentieren. Und wenn sich nun in einigen Tagen die Müllberge anhäufen werden, weil der Kehricht nicht mehr abgefahren wird, dann wird es buchstäblich jedermann stinken, daß noch immer keine Einigung im Tarifstreit erzielt worden ist. Freilich: Jeder Betroffene der Streikaktionen - also jeder von uns - muß sich drüber im klaren sein, daß die eigentlichen Adressaten des Arbeitskampfes ganz andere sind: die Arbeitsgebervertreter am Verhandlungstisch. Hoffentlich ist denen bewußt, welche Opfer **Otto und Anna Normalverbraucher** in diesen Tagen abverlangt werden. Joachim Sterz (Badische Zeitung, 2. Mai 1992, S.18, Übrigens)

"Otto Normalbürger" (普通の市民)

長い間フリードリヒ大王の遺骸は、シュバーベンのヘッヒンゲン城の教会に安置されていた。ドイツ統一がなったというので、遺骸はフリードリヒ大王がかつて治世を行なって

いたポツダムに移されることになった。

統一後 10 カ月がすぎたドイツ、及びドイツをとりまくヨーロッパの情勢を考えるならば、そのドイツの首相たるコールは、すでに過去となった死者を葬る儀式にのんびりと参列している場合ではないのではないか。かつての東ドイツの経済はいっこうに上向かず、人々はコールに裏切られたと感じ始めていたのである。ドイツが目指すべきは、かつての絶対主義などではありえないことは自明である。コールが行なったことは、逆向きの愛国主義を鼓舞し、右翼勢力を元気づかせるものでしかない、と社説の書き手レオポルト・グララーは主張する。

そして、その後の 2 年たった 1991 年において、ドイツは、経済の後退と並行するかのようになり、ネオ・ナチが台頭し、外国人が敵視されるという、社会的にはかなり陰悪な状況となっているのである。それに鑑みるならば、コールが 1989 年に行なったこと（西側ドイツの経済力で東側ドイツを取り込んだこと）には多くの問題があったといえるのではない。

コール政権の保守化、右傾化の仕上げは、リベラル派として世界的にも名声を築き上げてきたワイツゼッカー大統領の後任として、ほとんど無名であったザクセン州法務大臣シュテフェン・ハイトマン (Steffen Heitmann) を推し立てたことにあるといえよう。

ハイトマンとはどのような人物であるか。政治家となる前は、かつての DDR で "Pfarrer" (牧師) を勤めていたこの人間は、女性の社会的役割を 3 K、つまり "Kinder" (子供)、"Küche" (台所)、"Kirche" (教会) にあると広言し、ナチズムという過去をドイツが永遠に背負わなければならないというのは理解しがたい、と断言してはばからないのである (『バーデン新聞』1993 年 9 月 20 日付)。

なお、これまで大統領候補として、さまざまな人物の名 (H・M・エンツェンスベルガー、イェンス・ライヒ、イグナチオ・ブービス) が取り沙汰されてきたが、最終的に SPD は、ノルトライン・ウェストファーレン州知事であるヨハンネス・ラウを推薦することを決定している。FDP が推そうと執心していた、ドイツ統一に大きく貢献した前外務大臣ゲンシャーは、かつての DDR 出身でもあり、より多くの国民の賛意を得ると考えられていたが、ゲンシャー自ら大統領候補になる意志はないとの表明を行なっている (『バーデン新聞』1993 年 9 月 21 日付)。これで、ドイツ連邦の大統領は、ラウかハイトマンか、あるいはダークホース的な第 3 の人物かということになった。

Wo aber liegt Deutschland?

Von Leopold Glaser

Eingentlich, könnte **Otto Normalbürger** denken, habe der Bundeskanzler Wichtigeres zu tun, als sich wegen der Verlegung der sterblichen Überreste zweier verblichener Preußenkönige **die Nacht um die Ohren zu schlagen**. Aber so ist er halt, unser Kanzler: ein Meister der Zeichen. Leider ist es wieder einmal ein falsches. Immerhin, er scheint zu spüren, daß noch etwas fehlt. Der Mensch lebt nicht vom Markt allein.

Es fehlt noch viel, bis zusammengewachsen sein wird, was zusammengehört, keine Frage. Die "historische Stunde" hat uns überfallen aus grauem Himmel, ohne Wettervorhersage. Und sie hat unsere bescheidenen teilstaatlichen Identitäten (Ruhe, Ordnung, Sicherheit, Wohlstand) erschüttert. Das merken wir jetzt erst, nach den schönen Stunden des 9. November (1989), da sich nun die Trennung verschärft fortzusetzen beginnt - wahrgenommen als nicht nur ökonomischer, auch als seelischer und geistiger Riß.

Vermutlich spürt Kohl die Unsicherheit und Ratlosigkeit und die Sehnsucht nach einem tragenden Fundament. Gespürt hat er ja. Und Sinn für Symbole auch. Aber muß es Friedrich, der Preuße sein? (...) (Badische Zeitung, 17./18. August 1991, S.4, Leitartikel)

"Larifari" (ラリファリ)

ドゥーデン (DUDEN 1989: 928) によると、ラリファリ (Larifari) は、拒否の叫び、ナンセンス、たわごとといった意味の叫びである。選挙戦に勝とうという目的で、ブッシュは、ヨーロッパ共同体が農産物に多額の補助金を出していることを批判したが、それはナンセンスだというわけである。国内での点をあげようと思って、外に敵を作るとするのは、外交の常套手段であり、「ルーカスを打て！」の項で述べたように、9カ月後に、クリントンが用いた手段でもある。

Larifari

eh. Der amtierende US-Präsident George Bush scheut jetzt offensichtlich kein Mittel, um seine Wiederwahl im November doch noch zu retten. **Dabei ist es pures Larifari**, wenn er die Brüsseler Getreide-Exportsubventionen als sein Angriffsziel nennt, um 30 Millionen Tonnen US-Weizen auf den Weltmarkt zu drücken. Aber die Stimmen der US-Farmer

könnten in der Wahlschlacht den Ausschlag geben. (...) die erste Reaktion Australiens, Argentinens und anderer großer Getreideexporteure deutet an, daß der amerikanische Präsident sich mit seiner Kampfansage gegen die EG **einen Bären dienst erwies**. Diese Länder der sogenannten Cairns-Gruppe sind nämlich mit - und vielleicht sogar noch schwerer betroffen als die Westeuropäer. So hat Washington für die Uruguay-Abschlußverhandlungen möglicherweise Verbündete gegen die EG-Agrarpolitik verloren, zumindest falls George Bush Präsident bleibt. (Badische Zeitung, 4. September 1992, S.14, Der Kommentar)

"Zetermordio!" (助けてくれ！)

この表現は、固有名詞として挙げたわけではなく、いわば言葉遊び的な面があるということで、ここで例として取りあげた。"Zeter"は、中高ドイツ語に由来するもので、「強盗、泥棒だ、助けてくれ！」という意味の叫びであり、"mordio!"は、「人殺し！」という叫びである。"Zeter und Mordio/Zetermordio/zetermordio schreien"という具合に、表記は3通りあるようである (DUDEN 1992: 831-832)。

Anrücklich

pjv. Offensichtlich hat die Pharmaindustrie zuviel Geld. Noch vor gut drei Jahren wehrte sie sich heftig gegen die Forderung von Minister Blüm, im Rahmen der Gesundheitsreform einen Solidaritätsbeitrag von knapp zwei Milliarden Mark zu leisten. **Sie schrie Zeter und Mordio** und sah die gesamte, lebensnotwendige Forschung gefährdet. Jetzt zieht allein ein Pharmahersteller eben mal locker 300,000 Mark aus den Taschen, um die Protestaktionen der Ärzte gegen die Sparpläne des neuen Bundesgesundheitsministers und seine "Reform" zu finanzieren. Das Erstaunliche dabei ist aber nicht, daß die Arzneimittelhersteller trotz der Blümschen Reform, die ja angeblich existenzbedrohend sein sollte, in der Lage sind, locker einige hundert Tausender auf den Tisch zu legen. Der Hartmannbund, eine Interessenvertretung der Ärzte, nimmt das Geld sogar an. Die Begründung: **Man säße mit der Pharmaindustrie in einem Boot**. (Badische Zeitung, 7. September 1992, S.1, Tagesspiegel)

1 3 . 5 . おわりに

次の新聞論評記事の冒頭には"Der Berg kreite, und heraus kam am Ende: nichts." (山は産みの苦しみの叫びをあげたが、結局出てきたものは何もなかった。) という言い回しがあるが、これは"Der Berg kreite, und gebar eine Maus."のバリエーションである。そもそも、ドイツ語のこの言い回しは、古代ローマの詩人ホラチウス (紀元前 65 - 紀元前 8 年) に由来するとされている。

日本語にも「泰山鳴動して、鼠いっぴき」という言い回しがある。これは一見中国由来のように思えるが、実際はドイツ語の言い回しと同起源で、「大山鳴動して鼠いっぴき」を、いかにも漢文風にいい換えて、大山に泰山を当てたもののようである。

Chaos-Politik

jos. **Der Berg kreite, und heraus kam am Ende: nichts.** Was ist das für eine Politik, muß man immer eindringlicher fragen, bei der Koalitionsvertreter in nächtlicher Marathonsitzung - und nach endlos langen Vor-Diskussionen - erst eine Mineralölsteuer-Erhöhung und keine Vignette beschließen, sie blo ein paar Stunden später aber von der eigenen Fraktion zurückgepiffen werden: April, April - dabei ist doch erst März.(...) (Badische Zeitung, 5. März 1993, S.1, Tagesspiegel)

本章では、ドイツ語の固有名詞を構成要素として含むドイツ語のイディオムをいくつか実際の使用例にそってながめてきた。たとえば日常の新聞を読みこなすだけでも、イディオムと取り組むことがドイツ語学習においてどれほど重要かということが、明らかにできたのではないだろうか。アクチュアルなドイツに関するランデスクンデと並行して、イディオムを学習することも可能であるし、効果があるだろうという考えに基づいて、本章の論述をおこなってきた。

ドイツ語学習には、狭い意味での文法、意味論、語用論にとどまらず、ドイツ語の世界を越えたドイツ語文化圏を包摂するヨーロッパ文化、とりわけ、古代ギリシャ、古代ローマの文化、そして聖書に関する知識がきわめて重要であるといえよう。実際にイディオムを眺めてみると、改めてそのことが納得できるのではないだろうか。

20 世紀も終わろうとしている時点で、人類の歩んできた道、築いてきた歴史、文化に思いをはせる意味で、ウィットを引用して、本章の論述を終えることにしたい。

Es ist passiert. Ein Atomkrieg hat die Erde vollkommen verwüstet. Der letzte überlebende Mann hat sich aus den Trümmern befreit und macht sich auf die Suche nach Überlebenden. Nach Tagen trifft er endlich eine Frau.

"Hast du irgendwas zu essen? Ich bin kurz vor dem Verhungern", bettelt er die Frau an.

"Leider nur einen Apfel."

"Um Himmels willen", regt sich der Mann auf, "soll das ganze Theater **von vorn anfangen!?**"

(Heute schon gelacht?:103)

(一発の原子爆弾が地球を荒廃し尽くした。生き残った男ががれきの山から抜け出し、他に生き残った者がいないか探しに出た。いく日かたって、男はついに一人の女に出会った。

「何か食べるものは持っていないか？ 飢え死に寸前だ」、男は女に乞うた。

「残念だけど、りんご1個しかないわ。」

「りんごなんか、とんでもない」と、男は、飛び上がった。「これまでの人類の歴史をもう一度初めから繰り返せというのか？」^{*3)}

*3 このウィットは、旧約聖書にある楽園追放の物語のパロディーである。明示的にイディオム表現が登場しているわけではないが、男の発言がイディオム表現を踏まえていると理解できる。すなわち"bei Adam und Eva anfagen" (そもそもの始まりから再び始める) というイディオム表現である。そのために、いっそう落ちが印象づけられていると思われる。

第 1 4 章 政治的カリカチュアに見るドイツ統一とイディオム^{*1}

Wir sind das Volk. (われわれが国民だ)

Demokratie - jetzt oder nie! (民主主義を一いまでなければ永遠にこない)

Kein zweites Experiment mehr. Wiedervereinigung. (二度と実験は嫌だ。統一だ)

Zusammenwachsen, nicht zusammenwuchern! (一体となるのだ、はびこるのではない)

Wir waren das Volk. (われわれは国民だった^{*2})

1 4. 0 はじめに

ドイツ統一とはいったい何であったのか。いっこうに埋まらない東西ドイツの経済格差のみならず、東西ドイツの人々の中の精神の亀裂、それを埋めるのは幾世代も要するのではないか。どのような方向に解決の可能性を求めることができるかについては、マーツを初めとする人々の努力に期待したい (Maaz 1991)。ここでは、そのようなドイツ統一の過程がどのようなものであったかを想起することを狙いとしながら、政治的カリカチュアに描き出されたイディオムを見ていきたい。

本章における論述は、ドイツ統一以後における社会、経済、政治、そして言語および言語行動といったように、本来的にはさまざまな次元における問題に関わらざるを得ないといえるが、直接的にはドイツ語学習における一段階としてのイディオム学習を狙いとしてしている。現代ドイツに関するランデスクンデをバックグラウンドとしながら、効果的なイディオムの学習法を考えることにある。

*1 本章における論述は、筆者が交付されている科学研究費補助 (基盤研究(C)(2)「政治的カリカチュアを素材とするドイツ語イディオム学習・教授法に関する基礎研究」(課題番号: 10610499)) による研究成果の一部である。

本章における論述は、1996年11月日本独文学会中国・四国支部研究発表会(於 広島市アステール・プラザ)における発表原稿を基にしている。時間制限のため、原稿の一部のみを発表した。その後、他の新聞や雑誌から収集したカリカチュアを付け加えて、記述を詳しくしたものをドイツ語版として、1997年8月オランダ・アムステルダムで開催された「第11回国際ドイツ語教師大会」(IDT)に於いて"Die Deutsche Einheit und idiomatische Wendungen in politischen Karikaturen. Zur Behandlungsmöglichkeit von idiomatischen Wendungen im Deutschunterricht für Ausländer"の題目で発表した(Ueda 1998a)。このドイツ語版を大幅に短縮して雑誌論文としたものが(Ueda 1997c)である。さらに、ウィットをも素材として付け加える形で考察を展開したものが(Ueda 1999a, 1999b)である。

*2 最初の標語以外は、Ewald Lang, Wendehals & Stasi-Laus. Demo-Sprüche vor der Wende. München: Wilhelm Heyne Verlag, 1999 (Heyne Mini 1451)から取ったものである。

筆者は、すでに、政治的カリカチュアを素材とするイディオム学習に関する具体的な提案をいくつかの箇所で行った (Ueda 1997a, 1998a, 1999a, 1999b)。本章における論述は、そういった提案をまとめる形で、日本語で発表するものである。同時に、ドイツ統一後10年が過ぎようとしている時点で、その歴史的イベントを振り返ってみることも、必要なことだと考える。

本章における論述は、そのような理由から、2つの部分からなっている。まず、ドイツ統一の過程を想起するため、政治的カリカチュアを時間の流れに沿って配列し、そのカリカチュアに関するコメントを付していく。同時に、そのカリカチュアの下敷きとなっているイディオムに関して、日独対照の観点を踏まえながら、説明を加えていく。ドイツ統一に関する政治的カリカチュアは、有効なイディオム学習をおこなうための素材であると、筆者は理解している。

第2の部分は、統一ドイツの10年を、その間におけるいわばキー・ワードを手がかりとして、振り返ることである。統一ドイツ10年の歩みはどのようなものであったのだろうか。そして、そこからなにを学び取ることができるだろうか。外国語学習の目標は、学習対象言語の能力を涵養することにあるとしても、それはまた目標言語圏の文化に対する批判的な視点を涵養することでもあらねばならない。そしてさらには、学習者の母語文化に対する反省意識を培うものでもあらねばならないだろう。

14.1 政治的カリカチュアに見るドイツ統一とイディオム

以下、ドイツ統一に関する政治的カリカチュアを取り上げ、当該のカリカチュアが関連している出来事についてコメントを付していく。そして当該のカリカチュアが下敷きとなっているイディオムについての解説を行っていくことにする。

14.1.1 1989年7月1日以前 (前史)^{*3}

「おいしい蛙の太股はいかが！ モスクワの天候が急変したといつまでも鳴き騒いでいるのには、苛立ってしまったぞ！」 (Leckere Froschschenkel! Sein ewiges Gequake vom

*3 「壁」の崩壊前からドイツ統一に至るまでの時期区分については、他の場所で詳しく説明してある (Ueda 1997b: 6-7)。

Moskauer Wetterumschlag ging mir auf die Nerven!) といって、DDR づくりの料理を運んでいるのは、いうまでもなく DDR の国家主席 E・ホネッカーである。このカリカチュアは、1989 年 1 月 20 日のものであるが、ホネッカーの硬直した思考は、現実における政治情勢の変化を正確に見極めることができない。こうして DDR は孤立化の道を歩んでいくのである。



なぜ、蛙なのか。このカリカチュアの裏には、「天気蛙（雨蛙）」(Wetterfrosch) という天気予報を意味する語がある。そして、他方「不愉快なものをやむなく受け入れる」(einen Kröte schlucken müssen) という言い回しが基盤となっていると見ることができる。あえて不愉快なものを甘受するよりも、逆に攻撃的にその蛙を自分の思いのままに料理してしまいたいというホネッカーの本音を描き出していると解することができる。

ゴルバチョフが、「開明政策」(Glasnost) および「民主改革政策」(Perestroika)の標語の下、政治改革を押し進め、西側諸国とも緊張緩和をはかっていく中、ホネッカーは既定の路線、資本主義に対抗すべき社会主義国家の理念にしがみついていく。そのようなホネッカーを揶揄するカリカチュアがこの後多く見られるようになる。

14.1.2 1989年7月1日－1989年10月17日（大量脱出、月曜デモ、DDR 建国40周年式典、ホネッカー退陣）

いくら「DDR 色の社会主義」(Sozialismus in den Farben der DDR) を実現すると言おうとも、その DDR の硬直化した態度は、まさに次のカリカチュアが示しているように、奈落の底に向かって突進していくようなものであり、勇ましいステレオタイプの文句が一層むなしく響くばかりである。

「社会主義の進行は、牛もロバも止めはしない。」(Den Sozialismus in seinem Lauf hält

weder Ochse noch Esel auf.) というのは、E・ホネッカー (Erich Honecker) が1989年8月14日に、エアフルトの電子機械工場で32ビットのマイクロ・プロセッサが完成されたときに、社会主義の勝利を謳った言葉であるが、現実とはいうと、世界の電子機械産業は、その遙か彼方の先をいていたのである。



他方、この年の5月にハンガリーがオーストリアとの国境線の「鉄のカーテン」を段階的に取り壊し始めたことが引き金となり、DDRの将来にいかなる希望も見出し得ないと絶望し、DDRを見限った多くのDDR市民が、ハンガリー、オーストリア経由でBRDへと移住していているという現実があった。DDRが唱える社会主義の没落は、もはや誰にも止めようがない状況にあったといえるのである。(1989年8月19/20日)。(1989年11月14日のカリカチュアを参照。)

"Den Sozialismus in seinem Lauf hält weder Ochse noch Esel auf." (社会主義の歩みは牛もロバもとどめない。) この一文は、かつての労働運動の過程で作られたスローガンであるようだが、本来そこでいわれている牛は国家権力、ロバは教会権力を指していた (Hildebrandt 1991: 66)。DDR民主化運動の過程で作られた標語"Die Demokratie in ihrem Lauf hält weder Ochs noch Esel auf." (民主主義の歩みは牛もロバもとどめない) (Lang 1999: 91)は、このホネッカーの発言を言い換えたものである。

DDR市民の願い、それは一言でいえば、自由ということである。自由すなわち旅行の自由であり、言論の自由であり、集会の自由である。壁の崩壊に至る過程は、DDRの国民が背筋を伸ばして歩き、一人前の大人として発言する勇気を取り戻していく過程でもあった。もちろん、依然として、シュタージ (国家保安省) の介入を恐れながらではあったが。

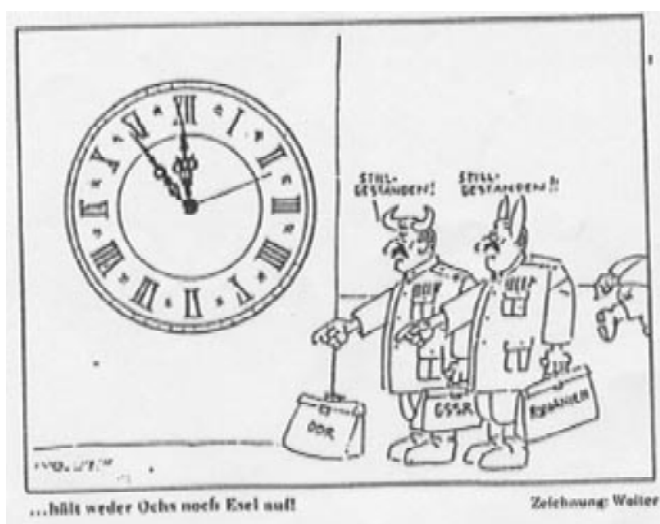
DDR の建国 40 周年、その 40 年間の成果は、まさに次のカリカチュアが示しているように、人間扱いをせず、見ない、聞かない、言わないという国民を作り上げることであった。(1989 年 9 月 23/24 日) この「見ざる、聞かざる、言わざる」(Nichts sehen, nichts hören, nichts sagen) という言い回しは、日本学者 A・ウェデマイヤー (André Wedemeyer) によると日本起源という事になっている (Röhrich 1991/92: 1458)。



14. 1. 3 1989 年 10 月 18 日－1989 年 11 月 28 日 (壁の開放、クレンツ登場、クレンツ退陣)

ホネッカーがいかに社会主義の理念を振りかざし、スターリン主義に固執し、国内の民主化の動きを押さえ込もうと努めても、もはや歴史の流れを押し留めることはできなかった。(前出の 1989 年 8 月 19/20 日のカリカチュア参照)。今では DDR が崩壊し、残るのはチェコスロバキアとルーマニアだけとなった。それも、時計を見ると、ほとんど「12 時 5 分前」*4 となっており、民主化のうねりが両国を巻き込んでいくのは、もはや避けられない。「時よ止まれ！」(Stillgestanden!) といったところで止まるわけではない。「牛もロバも時の進行を止めることはできない！」(1989 年 11 月 14 日)

ドイツ語における本来の言い回しは、「蛇をじっと見つめているウサギ」(Wie das Kaninchen auf die Schlange starren) であり、これは日本語で言えば「蛇に睨まれたウサ



*4 "fünf vor zwölf" (12 時 5 分前) という表現は「大きな災いが起こる寸前」という意味のイディオム表現である。これについては、第 8 章を参照。

ギ」と言うことになろう。しかし、「窮鼠猫を咬む」という言い回しもあるように、立場の逆転もあり得るのである。

ホネッカーに代わって DDR の指導者として登場した E・クレンツであったが、彼は結局のところホネッカーの路線を踏襲するしか脳のない官僚にすぎなかった。民主化を推し進め、勢力を伸ばしてきた野党（ウサギ）に睨まれたクレンツ（蛇）という、本来の言い回しのイメージとは逆転した構図となっている。（1989年11月17日）



"Wie das Kaninchen auf die Schlange starren"（ウサギが蛇を凝視するように。→恐怖で身がすくんで何もできない）。日本語では、「蛇に見込まれた蛙の様」あるいは「蛇に蛙」ということになる。ドイツ語では、蛙ではなく、"Kaninchen"（飼うウサギ）が驚きのあまりすくんで蛇を凝視しているというイメージである。日本語で「蛙」となっているのは、稲作文化と関係が深いということであろう。畦道で青大将が蛙を飲み込もうとしている光景は、特に田植え時期には、よく見かける。

ついでながら、「飼うウサギ」が関与しているもう一つのイディオム表現に"sich vermehren wie die Kaninchen (Karnickel)"（飼うウサギのように増える）というのがあるが、日本語ではこれも「飼うウサギ」ではなく、「ネズミ」となる。つまり「鼠算方式に増える」である。

社会主義統一党（SED）一党独裁による国家の支配、国家保安省（Ministerium für Staatssicherheit=略称 Stasi（シュタージ））という国家の中の国家としての秘密警察に監視された状態、国家の恣意から自由になった DDR 市民。しかし、その自由を心ゆくまで味わうまもなく、DDR 市民は、資本主義国家 BRD のくびきにつながれることになる。ある意味で、ドイツ統一は両ドイツ国民の意思によって実現したというよりも、BRD が金力にものをいわせて強引に押し進めた「併合」（Anschluß）というのが実態ではなかったの

か。そこには、明らかに、統一の総裁として歴史に名を留めようというコールの野望も絡んでいた。(1989年11月21/22日)

BRDの体制をそっくり受け入れる「加盟」(Beitritt)という形でDDRという国家は消滅した。そのことによって「わけ知りの西の人」(Besserwessi)のイメージ、そして現在につながる「東西論争」(Ossi-Wessi-Streit)の一つの原因ともなっているといえる「傲慢な西の人」(arrogante Wessis)対「怠け者の東の人」(faule Ossis)あるいは「東の強情」(Ost-Trotz)対「西の傲慢」(West-Arroganz) (Dahn 1996)というパターンができあがったのである (Maaz 1991、93頁以下参照)。



このカリカチュアの下敷きになっているイディオム「あるものを紐につないでおく」(einen an der Leine haben)とは、「あるものを意のままにする」という意味である。"einen an der Leine haben/halten"は状態を表現しているが、"jmdn. an die Leine legen"は他動的な表現である。日本語としては「鼻面を引き回す」が意味の上では対応している。表現上それに対応している"jmdn. an der Nase herumführen"というドイツ語の言い回しは"jmdn. täuschen, irreführen" (DUDEN 1992: 509)と説明されているので、意味がずれている。首輪から紐をつけられた犬のイメージが見出しのイディオム表現によって喚起される。

「壁」の崩壊によって、時の女神が自分にほほえみかけ、東ドイツの保守勢力を巻き込むことによって、統一なったドイツにおいて行われるはずの総選挙に勝利できると見たコールは、金の力にもものを言わせて統一に向かっての政策を推し進めていく。そして、DDRの人々といえば、コール首相の夢をばらまく言辞に弄されて、ただ腰をかがめて付き従うだけである。DDRの国民を引っ張っていくべき、DDR政府そのものについても、これは当てはまる。それを揶揄しているのが、次のカリカチュアである。

DDR経済は、BRDがいくら強いドイツ・マルクを投入しようとも、底抜けの経済であり、投資効果は一向に見えてこない。なぜか。それは、投資されたマルクは全て西に戻っ

ていく仕組みになっているからである (Höppner 1996)。潤ったのは、西側企業だけである。いかに DDR の人々があこぎな資本に対して無力であったかは、痛々しいほどである。(1989年11月24日)



このカリカチュアの基になっているイディオム表現は、もちろん「底抜けの樽 (Ein Fass ohne Boden sein)」である。レーリヒの説明によると、このイディオムはギリシャ神話に遡るとのことである (Röhrich 1991/92:418)。日本語で「底なし」といえば、「はてがないこと」で、大酒飲みや限りがないことに対して使われる。似ているが「底抜け」は、「しまりがないこと、とめどがなく、はなはだしいさま」(『日本語大辞典』1143頁)を意味する。ドイツ語では、大酒のみについては使わない。

14. 1. 4 1989年11月29日－1990年3月18日 (人民議会第1回目の自由選挙への道)

幾度かの変更を経た後、最終的には1990年3月18日に、DDRにおける最初にして最後の自由選挙が行われることになった。いわばDDRにおける民主主義の学校が始まったというわけである。しかし、実質的には、BRDの既成政党がDDRにおいて野党として名乗りを上げた各政党を指導するという形で、もっぱら西側のペースで選挙戦が行われたのであった。



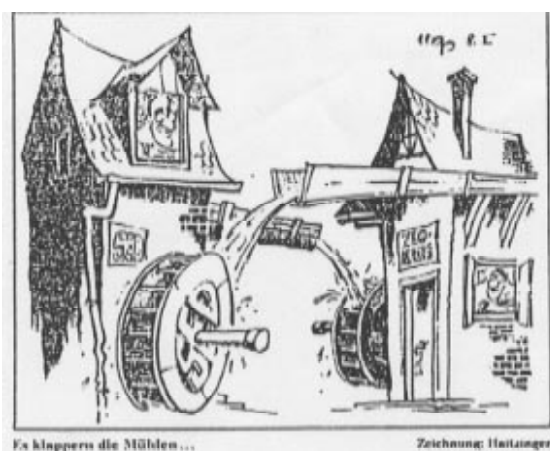
当然ながら、かつて一党独裁を誇っていた社会主義統一党 (SED) に対する風当たりは強い。社会主義統一党が党首にG・ギジ (Gregor Gysi) を選出したのは、1989年12月8日のことであった。そして、12月16日には、党名を SED・PDS と、折衷的な2枚看板にしたのであった。鈍重な SED が変わり身の素早さを見せたのである。しかし、表向き民主主義 (PDS) という山羊の毛皮をかぶっても、所詮その根本的な体質が SED (狼) のものであることに変わりはない、ということを、このカリカチュアは的確に描き出している。

(1990年1月10日)

このカリカチュアの下敷きとなっているイディオムは、「羊の皮を着た狼」(Ein Wolf in Schafskleidern (im Schafspelz)) である*5。本来は『新約聖書』「マタイによる福音書」7章15節に由来するものであるが (Röhrich 1991/92: 1740-1741)、カリカチュアそのものは、明らかに『グリム童話』「狼と7匹の小山羊」に依拠している。

SED・PDS は、その後2月4日に、SED とのつながりを表面的に断ち切るため党名から SED を削除し、PDS (民主社会党) となった。しかし、SED の後継党としてのイメージは現在に至るまで払拭しきれていない。そしてさらに、シュタージとの関わりが深かったという疑いもこの党にはつきまとっている。

そして、シュタージとかつてのドイツ赤軍派がつながっていたという事実が明るみになり、ネオナチとの関連も取り沙汰されている。そういう関係をこのカリカチュア (1990年1月11日) は、描いている。基



になっているイディオムは、「他の人の水車を回す水」(Wasser auf jmdes Mühle sein) であり、意味は「他の人を助ける」ということになる (DUDEN 11:783)。つまり、SED とネオナチは、互いに助け合っているということである。同じく水車に由来するイメージに基づく言い回しに "Oberwasser bekommen/kriegen" (有利な条件になる) と "Oberwasser haben" (有利な状況にある) がある。

1989年11月28日に BRD 首相コールが「10項目案」をドイツ国会で発表した時点では、発表した当のコール自身ドイツ統一はまだまだ将来の目標であるとの認識を持ってい

*5 "Zu viele Wölfe von gestern im Reformershafspelz von heute" (かつてのオオカミどもが、改革者という羊の衣を着ている) (Lang 1999: 115) という標語は、まさにこのカリカチュアが描いている状況を表現している。変わり身の早さの極端な例として、かつてのシュタージの総元締めであった M・ウォルフ (Markus Wolf) がいる。彼は、1989年11月4日、アレクサンダー広場における大集会で初めて公衆の面前に登場してきた。しかも民主化運動を支持する者としてである。当然多くのブーイングがあった。そのウォルフをやり玉に挙げているのが、次の標語である。"Keinen MARKUS WOLF im Schafspelz!" (羊の皮を着たマルクス・ウォルフは、ごめんだ!) (Lang 1999: 80)

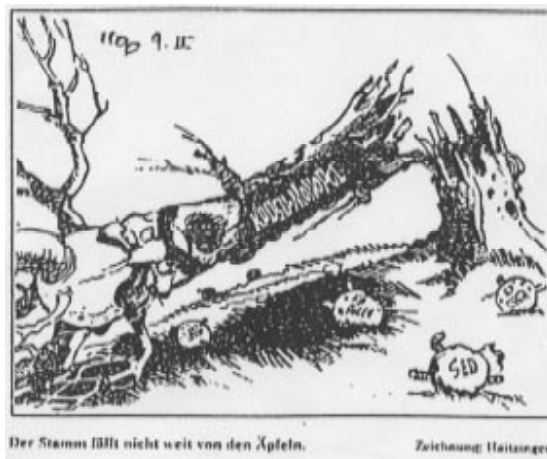
たようである。しかし、壁が開放されても依然としてDDR市民の移住の波は収まらない。

国民の国外脱出によってDDRの社会的機能はほとんど麻痺状態に近くなってきていた。クレンツの跡を継いで、DDR国民の期待を担って登場したH・モドロウ(Hans Modrow)であった。しかし、そのモドロウの現実認識も甘かった。それほどにDDR経済の崩壊は進行していたのであり、もはや1日も早く統一し、BRDの経済力でDDR経済の建て直しをはかる以外道はないことをモドロウも悟らざるを得なかった。



現実の政治の展開がコール、モドロウ2人の指導者の思惑を越えて、どんどんとドイツ統一へと向かっていったのである。もはや「カタツムリの歩み」(Schneckentempo)で悠長に構えているわけにはいかなくなっていた。(1990年2月7日)

東西ドイツの統一が可能になったのも、遠因をたどれば、ソ連においてゴルバチョフが「開明政策」(Glasnost)、「民主改革政策」(Perestroika)を推進し、東側諸国がそれに勇気づけられて民主化を目指してきたからであった。そしてそのゴルバチョフの政策は、いつしか自らにもふりかかってくる。1990年2月3日、ついにソビエト共産党は指導的役割を放棄する。すなわち共産党の一党支配が崩壊したのである。

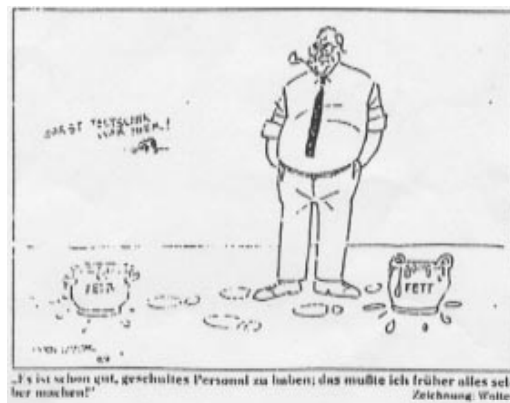


このカリカチュアの下敷きになっているのは"Der Apfel fällt nicht weit vom Stamm" (リンゴは幹から遠くには落ちない) というイディオムあるいはことわざであるが、その言い回しをひっくり返して、「幹が倒れるのはリンゴから遠くないところである」(Der Stamm fällt nicht weit von den Äpfeln) と言い換えているのである。「子が転けたら、親も転けた」というわけであろうか。(1990年2月10/11日)

ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』によると、"Der Apfel fällt nicht weit vom Stamm"

という言い回しは、「良くない素質において両親と非常に似ている」(DUDEN 1992: 47) こととある。日本語では「此の親にして此の子あり」という言い回しが、意味としては対応していると思われるが、日本語の言い回しは、良い意味でも悪い意味でも使われる点で、ドイツ語の言い回しとは異なっている。似たような表現を挙げると、「蛙の子は蛙」、「瓜の蔓に茄子はならぬ」がある。

パイプを加えて自分の不始末の結果を悠然と眺めているのは、いうまでもなくコール首相であるが、このカリカチュアの基となっているイディオムは、「不始末、不手際、不用意な発言で、ある人の気分を害する」(Bei jemandem ins Fettnäppchen treten) である。この言い回しは、雪深い地方の農家で冬に暖炉のそばに油鍋をおいてあった。それは、雪の中を訪れる客人の濡れた靴を暖炉で乾かしたあと、靴に塗るためのものであった。その鍋(あるいは浅い皿)に足をそのまま踏み込むことは、床に油を塗り散らすことになる。その後始末をする主婦としては機嫌が悪くならざるをえない、ということに由来している(DUDEN 1992: 202)



壁に「ホルスト・テルチクがここにいた！」(Horst Teltschik war hier!) と書かれているが、テルチクとは、コール首相のいわば頭脳的存在として仕えていた人物である。テルチクの助言と進言によって、コールは困難な政局を何とか乗り越えてきた。コール自ら乗り出せば、次の1990年3月7日のカリカチュアが示しているように、すべてをぶちこわしにする可能性の方が大きかったというのが、それまでのコールであった。(1990年3月3/4日)

旅行会社のカウンターの前に大きなハンマーをかついで立っているのは、象のぬいぐるみをきたコール首相である。そして左手に提げている鞆には「ポーランド」とある。

このカリカチュアは"sich benehmen wie ein Elefant im Porzellanladen" (瀬戸物店内の象のように振る舞う) というイディオムが基になっているのだが、具体的には何を意味しているのだろうか。それは、ポーランドとの国境をめぐる外交交渉に関わっている。

東西ドイツが一つに統一されたとき、ポーランドとの国境線はどうなるのだろうか。ポーランドにとっては、気が気でならないのは当然である。というのも、DDR との間には、



一応同じ盟友国として国境に関する協定が取り交わされていたが、統一が実現したときのドイツ人国家との間にはまだ協定がない。

外相のゲンシャーが慎重に進めてきたポーランドとの交渉を、コール首相は、不用意な発言でぶちこわしにしたのである。そしてさらにそのぶちこわし外交を展開するべき所を求めているという

批判がこのカリカチュアには込められている。(1990年3月7日)

また、コール象が担いでいる木製ハンマーからは"Holzhammermethode" (荒っぽいやり方) というイディオム表現も、このカリカチュアのモチーフとなっていることが見て取れる。

どしゃぶりの雨の中で (Im Schnurlregen) ずぶぬれになって、1990年3月18日と表示されたバス停の前で、立ちつくしている3人の男たちは、胸に付けたワッペンを見ると、DDRにおける最初にして最後の人民議会自由選挙を前にしたDDRの保守政党「民主主義の出発」(Demokratischer Aufbruch)、「民主社会同盟」(Demokratische Sozialunion)、「キリスト教民主同盟」(Christliche Demokratische Union)の各党首たちである。そこに傘を持って駆けつけているのは西ドイツのコール首相である。

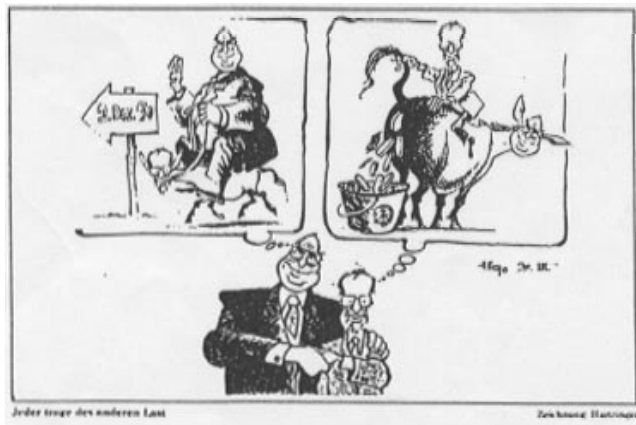
これはDDRの「民主主義の出発」の党首であるW・シュヌーア (Wolfgang Schnur) が、シュタージの協力者であったということで、党首を辞任せざるを得なくなり、そのとばかりで、同じ保守連合を形成している他の政党にも極めてマイナスになっているという事態を描いている。そのマイナス点を、何とか回復しようと傘を持って駆けつけてきているのが、コールということである。



そして、このシュヌーアの辞任は、この後に続く一連のシュタージ疑惑の始まりともいえるべきものであった。(1990年3月16日)

14. 1. 5 1990年3月19日－1990年8月22日（通貨・経済・社会同盟）

1990年3月18日のDDRの人民議会（Volkskammer）選挙は、「保守連合」（konservative



Allianz) が圧倒的な勝利を収めた。その結果、キリスト教民主同盟（CDU 東）からL・デメジエール（Lothar de Maizière）が首相として選出された。カリカチュアの説明として付されているドイツ語のテキスト（Jeder trage des anderen Last）は、それ自体としてはイディオムではないが、ほとんどイディオム的な性格を有している。意味は、

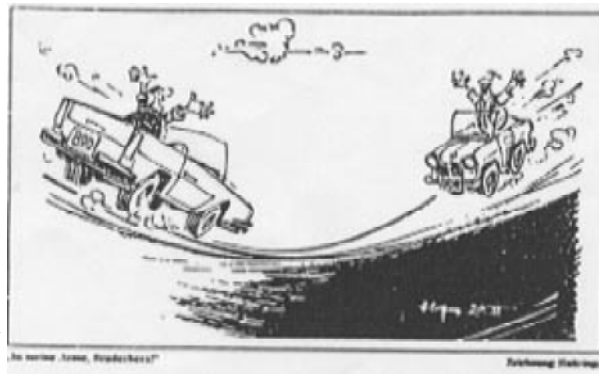
コール、デメジエール両者の思惑として吹き出しの中で描かれていることが、明らかにしている。

コールは、東側で勝利を収めた保守連合の勢力にのっかって、1990年12月2日に行われることが決まった統一ドイツ初の総選挙に有利に臨めると考えている。他方、デメジエールは、コールからDDR建て直しの財政援助をしこたま引き出せると期待している。互いに相手を当てにしている、持ちつ持たれつの、似たり寄ったりの関係というところであろうか。（1990年3月21日）

このカリカチュアは、グリム童話「おぜんやご飯のしたくと金貨をうむ驢馬と棍棒ふくろからでろ」（KHM 36）からモチーフをとっている。

社会民社党（SPD）が有利だという予想を覆して、DDRにおける人民議会の自由選挙は、保守連合（konservative Allianz）の勝利に終わった。ということは、DDRの人々が一

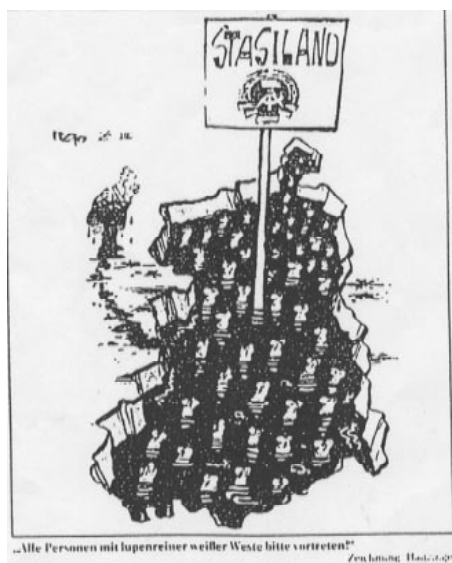
刻も早く BRD と一体となり、そして BRD 並の経済水準にまで BRD の経済力、端的に言えばドイツ・マルクの力によって引き上げてもらうことを願ったということである。民主的な国家としての DDR 建設の道を放棄したのである。作家 S・ハイム (Stefan Heym) の言い方によると、「より良い DDR を願った人々もいたが、DDR の存続など全く願い下げと考える人々もいた」(Die einen wollten eine bessere DDR, die anderen gar keine) ということである。(1990年3月23日)



しかし、ことがそう簡単には行かないことは、政治、経済、軍事等といった領域における問題を子細に検討すればするほど、明らかになってくる。本当に統一し、ボンの助けを借りて、ぬかるみから早急に脱出できるかどうか、極めて疑問であると、1990年3月20日の『バーデン新聞』の社説は述べている。

「民主主義の出発」党首 W・シュヌーアの辞任で始まったシュタージ疑惑は、次々から次へと DDR の政治家や知識人を巻き込んでいった。自由選挙後の 1990年3月27日は、東の社会民主党 (SPD-OST) 党首 I・ベーメ (Ibrahim Böhme) が、シュタージと通じていたという疑いが広まったことによって、党首の座を降りた。そして、この時点で、東の「キリスト教民主同盟」(CDU-OST) 党首である L・デメジエールにも同様の嫌疑が掛かっていた。しかし、デメジエールは、そのような非難にも関わらず、組閣を行い、首相の座についた。

10人に1人がシュタージと関係していたといわれるかつての DDR である。いくらかでも政治的な事柄に関与せざるを得ない人々が、望まないにしろ、いつしかシュタージに取り込まれていたということは、かつての DDR では避けられない面もあったのである。かつての DDR の人々で、どれだけが「潔白である」か(「純白のチョッキを着ている



か」(mit lupenreiner weißer Weste))と問われたら、殆どすべての人々が何らかの意味で泥にまみれているといえるだろう。それがDDRの過酷でもあり、悲しい現実でもあった。まさに「シュタージ国家」(Stasiland)であった。(1990年3月28日)

1990年7月1日に「経済・通貨・社会同盟」が発足することが決定された。そして、BRDの基本法第23条による加盟(Beitritt)という形でDDRがBRDに編入されるという「国家条約」が連邦議会の議題となってきた。

この議題に対して、社会民主党の首相候補であるラフォンテーヌは、連邦議会では「反対」、連邦参議院では「賛成」という態度決定を自党議員に迫った。同じ党の中で一方では賛成、他方では反対ということが、どのようにして可能なのか。そしてそのような戦略にどれほどの意味があるのか。なぜならば、いずれにしろ、「国家条約」は承認され、政府与党の考え通りの方向で、BRDにDDRが加盟し、編入されるという形で、ドイツ統一になることは、ほとんど決まっていたも同然であったからである。

というのは、連邦議会では、野党は過半数以下であり、連邦参議院では過半数を超えていたからである。もしSPDが絶対に反対というのであれば、連邦参議院でも「反対」の態度決定をするべきなのである。そのような曖昧な態度の社会党のお手並み拝見とばかりに、遠くから冷ややかに眺めているのは、コール首相である。

「牛を氷から引き出す」(Die Kuh vom Eis bringen)とは、「困難事を克服する」という意味のイディオムである。そのイディオムの言葉通りをカリカチュアとして描いている。

(1990年5月30日 = Röhrich 1991/92: 905)



「反対」、連邦参議院では「賛成」という態度決定を自党議員に迫った。同じ党の中で一方では賛成、他方では反対ということが、どのようにして可能なのか。そしてそのような戦略にどれほどの意味があるのか。なぜならば、いずれにしろ、「国家条約」は承認され、政府与党の考え通りの方向で、BRD

統一ドイツが東西の軍事情勢の下で、どのような位置を占めるべきかは、極めて大きな



問題であった。中立を目指すべきだという議論もあったが、最終的には、統一ドイツを NATO の一員として編入するという考えで西側諸国は合意した。しかし、統一ドイツが NATO 軍に加入することが、東西の勢力の均衡を破ることに、ゴルバチョフは強い懸念を表明して、この蛙の料理を食べることをため

らっている。

とはいえ、東西の軍事的対立の構図が崩れ去ろうとしているとき、ゴルバチョフもその提案をのまざるを得ないことは、もはや時間の問題であった。

「蛙を飲み込まざるをえない」(Die Kröte schlucken müssen) とは、「不快な物事をやむなく受け入れる」という意味のイディオムである。このイディオムによるカリカチュアは、さまざまなコンテクストにおいて描かれ、さまざまなバリエーションで登場している。

(1990年6月6日)

タラップに腰掛け、花びらを千切っているのは、ザールラント州知事 O・ラフォンテーヌ (Oskar Lafontaine) である。彼は、1990年12月2日の統一後初の連邦議会 (Bundestag) の総選挙で、SPD の首相候補として擁立されることになっていた。しかし、彼は、そのときの条件として、党首の地位も兼ねることを要求し、その時の党首であった H・J・フォー



ゲル (Hans-Jochen Vogel) の辞任を迫ったのである。つまり、「新しい水先案内人登場」(Die Lotzen an Bord)、役割交替というわけである。(1990年6月13/14日)

"Die Lotzen an Bord" (水先案内人が乗り込む。→リーダーの地位につく) とは逆の表現が、"Der Lotze geht vom Bord" (水先案内人は船を下りる。→リーダーの地位を退く。) である。後者の表現に関して、最初のカリカチュア (J・テニエル (John Tenniel) 作) が登場したのは、イギリスの "Punch" 誌の 1890年3月29日号であったと、レーリヒ『こと

わざ的な言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92: 976)にはある。いずれの表現も、政治的な論評によく登場し、カリカチュアとしてもしばしば描かれている。



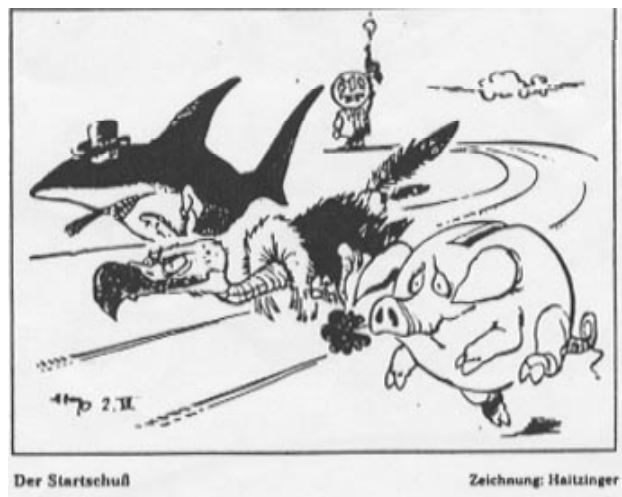
「シリンダーハット（山高帽子）から何かを取り出す」(Etwas aus dem Zylinder holen) といったとき、ふつうのマジシャンとしては兎や鳩を取り出すことになるだろうが、このカリカチュアでは取り出されるものが尋常のものではない。シュタージと書かれた帽子から次々と「ドイツ赤軍派」を取り出して見せているのは、多分シュタージ文書を管理している J・ガウク

(Joachim Gauck) である。シュタージがかつてのドイツ赤軍派を秘密裏に援助し、軍事訓練まで施していたということが明らかになったのであった。(1990年6月20日=Röhrich 1991/92: 1785)

もちろん手品、マジックには、種も仕掛けもあるわけだが、観客にそれを見破ることはきわめて難しい。だからこそ観客は、マジックに驚嘆することになる。日本語の手品という語は、種も仕掛けもあり、裏があるということで理解され、ごまかされないように注意を促す言葉という感じだが、ドイツ語の上記のイディオム表現は、度肝をぬく意外なものを取り出すというマジシャンの腕前に対する感嘆の意味合いが強いようである*6。

*6 このイディオム表現に基づく種々のカリカチュアについては、第15章を参照(15.6.2.2節)。

東西の通貨統合（1990年7月1日）によって、スタート・ダッシュをかけている、鯨（Hai）とハゲタカ（Geier）、豚（Schwein）。いずれもイディオムの具体的なイメージである。つまり鯨は高利をむさぼるあくどい商売人（Börsenhai、Kredithai）、ハゲタカ（Pleitegeier）は獲物を虎視眈々とねらっている悪魔。豚は貯金箱の豚（Sparschwein）であるが、



スタート直後から少しばかり情けない顔つきである。この勝負の結果は、10年後の現在においてどうなっているのであろうか。このカリカチュアの意図は、通貨統合によって、東ドイツへの投資が促されることになるだろう、そして、いわゆる統一による好景気が訪れるだろうという資本側の思惑を描くことにある。（1990年7月4日）

貪欲な鯨については、B・ブレヒト（Bert Brecht）の短編"Wenn die Haifische Menschen wären"（もし鯨が人間ならば）が思い起こされるが、その物語はむしろ"Die großen Fische fressen die kleinen"という表現と関連が深いのであろう。レーリヒは、同じブレヒト『三文オペラ』中の「メキー・メサーの歌」を引用している（Röhrich 1991/92: 629）："Und der Haifisch, der hat Zähne. Und die trägt er im Gesicht..."（鯨には歯がある。歯は顔についている。）

ドイツ統一、そして統一ドイツの NATO 編入といった難問題すべてがうまく解決し、極楽天国で左うちわで暮らしていけるといふ桃源郷を思い描いているコール。ドイツ語では"Schlaraffenland"あるいは"Schlaraffenleben führen"である。統一の宰相として歴史に名を残すという夢は実現できたが、統一によるつけとその後の景気の停滞から、その輝きは失われて行くばかりである。（1990年7月21/22日）

他方、このカリカチュアは、棚ぼた、鴨ネギ、という意味合いの"die gebratene Tauben fliegen ins Maul"というイディオム表現がモチーフとなっている。このイディオム表現は、通常は、"die gebratene Tauben fliegen nicht ins Maul"という具合に、怠惰を戒める意味で使われるようであるが、このカリカチュアでは、逆の意味の表現が基となっている。



日本の昔話あるいはおとぎ話では「兎と亀」ということになるが、グリム童話では「兎とハリネズミ」(Hase und Igel)である。しかし、このカリカチュアでは、その2つがミックスされているようである。



元々の「兎とハリネズミ」では、ハリネズミは2匹登場するが、このカリカチュアで社会民主党首相候補ラフォンテーヌの前を走っているのは、キャベツそのもの、すなわちコール(Kohl)一人だからである。統一後初のドイツ連邦議会選挙戦を戦って

いる SPD と CDU/CSU/ FDP 連合の模様を描いたものだが、通貨統合を経て、まさに統一へと向かって追い風を受けて走っているコールに追いつくのはなかなかのことであり、ラフォンテーヌは空腹と息切れで今にもダウンしそうである。(1990年8月8日)

14. 1. 6 1990年8月23日－1990年10月15日 (国家統一への道)

統一後、それまでの DDR 地域の社会、経済を立て直すための財政をどのようにして確保するか、それが連邦大蔵大臣 T・ワイゲル (Theo Waigel) の最大の課題である。ワイゲルが後ろに隠し持っている3つの可能性 (ドイツ国民を象徴するドイツ・ミヒェルの顔

をした豚の貯金箱 (Sparschwein) をたたき壊すためのハンマー) は、税金の引き上げ (Steuererhöhung)、国債 (Verschuldung) という名の借金、節約 (Einsparung) である。「どれがいいかな?」 (Wie hättest Du's denn gern?) と問われても、どれもイヤだとはいえないドイツ国民としては、情けない顔つきになるばかりである。(1990年8月30日)



カリカチュアに描かれているのは豚の貯金箱であるが、そもそもなぜ、豚が貯金箱になったり、幸運をもたらすものと見なされるのだろうか。ドゥーデンによると、中世の武闘競技で最下位になったものに残念賞として豚が与えられたことに由来するのではないかということである。つまり最下位となったものは、本来それに値しないのに、豚を賞としてもらうことになっているのである (DUDEN 1992: 647-648)。しかし、別の説もある。ハイネによると、豚が幸運をもたらすという俗信は、遠くフェニキア人たちが地中海で活躍していた時代にさかのぼるといふ。フェニキア人たちは、航海中は必ず豚を船に乗せていた。豚は荒天を感知あるいは予知し得たのである。豚が幸運をもたらすというのは、そのフェニキア人たちの知恵に由来するという (Heine 1987:35-44)。

統一ドイツにおける初のドイツ連邦議会総選挙が1990年12月2日に行われることになり、社会民主党は首相候補としてO・ラフォンテーヌを指名した。

コール首相の側は、統一のコストによる増税が避けられないにも関わらず、選挙戦では増税について触れることをタブーとし、ある意味では国民をだましていた(「オッガースハイムの砂糖水」という札の樽の横でにんまりしているのは、コール首相である。オッガースハイム (Oggersheim) は、コール首相の出身地である。)

それとは対照的に、社会民主党の首相候補ラフォンテーヌは、あえて真実を国民に告げて、選挙戦を展開したのである。当然に多くの国民にとって増税という言葉は、耳障りなものであり、想像されたように、結果的には社会民主党は敗北する。



「純なワインを注ぐ」(Jemand den reinen Wein einschenken)とは、「真実を告げる」という意味のイディオムだが、真実を告げることが常に正しい振る舞いとは限らないのである。特に、政治の世界ではそうであろう。ラフォンテーヌは、あまりにもナイーブであったともいえるし、あるいは、多少とも自虐的な面があり、初めから選挙に勝てないと見越していたがゆえの振る舞い

だったのかと取れなくもない。(1990年9月28日=Röhrich 1991/92: 1709)しかし、ラフォンテーヌが主張したように、やはり統一のコストは高くつくことが、だれの目にも明らかになってくる。にもかかわらず、ドイツ国民は、心地よい言葉にのみ耳を傾け、SPDは支持率を落としていくのである。

上のカリカチュアのモチーフとなっているイディオム"Jemandem den reinen Wein einschenken"と似たラテン語の表現に"In vino veritas" (ワインの中に真理あり)というものがある。ただしドイツ語のイディオム表現とラテン語の言い回しは、主客が逆になっているようである。前者では、真実を告げるのは、ワインを注ぐ方であるが、後者の言い方ではワインを飲んでいる方が酔いが回って真実を暴露するとなっているからである。つまり、後者は、日本語でいえば「酒は本心を現す」という表現に対応するようである。

DDRの人民議会の自由選挙の過程でコールが約束した「花咲く景観」(blühende Landschaft)あるいは「花咲き香る庭園」(blühender Garten)は、いったいいつになったら



実現するのだろうか。「さあ、いったい何を待つというのかね?」(Also, worauf warten wir?)とコール首相が西側の投資を促そうとも、あくまでも利潤追求を至上命令とする西側企業は、荒廃したDDRの産業、経済の建て直しに先を争って投資するほど思慮なしではない。

あくまでも冷徹な企業の論理に従うのである。

このカリカチュアは、「破産をねらうはげたか」(Pleitegeier)をイメージとして描いたものである。イディオム表現としては「破産をねらう秃げ鷹が屋根にとまっている」(Der Pleitegeier sitzt auf dem Dach)が基になっているが、これは「破産が間近に迫っている」という意味である。(1990年10月10日)

14.1.7 1990年10月16日－1990年12月31日(統一ドイツ)

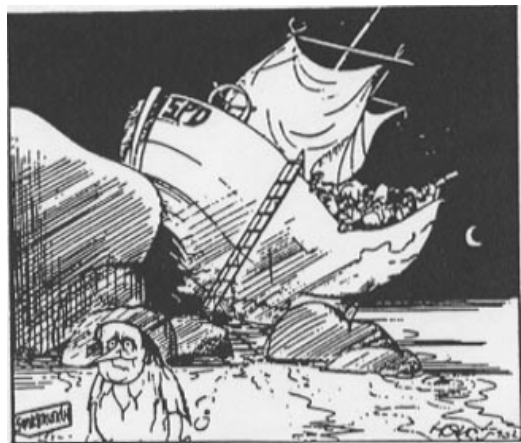
統一ドイツにおける最初のドイツ連邦議会総選挙を1990年12月2日に控えて、統一の負担による増税が不可避であることは、すでに国民のほとんどが知るところとなっていた。それにも関わらず、政府与党は、必死に増税について触れることを選挙戦においてはタブーとしていた。

しかし失業者の増大によって、失業手当をまかなうため、増税が不可避であることを漏らした労働問題大臣N・ブルーム(Norbert Blum)に、それでは選挙戦が不利



になると判断したコール首相とワイゲル大蔵大臣が口枷をはめようとしている。

日本語でも似た言い回しになっているのだが、カリカチュアが具体的に描いているように、基になっているイディオム表現は「箝口令をしく」(Jemandem einen Maulkorb umhängen/anlegen) というものである。この表現はもちろん文字通り「口輪をはめる」でも十分に意味は通じる。(1990年11月14日＝Röhrich 1991/92:1012)



「ウサギとハリネズミ」(Hase und Igel)は、小さいものが大きなものに勝利を収めるといった競争について多く使われるようになってきているのだが、ドイツ統一後の初の総選挙において、SPDとCDUの関係は、かならずしもSPDがウサギでCDUがハリネズミという捉え方は正しくはないのではないか。

(1990年8月8日のカリカチュアを参照)結果からすると、明らかにCDU/CSU/FDP連立内閣与党が圧倒的な勝利を収めたのだから。敗北

の責任をとって、SPD 党首のラフォンテーヌは辞任する。(1990年12月1/2日 = Röhrich 1991/92: 876) このカリカチュアのモチーフとなっているイディオム表現は、"Der Lotze geht vom Bord" (水先案内人は船を下りる) である。(1990年6月13/14日のカリカチュアを参照)

馬の背から「こちらオットー。私の方としては始めてもいいですよ！」(Hier Otto, meinetwegen können wir anfangen!) と意気揚々と電話しているのは、統一後初の総選挙で11パーセントの票を獲得した FDP 党首 O・G・ラムスドルフ (Otto Graf Lambsdorff) である。FDP が躍進できたのは、統一に至る過程で八面六臂の外交活動を展開した FDP 所属の外相 H・D・ゲンシャー (Hans-Dietrich Genscher) のおかげである。



このカリカチュアは、"auf dem hohen Roß sitzen"あるいは"sich aufs hohe Roß setzen"というイディオムを具体的に図示したものである。

意味は、いずれも「高慢、尊大、高飛車なこと」である。(1990年12月7日)

大粒の汗を流して途方に暮れている様子なのは、ドイツ連邦共和国政府与党の党首たち、ラムスドルフ (FDP)、ワイゲル (CSU)、コール (CDU) である。連立内閣を組むに当たって、交渉における難題となっているのが刑法第 218 条、すなわち妊娠中絶をめぐる規定である。これが「熱い鉄」(das heiße Eisen)となり、交渉が難航している状態を描いている。(1990年12月11日)

妊娠中絶に関しては、東ドイツと西ドイツの刑法の規定が大きく食い違っているため、それをどのような方向で調停するかが問題となったのであり、現在に至るまで、結論は出していない。各州の足並みもそろわず、バイエルン州はあくまでも妊娠中絶は認めないという強硬な立場を崩していない。

基になっているイディオムは"ein heißes Eisen"であるが、意味は"eine heikle bedenkliche

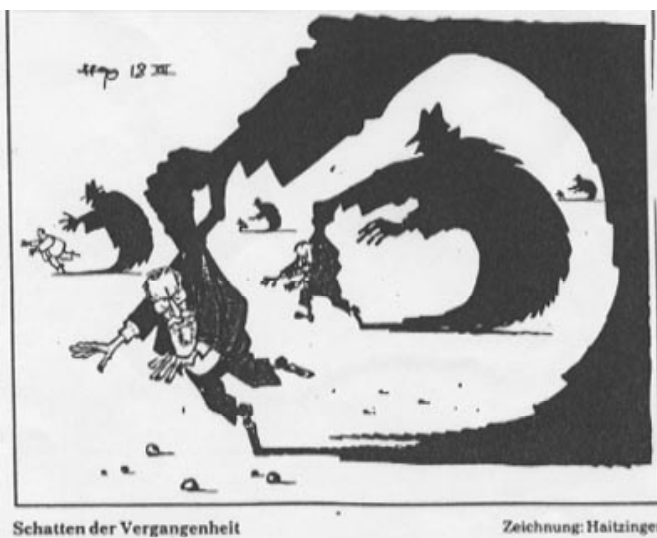
Sache" (DUDEN Band 11: 320)、すなわち「こみ入った事柄」である。日本語では結果に焦点に合わせた表現「やけどする」が対応すると考えられる。同方向の言い回しに



die Kastanien aus dem Feuer holen" (火中の栗を拾う)がある。この言い回しは、日本語でも普通に使われているが、本来は、西洋起源であるのだろう。というのも、この言い回しは、ラフォンテーヌ『寓話』「サルとネコ」(岩波文庫下巻 195 - 197 頁)に由来すると説明されているからである (DUDEN 1992: 375)。

次のカリカチュアは、描いている事柄からすると、忍び寄るシュタージの影という構図であるが、イディオム表現としては、「あるものが過去に影を投げかける」(Etwas wirft einen Schatten auf die Vergangenheit)あるいは「過去の影」(Die Schatten der Vergangenheit)である。

1990年3月18日に行われた人民議会の自由選挙前に、すでに「民主主義の出発」党首W・シュヌーアがシュタージの「非公式の協力者」(IM= inoffizieller Mitarbeiter)であったことが明るみになり、辞任に追い込まれたのであったが、その後幾人もの東出身の政治家がシュタージ疑惑で辞任に追い込まれていった。



そして、そのシュタージ疑惑は、DDRにおける最初で最後の自由選挙で選出された内閣総理大臣であるL・デメジエールに

まで及んできた。デメジエールは、こうして、ドイツ統一約1年後の1991年9月6日に連邦議会議員を辞任し、政界から足を洗うことになった。(1990年12月20日)

このシュタージ疑惑は、統一の負の付けとして、現在に至るまで続いている。そして、その過程では、さまざまな悲劇を生みだしてきている。

14. 1. 8 1991年1月1日以後 (後史)

統一が高くつくということ、そして増税が不可避であることを SPD の首相候補であったラフォンテーヌは、繰り返し説いていた。しかし、現実には、そのラフォンテーヌが主張していたよりも、ずっと暗い事態となっていた。その意味で、ラフォンテーヌの予測は、方向としては誤っていなかった。

しかし、コールは、「いまわかっただろう。ラフォンテーヌは、間違っていたのだ。現実には、全く異なっている。もっともっと暗いじゃないか！」(Da



sieht man, wie unrecht Lafontaine doch hatte: die Wirklichkeit ist ganz anders, viel schwärzer!)
 といって、ラフォンテーヌを批判している。ラフォンテーヌの予測が誤っていたのは、程度の点においてだけであった*7。(1991年2月23/24日)

14.2 まとめにかえて—統一ドイツの10年を省みて—

世界の耳目を引きつけたドイツ統一。それから早くも10年がすぎようとしている。統一ドイツが抱えることになった問題は、多岐にわたるが、ウィースバーンに本部を置く「ドイツ語協会」(Gesellschaft für deutsche Sprache) 会員4人が中心の選考委員によって選定されている

「今年の言葉」(Wort des Jahres) と「今年最悪の言葉」(Unwort des Jahres)

	今年の言葉	今年最悪の言葉
1989	Reisefreiheit (旅行の自由)	
1990	die neuen Bundesländer (新連邦州)	
1991	Besserwessi (わけしりの西の人々)	ausländerfrei (外国人のいない)
1992	Politikverdrossenheit (政治嫌悪)	ethnische Säuberung (民族浄化)
1993	Sozialabbau (社会解体)	Überfremdung (外国人過剰)
1994	Superwahljahr (スーパー選挙年)	Peanuts (ピーナッツ)
1995	Multimedia (マルチメディア)	Diätenanpassung (議員手当調整)
1996	Sparpaket (歳費節減関連法)	Rentnerschwemme (年金者洪水)
1997	Reformstau (改革渋滞)	Wohlstandsmüll (福祉のゴミ)
1998	Rot-Grün (赤-緑)	sozialverträgliches Frühableben (社会的容認可能な早死)
1999	Millenium (ミレニアム)	Kollateralschaden (付随損傷)

を手がかりに、統一ドイツ10年を振り返ってみよう(1989年以降の今年の言葉と1991年以降の今年最悪の言葉を表として掲げる。)

*7 色彩語彙を構成要素とするイディオム表現については、第7章で詳述してあるので、そちらを参照されたい。

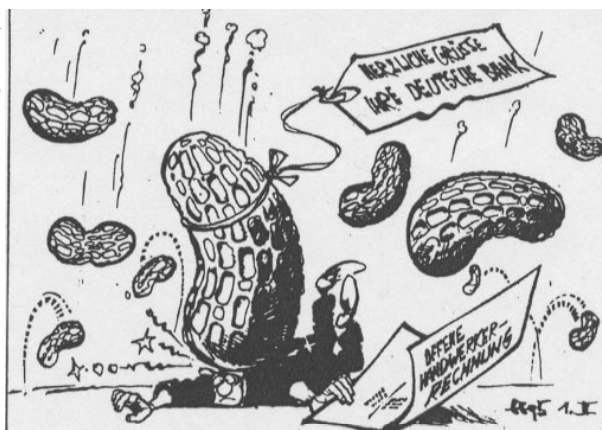
まず、今年の言葉。これは、その年に一番話題になった事柄に関する言葉という性格のものである。従って、ドイツ統一以降の10年におけるドイツの政治、社会、経済等の推移がうかがえる。1989年と1990年については、今年最悪の言葉の選定が1991年以後に行われるようになってきていることから、「今年の言葉」として選定されているが、「今年最悪の言葉」といっておかしくないものもある。

東ドイツ国民長年の悲願であった「旅行の自由」、そして統一以後再編された「新連邦州」は、希望に満ちた未来を予感させる。しかし、1991年の語を見ると、すでに雲行きが怪しくなってくる。ドイツ統一の歓喜は鳴り止み、西側の人々に対する批判的な言葉となってくる。対する東側の人々を批判する語としては"Jammerossi"（愚痴こぼしの東の人々）というのがある。一時の統一景気からさめた人々は、不況に苦しむ。政府の失業対策は、それほど効果を上げない。政治にもはや過剰な期待は寄せないというのが多くの国民の態度であり、「政治嫌悪」の語は、それを的確に捉えている。「社会解体」が意味するのは、福祉政策の切り捨てであり、それは「歳費節減関連法」によって画竜点睛がはかられることになった。1994年は、ドイツ連邦議会選挙を含め、いくつかの州議会選挙等数多くの選挙が行われ、新しい政治、新風の到来を期待させた。しかしながら、結果的には、保守政権が維持されることになり、政治嫌悪の感はいっそう強まる。情報革命が喧伝され、マルチ・メディア時代の到来が謳われる。コンピュータ産業のみが繁栄しても、世界に不況の暗雲がのしかかっている状況はすぐには変わらない。政府が声高にいう財政改革は必然的に停滞せざるを得ない。1998年の保守から革新への政権交代は、新しい世紀における新しい政治を期待させた。「ミレニアム」の語は、その期待感をいっそう強めた。

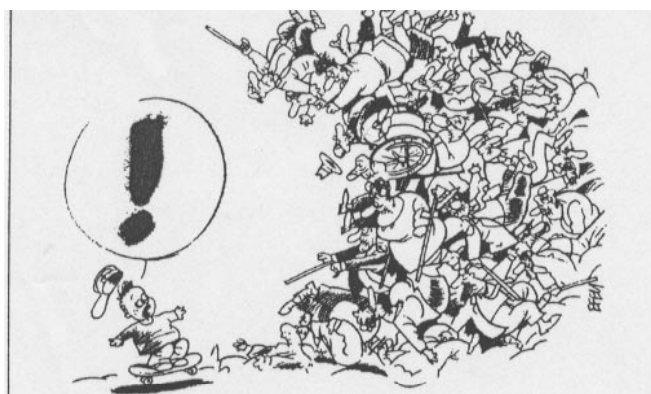
他方、1991年から選定されている今年最悪の言葉（アクチュアルで、きわめて不適切で、非人間的な表現というのが選定基準である）には、バルカン半島における2つの戦争が影を落としている。「民族浄化」、「付随損傷」は、それぞれボスニア・ヘルツェゴビナをめぐるユーゴ内戦、コソボをめぐるユーゴ内戦に関わっている。前者については、医療班として、後者については国連軍の一部として、ドイツ国防軍もNATO軍の一員として関わらざるを得なかった。上の2つ以外は、ドイツ国内の出来事に関連している。

「外国人のいない」という語は、「外国人過剰」の語とともに、「ユダヤ人のいない」(judenfrei) というナチ時代のスローガン、悪夢を想起させる。「ピーナッツ」は、日本

でもかつてロッキード疑惑に関連して、賄賂の意味で流行語になったが、ドイツでは大手建設会社の倒産に関連して、ドイツ銀行頭取の言葉として広まった。日本では、ピーナッツ1個が当時100万円という額を意味していたと記憶しているが、ドイツ銀行頭取は、はした金という意味で使ったのである。倒産の煽りを喰う下請け企業にとっては、死活問題であり、断じて取るに足りる額であった。「議員手当調整」と同様、事柄を矮小化し、覆い隠すものである。



日本もいよいよ高齢者社会に突入し、2000年4月1日から介護保険（ドイツでは1993年以来実施）が導入されたが、高齢者の多くは年金生活者である。その年金生活者が洪水のように押し寄せてくると恐怖をあおり立てた後は、「福祉のゴミ」（日本ではかなり以前から粗大ゴミという言葉がある）と無用扱いされ、ついには、労働力としての価値がなくなったとして、医療から見放されることもやむを得ないという発言まで、医療者自身から飛び出す時代になった。（「社会的容認可能な早死」という語は、あらゆる可能な、尽くすべき手を尽くさないということであり、ドイツ医師連合会長の発言である。）^{*8}



ドイツ統一以後の今年という言葉、今年最悪の言葉を眺めてきて言えるのは、世界的な不況の中で、身軽な国家を目指す財政再建、節減政策のスローガンのもと、社会福祉が切りつめられ、いよいよ人間らしさが失われていっているということである。統一ドイツ10年の歩みは、必ずしも明るい話題ばかりというわけではなく、むしろ落ち込みそうになるような出来事が多かったと言えるのではなかろうか。そのドイツで話されているドイツ語を、

*8 ピーナッツに関するカリカチュアは『バーデン新聞』1995年2月1日から、「福祉のゴミ」に関するカリカチュアは、Schlosser 2000:38から取ったものである。後者のカリカチュアは、ドイツ語にも「Tsunami」として取り込まれている「津波」、「年金生活者の洪水」(Rentnerschwemme)も加えて、3つのモチーフに基づいている。

日本において学習しているわれわれにとっては、良くも悪くも、一つの先行例として、考えるべき問題を提起していると言えるのではなかろうか。

14.3 おわりに

ドイツ統一に至るドイツの政治、社会、経済等の情勢を政治的カリカチュアの中で追うことによって、ドイツ統一がどのようなさまざまな次元に及ぶ問題を引き起こしてきているのかを、考える糸口としたいというのが、本章における論述の意図であった。統一後10年が過ぎた現時点から振り返るとき、いっそう、その問題点が浮き彫りにされてきているのではなかろうか。

ドイツ語学習の点でいえば、体系的な学習の対象になりにくいイディオム表現を、ドイツ統一の過程という歴史的事件と政治的カリカチュアを介して結びつけることによって、政治情勢のコンテクストに依拠する形で、より効果的に学習することができるのではないか、という考えに基づいて、以上の論述を行ってきた。具体的なイメージとともにイディオム表現がいくらかでも印象深く記憶されたとするならば、本章における論述の意図は実現されたといえよう。

第15章 政治的カリカチュアとウィットを素材とするイディオム学習^{*1}

Ein Pfarrer hat der kleinen Gebirgsgemeinde schon lange Zeit gedient. Er meint, es wäre vielleicht der Zeitpunkt gekommen, einem Jüngeren Platz zu machen. Mit einem alten Bergbauern bespricht er seinen Entschluß, sich zur Ruhe zu setzen.

"Weißt du", resümiert er nachdenklich, "man sagt ja nicht zu Unrecht, neue

Besen kehren gut."

"Das mag sein", willigt der alte Bauer ein, dann schüttelt er den Kopf. "Aber nur der alte Besen weiß, wo der Dreck sitzt!" (Hoppe(Hrsg.) 1999:37)

(もう長い間山の小さな村でつとめてきた牧師さん、後進に道を譲る頃合いが来たと考えた。そこで、村の長老と、隠居生活に入ろうとの決心を話し合った。

「知ってのことでしょうが」と、牧師さんは考え深げに話をまとめた。「うまく言ったものじゃないか、「新しいほうきはよく掃ける」と。」

「そうかも知れませんが」と、長老は牧師さんの言うとおりで思いながらも、頭を横に振った。「しかし、どこにゴミがあるかを知っているのも、古いほうきだけですよ。」^{*2}



*1 本章における論述は、次の論文が基になっている。「政治的カリカチュア、ウィットを素材とするイディオム学習に関する一考察」(『広島大学文学部紀要』第59巻、1999年、188-208)。いずれも、文部省科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2) (課題番号：10610499、研究課題：政治的カリカチュアを素材とするドイツ語イディオム学習・教授法に関する基礎研究)〕による研究成果の一部である。また、両者の論考をドイツ語でまとめたものを「第10回世界ドイツ語・文学研究者会議」(X. IVG-Kongress) (於オーストリア・ウィーン市)において口頭発表した(2000年年9月11日)。

また、これらの論考は、筆者が勤務する広島大学文学部に於いて1998年、1999年の2年間「政治的カリカチュアに見るイディオム」をテーマとする授業で取り扱った材料を基にしている。演習では、政治的カリカチュアだけでなく、多数のウィットも素材とした。筆者のドイツ語授業、そして授業に対する姿勢は、教師と学生両者がおもしろく、興味を持って取り組める素材、テーマであってこそ学習効果が上がるというものである。

*2 このカリカチュアは、ゴルバチョフが改革路線を引き下げて登場したことをふまえて描かれているものである。(Röhrich 1991/92: 181)

15.0 はじめに

いわゆる「イディオム能力」に関しては極めて個人差が大きい。その理由はどこにあるのか。それは個々人の教育あるいは教養の程度に依存している、といった説明がなされるかも知れない。しかし果たしてそうだろうか。根本原因はイディオムの学習が偶然に任されてきたという点にあるのではないか。

確かに外国人のためのドイツ語教育の枠組みの中で、イディオムの学習を目標とするいくつかの教材が作成されてはいる。(たとえば Griesbach/Uhlig 1993、Wotjak/Richter 1993。)しかし、どのようなイディオムを、どれだけ、どのような段階で学習すべきなのか、といった学習素材の選択に関する基準や教授法については、いかなる合理的な根拠付けも見られない。教授法上の考察は、まさにこれからなされるべき課題として放置されてきている。これは、ドイツ語圏における母語としてのドイツ語授業についても、外国語としてのドイツ語授業のいずれについてもいえることである。

筆者の知る限り、イディオムに関する体系的な学習、教授法に関する考察はこれまでにない。イディオムの学習および教授は、いわば場当たりのものといってよい。授業で使用する教材に登場する限りで付随的に学習対象となっており、イディオムそのものが中心的な学習対象として取り上げられることはない。

ウィットについては、確かに、その分類や言語的特徴に関する考察はなされてきている(たとえば、Marfurt 1977)。また言語能力だけでなく、ランデスクンデを展開する素材という観点からの考察も行われてきている(Ueda 1997)。ウルリヒの著書(Ulrich 1980)は、そのタイトルが示しているように、ウィットというテキストそのものをドイツ語授業の学習対象としている。従って、ウィットの言語学的、内容的な分類等が論述の主要部分をなしており、イディオム学習のための素材という観点からウィットを取り上げたものではない。イディオム学習との関連で笑い話(Scherz)を取り上げている唯一の例外が Wotjak

/Richter (1993)であるが、ほんの部分的な取り扱いである*3。

本論文は、ドイツの新聞や雑誌から拾い上げた政治的カリカチュアを素材として、そのカリカチュアが下敷きになっているイディオム表現を学習対象とするドイツ語授業の展開の可能性について考えることを狙いとする。そして、イディオム表現を落ちとするウィットをも素材とすることによって、学習対象をより一層定着させようとするものである。

カリカチュアというゲシュタルト知覚を駆使する対象だけでなく、線形的な認識に関わるウィットという言語テキストをも素材とすることは、左右の脳の機能を促すだろう。またカリカチュアというイメージに付け加えて、ウィットによるエピソード的な記憶をも稼働することによって、イディオムの一層の定着がはかれるものと信ずる。

15.1 イディオム

イディオム表現の言語的特徴については、第2章で詳述しているが、ここでもういちどその特徴を手短に確認しておこう。ドイツ語と日本語両言語におけるイディオム表現に関する研究において確定されているイディオム表現の言語的特徴としては、表現の固定性、イディオム性、語彙性、再生産性、イメージ性といった5つがある。統語的な振る舞いの点からいうと、イディオム表現は、名詞、動詞、形容詞、副詞的表現の4つに分けること

*3 ウォーチャク/リヒター (Wotjak/Richter 1993)は、イディオム学習に関する具体的な提案を数多くおこなっている。800以上のイディオム表現を、主として事項別に分けて、埋め込み、言い換え(パラフレーズ)をはじめとして、様々な課題を提示している。自習用としても有用な著書である。この著書の一節にイディオム表現を含んだ笑い話(ScherzあるいはWitz)が、翻訳上の問題に関する考察を促す課題として取り上げられている(S.86-88)。たとえば、一例を挙げると、次のようなものである。

課題1: 以下の笑い話を読みなさい! これらの笑い話を、それほど困難を覚えずに、母語に翻訳できますか。翻訳するとき問題があるとすれば、その原因はどこにありますか。

(みずまし)

客がワインを飲み干したかと思うと、ウェイターがさっとやってきて、ワインを注ぎ足しながら、いう。「お客さん、ワインのお味はいかがでしょう。」

「口の中が生唾で一杯になってきて、ワインの味がよくわからないぐらいですよ。」

Aufgabe 1: Lesen Sie die folgenden Scherze! Können Sie diese ohne größere Schwierigkeiten in Ihre Muttersprache übertragen? Worin liegt die Ursache für eventuelle Übersetzungsprobleme?

(Verwässert)

Der aufmerksame Kellner gießt flink nach und fragt dabei seinen Gast:

"Nun mein Herr, wie schmeckt Ihnen der Wein?"

"Man kann sagen, da läuft einem das Wasser im Mund zusammen." (Wotjak/Richter 1993: 86)

イディオム表現が、翻訳する際、どのような問題を提起するかについては、筆者も他の場所で考察している(Ueda 1991a および本論文第4章)。

ができるようである。(日本語においては、形容動詞に属する表現もある)。

15.2 カリカチュア

政治的カリカチュアは、現在、新聞や雑誌にとって欠かせない要素となっている。日々目にする新聞や雑誌に登場する政治的カリカチュアの本質的な機能は、その時々国内、国外における政治、社会その他のできごとを、ユーモラスに批判し、ことの重要性に読者の注意を向け、かつ思考を促す点にあるといえよう。

もちろん、描き手によって、そのカリカチュアが体現しているメッセージは、さまざまに異なる。当の新聞に掲載されている記事に対する補足的なコメントといった性格のカリカチュアもあれば、描き手の批判的な視点を強く打ち出しているものもある。

また、ドイツの新聞に掲載されている政治的カリカチュアの中には、日本の新聞紙上に掲載されている政治的戯画を見慣れたものにとっては、理解しがたいものも多い。カリカチュアが問題としている出来事をめぐる歴史的あるいは文化的背景に関する知識が欠落しているため、カリカチュアが伝えようとしているメッセージが理解できないという場合もあるが、カリカチュアを読み解くための記号論的なコードがドイツと日本では異なっているため理解困難な場合もある^{*4}。日独の政治的カリカチュアを比較・対照研究することが必要になるが、これは別のテーマである。

第14章においてもそうであったが、本章で取り扱う政治的カリカチュアは、ドイツの新聞に掲載されたものであるが、ドイツ語のイディオム表現がカリカチュアのモチーフとなっていると筆者が判断したものである。その意味では、筆者自身のドイツ語におけるイディオム能力が試されているといえよう。つまり、実際にはイディオム表現が下敷きになっているカリカチュアでありながら、拾い上げられなかったものもあるだろうということである。しかしながら、イディオム能力に関しては個人差が大きいという事実、そして外

*4 戦後ドイツで最長の16年間、連邦首相を務めたH・コールは「待ちの政治家」として名をなした。そのコールの政治姿勢を言い表す表現"etwas aussitzen (müssen)"(なにもしないで事態がすぎるのを待つ)は、イディオム表現として辞典に採用されるまでになったのである。次のカリカチュアは、大気汚染による「森の死」(Waldsterben)に対してもただ待ち続けている無策のコールを批判している。枯死した枝には、蜘蛛の巣が張っている。「蜘蛛の巣」は、ドイツのコミックやカリカチュアでは、長い時間の経過を意味するものとして描かれている。日本の漫画や戯画では、長い時間の経過というよりも、荒れ果てた様子を描き出している場合が多い。(このカリカチュアは、レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92)の123頁から。)



国語としてドイツ語を学習している者にとっては、イディオム表現に関しても永続的に学習途上にあるという事実を踏まえるならば、このことは必然でもあり、研究の意義を本質的に損なうものではないと考える。

15.3 ウィット

これまで、ウィットに関してなされてきた学問的研究は、他の言語的テキストと同様、大きく言って、構造と機能に関するものの2つに分類することが可能であろう。

西欧では、ベルグソンの『笑いについて』を代表として、笑いに関する哲学的な考察の中で、ウィットが論究の対象とされることが多かった。これらの哲学的考察は、ウィットの機能を主題としてきたといえよう。

フロイトによる精神分析の視点からの考察によって初めて、ウィットの笑いを引き起こすメカニズムと機能に関する深層心理学的な説明が与えられた。そして、そのようなフロイトの試みを踏まえてウィットの社会心理学的な機能に関する考察もおこなわれている*5。

他方、ウィットに関する言語学的な探求は、そのほとんどが意味論的な視点から行われてきている。ウィットの持つ落ちがいかなる意味構造に基づいているかが考察の対象となっている。論理的な矛盾（パラドックス）、テキストとしての一貫性の欠如、聞き手、読み手（つまりウィットを受容者）における期待の地平の破壊といったように、様々な概念が駆使されてきている。そして、スクリプトという認知言語学あるいは語用論的な概念を援用しながら、ウィットの落ちを説明しようとしているのが、最近の試みであるようである（小泉 1998）。

本論文は、しかしながら、ウィットそのものに関する分析的探求を目指すものではない。そのような先行研究を踏まえながらも、ウィットをドイツ語授業における教材、しかもイディオム学習のための素材という観点から考察することが目標である。

ウィットというテキストを構成している言語素材には、イディオム表現が含まれている場合も多い。ウィットに登場するイディオムというとき、それは、以下のように3つに分類することが可能であろう。

まず、1) ウィットを構成しているテキスト中にイディオム表現が登場するもの。次に、

*5 ケーラーは、フロイトの精神分析的な考察を踏まえて、ウィットの個人心理的、社会心理的機能について述べている（Köhler 1993: 265-285）。

2) イディオム表現がウィットの落ちを形成しているもの。最後に、3) ウィットのテキストそれ自体がイディオム表現を基盤にして形成されているもの。数の点からいえば、挙げた順に例が少なくなっている。イディオムを学習するための素材という点からは、その例は少ないのであるが、3) の部類がもっとも興味あるものといえよう。

15.4 教材としてのカリカチュア

マリーエンフェルト (Marienfeld 1990)、ペッツ (Pötzsch 1997) そしてボーデン (Boden 1997)、これら3つの著書は、それぞれ「ドイツ問題」(すなわちドイツ統一)、「ドイツの戦後史」および「ヨーロッパ連合成立の過程」を政治的カリカチュアに見るといふ趣旨の著書である。カリカチュアの背景となっている政治的、社会的、経済的な状況がどのようなものであったかに関する説明も、適宜付されている。これらの著書は、いずれも歴史的な理解を助けるものとして、政治的カリカチュアが援用されている。ドイツ語学習という点から政治的カリカチュアが問題とされているわけではない。

アハターベルクの著書 (Achterberg 1998) は、政治的カリカチュアの歴史、記号論的記述を導入として、社会科学にとって政治的カリカチュアがどれほど有用であるかを、湾岸戦争時、ドイツの新聞に掲載されたサダム・フセイン、ジョージ・ブッシュに関するカリカチュアを素材に分析、考察している。

これらの著書は、いずれも、歴史や社会情勢の理解を促す素材として政治的カリカチュアを取り扱ったものであるが、他方、現行のドイツ語教材を眺めてみると、政治的カリカチュアが全く問題とされていないわけではない。

政治的カリカチュアを取り入れた Ossip Ottersleben, *Neue deutsche Skandale in Karikaturen* (『ドイツ漫画スキャンダル集』林捷編・注、同学社) は、ランデスクンデを目標とした中級読本という性格の教科書だが、本文理解の助け、あるいは気分転換のために、政治的カリカチュアを取り込んでいる。

これらの著書に言及したのは、つまりは、政治的カリカチュアが決してドイツ語でいう "Augenweide" (慰み)、つまり目を楽しませるものにとどまらず (あるいはそれに留めず)、カリカチュアに反映されている価値観、あるいは敵対イメージの形成に及ぼす影響、そして歴史理解を反映しているメディアとして極めて興味深い対象であり、科学的分析、研究の対象足り得るといふことを述べたかったからである。

15.5 教材としてのウィット

ウィットというテキストをドイツ語授業を展開するための教材としてみると、どのような可能性があるだろうか。

文法学習、意味学習を促す素材としては、これまでもドイツ語授業において投入されてきている。ウィットというテキストが潜在的に備え持っている笑いを誘発するという要素が、教材として取り上げるときの判断に大きくあずかっている。ドイツ語学習を可能な限り楽しいものにしたいという願いが込められている。

たとえば、根本道也編『スーパージョーク 50 - 初級文法総復習』(同学社)、根本道也編『新・スーパージョーク 33 - 初級文法総復習』(同学社)は、本の題名が示しているように、ウィットを素材として、文法事項の理解と習得を目標として編まれたものである。シュトレベザム『わんぱくウィット集』(水野櫻・渡辺善和編・注、三修社)、Paul Schwarz / 小栗友一『ドイツおもしろ草紙』(第三書房)も同じ目標設定をもった教科書である。

笑いありのドイツ語授業を行いたいという著者あるいは編者たちの希望的な目標設定は理解できるが、果たして授業の実際はどうであろうか。カリカチュアの場合は、その批判や皮肉がすぐには理解できないとしても、視覚的にすぐに笑える部分もあるだろうが、ウィットについては、言語的な理解に依拠しているため、初級段階で理解できるものは、それほど多くはないというのが筆者の見解である。

ウィットという言語的テキストを、学習対象言語そのものに関する知識を提供するものとしてみると、文法、語彙、意味習得のための素材としてだけでなく、さらにその教材としての利用可能性の幅が広がる。すなわち、ウィットに登場する様々なドイツ語を学習対象とすることが可能である。

たとえば、ドイツの様々な地方およびその地方の方言を対象にしたウィットが数多い。そのようなウィットに注目しているのが、マッヒャである。マッヒャ (Macha 1992) は、まず"Witz"という語の由来について略述した後、ウィットを、「事項のウィット」(Sachwitze)と「ことばのウィット」(Wortwitze)の2つに分けている。そして、それぞれのジャンルに属するウィットの例について述べた後、ドイツ語の歴史を踏まえた様々なドイツ語方言に関するウィットを素材にして、それらの方言の特徴について詳述している。

また、方言のウィットと絡んで、ドイツ各地方の人々、ドイツ語圏の各国民とその国民性や気質を対象としているウィットも多く見受けられる。筆者は、他の場所で、そのようなウィットを収集して、ドイツ語圏を中心としたヨーロッパ諸国民に関するランデスクン

デを展開することを試みた (Ueda 1998b)。

様々な職業に関するウィットも数多い。生徒に関するウィット (Schülerwitze) や子供に関するウィット (Kinderwitze) といったものも、それぞれ独自のジャンルとして確立されている。そのようなウィットからそれぞれの社会集団に特徴的な言葉遣いを拾い上げることによって、社会集団言語 (Soziolekte) や状況によることばの使い分け、すなわちレジスター (Register) に関する知識を深めることも可能であろう。

もちろん、客員労働者のドイツ語を初めとして、様々な段階の学習者言語の例も拾い上げることができる。つまり、ウィットというテキストを素材として、ドイツ社会言語学を展開することも可能であろう。

他方、ウィットを理解するには、単に言語的な知識だけでなく、当該学習言語文化圏に関する広汎な知識が必要とされる。あるいは、まさに現在世界で起こっているさまざまな出来事だけでなく、過去の出来事についても通じていることが必要になってくる。ウィットそれ自体を理解するという点からいえば、かなり高度の言語的知識と、いわば「百科全書的知識」が必要とされるといえる。このことは、逆に言えば、ウィットはランデスクンデを展開するためのすぐれた教材でもあり得るということの意味する。

15.6 カリカチュアとウィットを素材とするイディオム学習

15.6.0 これまで筆者は、まず、ドイツの戦後史における一大転換ともいうべき、ドイツ統一に焦点を合わせてドイツの新聞や雑誌から政治的カリカチュアを収集してきた。その目的は、カリカチュアにおいてドイツ統一という歴史的イベントがどのように描かれているかを確認しておくためであった。言葉による記述よりも、カリカチュアというメディアが鮮明なイメージを伴って、事態の推移に関する記憶を喚起し得ると考えたからである。ドイツ語授業におけるランデスクンデ展開のための資料を提供するというのがその作業の目的であった。

その作業の過程で、それらのカリカチュアの中には、イディオムを下敷きにして描かれたものも多いということに気づいた。そして、レーリヒの論文 (Röhrich 1969) と『ことわざ的な言い回しの大辞典』 (Röhrich 1991/92) に、政治的カリカチュアが多数掲載されていることに意を強くし、1970年以後の『バーデン新聞』 (Badische Zeitung) 紙を資料源としてカリカチュアを収集することに精力を傾けてきた。日本におけるドイツ語学習者のためのイディオム辞典を作成することがその最終目的である。

以下では、ドイツ語のイディオム表現を学習対象とするドイツ語授業において、政治的カリカチュア、ウィットという2種類のテキストをどのように投入することが可能かについて、具体例で考えていく。

15.6.1 学習対象の限定

たとえば、ドゥーデン (DUDEN 1992) には 10,000 以上の「固定的な言い回し、慣用的言い回し、ことわざ」(feste Wendungen, Redensarten und Sprichwörter) といった、いわゆるイディオム表現が見出しとして掲載されている。レーリヒの『ことわざ的な言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92) には、およそ 15,000 の慣用的言い回しが収録されている。これら多数の表現の中から、どれを学習対象として選択すべきなのか。いうまでもなく、これらの辞典に収録されていない慣用的な言い回しも存在するし、また新しい言いまわしも作り出されつつあるという事実を忘れてはならない。

ともあれ、外国語としてのドイツ語学習を念頭におくとき、おのずから何らかの基準に依拠して、その学習対象を限定せざるをえない。たとえば、ウォーチャック／リヒターの著書 (Wotjak/Richter 1993) では、800 以上のイディオム表現が練習の対象として取り上げられているが、その選定の基準について明確な根拠付けはなされていない。またレスキー／エティンガーの著書 (Hessky/Ettinger 1997) では、およそ 1,400 のイディオム表現が辞典的記述と練習問題の対象となっているが、それらは、頻度からではなく、ドイツ語の言語使用において重要だと判定されたものということになっている。ドゥーデンのイディオム辞典 (DUDEN 1992) と通常の辞典 (DUDEN 1996) を手がかりにして上述の数に絞り込んだということだが、最終的には著者たち自身の判断に依拠しているようである。

筆者がイディオム表現を下敷きとしている政治的カリカチュアに素材を求めたのは次の理由からである。当該のカリカチュアが掲載されている新聞の読者は、おそらくどのようなイディオム表現が基盤となって当のカリカチュアが描かれているかを容易に理解できるだろう。もし理解できないならば、説明的なコメントを付す必要があるだろう。カリカチュアの描き手や新聞の編集者はそのような判断に基づいて、当のカリカチュアを描いただろうし、新聞に掲載しただろう、と考えられる。

そのような考えが正しいとするならば、少なくとも当該の新聞の読者たちについては、当該のカリカチュアが下敷きとしているイディオム表現は、受け身的か能動的かのいずれであるかは措くとしても、語彙表現の一部として存在しているといえる。その意味で、現在のドイツ語を学習する者にとっては、生きた表現として学習対象に取り上げても間違い

ではなからう。

ウィットに登場するイディオム表現を学習対象とする理由は、次のようなものである。様々なウィット集が数多く出版され、今日ではインターネットでも次々と広まっていている。常に新しいウィットのみが出版され、流布しているとはいえないが、世代、性、職業等を問わず、多くの人々の間で受容されていることは確かである。そのようなウィットに登場している表現であるならば、容易に理解できないような表現であることは、即座に笑いをもたらすべきウィットにとっては致命的な欠陥であるといえよう。このことは逆に言えば、ウィットに登場するイディオム表現は、確実にウィットを受容する人々の語彙に属しているということである。従って、外国語としてのドイツ語を学ぶ者にとっても、それらのイディオム表現は、生きた表現として学習するに値すると考えられる。

15.6.2 学習対象イディオムの取り扱い

以下、新聞からの論説記事、カリカチュア、ウィットにおけるイディオム表現の取り扱いに関する具体的な提案について述べていく。

15.6.2.1 論説記事 (Zeitungskommentar) 中のイディオム

たとえば、一例として次の論説記事を取り上げてみよう。

"Diepgen beschwert sich, daß nach der Umverteilung beispielsweise eine Wählerstimme im Stadtteil Tempelhof "nur noch halb soviel wert wie eine in Steglitz" wäre. Die Schwankungen liegen freilich noch im rechtlich zulässigen Rahmen. Zur allgemeinen Verblüffung hat Eberhard Diepgen nun noch einen dritten Vorschlag aus dem Hut gezaubert. Danach soll es wie bisher 22 Berliner Bundestagsabgeordnete geben, die nicht über Wahlkreise und Landeslisten, sondern ausschließlich über Listen gewählt werden sollen. So ließe sich vermeiden, daß die Hälfte der CDU-Bewerber um ein Bundestagsmandat leer ausgeht. Daß Diepgen jedenfalls künftig in der Partei keinen leichten Stand haben wird, wenn die Zahl der Mandate sich von elf auf sechs verringert, ist so sicher wie das Amen in der Kirche" (Badische Zeitung, 4./5. Mai 1990, S. 5).

上の新聞論説は、事柄はやや古く、ドイツ統一がなり、東西ベルリンが一つになった時点以後において、ベルリンから選出されるドイツ連邦議会議員の定数に関するものである。当時の西ベルリン市長であるディープゲンはCDUに属しているが、CDUに属する議員が減少することが見込まれる事態を極力避けるため、第3の解決策を突然に持ち出したということがコメントの対象となっている。

この論説には、"einen dritten Vorschlag aus dem Hut gezaubert"と"so sicher wie das Amen in der Kirche"という2つのイディオム表現が登場している。前者のイディオム表現に関して、それらの構成要素の意味を総和した意味、「第3の提案を帽子から手品によって取り出した」という意味は、確かにそれなりに理解可能なものではあるが、このコンテキストにおいては適切ではないと判断される。そこで、たとえば、ドゥーデンのイディオム辞典を参照することになる。すると、そこには次のような説明が載っている。

"etwas aus dem Hut machen (ugs.): etwas improvisieren"あるいは"etwas aus dem Hut ziehen (ugs.): etwas [überraschend] hervorbringen, herbeischaffen" (DUDEN 1992: 359)

手元の独和辞典では、このイディオムは「(手品のように) あっさり... を取り出す (その場で即興でやってのける) (『独和大辞典』1144頁) という意味だと説明されている。

つまり、手品師が帽子からウサギや鳩を取り出すように、第3の提案を取り出すという意味である。"Zur allgemeinen Verblüffung" (誰もが度肝を抜かれたのだが) という句に重点が置かれている。もちろん、手品師のすることであるから、種も仕掛けもあるわけで、提案の中身を疑ってかかる必要があるというようなコノテーションが、この表現には付着している。

このような論説記事の中に出てくるイディオム表現に焦点を合わせて学習を進めることは、それなりに、ドイツの政治あるいは社会状況について多くを学ぶことになるだろう。しかし、一つのテーマを軸にして新聞記事を拾い集めていくといったことをしない限り、関心が分散してしまう危険性がある。そのようなことを防ぐため、たとえばドイツ統一というテーマの下、事態の進行に従って論説記事を収集して、その中に登場してくるイディオム表現を学習していくことが有効であろう (Ueda 1997a, Ueda 1997b, Ueda 1997c および 1998a)。

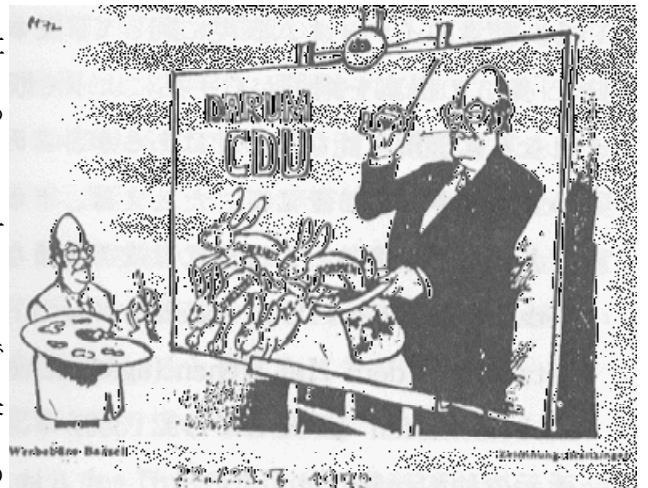
15.6.2.2 政治的カリカチュアの中のイディオム

さらに歩を進めて、イディオム表現が出てくる言語的テキストと並べて、当該のイディオム表現を下敷きとして描かれたカリカチュアを提示していくことが、学習の効果を高めるであろう。

「帽子からウサギを取り出す。」というイディオム表現に関連しては、様々な政治的カ

リカチュアが描かれている。

次のカリカチュアには、「コマーシャル事務所バルツェル」(Werbefür Barzel)とあるが、バルツェルは、SPD 党首ブランドと連邦首相の座を争った保守政党 CDU の党首である。保守勢力が持ち出す選挙戦のスローガンは、せっぱ詰まったときは、いつでも決まって、「国内治安」(Sicherheit)「経済および社会の安定」(Stabilität)、「税制等の



改革」(Reformen)である。これらのスローガンを、魔法使いのように、即座に帽子から取りだしている自らをポスターに描いている。このカリカチュアには、おきまりの、いつでも持ち出してくるスローガンしか思いつかない CDU に対する皮肉と批判が込められていると解することができる。(1972 年 7 月 22/23 日)

次のカリカチュアは、コール首相の下で長い間大蔵大臣を務めていたシュトルテンベルクが、税制改革のための解決策に苦慮している様子を描いている。成り立てのマジシャンなので、術に熟達していないため、舞台上に登場する寸前になっても大汗を流しながら、必死で手品のハンドブックを読んでいる。小道具のウサギは、帽子の中で不安げな顔で、そのシュトルテンベルクを見上げている。(1987 年 8 月 26 日)



ゴルバチョフは、ソビエト連邦最後の書記長となったわけであるが、彼は、緊張緩和のため、思い切った提案を次々に行った。核兵器を完全に廃棄し、世界から核兵器をなくすことをも提案し、そしてノーベル平和賞を受賞するという榮譽にも輝くことに



なったのである。(Röhrich 1991/92: 1786)

4番目のカリカチュアは、DDR（ドイツ民主共和国、東ドイツ）が崩壊・消滅し、統一へと向かっている過程で明るみになってきたことだが、DDRにおける国家の中の国家として国民を監視していた「国家保安省」（シュタージ）がドイツ連邦共和国におけるドイツ赤軍派（RAF）と通じていたことが、次々と暴かれ、国民を驚愕させたのであった。



上述のイディオム表現には、カリカチュアが示しているように、「Ewas aus dem Zylinder holen (zaubern)」というバリエーションもある。そしてまさにマジシャンが行うように、「das Kaninchen aus dem Zylinder holen」と表現することも可能である。(Röhrich 1991/92: 1785)

15.6.2.3 ウィットの中のイディオム

論説記事という言語的コンテクストにおいてイディオム表現の具体的な使用例を理解し、さらにカリカチュアによって、イディオム表現の意味を視覚的映像によって捉え、鮮明に記憶に留めた。その次の段階は、ウィットにおけるイディオム表現について考えてみる。たとえば、次のウィットは、上述のイディオム表現「Etwas aus dem Hut/ Zylinder holen/ zaubern」が下敷きとなっている。このウィットのテキストを読む前、あるいは一読してから、どのようなイディオム表現がこのウィットのテキストの下敷きとなっているか、という問を発することがまず可能であろう。その間に答えることによって、ここで問題としているイディオム表現が確実に理解できたかどうか、そして多少なりともアクティブに駆使できるかどうかを確認することができるであろう。

Ein kleines Häschen will von seiner Mutter wissen, woher die kleinen Hasen kommen. Die Hasenmutter will die Frage zuerst nicht beantworten, aber da das kleine Häschen nicht locker läßt, sagt sie schließlich: **Die kleinen Hasen kommen aus dem Hut des Zauberers!** (Fremgen(Hrsg.) 1993: 99)

（子ウサギが、ウサギはどこから生まれるかを、お母さんから知りたがっている。お母さんウサギは子ウサギの質問に答えまいとするが、子ウサギはそれでは承知しない。で、とどのつまり、お母さんウサギは答える。「ウサギは魔法使いの帽子から生まれてくるのだよ!」）

次のウィットも上述のイディオムが下敷きとなっていることは、明らかである。ここでも、テキストを読む前、あるいは一読してから、問題となっているイディオム表現に関する問を発することが考えられる。

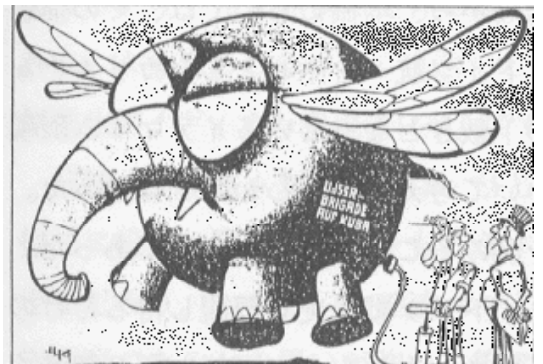
Die Hasen sind mit der Aufklärung ihrer Kinder noch weit zurück. "Wie ist das, Mami?" fragt der kleine Hase. "Die Menschen bringt der Storch. **Wie bin ich zur Welt gekommen?" "Dich hat der Zauberer aus dem Zylinder gezogen."** (Dietl 1988: 59)

(ウサギは子供たちに対する性教育においてはるかに遅れている。「ママ、どうなっているの?」と、子ウサギが質問する。「人間はコウノトリが運んでくるというけど、僕はどのようにしてこの世に出てきたの? 「あんたは魔法使いが帽子から取り出したんだよ。」)

ウィットをイディオム学習の素材として投入するのは、応用的な段階ということになる。たまたま上で取り扱ったウィットには、イディオム表現がほぼ元の形で登場しているので、どのイディオムが基盤となっているかが比較的理解しやすいといえる。しかし、中には本来のイディオム表現が容易に認識できなくなっているものもある。たとえば、以下のウィットについては、授業においては、下敷きとなっているイディオム表現に関する問を発すると同時に、関連するカリカチュアを提示して、問題となっているイディオム表現を想起する助けとすることが一案であろう。OHPを使用して、全員でウィットのテキストを読み、カリカチュアを目にしながらか、考えていくことが、より共同作業を促すだろう、と筆者は考える。

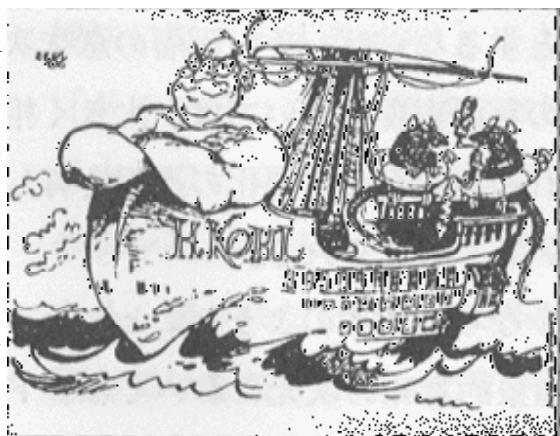
Eine Elefantenherde trottet durch den Urwald. Einer der Rüsselträger macht fortwährend: "SSsssss." Ein anderer stößt ihn an: "Warum machst du eigentlich bloß "SSSsss?" "Ach, weißt du, **ich bin der, der aus einer Mücke gemacht wurde..!**" (Bornheim 1983: 211)

(象の群が原始林の中をのそのそと歩いている。一頭がひっきりなしに「ブーン、ブーン」という音を出している。もう一頭がその象を突っついていう。「おまえは一体どうして「ブーン、ブーン」という音ばかり立っているのだ?」「おまえは、知らないのか。僕は、虻からつくられた象なんだ!」)



Auf einem alten Dampfer begegnen sich zwei Ratten. Sagt die eine zu der anderen: "Kommste mit? Wir spielen Schiffeversenken!" (Bornheim 1983: 9)

(おんぼろ蒸気船で2匹のネズミが出会った。一匹がもう一匹に向かっていう。「一緒に来るかい？船沈め遊びをしようよ！」)



15.7 残された課題

本章では、政治的カリカチュアを素材にして、それらのカリカチュアの下敷きとなっているイディオム表現を対象とするイディオム学習・教授法について考えた。本章における論述をモデルとして、ドイツ戦後史を概観するという目的に沿って政治的カリカチュアを配列し、それらのカリカチュアが下敷きとしているイディオム表現を取り出し、日独のイディオムを比較・対照しながら説明を付け加えていくという、より大きな作業が可能である。また、その説明には、できる限り、新聞記事から当該のイディオムの具体的使用例も取り込んでいき、カリカチュアと並べて、ウィットにおける当該のイディオム表現の使用例も提示していくという構想が考えられる。

なされるべき作業は、まだまだ多い。まずドイツ戦後史を概観し得るだけのカリカチュア、しかもイディオム表現を下敷きとしたものを可能な限り数多く収集することが必要である。そして、ドイツ戦後史に関する知識と認識を深めることも欠かせない。同時に、日本語のイディオム表現との比較・対照も進めていく必要があることはいままでもない。さらにウィットにおけるイディオム表現の用例も十分に収集していく必要がある。

人間の世界認識に対する生物学的制限が普遍的なものであるならば、世界認識の言語的表示も、意味的普遍仮説が正しいとするならば、その深層の意味次元では共通しているで

*6 "Ewas aus dem Zylinder holen" (帽子からなにかを取り出す) に関するカリカチュアは、いずれもレーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92: 1054) から。"aus einer Mücke einen Elefanten machen" (アブから象をつくる) というイディオムに関するカリカチュアは、『バーデン新聞』1985年10月23日から。"die Ratten verlassen das sinkende Schiff" (ネズミは沈む船を見捨てる) に関するカリカチュアは、レーリヒ『ことわざ的な言い回しの大辞典』(Röhrich 1991/92: 1228) から。

あろう。たとえ、表層の言語表現においては、大きく相違しているとしても。個々の言語体系は、それぞれ固有の言語化の過程を有しているが、共通した世界認識を出発点としていると考えられる。

日独イディオム比較・対照という次元においていうならば、次のようなことになるだろう。「何もしなくても楽に暮らせる」という抽象的意味の次元においては、ドイツ語母語話者においても、日本語母語話者においても、同一の概念的把握を行っているだろう。しかし、ドイツ語は、その概念的意味を"die gebratenen Tauben fliegen in das Maul"と言語化し、日本語は「鴨がネギを背負ってくる」（あるいは「鴨ネギ」）もしくは「左うちわ」あるいは「棚ボタ」と言語化する。それぞれの言語化においては、それぞれの言語共同体の集団的体験が反映されていると考えられる。そのようないわゆる文化的背景の違いが言語化のあり方に影響を与えているのである。逆にいうと、イディオム表現を比較・対照することは、比較・対照されるそれぞれの言語を母語とする人々の発想や世界観の一面を知ることにもつながるといえるだろう。

そのようにマクロな比較・対照以外にも、たとえば、日独両言語が、それぞれ事象のどのような側面に焦点を当てて、イディオム表現として言語化しているのか、イディオム表現全体にわたって、検討してみることは興味深いと思われる。よく言われる「する言語」と「なる言語」（池上 1981 参照）という類型化がイディオム表現のレベルでも妥当するかどうか、検討に値するだろう。

日独イディオム比較・対照研究は、ひとまずは、外国語としてのドイツ語学習・教授法に役立つ認識や知見をもたらすという応用言語学的な営みであると規定できるだろう。しかし、上で述べたように、その射程は大きく、広がりを持つ研究領野であるとの思いが強い。筆者の研究はほんの手始めの試みにすぎない。

ドイツ語学習の一つの単位としてのイディオム表現を念頭において、その効果的な学習に資するものとしてのカリカチュアとウィットの取り扱いの可能性について述べてきた。そのような考えに基づいて、筆者は、1998年、1999年の2年間、勤務先の大学において、イディオム表現を学習目標とした演習を行ってきたが、実際どれだけの成果が上がっているかについては、まだ調査は行っていない。しかしながら、以上提示してきたイディオム表現の使用例とそれを下敷きにして描かれたカリカチュアとウィットをドイツ語授業に投入することによって、イディオム表現をよりよく理解し、一層の定着をはかることができるものと確信する。そして、ドイツ語学習がより楽しいものとなることを願うもので

ある。

第16章 ランデスクンデとイディオム学習

Vom Stalin-Regen

in die Groß-Deutsche Traufe? (Lang 1999: 110)

(スターリン雨から大ドイツ雨樋へ?*)

16.0 はじめに

本章は、本論文の結論である。本章のタイトルと完全に一致する内容とは言い難いが、まず、これまでの論述を簡単にまとめる。そのまとめをふまえて、ドイツ語学習、その中におけるイディオム学習とランデスクンデの関係について考えていく。従って、内容的には、2つの部分に分かれている。

16.1 各章のまとめ

第1章において、イディオムに関する一般理論的研究、ドイツ語のイディオムに関する研究、ドイツ語との比較・対照研究、日独イディオム比較・対照研究、それぞれの領域における研究状況について、概観した。イディオム表現が持っている言語的特質に起因して、ことわざ辞典やイディオム辞典の編纂はさておくとしても、イディオムに関する研究は現代言語学において比較的新しい研究分野であるといえる。とりわけ日独イディオム比較・対照研究については、日独対照研究そのものが1971年に産声を上げたに比して、これも独和辞典、慣用句辞典をのぞいて、研究そのものはそれほど多くはない。

第2章では、ドイツ語および日本語におけるイディオム表現に関する研究をふまえて、イディオム表現の言語的特徴について論述した。本論文が考察対象としているイディオム表現の定義でもあるが、実際の資料収集においては、その視点は貫徹することが難しかったと反省せざるを得ない。

第3章においては、一つのドイツ語のイディオム表現の具体的な使用例について、とり

*1 これは、1998年DDR（ドイツ民主共和国）における民主化運動の中で創出された横断幕の標語であるが、"vom Regen in die Traufe kommen"（雨を避けて雨樋に来る：一難去ってまた一難）というイディオム表現を踏まえてのバリエーションである。「スターリン雨」とはもちろん、DDRにおける抑圧政治を意味している。「大ドイツ雨樋」とは、統一による大ドイツ主義の再来、それに対する恐れを表現している。1871年プロイセンを中心として成立したドイツ帝国をはじめとして、大国となったドイツはその後の歴史の中でヨーロッパにおいて幾多のわざわいの原因となってきたというのは、事実である。そのような歴史認識の表現でもあると、この標語は解することができる。

わけその意味的機能について論述した。「意味的付加価値」というのがキー・ワードである。政治的な言説においては、「多方向発信性」という点において、イディオム表現がアピールするために多用されることになる。

第4章においては、日本語母語話者がドイツ語イディオム学習において抱える困難性について、ドイツの新聞からひろった具体的な使用例を素材にして考えた。日独両言語におけるイディオム表現が依拠する比喩的イメージの違いが、学習上の困難性につながる場合が多い。特に注意を要するのは、「偽の友だち」関係にある日独両言語におけるイディオム表現である。

第5章は、本論の第一部でおこなう日独イディオム比較・対照研究のための準備としての考察である。先行研究をふまえて、比較・対照の視点を12の事項分野別に整理してみた。もちろんこの視点は、具体的な比較・研究を遂行する中で、さらに修正される必要があることはいままでのない。

第6章は、第7章から第13章においておこなわれる日独イディオム比較・対照研究のための資料源策定について述べた。イディオム辞典あるいは事典に関するコメントであると同時に、先行研究の概観でもある。検討の結果、日本語に関しては、原則的に『成語林』、ドイツ語に関してはフリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』とドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』を資料源とすることにした。ただし、第8章については、日本語は『数のことば辞典』を中心として資料をひろった。

第7章においては、日独両言語における色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム表現を比較・対照した。色彩に関する比喩的、政治的な意味合いが異なることに特に注意すべきである。具体的にどの色合いがどの色彩として認識されるかといった問題については、深くは論及していない。

第8章は、数詞を構成要素とするイディオム表現を比較・対照した。日本語においては、人生の区切りとしての数字の意味づけにおいて特徴があるようである。そして、ドイツ語において興味深いのは、自動車工業の国ドイツを反映していると思われるイディオム表現が存在することである。

第9章においては、ドイツ語の"Zunge"を構成要素とするイディオム表現、日本語の「舌」を構成要素とするイディオム表現を形態統語論、意味論、語用論の観点から分類、比較・対照した。「舌」が持っている身体器官としての第一次的機能よりも、発言行為に関わる二次的機能を意味内容とするイディオム表現が多数を占めることが明らかになった。ド

イツ語学習上において留意すべき、「偽の友だち」関係にあるいくつかの表現が抽出できた。

第10章は、第9章の論述を引き継ぐ形のものである。すなわち、日本語で「舌」を構成要素とする表現に、ドイツ語では"Mund"を構成要素とする表現が対応している例がいくつかあり、またその逆、つまり日本語で「口」を含む表現がドイツ語では"Zunge"を構成要素とするイディオム表現に対応している例がいくつか観察される。このことを検証するために、ドイツ語における"Mund"、日本語における「口」を構成要素とするイディオム表現を比較・対照した。この問い自体については、それほど多くの事例が見つかったわけではない、というのが答えになる。口に関しても、発言行為に関する表現が多いことが確認された。

第11章は、身体動作、しぐさに関する表現がイディオムとしての意味を有している固定的表現について、日独比較・対照の視点から論述した。ドイツの新聞からひろった論説記事における多くの使用例をあげて論述している点に特徴がある。イディオム表現が、どのようなコンテキストで、どのような意味、機能で使われているかを理解するには、現実の政治的コンテキストを背景にして使用されている事例を観察することが役立つという考えに基づいている。

第12章は、日独両言語にとっての外来語を含むイディオム表現を比較・対照した。共通項を設定して比較・対照することは、そう簡単ではないといえるが、日本語、ドイツ語それぞれにおけるイディオム表現が、どれだけ他の言語からの表現を取り込んでいるかということ、その取り込み方の実態が確認できた。日本語においては外来語を名詞として取り込んでイディオム表現を形成している場合がほとんどである。ドイツ語では、名詞句として取り込まれてイディオム表現を形成しているケースの方が、副詞句として取り込まれて動詞句を形成しているケースをいくらか上回っており、ドイツ語における名詞句構文を好む傾向がイディオム表現についてもいえることが確認できた。

第13章からは、ドイツ語学習における一単位としてのイディオム学習に関する考察をおこなっている。第12章においてすでにその方向が示されているのだが、特に固有名を構成要素とするイディオム表現において、日独両言語がその受けている文化的影響の違いが顕著であるといえる。外来語を構成要素とするイディオム表現の場合と同じように、確固たる比較・対照の基準を設定することは難しいが、日本語にとっての中国古典の世界と、ドイツ語にとっての古代ギリシャ、ローマ、そして聖書の世界を同等のものとして捉える

ことはそれほど間違いではないだろう。固有名を構成要素とするイディオム表現の学習において、筆者が構想するランデスクンデ（ドイツ語に関してはドイツ学ということになり、日本語に関しては日本学ということになる）の必要不可欠性が明らかになるといえる。

第14章は、政治的カリカチュアに見られるイディオム表現を素材とする、ドイツ語イディオム学習・教授法の具体的提案としての論述である。ドイツ現代史における大きな出来事であるドイツ統一に関して描かれた政治的カリカチュアを、情勢の推移に従って配列して、どのような政治的状況で、どのような事柄に関して、どのようなイディオムが使用されているのか、ということが、理解しやすい形で提示し得たと信じている。ドイツ現代史に関する知識をふまえて、具体的なイディオム使用のコンテクストを考えることによって、生きたイディオム表現を策定することも、目的であった。補足的に、「今年のことば」と「今年最悪のことば」を通して、ドイツ統一後10年を振り返って、ドイツ統一が投げかけた問題について考える素材とした。

第15章は、イディオム学習・教授法に関するもう一つの具体的提案として、政治的カリカチュアに加えて、ウィットにおけるイディオム表現を素材とする授業を構想してみた。ウィットを理解すること自体が高度のドイツ語能力だけでなく、筆者が構想するドイツ学の枠組みにおける多くの知識を必要とするものであるがゆえに、なおのこと、ドイツ語学習の到達目標として掲げられてしかるべきものであろう。

以上、本論文の内容を章立ての順に簡単にまとめてみた。本論文の結論をいえば、日独イディオム比較・対照研究を展開する中で得られる種々の洞察をふまえて、ドイツ語イディオム学習・教授法の具体的な組み立てを考えていくことが必要だということになるだろう。本論文の15章における論述がそのことを納得させるものであるならば、本論文の目的は達成されたといえよう。

16. 2. ドイツ学の構想とランデスクンデ、イディオム学習

本論文全体の「はじめに」で述べたように、外国語学習を支えるものとしてのランデスクンデの不可欠性を日独のイディオム表現を分析、比較・対照することを通して、明らかにしていくというのが、筆者の論述の基本姿勢であった。それではそのランデスクンデとはいったいどのようなものとして理解すればいいのか。以下においては、筆者が構想するランデスクンデについて述べる中で、ドイツ語学習、イディオム学習の位置づけを試みる。

最終的には、ドイツ語学習を支えるものとしてのランデスクンデをドイツ学として捉え

なおすことを提案したい。そしてそのドイツ学の中で、ドイツ語学習を位置づけたい。ドイツ語学習における一単位としてのイディオム学習というのが従来の理解であろうが、筆者は、むしろドイツ語学習における恒常的な学習項目としてのイディオム学習であるべきだと考えている。ドイツ語のウィットをドイツ語母語話者が理解するように理解し、笑うことができるようなドイツ語能力に少しでも接近し得るためには、イディオム表現とそれに伴うコンテキストを理解する能力が、ドイツ語学習における重要で、かつ恒常的な学習項目であるべきだろう、というのが筆者の結論である。そのためには日独イディオム比較・対照研究のみならず、日独両言語比較・対照研究が、さまざまな言語レベルで展開されていく必要があるだろう。とりわけ、意味論、語用論における研究の展開が強く望まれる。

16.2.1 ランデスクンデ (Landeskunde)

16.2.1.1 一般的理解

1970年代に入って、ドイツ語教育に関して"Landeskunde" (ランデスクンデ) という語が取りざたされるようになってきた。そしてこの語の理解は、さまざまであった。すなわち、ドイツの地理 (これが本来的な学校における学科目としての意味であった)、政治、経済、文化、歴史等の個別分野をさす語として理解される反面、ドイツ語学習に関わるあらゆる分野を包括する領域であるともされた。しかしながら、20年の年月における議論と実践を得て、現在においては、ドイツ語学習において付随的に必要とされる知識の総体をさす語として理解されているようである。そして、教師の側においてその体系化がはかれるべきものとされている。

16.2.1.2 筆者の理解

しかし、筆者は、ランデスクンデをそのような付随的な知識の総体であるとは捉えない。それはドイツ語学習、ドイツ語研究の目標とも関わる重要な問題であると考えられる。ドイツ語能力を身につけるのは、それ自体が自己目的であることは、きわめてまれであろう。ドイツ語を通して、何かを行うためである。その何かは、人によってさまざまであろう。しかし、最終的には、生きていくための知識を獲得していく手段であると捉えているであろう。ドイツ語を通して得られる知識、ドイツ語を介してドイツ語を話す人々とコミュニケーションすることによって豊かになる体験、そういったものは、すべて生きるためであり、よりよく生きるためであるといえるだろう。

16.2.1.3 提案

筆者は、ドイツ語に関わるランデスクンデを「ドイツ学」(Deutschkunde) として捉え

なおすことを提案したい。"Deutschkunde"であって"Deutschlandskunde"（ドイツ国学）ではないということに注意して欲しい。ドイツ語圏に関する学問分野の総体を意味するものとしてのドイツ・ランデスクンデであると理解したい。地球上でドイツ語が母語として習得され、話されている地域は、ドイツ連邦共和国だけではないからである。ドイツ語を通して得られる知識の総体、それがドイツ学を構成するものと考えよう。

16.2.1.4 ドイツ学の中のドイツ語学習

逆に言うならば、そのような全体的な人間形成に資するものとしてのドイツ学を進めていく手段としてのドイツ語学習であると理解する。従って、ドイツ語学習すなわちドイツ語研究、あるいはドイツ文学研究というのは、きわめて視野の狭い捉え方でしかない。ドイツ語学習によって身につけたドイツ語能力は、ドイツ学を推進していくための基本的条件でしかない。ドイツ語能力を身につけたものは、あらゆる方向を向いて進む可能性があるのである。その決断は、個々人の人生、人間形成と関わっている。

16.2.1.5 ドイツ語学習の中のイディオム学習

すでにいくどか本論文で触れたように、イディオム表現はきわめて重要な学習單元であるにもかかわらず、これまでその学習法、教授法に関する体系的考察は、数少ない。イディオム現象そのものに関する理論的、体系的研究の進展に伴って、学習法および教授法に関しても研究が進んでいくことが期待されるが、現状は試行錯誤の繰り返しといった状況である。本論文もその試みの一つではあるが、すっきりした体系的な学習法・教授法を提案し得たと断言することはできない。本論文の提案の趣旨を簡単にまとめるならば、日独両言語におけるイディオム表現を、事項・分野別に比較・対照研究することによって得られる知見に基づいて、ドイツ語のイディオム学習をおこなうというものである。とりわけ、イメージの差、比喩の差、使用条件の差、価値判断を含むコノテーションの差といった点に注意して、学習を進める必要があるであろうというものである。

16.2.1.6 イディオム学習を通してのドイツ学

このことはイディオム学習において、とりわけ目標言語（ドイツ語）と出発言語（日本語）の種々の差異がきわだっているということである。従って、ドイツ語におけるイディオム表現は、ドイツ語文化圏に関する種々の知識を獲得していく糸口となるものである。すなわち、ドイツ学を推し進めるための、格好の素材であるといえる。本論文における本論第二部の3つの章における論述は、筆者のこのような考えに基づいて行われたものである。

16.3. おわりに

本論文は、筆者が30年近い年月ドイツ語教育に携わってきたという経緯もあって、応用言語学、とりわけ外国語教授法の分野に属する性格のものである。そのため、日独比較・対照言語学といいながら、重点はドイツ語学習・教授法におかれざるを得なかった。しかしながら、言語研究自体の興味深いこと、言語自体に関する洞察を追求することの学問的満足 (*Begeisterung*) の貴重であることを知らないわけではないが、筆者の思考はどうしても外国語教育 (ドイツ語教育) の方に向いてしまわざるを得なかった。

筆者は、言語研究自体にとどまることには満足できない部分がある。言語に関する洞察は、その言語圏文化、その言語母語話者たちの感情世界、世界観、人生観といったものに接近する一つの手がかりであるという考えを固持したい。そのような考えから、本論文の場合は、ドイツ語を通してトータルな人間理解という意味でのドイツ学というものを構想し、提唱してみた。それは、和辻が「風土」というものの中で、文化、人間を捉えようとした方向の思考と、いくぶんかつながるものであると考えている。

おわりに

本論文は、応用言語学の分野に属するものであり、極めて理論的ならざる考察である。しかしそうである反面、実践に支えられた実効ある提言を行っているものであるという思いに支えられてこそ、拙い論考でありながらも、これまで筆者がエネルギーを注ぎ込んできた足跡を振り返りつつ、ひとつの道程としてまとめる勇気を持つことができたといえる。

筆者のもう一つの大きな課題は、カール・ビューラー研究である。ビューラーの言語理論に関する関心は、しかしながら、筆者のイディオム研究にもいわば地下水脈として流れていると考えている。いつか、その水脈が地上に湧き出てくることを自らに言いかけ、願いながら、ドイツ語イディオム学習・教授法に関する筆者の考察に関する論述を終えることにする。

本論文の基盤となっているのは、本文の2、3の章における脚注でも触れているように、「日独イディオム対照研究」(1995, 1996年度)と「政治的カリカチュアを素材とするイディオム学習・教授法に関する基礎的研究」(1998, 1999, 2000年度)という研究課題で交付された科学研究費補助による研究である。本論文は、従って、本来的には、これまでの研究成果の総まとめという性格の論述になるべきものであった。しかしながら、結果的には、まとめどころか、筆者の日独イディオム対照研究は、ようやくスタート地点についたばかりでしかないことを痛感させられている。事項・分野別の日独イディオム比較・対照しかり、政治的カリカチュア、ウィットを素材とするイディオム学習に関する考察、しかりである。これから行くべき道筋が確認できたことが本論文の成果といえるのみである。道なお遠しである。それは、とりもなおさず、筆者のドイツ語学習がさらに続いていくことを意味する。生きているかぎり学習することに、また人生の意味もあり、人間として生きるということなのであろう。

1994年の文学部改組に伴い、筆者は言語学講座に属することになった。言語学講座に移って以来、ドイツ語学だけでなく、一般言語学に関する研究も課題となってきた。過去6年の間に研鑽につとめてきた一般言語学的な考察や分析方法の幾ばくかでも本論文の論述に活かすことができたとすれば、文学部改組という外的事情に促されてのことではあるが、自らの研究の幅を少しでも広げることができたことをよしとすべきであろう。

過去6年にわたって常に、日独イディオム対照研究に関する論文をまとめるよう筆者を

おわりに

勇気づけてくださった言語学講座主任である古浦敏生教授に、心からお礼申し上げます。本論文執筆を始めるまで、そして執筆過程において頂いた古浦先生のコメントは最大限考慮して活かすよう努めてきたつもりであるが、果たして古浦先生の意図に沿う論考を展開することができたかどうかは、筆者には判断できない。最終責任は、総て筆者にあることを申し添えて、今一度のお礼の言葉とさせていただきます。

本論文執筆のため、種々の犠牲を強いられた身近な人たちに感謝の思いを伝えたいと思います。

2001年2月21日 東広島市鏡山 1-2-3 広島大学文学部植田教官室 (A451) で記す

参考文献表

配列は、著者あるいは編者または書名のアルファベット順としている。日本語の文献については、ローマ字書きした時のアルファベット順に従っている。本文中で直接言及したものだけでなく、本論文作のため「参考」にした文献をあげている。

Achterberg 1998: Christoph Achterberg, *Karikatur als Quelle*. Frankfurt am Main/Berlin/Bern/New York/Paris/Wien: Peter Lang. (Europäische Hochschulschriften: Reihe 31, Politikwissenschaft; B. 372)

Aitchison 1994: Jean Aitchison, *Words in the Mind. An Introduction to the Mental Lexicon*. Oxford: Basil Blackwell.

Alexander 1985: Richard J. Alexander, *Phraseological and Pragmatic Deficits in Advanced Learners of English: Problems of Vocabulary Learning?* In: *Die Neueren Sprachen* 6, S.613-621.

Alexander 1987: *Problems in Understanding and Teaching Idiomatic in English*, In: *Anglistik & Englischunterricht (Themenheft Wortschatzarbeit)* 32, S.105-122.

Augstein 1990: Rudolf Augstein, *Deutschland, einig Vaterland? : ein Streitgespräch*. Göttingen: Steidl.

Barz 1986: Irmhild Barz, *Probleme der phraseologischen Modifikation, Deutsch als Fremdsprache* 6, S.321-326.

Baur(Hrsg.) 1999: Rupprecht S. Baur(Hrsg.), *Wörter in Bildern - Bilder in Wörtern. Beiträge zur Phraseologie und Sprichwortforschung aus dem Westfälischen Arbeitskreis*. Baltmannsweiler: Schneider-Verlag.

Bausinger 1988: Hermann Bausinger, *Stereotypie und Wirklichkeit*. In: *Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache*. Band 14, S.157-170.

Bergson 1988: Henri Bergson, *Das Lachen: ein Essay über die Bedeutung des Komischen*. Aus dem Französischen Franz von Roswitha Plancherel-Walter. Nachw. von Karsten Witte. Darmstadt: Luchterhand-Literaturverl. (ベルグソン『笑いと持続と同時性』鈴木力衛他訳、白水社)

バーナード 1994: バーナード正子「からだ言葉の慣用表現」、『BRÜCKE』(獨協大学ドイツ語学研究室) 第7号、29-55頁。

Berlin/Kay 1969: Berlin, B./Kay, P., *Basic color terms. Their universality and evolution*. Berkeley.

Boden 1997: Matina Boden, *Europa von Rom nach Maastricht. Eine Geschichte in Karikaturen*. München/Landsberg am Lech: Günter Olzog Verlag.

- Bornheim 1983:** B. Bornheim, Das Superbuch der Witze. Niederhausen/Ts.: Falken-Verlag.
- Braun 1998:** Peter Braun, Tendenzen in der deutschen Gegenwartssprache. Sprachvarietäten. Stuttgart: Kohlhammer. (4. Auflage)
- Büchle 1994:** Karin Büchle, Schimpfwörter im DaF-Unterricht - Tabuthema, Randerscheinung oder doch mehr? In: Beiträge zur Fremdsprachenvermittlung, H.27, S.18-36.
- Bühler 1982:** Karl Bühler, Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache. Stuttgart/New York: Gustav Fischer Verlag (UTB 1159)
- Burger 1976:** Harald Burger, Die Achseln zucken - Zur sprachlichen Kodierung nicht-sprachlicher Kommunikation. In: Wirkendes Wort, 22, S.311-334
- Burger 1987:** Harald Burger, Funktionen von Phraseologismen in den Massenmedien. In: Burger/Zett (Hrsg.) 1987, S.11-28.
- Burger 1989:** >Bildhaft, übertragen, metaphorisch...< Zur Konfusion um die semantischen Merkmale von Phraseologismen. In: Gréciano (Hrsg.) 1989, S.17-29.
- Burger 1998:** Harald Burger, Phraseologie. Eine Einführung am Beispiel des Deutschen. Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Burger/Buhofer 1981:** Harald Burger/Annelies Buhofer, Phraseologie als Indikator für Text- und Stiltypen. In: Wirkendes Wort 6, S.377-398.
- Burger/Jaksche 1973:** Harald Burger/Harald Jaksche, Idiomatik des Deutschen. Tübingen: Max Niemeyer.
- Burger/Zett (Hrsg.) 1987:** Harald Burger/Robert Zett (Hrsg.), Aktuelle Probleme der Phraseologie-Symposium 27.-29.9. 1984 in Zürich. Bern u.a.: Lang.
- Burger u.a. 1982:** Harald Burger/Annelies Buhofer/Ambros Sialm, Handbuch der Phraseologie. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Burghoff 1988 :** Beatrix Burghoff, >In den alten Zeiten, wo das Wünschen noch geholfen hat. Die KHM 1-25. In : Rölleke (Hrsg.) 1988, S. 27-59.
- Buscha 1979:** Joachim Buscha, Deutsches Übungsbuch. Leipzig: VEB Enzyklopädie.
- Cernyseva 1984:** Irina Cernyseva, Aktuelle Probleme der deutschen Phraseologie. In: Deutsch als Fremdsprache 1, S.17-22.
- Chafe 1970:** Wallace L. Chafe, Meaning and the Structure of Language. Chicago.
- Coulmas 1981:** Florian Coulmas, Routine im Gespräch. Zur pragmatischen Fundierung der Idiomatik. Wiesbaden : Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion.
- Coulmas 1982:** Ein Stein des Anstoßes. Ausgewählte Probleme der Idiomatik. In: Studium Linguistik 13, S.17-36.
- Coulmas 1985a:** Diskursive Routine im Fremdsprachenerwerb. In: Sprache und Literatur in

Wissenschaft und Unterricht 56, S.47-66.

Coulmas 1985b: Lexikalisierung von Syntagmen. In: Schwarze/Wunderlich (Hrsg.) 1985, S.250-268.

Dahn 1996: Daniela Dahn, Mangelnde Gleichheit kann lebensgefährlich sein. In: Frankfurter Rundschau, 30. September, S.14. (Gespräch des Monats)

Daniels 1985: Karlheinz Daniels, Idiomatic Kompetenz in der Zielsprache Deutsch. Voraussetzungen, Möglichkeiten, Folgerungen. In: Wirkendes Wort 2, S.145-157.

Dietl 1986: Erhard Dietl, Die Witz-Rakete: 777 Witze. München: Franz Schneider Verlag.

Dietl 1988: Erhard Dietl (Hrsg.), Der Witzballon. Witze zum Abheben. München: F. Schneider.

Dietz 1999: Hans-Ulrich Dietz, Rhetorik in der Phraseologie. Zur Bedeutung rhetorischer Stilelemente im idiomatischen Wortschatz des Deutschen. Tübingen: Niemeyer.(Reihe Germanistische Linguistik 205)

Dittrich 1975: Hans Dittrich, Redensarten auf der Goldwaage. Herkunft und Bedeutung in einem bunten ABC erklärt von Dr. Hans Dittrich. Bonn: Ferd. Dummlers Verlag.

土肥直道『からだ語辞典』(騒人社、1996年)

Dobrovolskij 1995: Dmitrij Dobrovolskij, Kognitive Aspekte der Idioma-Semantik. Studien zum Thesaurus deutscher Idiome. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

『独和大辞典』、小学館。

DUDEN 1977: Das Bildwörterbuch der deutschen Sprache. 3., vollständig neu bearbeitete Auflage. Bearbeitet von Kurt Dieter Solf und Joachim Schmidt in Zusammenarbeit mit den Fachredaktionen des Bibliographischen Instituts. Mannheim/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

DUDEN 1989: Deutsches Universal-Wörterbuch A-Z: 2., völlig neu bearbeitete und stark erweiterte Auflage. Herausgegeben und bearbeitet vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern der Dudenredaktion unter der Leitung von Günther Drosdowski. Mannheim/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

DUDEN 1992: DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatics Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Günther Drosdowski und Werner Scholze-Stubenrecht. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

DUDEN 1996: Deutsches Universal Wörterbuch A-Z. 3., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Auf der Grundlage der neuen amtlichen Rechtschreibungen. Bearbeitet von Günther Drosdowski und der Dudenredaktion. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

Eismann 1989: Wolfgang Eismann, Zum Problem der Äquivalenz von Phraseologismen In: Gréciano (Hrsg.) 1989, S.83-93.

Esser 1969: Wilhelm Martin Esser, Deutsch-französische Parallelen in Redewendung, Sprachbild und Sprichwort. Beobachtungen zu den Schwierigkeiten einer nationalen Charakteristik, 79, S.204-217.

Erdmann 1966: Karl Otto Erdmann. Die Bedeutung des Wortes. (1. Auflage: 1919). Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

ジュリアス・ファウスト『ボディ・ランゲージ』(石川弘義訳、三笠書房)

Fernandez-Bravo(Hrsg.) 1999: Nicole Fernandez-Bravo(Hrsg.), Phraseme und typisierte Rede. Tübingen: Stauffenburg-Verlag. (Eurogermanistik 14)

Fleischer 1982: Wolfgang Fleischer, Phraseologie der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig: VEB Enzyklopädie.

Fleischer 1984: Zur Bedeutungsbeschreibung von Phraseologismen. In: Schildt/Viehwegger (Hrsg.) 1984, S.187-206.

Fleischer 1986: Die Modellierbarkeit von Phraseologismen - Möglichkeiten und Grenzen. In: Schöne (Hrsg.) 1986, S.218-222.

Földes 1984: Csaba Földes, "Sind alle deutschen Redensarten wirklich deutsch?" In: Sprachpflege, 9, S.127-129.

Földes 1984/1985: Eigennamen in deutschen phraseologischen Redewendungen. Eine etymologische und semantisch-stilistische Analyse. In: Muttersprache, XCV(1984/85), 5. S.174-180.

Földes 1987: Anthroponyme als Strukturkomponenten deutscher Phraseologismen. In: Zeitschrift für germanistische Linguistik, 15, S.1-19.

Földes, 1990: Phraseologie und Landeskunde - am Material des Deutschen und Ungarischen. In: Zielsprache Deutsch, H.2, S.11-15.

Fremgen (Hrsg.) 1993: Hjördis Fremgen (Hrsg.), 1000 Witze von A bis Z. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag. (Ravensburger Taschenbuch 1850)

Freud 1998: Sigmund Freud, Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten. Einleitung von Peter Gay. Frankfurt am Main:Fischer-Taschenbuch-Verlag.

Friederich 1966: Wolf Friederich, Moderne Deutsche Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber.

Friederich 1976: Wolf Friederich, Moderne Deutsche Idiomatik. Alphabetisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber.

Fritz 1981: Gerd Fritz, Zur Verwendung tautologischer Sätze in der Umgangssprache. In: Wirkendes Wort 6, S.398-415.

- Gamsch(Hrsg.) 1989:** E. Gamsch(Hrsg.), Die 300 besten Ärzte-Witze. München: Knaur.
- Gamsch(Hrsg.) 1991:** Die 300 besten Schüler-Witze. München: Droemersch Verlagsanstalt Th. Knaur Nachf..
- Gamsch(Hrsg.) 1998:** Gamsch(Hrsg.), Die 300 besten Kneipenwitze. München: Knaur.
- Gamsaliev 1983:** Brigitte Gamsaliev, Einige Gründe für die hohe Frequenz des Phraseologismus. >eine Rolle spielen<. In: Deutsch als Fremdsprache, S.287-289.
- Gibbs u.a. 1989:** Raymond W. Gibbs/Nandini P. Nayak/Cooper Cutting, How to Kick the Bucket and Not Decompose: Analyzability and Idiom Processing. In: Journal of Memory and Language 28, pp. 576-593.
- Gibbs 1990:** Raymond W. Gibbs, Psycholinguistic studies on the conceptual basis of idiomaticity. In: Cognitive Linguistics 1-4, pp.417-451.
- Glaap 1979:** Albert-Reiner Glaap, Idioms im Englischunterricht - kontextualisiert, sachfeldbezogen, kontrastiv. In: Die Neueren Sprachen 6, S.485-498.
- Glaap 1985:** Idiomatisches Englisch = Besseres Englisch? Zu einem vernachlässigten Bereich des fremdsprachlichen Unterrichts. In: Sprache und Literatur in Wissenschaft und Unterricht 16, S.95-104.
- Glaap/Weller 1979:** Albert-Reiner Glaap/Franz-Rudolf Weller, Auswahlbibliographie zur Idiomatik im Fremdsprachenunterricht (Englisch/Französisch). In: Die Neueren Sprachen 6, S.586-595.
- Gläser 1985:** Rosemarie Gläser, Idiomatik und Sprachvergleich. In: Sprache und Literatur in Wissenschaft und Unterricht 16, S.67-73.
- Gottschalk 1973:** Klaus-Dieter Gottschalk, Modelle zur Beschreibung der Idiomatik des Englischen. In: Linguistische Berichte 24, S.54-61.
- Gréciano 1982:** Gertrud Gréciano, Zur Semantik der deutschen Idiomatik. In: Zeitschrift für germanistische Linguistik 10, S.295-316.
- Gréciano 1983:** Forschungen zur Phraseologie. In: Zeitschrift für germanistische Linguistik 11, S.214- 243.
- Gréciano 1987a:** Idiom und Text. In: Deutsche Sprache 15, S.193-208.
- Gréciano 1987b:** Idiom und sprachspielerische Textkonstitution. In: Korhonen (Hrsg.) 1987, S.193-206.
- Gréciano 1987c:** Das Idiom als Superzeichen. Pragmatische Erkenntnisse und ihre Konsequenzen. In: Burger/Zett (Hrsg.) 1987, S.41-57.
- Gréciano 1988:** Affektbedingter Idiomgebrauch. In: Sandig (Hrsg.) 1988, S.49-61.
- Gréciano(Hrsg.) 1989:** EUROPHRAS 88. Phraseologie Contrastive. Actes du Colloque International Klingental - Strasbourg, 12-16 mai 1988. Strasbourg: Université des Sciences

Humaines. Département d'Etudes Allemandes.

Griesbach/Uhlig 1993:Heinz Griesbach/Gudrun Uhlig, Mit anderen Worten Deutsche Idiomatik Redensarten und Redeweisen. München: iudicium verlag.

エドワード・T・ホール 『かくれた次元』、日高敏隆、佐藤信行訳、みすず書房。

エドワード・T・ホール 『文化としての時間』、宇波彰訳、TBS ブリタニカ。

エドワード・T・ホール 『沈黙のことば』、国弘正雄、斎藤美津子他訳、南雲堂。

針原孝之著 『ことわざの基礎知識』、雄山閣、1978年。

Hartmann(Hrsg.) 1998: Dietrich Hartmann(Hrsg.), "Das geht auf keine Kuhhaut" - Arbeitsfelder der Phraseologie: Akten des Westfälischen Arbeitskreises Phraseologie/Parömiologie 1996 (Bochum). Bochum : Brockmeyer.

Hausendorf 2000: Heiko Hausendorf, Zugehörigkeit durch Sprache. Eine linguistische Studie am Beispiel der deutschen Wiedervereinigung. Tübingen: Niemeyer.

早川東三（著者代表）『日独口語辞典』、朝日出版社、1985年。

林四郎監修 『たのしく学ぶことわざ辞典』、NHK出版、2000年。

HDA: Handwörterbuch des Deutschen Aberglaubens. Herausgegeben unter besonderer Mitwirkung von E.Hoffmann-Krayer und Mitarbeit zahlreicher Fachgenossen von Hanns Bächtold-Stäubli. Band I(1927), II(1929/30) III(1931/32), IV(1931/32), V(1932/33), VI(1934/35), VII(1935/36), VIII(1936/37), IX(39/41), Register(1942). Berlin/Leipzig: Walter de Gruyter.

Heine 1987: E.W. Heine, Luthers Floh. Geschichten aus der Weltgeschichte. Zürich: Diogenes Verlag.

Heinsohn u.a. 1979: Gunnar Heinsohn/Rolf Knieper/Otto Steiger, Menschenproduktion. Allgemeine Bevölkerungslehre der Neuzeit. Frankfurt am Main: Suhrkamp. (edition suhrkamp 914)

Heller 1980: Dorothea Heller, Idiomatik. In: Lexikon der Germanistischen Linguistik. Herausgegeben von Hans Peter Althaus, Helmut Henne, Herbert Ernst Wiegand. Tübingen: Niemeyer, 1980, S.180-186.

Hessky/Ettinger 1997: Regina Hessky/Stefan Ettinger, Deutsche Redewendungen. Ein Wörter- und Übungsbuch für Fortgeschrittene. Tübingen: Gunter Narr.

Hildebrandt 1996: Dieter Hildebrandt, Berliner Enzyklopädie. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. (dtv 12224)

Holderbaum 2000: Anja Holderbaum, Englische Idiomatiken als Gegenstand einer empirischen Übersetzungsforschung. Trier: WVT, Wiss. Verl. Trier.

Höppner 1996: Reinhard Höppner, "Blöder Ossi-Wessi-Streit". In: Badische Zeitung, 2.Oktober, S.5.

池上 1981:池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。

『イラストことわざ辞典』、学習研究社、1983年。

伊藤 1991: 伊藤真「慣用句とそのモデル化の試み」、『ドイツ文学』(日本独文学会) 86、157-166頁。

岩崎英二郎／子安美知子／上田浩二／岡村三郎『ドイツ語基本熟語辞典』、白水社、2000年。

『実用ことわざ・慣用句辞典』、三省堂編修所編、三省堂、1998年。

Juhasz 1984: Jozsef Juhasz, Die semantische Teilbarkeit der phraseologischen Einheiten. In: Schildt/Viehweger (Hrsg.) 1984, S.207-215.

Kaehlbrandt 1999: Roland Kaehlbrandt, Deutsch für Eliten: ein Sprachführer. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt.

Kahlert/Kohlsaat 1997: Ein Nilpferd in der Kneipe. Witze, Bilder und Geschichten. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag.(rotfuchs 250)

金田鬼一訳『グリム童話』(一～五)(岩波文庫)。

金山宣夫『世界20カ国ノンバーバル事典』、研究社。

Kaneko (Hrsg.) 1984-87: Kaneko Tohru(Hrsg.), Deutsch und Japanisch im Kontrast, im Auftrag des Instituts für deutsche Sprache Mannheim. Heidelberg: Groos (4 Bde.)

Kantola 1987: Markku Kantola, Zum phraseologischen Wortpaar in der deutschen Gegenwartssprache. In: Korhonen (Hrsg.) 1987, S.111-128.

加藤主税『世紀末死語事典』、中央公論社、1997年。

Kauka 1999: Rolf Kauka, Ein Witz für jeden Schultag. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag.

Kay/McDaniel 1978: Paul Kay/C.K.McDaniel, The linguistic significance of the meanings of basic color terms. In: Language, Vol.54, No.3, pp. 610-646.

『数のことば辞典』、パラキハウス、講談社ことばの新書、1999年。

木下哲生『ことわざにうそはない?』、アリス館(ことばの探求VII-ことわざと慣用句)、1997年。

Köhler 1993: Peter Köhler (Hrsg.), Das Witzbuch. Stuttgart: Philipp Reclam jun. (Universal-Bibliothek Nr.8946)

Köster 1999: Rudolf Köster, DUDEN Redensarten.Herkunft und Bedeutung. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG (Duden-Taschenbücher 29)

木暮正夫『ことわざランド1』、佼正出版社、1993年。

小泉 保『ジョークとレトリックの語用論』、大修館書店 1998年。

『故事・俗信ことわざ大辞典』、小学館、1982年。

Koller 1974: Werner Koller, Intra- und interlinguale Aspekte idiomatischer Redensarten. In: Skandinavistik 4/1, S.1-24.

Koller 1975: Redensarten in Schlagzeilen. In: Muttersprache, S.400-409.

Koller 1975: Die einfachen Wahrheiten der Redensarten. In: Sprache und Literatur in Wissenschaft und Unterricht (Themenheft Idiomatik) 16/56, S.26-36.

Koller 1987: Überlegungen zu einem Phraseologie-Wörterbuch für Fremdsprachenunterricht und Übersetzungspraxis. In: Burger/Zett (Hrsg.) 1987, S.109-120.

Kolvenbach 1971: Monika Kolvenbach, Primäre Varianten idiomatischer Wendungen. In: Schweisthal (Hrsg.) 1971, S.65-75.

Korhonen(Hrsg.) 1987: Jarmo Korhonen (Hrsg.), Beiträge zur allgemeinen und germanistischen Phraseologieforschung. Internationales Symposium in Oulu 13.-15. Juni 1986. Veröffentlichung des germanistischen Instituts der Universität Oulu, Finnland.

小坂光一『応用言語科学としての日独語対照研究』、同学社、1992年。

『ことわざ慣用句辞典』、三省堂編集所。

Krauss 1993: Heinrich Krauss, Geflügelte Bibelworte. Das Lexikon biblischer Redensarten. München: Verlag C.H. Beck.

Krüger-Lorenzen 1982: Krüger-Lorenzen, Deutsche Redensarten und was dahinter steckt. München: Wilhelm Heyne Verlag.

Kühn 1984: Peter Kühn, Pragmatische und lexikographische Beschreibung phraseologischer Einheiten: Phraseologismen und Routineformeln. In: Wiegand (Hrsg.) 1984, S.175-235.

Kühn 1985: Phraseologismen und ihr semantischer Mehrwert. >jemandem auf die Finger gucken< in einer Bundestagsrede. In: Sprache und Literatur in Wissenschaft und Unterricht 16/56, S.37-46.

Kühn 1987: Phraseologismen: sprachhandlungstheoretische Einordnung und Beschreibung. In: Burger/Zett (Hrsg.) 1987, S.121-137.

Kühn 1989: Phraseologie und Lexikographie: Zur semantischen Kommentierung phraseologischer Einheiten im Wörterbuch. In: Wiegand (Hrsg.) 1989, S.133-154.

Kühnert 1985: Helmut Kühnert, Die Rolle des Bildverständnisses bei Phraseologismen im Fremdsprachenunterricht für Fortgeschrittene. In: Deutsch als Fremdsprache 4, S.223-236.

国松俊英著『ことわざおもしろ探偵団1』、同著『ことわざおもしろ探偵団2』、同著『ことわざおもしろ探偵団3』(いずれも童心社)。

Kunz 1995: Johannes Kunz, Der Österreichische Witz. Das Standardwerk mit 1200 Witzen und Anekdoten, eingeleitet von Fritz Muliär. Wien:Ibera & Molden Verlag.

Kunz 1999: Johannes Kunz, Selten so gelacht. Das 20. Jahrhundert in Witz und Anekdote. Wien:

Molden Verlag.

Küpper 1983: Heinz Küpper, Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache. Stuttgart: Klett Verlag.

Küpper 1987: Heinz Küpper, Deutsch zum Anfassen. Moderne Redewendungen von "Abseilen" bis "Zoff". Wiesbaden: VMA-Verlag.

倉持保男・阪田雪子 [編] 『慣用句の辞典』、三省堂、1997 年。

ラ・フォンテーネ『寓話』今野一雄訳、岩波文庫（上、下）。

Lakoff 1991: George Lakoff, Metapher und Krieg. In: Sprache im technischen Zeitalter, 119, S.22-239 (Aus dem Amerikanischen von Thomas Mohr)

Lang 1999: Ewald Lang, Wendehals & Stasi-Laus. Demo-Sprüche vor der Wende. München: Wilhelm Heyne Verlag.(Heyne Mini 1451)

Lister 1999: Ronald Lister, Idioms im Griff: phrasal verbs, Redewendungen und Metaphern nach Situationen. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt-Taschenbuch-Verlag.

Lüger1999: Heinz-Helmut Lüger, Satzwertige Phraseologismen. Eine pragmalinguistische Untersuchung. Wien: Ed. Praesens.

Maaz 1991: Hans Joachim Maaz, Das gestürzte Volk oder die unglückliche Einheit. Berlin: Argon Verlag.

Macha 1992: Jürgen Macha, Sprache und Witz. Die komische Kraft der Wörter. Bonn: Ferd. Dummlers Verlag.

前沢明著『まんがで攻略 慣用句なんてこわくない』、実業之日本社、1992 年。

Malinowski 1923 : Bronislaw Malinowski, The problem of meaning in primitive languages. In: C. K. Ogden/I. A. Richards, The meaning of meaning. London: Kegan Paul. (ブロニスロー・マリノウスキー「原始言語における意味の問題」(石橋幸太郎訳『意味の意味』、興文社、1936、305-362 頁)

Marienfeld 1990: Wolfgang Marienfeld, Die Geschichte des Deutschlandsproblems im Spiegel der politischen Karikatur. Hameln: Verlag CW Niemeyer.

松田秀元・下山峯子『ドイツ語おもしろ表現』、三修社。

ミヒェル **1980:** ミヒェル・ウォルフガング(Wolfgang Michel) 「非言語的手段によるコミュニケーション<ドイツ的表現への招待>」、『西日本日独協会年報』 5号、22-30 頁。

Mieder 1995: Wolfgang Mieder, Deutsche Redensarten, Sprichwörter und Zitate. Studien zur ihrer Herkunft, Überlieferung und Verwendung. Wien: Edition Praesens.

Militz 1990: Hans-Manfred Militz, "Eigennamen im Sprichwort". In: Sprachpflege und Sprachkultur 2, S.33-35.

宮地裕編『慣用句の意味と用法』、明治書院、1982年。

森睦彦『数のつく日本語辞典』、東京堂出版、1999年。

Müller 1994: Gerhard Müller, Der >>Besserwessi<< und die >>innere Mauer<<. In: Muttersprache, 2, S.118-136.

中野道雄・ジェイムズ=カーカップ『ボディ・ランゲージ事典』、大修館書店 1985年。
『日本語大辞典』、講談社。

Nitta u.a.(Hrsg.) 1999: Nitta, Haruo/Shigeto, Minoru/Wienold, Götz (Hrsg.), Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen. München: iudicium, 1999.

延原政行編『ことわざ事典』、金園社。

野村雅一『ボディランゲージを読む一身ぶり空間の文化』、平凡社。

尾上兼英編『成語林』、旺文社、1992年。

奥山益朗編『慣用表現辞典』、東京堂出版、1994年。

Pankow/Salminen 1987: Christiane Pankow/Olli Salminen, Routineformeln im finnisch-deutschen Spracherwerb - eine Forschungsaufgabe. In: Korhonen (Hrsg.) 1987, S.237-243.

Petrovic 1988: Velimir Petrovic, Phraseologie im Fremdsprachenunterricht. In: Deutsche Sprache 16, S.351-361.

Pfister 1936/37: F. Pfister, Tabu. In: HDA, Band VIII, S. 630-635.

Pfromm 1995: Rüdiger Pfromm, Und Europa wächst zusammen. Karikaturen, Lieder, Gedichte und Texte für Fremdsprachenunterricht und Schüleraustausch. Rheinbach: CMZ-Verlag.

Pohlke 2000: Reinhard Pohlke, Das wissen nur die Götter. Deutsche Redensarten aus dem Griechischen. Düsseldorf/Zürich: Artemis & Winkler.

Polenz 1985: Peter von Polenz, Deutsche Satzsemantik. Grundbegriffe des Zwischen-den-Zeilen-Lesens. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Pötzsch 1997: Horst Pötzsch, Deutsche Geschichte nach 1945 im Spiegel der Karikatur. München/Landsberg am Lech: Olzog Verlag.

Püschel 1978: Ulrich Püschel, Wortbildung und Idiomatik. In: Zeitschrift für germanistische Linguistik 6, S.151-167.

Raab 1952: Heinrich Raab, Deutsche Redewendungen. Von Abblitzen bis Zügel schießen lassen. St. Pölten/Wien.

Ramser 1997: Katharina Ramser(Hrsg.), Blondinenwitze. Bern/München: Edition Hans Erpf.

- Raskin 1985:** Victor Raskin, Semantic mechanisms of humor. Dordrecht:Reidel.
- Reger 1974:** Harald Reger, Zur Idiomatik der Boulevardpresse. In: Muttersprache, S.230-239.
- Reger 1977:** Zur Idiomatik der konventionellen Tagespresse. In: Muttersprache, S.337- 346.
- Reger 1978:** Die Metaphorik in der konventionellen Tagespresse. In: Muttersprache, S.259-279.
- Reineke/Damm 1983:** Wolfgang Reineke/Friedbert Damm, Signale im Gespräch. Ein Kommunikationsleitfaden. Heidelberg: Sauer-Verlag. (2., erweiterte Auflage)
- Reiter 1997:** Raimond Reiter, Der "heimtückische" Witz im Dritten Reich als politisches Gleichnis. In: Muttersprache 3, S. 226-232.
- Röhrich 1972:** Lutz Röhrich, Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. Freiburg/Basel/Wien.
- Röhrich 1980:** Gebärdensprache und Sprachengebärde. In: Humaniora. Essays in Literatur. Folklore. Bibliography. Honoring Acher Taylor on his Seventieth Birthday. Editors: Waland D. Haud/ Gustave O. Arit. New York: J. J. Augustin Publishers, pp.121-149.
- Röhrich 1991/92:** Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten. 1-3. Freiburg/Basel/Wien: Herder Verlag.
- Rölleke (Hrsg.) 1988:** Heinz Rölleke (Hrsg.), Redensarten des Volks, auf die ich immer horche. Das Sprichwort in den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Bern/Frankfurt/New York: Peter Lang Verlag.
- Roos 1979:** Eckhard Roos, Semantische Aspekte englischer Idioms. In: Anglistik & Englischunterricht (Themenheft Semantik) 8, S.117-130.
- Rüegg 1991:** Regula Rüegg, "Im Abgehen ein Schnippchen schlagend" Zur Funktion von Kinegrammen in Volksstücken des 19. und 20. Jahrhunderts. Bern/Berlin/Franfurt am Main/New York/Paris/ Wien: Peter Lang.
- Sabban (Hrsg.) 1999:** Annette Sabban (Hrsg.),Phraseologie und Übersetzen. Bielefeld: Aisthesis-Verlag.
- Sandig (Hrsg.) 1988:** Barbara Sandig (Hrsg.), Stilistisch-Rhetorische Diskursanalyse. Tübingen: Narr.
- Sandig 1989:** Stilistische Funktionen verbaler Idiome am Beispiel von Zeitungsglossen und anderen Verwendungen. In: Gréciano (Hrsg.) 1989, 387-400.
- Scheffler 1995:** Ursel Scheffler, Kugelblitz-Witze. München: Franz Schneider Verlag.
- Scheman 1989:** Hans Schemann, Synonymwörterbuch der deutschen Redensarten. Straelen.
- Schemann 2000:** Hans Schemann, Idiomatik und Anthropologie: "Bild" und "Bedeutung" in linguistischer, sprachgenetischer und philosophischer Perspektive. Hildesheim/Zürich: Olms(Germanistische Linguistik: Monographien 4)
- Schiewe 1997:** Jürgen Schiewe, Sprachwitz - Sprachspiel - Sprachrealität. Über die Sprache im

geteilten und vereinten Deutschland. In: ZGL (Zeitschrift für germanistische Linguistik) 25, S.129-146.

Schiewe/Schiewe 2000: Andrea Schiewe/Jürgen Schiewe, Witzkultur in der DDR. Ein Beitrag zur Sprachkritik. Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht.

Schildt/ Viehweger (Hrsg.) 1984: J. Schildt/D. Viehweger (Hrsg.), Die Lexikographie von heute und das Wörterbuch von morgen. Analyse - Probleme - Vorschläge. Berlin (Ost): Akademie der Wissenschaften der DDR. Zentralinstitut der Sprachwissenschaft (Linguistische Studien, Reihe A, Arbeitsberichte 109).

Schlechte/Schlechte 1991: Helga und Klaus-Dieter Schlechte: Witze bis zur Wende. 40 Jahre politischer Witz in der DDR. München: Ehrenwirth.

Schlosser 2000: Horst Dieter Schlosser, Lexikon der Unwörter. Bertelsmann Lexikon Verlag.

Schöffler 1970: Herbert Schöffler, Kleine Geographie des deutschen Witzes. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. (Kleine Vandenhoeck-Reihe 9/9a)

Schöne (Hrsg.) 1986: Albrecht Schöne (Hrsg.): Kontroversen, alte und neue. Akten des 7. Internationalen Germanisten-Kongresses Göttingen 1985. Tübingen: Niemeyer, Band 3.

Scholze-Stubenrecht 1987: Werner Scholze-Stubenrecht, Phraseologismen im Wörterbuch. In: Jahrbuch 1987 des IDS. Düsseldorf: Schwann, S.284-302 (Sprache der Gegenwart 74).

Schröder 1985: Konrad Schröder, Wortschatzunterricht, Wortschatzerwerb und Umgang mit Wörterbuch. Eine Bibliographie für die Jahre 1973-1984. In: Die Neueren Sprachen 6, S.652-669.

Schwarze/Wunderlich(Hrsg.) 1985: Christoph Schwarze/Dieter Wunderlich(Hrsg.), Handbuch der Lexikologie. Frankfurt am Main: Athenäum.

Schweisthal(Hrsg.) 1971: Günther Schweisthal (Hrsg.), Grammatik, Kybernetik, Kommunikation. Festschrift für Alfred Hoppe. Bonn: Ferd Dümmlers.

瀬川真由美『猫の嘆きと白ネズミ』、白水社、1996年。

塩田丸男『人体表現読本』、白水社、1998年。

白石大二『国語慣用句辞典』、東京堂出版、1969年。

白石大二監修『まんがことわざ事典』、学習研究社。

Simmel 1993: Johannes Mario Simmel, Auch wenn ich lache, muß ich weinen. München: Droemer Knaur.

砂見 1998: 砂見かおり「認知慣用句論のための一考察—慣用句シソーラスのモデル化問題を中心に—」『独文研究室報』（金沢大学独文学研究会）第13号、17-40頁。

丹野顕『意味から引ける慣用句辞典』、日本実業出版社、1998年。

『使える慣用句事典』、日本語表現研究会 [著]、PHP研究所、1997年。

Ueda 1991a: Yasunari Ueda, Schwierigkeiten beim Verstehen der deutschen idiomatischen Wendungen. In: Info Daf: Information Deutsch als Fremdsprache, herausgegeben vom Deutschen Akademischen Austauschdienst in Zusammenarbeit mit dem Fachverband Deutsch als Fremdsprache 18, 1, S.3-14.

植田 1991b: 植田康成「ドイツ語イディオムの世界ーイディオムからみた日独比較文化論の試みー」、『かいろす』29、1-37頁。

Ueda 1993a: Kontrastive Phraseologie - Deutsch-Japanisch. In: Zielsprache Deutsch, 3, S.128-133.

植田 1993b: 「固有名詞を構成要素とするイディオムー日独対照イディオム学を目指してー」、『かいろす』31、42-81頁。

植田 1996: 「カリカチュアに見るドイツ統一(1)」、『かいろす』34、93-125頁。

植田 1997a: 「「壁」の崩壊とイディオムー"die Attitüde der beleidigten Leberwurst"ー」『広島大学文学部紀要』第57巻、210-228頁。

植田 1997b: 「政治的カリカチュアに見るドイツ統一」『広島大学文学部紀要』第57巻特輯号4（本文86頁）。

Ueda 1997c: Politische Karikaturen, die deutsche Einheit und idiomatische Wendungen. Zur Landeskunde im Unterricht Deutsch als Fremdsprache. In: Zielsprache Deutsch 28, 4, S. 202-211.

Ueda 1998a: Die Deutsche Einheit und idiomatische Wendungen in politischen Karikaturen. Zur Behandlungsmöglichkeit von idiomatischen Wendungen im Deutschunterricht für Ausländer. In: Hans Barkowski (Hrsg.), Deutsch als Fremdsprache. weltweit interkulturell? Wien: Edition Volkshochschule, S.141-160.

植田 1998b: 「ウィットの中のヨーロッパ諸国民ードイツを中心としてー」『かいろす』6、19-63頁。

植田 1999a: 「政治的カリカチュアとウィットに見るイディオム」『広島大学文学部紀要』第59巻特輯号2（本文89頁）。

植田 1999b: 「政治的カリカチュア、ウィットを素材とするイディオム学習に関する一考察」『広島大学文学部紀要』第59巻、188-208頁。

Ulrich 1980: Winfried Ulrich, Der Witz im Deutschunterricht. Braunschweig: Georg Westermann Verlag.

Valence 1995: Tom Valence, 1000 tolle Schülerwitze. Würzburg: Arena Verlag.

Wander 1987: Friedrich Wilhelm Wander, Deutsches Sprichwörter-Lexikon. Ein Hausschatz für das deutsche Volk. Kettwig. (1. Ausgabe: Leipzig 1867)

和辻哲郎『風土』(岩波文庫、青144-2)。

- Wiegand (Hrsg.) 1984:** Herbert Ernst Wiegand (Hrsg.), Studien zur Neuhochdeutschen Lexikographie. In: Germanistische Linguistik 1-3 (1983). Hildesheim: Olms.
- Wiegand 1989:** Wörterbuch in der Diskussion. Vorträge aus dem Heidelberger Lexikographischen Kolloquium. Tübingen: Niemeyer.
- Wirrer (Hg.) 1998:** Jan Wirrer (Hrsg.), Phraseologismen in Text und Kontext. Bielefeld: Aisthesis-Verlag.
- Witzbuch 1997:** Witzbuch über 1000 Witze für junge Leute. Stuttgart: Fischer Verlag.
- Wotjak 1984:** Barbara Wotjak, Zu einer integrativen Mehrebenenbeschreibung von Phraseologismen. In: Deutsch als Fremdsprache, S.326-331.
- Wotjak 1985a:** Zu Inhalts- und Ausdrucksstruktur ausgewählter somatischer Phraseolexeme (1). In: Deutsch als Fremdsprache, S.216-223.
- Wotjak 1985b:** Zu Inhalts- und Ausdrucksstruktur ausgewählter somatischer Phraseolexeme(2). In: Deutsch als Fremdsprache, S.270-276.
- Wotjak/Richter 1993:** Barbara Wotjak/Manfred Richter, sage und schreibe. Deutsche Phraseologismen in Theorie und Praxis. Leipzig/Berlin/München/Wien/Zürich/New York: Langenscheidt-Verlag Enzyklopädie.

【資料1】ドイツ語における色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム

1. (bis) ins Aschgrau : (viel) zu weit führen, (weit) über das Ziel gehen (－)
hinausschießen
(灰色に撃ち出す) (本来の目標を超えて、はるか遠くまで行く)
2. blau sein (od. blau : (sehr) betrunken sein (－)
sein wie ein Veilchen)
((権のように) 青くなっている) (酔っている)
3. blau machen : nicht zur Arbeit gehen (－)
(青くする) (仕事に行かない)
4. j-n blau und grün : j-n sehr verprügeln (－)
schlagen
(誰かを打って、青く緑にする) (ひどく殴打する)
5. blaues Blut adelige Abstammung (±)
(青い血) (貴族の血統)
6. blaue Bohnen Gewehrkegeln (±)
(青い豆) (弾丸)
7. blaue Jungen (od. Matrosen (±)
Jungs)
(青い若者) (水夫)
8. blauer Montag : ein Montag, den man sich unberechtigterweise
von der Arbeit freigemacht hat (－)
(青の月曜日) (仕事をずる休みした月曜日)
9. mit einem blauen :1) (bei einem Unfall) nicht (sehr) verletzt werden
Auge davonkommen 2) nicht (sehr) bestraft werden (±)
(青い片目で逃れる) (1) 事故で軽傷を負う、2) 軽い罰を受ける)
10. den blauen Brief 1) die Kündigung erhalten
erhalten (od. 2) e-n Mahnbrief der Schule bekommen (±)
bekommen, kriegen)
(青い手紙を受け取る) (1) 解雇通知を受け取る、2) 学校から警告の手紙を受け取る)
11. j-m blauen Dunst : j-m. etw. vorspiegeln, vortäuschen (－)
vormachen
(誰かに対して青いもやを作る) (誰かを欺く)
12. sein blaues Wunder : eine böse Überraschung erleben (－)
erleben
(青の奇跡を体験する) (予期もしなかった悪いことにめぐり合う)
13. j-m (od. für j-n) das (fast) Unmögliches tun (wollen) (－)
Blaue vom Himmel
(herunter) holen
(wollen)
(空の青を引き下ろそうとする) (ほとんど不可能なことをしようとする)
14. das Blaue vom Himmel alles Mögliche, Unwahrscheinliche zusammenlügen
(herunter)lügen (od. versprechen) (－)
(od. versprechen)
(空の青をとって来ると嘘を言う) (不可能事、できそうもないことを約束する)
15. das Blaue vom Unwichtiges reden und kein Ende finden (－)
Himmel
herunter)reden .
(od. schwatzen)
(空の青をとって来るという) (取りに足りないことを限りなくしゃべる)
16. ins Blaue hinein ohne jeden Plan und Zweck reden (träumen,
reden, (od. träumen schießen) (±)
schießen
(青に向かってしゃべる) (計画、目的もなしにしゃべる)
17. e-e Fahrt ins Blaue s. Fahrt:eine (Vergnügungs-)Fahrt mit unbekanntem Ziel (±)
(青に向かってのドライブ) (行き先のわからないドライブ)
18. der blaue Planet: die Erde (±)
(青い惑星) (地球)
19. die blaue Stunde: die Zeit der Dämmerung (+)

- (青い時間) (たそがれ時)
20. blondes Gift: verführerische Blondine (±)
(ブロンドの毒) (魅惑的なブロンドの女性)
21. da ist mir zu braun: das ist mir zu bunt (－)
(あまりに茶色だ) (行き過ぎだ)
22. braun sein: gewitzt sein (－)
(茶色である) (頭がおかしい)
23. jemanden braun färben: jemanden zum Nationalsozialismus überreden (－)
(茶色に染める) (国家社会主義を信奉させる)
24. etwas zu braun machen: etwas übertreiben (－)
(過剰に茶色にする) (誇張する)
25. das ist mir zu bunt
(あまりにも色とりどりだ) das finde ich schlimm, unverschämt (－)
(ひどい、恥知らずだと思う)
26. es wird mir zu bunt (－)
(色とりどりになる) (ひどい、限界に達する)
27. es zu bunt treiben
(mit etwas) etw. zügellos tun, über das anständige Maß
hinausgehen (－)
(色とりどりになるまで行う) (止めどなく、適切な規模を越えていく)
28. bunt zugehen
(色とりどりの状態である) durcheinandergo, lebhaft (od. wüst) sein (－)
(度を超して、めちやくちやになっている)
29. bunter Abend
(色とりどりの夕べ) e-e Abendveranstaltung mit ganz
verschiedenartigem Unterhaltungsprogramm (±)
(様々な余興をともなった夕べ)
30. e-e bunte Platte
(色とりどりの板) : eine Platte mit verschiedenen Wurstsorten in
aufgeschnittener Form (±)
(あれこれのソーセージを切って盛りつけた板)
31. bunte Reihe machen
(色とりどりの列を作る) : Personen so setzen, daß immer ein Herr und
eine Dame nebeneinander sitzen (±)
(男女交互に座らせる)
32. den bunten Rock
anziehen
(迷彩色のズボンを着る) Soldat werden (±)
(兵士になる)
33. ein bunter Teller
(色とりどりの皿) : ein Teller mit Gebäck, Obst, Süßigkeiten (±)
(クッキー、くだもと、あめ玉などを載せた皿)
34. bekannt sein wie ein bunter Hund: sehr bekannt sein (±)
(多色の犬のように知られている) (非常に知られている)
35. Farbe bekennen
(色を告白する) sagen, welche Ansicht man hat, welcher
Richtung man angehört, s. offenbaren (±)
(見解や方向性を言う、明らかにする)
36. Farbe bekommen
(色を得る) 1) wieder so werden, daß man gesunde Gesichtsfarbe
hat
2) klarer, deutlicher, anschaulicher werden (+)
(1) 健康な顔色をとりもどす、2) 明白になる)
37. die Farbe wechseln
(色を変える) 1) bleich werden
2) die Überzeugung ändern (±)
(1) 青ざめる、2) 考えを変える)
38. jmdm. Farbe halten: treu ergeben sein (+)
(誰かの色を守っている) (忠実に仕えている)
39. etwas in den leuchtendsten Farben malen: etwas sehr, fast übertrieben positiv
darstellen (±)
(何かをこの上なく輝く色で描く) (何かを非常に大げさに肯定的に描く)
40. wie ein Blinder von der Farbe reden: ohne Überlegung reden, ohne Sachkenntnis
urteilen (－)
(目の見えない人が色について語るよう) (熟慮なしに語る、当該のことについて良く
知らずに判断する)
41. (grün und)gelb vor
Neid (od. Zorn, Wut
Ärger) werden
(ねたみ、怒り等で緑と) außerordentlich neidisch (od. wütend, ärgerlich) werden (－)
黄色になる) (法外に嫉妬する、怒る)
42. der gelbe Neid
krasser, unverhüllter Neid (－)

- (黄色の妬み) (あからさまな妬み)
43. jmdm goldene Berge versprechen: jmdm große, unerfüllbare Versprechungen machen
(黄金の山を約束する) (大きな果たすことのできない約束をする) (－)
44. jmdm eine goldene Brücke/goldene Brücken bauen: jmdm. ein Eingeständnis seiner Schuld, das Nachgeben erleichtern (+)
(黄金の橋を築く) (罪の告白、譲歩をしやすくしてあげる)
45. Handwerk hat goldenen Boden: wer ein Handwerk erlernt, hat eine gute berufliche Zukunft, wird viel Geld verdienen (+)
(手仕事は黄金の基盤を持つ) (手仕事を学ぶものは、将来多くの金を稼ぐ)
46. goldene Hochzeit: (±)
(金婚式)
47. das Huhn, das goldene Eier legt, schlachten: sich törichter- oder unvorsichtigerweise die Grundlage seines Einkommens, Wohlstandes entziehen (－)
(金の卵を産む鶏を殺す) (愚かにも収入、幸福の基盤をなくす)
48. im/in einem goldenen Käfig sitzen: trotz großen Reichtums unfrei, gebunden sein
(黄金の籠に座っている) (巨万の富がありながら、不自由で拘束されている) (－)
49. das Goldene Kalb anbeten: die Macht des Geldes anbeten, von Geldgier erfüllt sein
(黄金の牛に祈りを捧げる) (金の力を信じている、金欲に満たされている) (－)
50. um das Goldene Kalb tanzen: (－)
(黄金の牛をめぐる) (金を求めること、金欲)
51. der Tanz um das Goldene Kalb: das Streben, die Gier nach Geld (－)
(黄金の牛をめぐる) (金を求めること、金欲)
52. mit einem goldenen Löffel im Mund geboren sein: Kind reicher Eltern sein; Glück in allen Dingen haben (±)
(黄金のスプーンをくわえて生まれる) (金持ちの子である、全てにおいて幸運である)
53. die goldene Mitte wählen: eine angemessene, die Extreme meidende Entscheidung treffen (±)
(黄金の中間を選ぶ) (極端を避けた適切な決定を行う)
54. der goldene Mittelweg: eine angemessene, vermittelnde, die Extreme meidende Lösung eines Problems, eines Konflikts (±)
(黄金の中道) (こじれた問題を、極端を避けた適切なやり方で解決すること)
55. sich eine goldene Nase verdienen: sehr viel Geld verdienen (－)
(黄金の鼻を得る) (たくさんのお金を得る)
56. Goldener Sonntag: letzter Sonntag vor Weihnachten (±)
(黄金の日曜日) (クリスマス直前の日曜日)
57. der graue Alltag : das Einerlei des Lebens (ohne Freude und Abwechslung) (－)
(灰色の日々) ((楽しみや気晴らしのない) 単調な日々)
58. das graue Elend haben (od. kriegen) : ganz deprimiert, schwermütig werden (－)
(灰色の悲惨を持つ) (全く憂鬱で、気が重くなる)
59. graue Theorie : etw. rein Theoretisches, das in der Praxis nicht stimmt (－)
(灰色の理論) (実際には当てはまらない純粋な理論)
60. alles grau in grau malen : alle Dinge trostlos, hoffnungslos darstellen (－)
(すべてを灰色に塗る) (すべての物事を救いようがないように述べる)
61. alles grau in grau sehen : alle Dinge, trostlos, hoffnungslos sehen (－)
(すべてを灰色に見る) (すべての物事を救いようがないように見る)
62. graue Eminenz: einflußreiche politische Persönlichkeit, die als solche kaum nach außen in Erscheinung tritt (±)
(灰色の著名人) (表には出てこない政治的に影響力のある人物)
63. graue Maus: unscheinbare Person, Gruppe o.ä. (－)
(灰色の鼠) (いかがわしい人物、グループ等)
64. alt und grau bei etwas werden: bei etwas sehr lange warten müssen (－)
(髪が灰色になり、高齢になる) (非常に長く待つことを余儀なくされる)
65. sich keine graue Haare wachsen lassen: sich keine unnützige Sorgen machen (±)
(灰色に髪を生やさない) (余計な心配をしない)
66. bei Nacht sind alle Katzen grau: in der Dunkelheit kann man nur schwer jmdn.

- erkennen (±)
(夜には猫はすべて灰色だ) (暗がりでは見分けがつきにくい)
67. bei Mutter Grün : im Freien, unter freiem Himmel (schlafen usw.)
(母なる緑のもとで) (野原で、空のもとで) (±)
68. dasselbe in Grün praktisch genau dasselbe, fast ohne jeden Unterschied
(同じ緑のもの) (實際上同じこと、ほとんど違いがないこと) (±)
69. die grüne Grenze e-e Grenze, die durch Wald und Wiese (nicht Schlagbaum und Beamte) gekennzeichnet ist (±)
(緑の国境) ((遮断機と官憲ではなく) 森と草地で標示された国境)
70. ein grüner Junge ein junger, unerfahrener Mensch (-)
(緑の若者) (若い、経験のない人間)
71. j-m grünes Licht j-m die Erlaubnis zu etw. geben (±)
geben (緑の信号を与える) (誰かに許可を与える)
72. ach, du grüne Neune : Donnerwetter! (Ausruf der Verwunderung, Bestürzung) (±)
(緑の九ちゃん!) (びっくりしたときの叫び)
73. j-s grüne Seite : j-s. linke Seite (±)
(誰かの緑の側) (誰かの左側)
74. am grünen Tisch : rein theoretisch, ohne Kontakt mit der Praxis
(entscheiden) (entscheiden) (-)
(緑の机で (決定する)) (実践との関わりなく、純理論的に決定する)
75. auf einen grünen s. Zweig: Erfolg haben, vorankommen (+)
Zweig kommen (緑の枝に至る) (成功する、前進する)
76. j-m nicht grün sein j-n nicht leiden können (-)
(誰かに対して緑でない) (誰かを我慢できない)
77. s. grün und blau sich sehr ärgern (-)
ärgern (腹を立てて緑と青になる) (非常に腹を立てる)
78. j-n grün und blau = j-n blau und grün schlagen (-)
schlagen (緑と青になるまで叩く) (打って緑と青にする)
79. grün und gelb s. gelb (-)
werden (vor Neid usw.) (妬みで) 緑と黄色になる)
80. mir wurde grün und mir wurde übel, schwindlig (-)
gelb vor den Augen (目の前が緑と黄になる) (気持ち悪く、目が回る)
81. grüne Minna: Transportwagen der Polizei für Gefangene, Festgenommene o.ä. (±)
(緑のミンナ) (囚人、逮捕された者を輸送する警察の自動車)
82. grüne Welle: straßenverkehrstechnische Einrichtung an einer Hauptstraße, bei der die Ampeln so geschaltet sind, daß der Verkehr bei Einhaltung einer bestimmten Geschwindigkeit immer Grün, also freie Fahrt hat (±)
(緑の波) (一定速度で走ると常に青信号となるような信号システム)
83. grüne Witwe: Ehefrau, die sehr viel allein, fast wie eine Witwe lebt, weil das Haus, das sie mit ihrem Mann bewohnt, in der grünen Natur liegt und ihr Mann wegen beruflicher Verpflichtungen selten zu Hause ist. (±)
(緑の未亡人) (辺鄙なところに住んでいて、夫が単身赴任状態で、ほとんど未亡人状態にある婦人)
84. es ist alles immer im grünen Bereich: es ist alles unter Kontrolle, normal, in Ordnung (+)
(すべては緑の領域にある) (すべて正常である、手の内に収めている)
85. grün wie die Gans schießt; grün schießt die Gans ins Gras: Kommentar, wenn man Grün ausspielt. (-)
(鶯鳥の緑の糞のよう) (トランプで、緑のカードを使い果たしたときの言い方)
86. eine grüne Hand/ einen grünen Daumen haben: guten Erfolg bei der Pflege von Pflanzen haben (+)
(緑の手、緑の親指を持っている) (植物をうまく手入れして成果を収める)

87. grüne Hochzeit: Tag der Hochzeit (±)
(緑の結婚式) (結婚記念日)
88. die grüne Hölle: der Urwald als bedrohlicher, Schrecken und Strapazen
verursachender Lebensraum (±)
(緑の地獄) (人を恐れさせ、疲労困憊させる原始林)
89. jmdn über den grünen Klee loben: jmdn über Gebühr, übermäßig loben (－)
(緑のクローバの上で讃える) (過分に、過剰に讃える)
90. unter den grünen Rasen liegen/ruhen: gestorben sein (±)
(緑の芝生の下で安らかに眠っている) (死んでいる)
91. auf der grünen Wiese: vor der Stadt, die noch unbebautem Gelände (±)
(緑の牧草の上) (まだ建物が建っていない郊外)
92. "himmelblau: volltrunken" (泥酔している) (－)
93. kupferne Hochzeit: (±)
(銅婚式)
94. kupferner Sonntag: drittletzter Sonntag vor Weihnachten (±)
(銅の日曜日) (クリスマス3週間前の日曜日)
95. rosa: homosexuell (ホモ) (±)
96. etw. durch e-e (od. : etw. zu günstig, sehr optimistisch beurteilen (－) die) rosarote
(od.rosige) Brille sehen
(ピンクのメガネを通して見る) (非常に楽観的に判断する)
97. alles in rosarotem s. Licht: alles optimistisch beurteilen (±)
(od. rosigem) Licht
sehen
(すべてのピンクの光の中で見る) (すべてを楽観的に判断する)
98. rote Zahlen Zahlen, die in der Bilanz ein Defizit, einen (±)
Verlust angeben
(赤字) (決算で損失を示す数字)
99. etw. (bes. den Tag) :etw. als bemerkenswert hervorheben (±)
im Kalender rot
anstreichen
(カレンダー上の特定の日を赤で印する) (何かを注目すべきものとして強調する)
100. rot sehen (sofort) sehr wütend werden (－)
(赤く見る) ((すぐさま) 激怒する)
101. heute rot, morgen tot: Kommentar, wenn jemand unerwartet gestorben ist. (±)
(今日は赤、明日は死) (誰かが急に死亡した時にいう文句)
102. der rote Faden: der leitende Gedanke, die Grundlinie, das Grundmotiv (±)
(赤い糸) (指導的な考え、基本線、基本動機)
103. die rote Laterne: der letzte Tabellenplatz (－)
(赤い明かり) (順位の後、どん尻)
104. sich die Augen rot weinen: heftig weinen (±)
(目が赤くなるほどなく) (激しくなく)
105. jmdm den roten Hahn aufs Dach setzen:jmds. Haus in Brand setzen (－)
(誰かの家の屋根に赤い雄鶏をおく) (放火する)
106. keinen roten Heller für etwas geben: für etwas keine Chance sehen, für etwas das
Schlimmste befürchten (－)
(一枚たりとも赤いヘラー貨幣を出さない) (見込みがない、最悪を怖れる)
107. ein Satz heiße/rote Ohren: Ohrfeigen, Prügel (－)
(ワンセット、すなわち赤い耳) (ビンタを張ること、ひっぱたくこと)
108. es gibt gleich rote Ohren : Drohrede (－)
(すぐに赤い耳になるぞ) (脅し文句、痛い目にあうぞ！)
109. mit roten Ohren abziehen: sich beschämt entfernen (－)
(赤い耳で引き下がる) (恥じ入って、その場を離れる)
110. Salz und Brot macht Wangen rot: einfache, kräftige Nahrung erhält die Gesundheit
(塩とパンが頬を赤くする) (質素で、元気を与えてくれる食物が健康を維持する) (±)
111. ein rotes Tuch für jmdn. sein/ wie ein rotes Tuch auf jmdn wirken: jmdn wütend
machen (－)
(誰かにとって赤いタオルの効果を持つ) (誰かを怒らせる)
112. in die rote Zahlen kommen/geraten: Verlust machen (±)
(赤字になる) (損失を出す)
113. aus den roten Zahlen herauskommen: wieder Gewinne machen (±)

- (赤字から抜け出す) (ふたたび収益を得る)
 114. in den roten Zahlen sein: Verlust machen (±)
 (赤字状態にある) (損失を出している)
115. das Schwarze Brett e-e Anschlagtafel für Bekanntmachungen (±)
 (黒い板) (お知らせをするための掲示板)
116. schwarze Diamanten :(Stein-)Kohle (±)
 (黒いダイヤモンド) (石炭)
117. schwarzes Elfenbein : Negersklaven (-)
 (黒い象牙) (黒人奴隷)
118. der Schwarze Erdteil Afrika (±)
 (黒い地球の部分) (アフリカ)
119. etw. in schwarzen etw. sehr pessimistisch darstellen (±)
 (od. den schwärzesten) Farben
 schildern (od. malen, beschreiben usw.)
 (黒い色で描く) (非常に悲観的に描く)
120. schwarze Gedanken traurige, pessimistische Gedanken (solchen Gedanken (bes. schwarzen freien Lauf lassen) (±)
 Gedanken nachhängen)
 (黒い考え) (悲観的な考え)
121. die Schwarze Kunst 1) der Buchdruck
 (黒い芸術) 2) Zauberei (±)
 (1) 印刷、2) 魔術)
122. der Schwarze Mann e-e Schreckgestalt (bes. als Drohung für Kinder) (-)
 (黒い男) (人を怖れさせるもの (特に子供を怖れさせるもの))
123. der schwarze Markt ein illegaler Warenverkehr (bis. in Notzeiten) (±)
 (黒い市場) (不法な商品のやりとり)
124. j-m den Schwarzen es so machen, daß j-d anders das Unerfreuliche zu tun Peter zuschieben (od. die Schuld auf sich zu nehmen) hat (±)
 (誰かに黒いピーターを押しやる) (誰かが不愉快なものをせざるを得ないようにする)
125. das schwarze Schaf : ein Familienglied, das durch seine Ideen, seinen (der Familie) Charakter nicht zur übrigen Familie paßt (±)
 (黒い羊) (考えや、性格で、家族と合わないもの)
126. e-e schwarze Seele : ein schlechter, Böses sinnender Mensch (±)
 haben (黒い魂を持っている) (邪悪なことを考えている人間)
127. ein schwarzer Tag : ein Unglückstag (±)
 (黒い日) (不幸な日)
128. der Schwarze Tod (-)
 (黒い死) (ペスト)
129. da kannst du warten, da kannst du sehr, sehr lange warten (-)
 bis du schwarz wirst (いつまでも待つ)
 (黒くなるまで待つ)
130. j-m schwarz vor (fast) ohnmächtig werden (±)
 (den) Augen werden (失神する)
 (目の前が黒くなる)
131. mit etw. sieht es es sieht sehr ungünstig aus für etw. (±)
 schwarz aus (あるものに関しては黒く見える) (あるものに関してはきわめて不利な状況である)
132. schwarz von j-m sehr schlecht beurteilt werden, bei j-m sehr
 angeschrieben sein wenig beliebt sein (±)
 (bei j-m) (黒く書き付けられている) (誰によって悪く判断される)
133. s. schwarz ärgern = s. grün und blau ärgern (±)
 (黒く怒る)
134. schwarz auf weiß geschrieben, gedruckt (±)
 (白の上に黒く) (書かれてある、印刷されてある)
135. j-m nicht das j-m nicht das geringste gönnen (±)

- Schwarze unter dem Nagel (od. unter den Nägeln) gönnen
(爪の下の黒も恵まない) (ほんのわずかも恵まない)
136. er hat nicht das Schwarze unter den Nägeln
er hat gar nichts mehr, er ist ganz arm (－)
(爪の下の黒をもっていない) (何も持っていない、全く貧乏である)
137. aus schwarz weiß machen (wollen)
in sein Gegenteil verkehren (wollen) (－)
(黒から白を造る) (逆に持っていく)
138. ins Schwarze treffen
genau das Richtige sein, großen Erfolg haben (±)
(黒に当てる) (まさに正しい、大成功を収める)
139. ein Schuß ins Schwarze
ein Treffer, ein voller Erfolg (+)
(黒を射ること) (あたり、完全な成功)
140. schwarzarbeiten
ohne Genehmigung des Arbeitsamtes und ohne Steuerkarte arbeiten (±)
(黒い状態で働く) (労働局の許可なしに働く)
141. schwarzfahren
ohne Fahrkarte (od. Fahrschein) fahren (±)
(黒い状態で乗る) (乗車券なしで乗る)
142. schwarzhören
1) ohne Genehmigung Rundfunk hören
2) ohne Genehmigung (in der Universität) Vorlesungen hören (±)
(黒い状態で聞く) (1) 無許可でラジオ放送を聴く、2) 無許可で大学で聴講する
143. schwarzschlachten
ohne amtliche Genehmigung (ein Tier) schlachten (±)
(黒い状態で殺す) (当局の許可なしに動物を殺す)
144. schwarzsehen
1) pessimistisch sein (悲観的である)
2) für etw. keine Chance sehen (チャンスがない)
3) ohne Genehmigung fernsehen (±)
(黒く見る) (無許可でテレビを見る)
145. etwas durch schwarze Brille sehen: allzu pessimistisch sein (±)
(黒いメガネを通してみる) (あまりに悲観的である)
146. die schwarze Liste: Aufstellung verdächtiger, mißliebiger Personen (±)
(ブラック・リスト) (疑わしい、気に入らない人物のリスト)
147. Hokuspokus Fidibus, dreimal schwarzer Kater: scherzhafte Zauberformel (±)
(魔術、手品の時のかけことば)
148. in die schwarze Zahlen kommen: wieder Gewinne machen (±)
(黒字になる) (ふたたび収益を得る)
149. schwarze Zahlen schreiben: Gewinne machen (±)
(黒字を書く) (収益を得る)
150. in den schwarzen Zahlen sein: (±)
(黒字状態にある) (収益を得ている)
151. ein silbernes Nichtschen und ein goldenes Warteinweilchen/ ein goldenes Nichtschen in einem silbernen Büchchen: scherzhafte Antwort auf neugierige Kinderfragen (±)
(何故という子供の質問に対するじょうだんを込めた答え)
152. silberne Hochzeit: (±)
(銀婚式)
153. silberne Löffel stehlen: sich etwas [Schlimmes] zuschulden kommen lassen (±)
(銀のスプーンを盗む) (悪いことをした罪を負う)
154. mit einem silbernen Löffel im Mund geboren sein: (±)
(銀のスプーンをくわえて生まれる) (金持ちの子である、全てにおいて幸運である)
155. Silberner Sonntag: vorletzter Sonntag vor Weihnachten (±)
(銀の日曜日) (クリスマス2週間前の日曜日)
156. ein weißer Rabe : ein seltener Mensch, etw. ganz Außergewöhnliches (±)
(白い鳥) (まれな人間、) きわめて法外なこと)
157. j-n weißwaschen j-n von einem Verdacht befreien (±)
(誰かを洗って白くする) (誰かを疑いから解放する)
158. der Weiße Tod : der Tod in Schnee und Eis (±)

- (白い死) (凍死)
159. e-e weiße Weste :nichts Unehrenhaftes getan haben (±)
haben
(白のベストを着ている) (不名誉なことはしていない)
160. weiß wie die gekalkte Wand: sehr bleich (±)
(石灰化した壁のように白い) (とても青ざめている)
161. Weißer Sonntag: Sonntag nach Ostern (±)
(白の日曜日) (イースターのあとの日曜日)
162. weiße Kohle: Elektrizität (±)
(白い石炭) (電気)
163. ein weißer Fleck auf der Landkarte: ein unerforschtes Gebiet (±)
(地図の上の白い斑点) (未探検の地域)
164. jmdm nicht das Weiße im Auge gönnen: gegenüber jmdm. äußerst mißgünstig sein
(目の中の白い部分を恵まない) (誰かに対して非常に悪意を持っている) (±)
165. Halbgötter in Weiß: Ärzte, bes. die Chefärzte in Krankenhäusern (－)
(白衣の神) (医師、とりわけ病院の主治医)
166. laß deinen Kragen mal wieder teeren, da kommt schon das Weiße durch: dein
Kragen ist ziemlich schmutzig (－)
(襟にタールを塗っても、白が透けてくる) (襟がかなり汚れている)
167. weiße Mäuse sehen: Wahnvorstellung haben (±)
(白い鼠を見る) (妄想を抱く)
168. einen Mohren weiß waschen: etwas Unmögliches erreichen (±)
(ムーア人を洗って白くする) (不可能なことを達成する)
169. weiße/grüne Weihnachten: Weihnachten mit/ohne Schnee (±)
(白い/緑のクリスマス) (雪の/ないクリスマス)
170. weißbluten: bis zum Weißbluten (－)
(出血して白くなる) (スッカランになるまで出費する)
171. jmdn bis zur Weißglut bringen/reizen: jmdn äußerst zornig machen (±)
(誰かを灼熱の白になるほど刺激する) (誰かを非常に怒らせる)

【資料2】日本語における色彩に関する語彙を構成要素とするイディオム

1. 青息吐息：非常に困って、ため息ばかりが出るような状態（－）
2. 青くなる：恐怖や不安などのために、顔が血の気を失って青白くなる（－）
3. 青筋を立てる：こめかみに血管を青く浮き立たせ、かんかんになって怒る（－）
4. 青田を買う：（－）
5. 赤い信女：夫に死なれた婦人（±）
6. 赤犬が狐を追う：どれがどれだか混乱して区別がつかない（－）
7. 赤子の手を捻る：（±）
8. 赤の他人：（－）
9. 赤恥をかく：（－）
10. あけに染まる：傷を受けて血で体が赤く染まる（±）
11. 色が褪める：色が薄れる、男女間の愛情が薄れて冷淡になる（－）
12. 色気が付く：男女の恋愛感情をほのかに解するようになる（－）
13. 色気を出す：（－）
14. 色に出ず：心の中の思いが表情に表れること（±）。
15. 色に溺れる：色情に心を奪われる（－）
16. 色眼鏡で見る：（－）
17. 色目を使う：（－）
18. 色も香もある：容色も美しく異性に魅力を感じさせるものがある（＋）
19. 色を失う：顔色が青ざめる（－）
20. 色を易（か）え品を貿う：いろいろと手段を講じる（±）
21. 色を付ける：物事の扱いに情を加える（±）
22. 色を作（な）す：顔色を変えてひどく怒る（－）
23. 顔色を窺う：（－）
24. 顔を赤らめる：恥ずかしさや興奮、怒りなど感情の急激な動きによって、顔を赤くする（±）
25. 烏の濡れ羽色：髪の毛が黒くてつややかなことのたとえ（＋）
26. 顔色無し：怖れ・驚き・恥ずかしさなどのために、顔から血の気が引く（－）
27. 黄色い声：甲高い声（±）
28. 気色が悪い：体調が悪く、気分がすぐれない、不愉快だ、気味が悪い（－）
29. 嘴が黄色い：年が若く、経験不足で未熟であること（－）
30. 黒い霧：（－）
31. 黒山のように：人が大ぜい群がっていることのたとえ（±）
32. 尻（けつ）が青い：年齢が若くて経験が不足していることのたとえ（－）
33. 紅一点：（＋）
34. 黄泉の客：死んだ人（±）
35. 紅灯の巷：ネオン街（±）
36. 黄金の雨：（＋）
37. 金看板を掲げる：外見を飾り立て誇大に見せかける（－）
38. 金言耳に逆らう：（±）
39. 金字塔を打ち立てる：（＋）
40. 金城鉄壁：非常に守りが堅いこと（＋）
41. 金的を射当てる：すばらしいものや幸運を自分のものとすることのたとえ（＋）
42. 黒白を争う：（±）
43. 黒白を弁ぜず：物事の是非や善悪の判断ができない（－）
44. 声色を使う：人の声や口調をまねる（±）
45. 才色兼備：（＋）
46. 朱筆を入れる：文章を手直しする（±）
47. 朱を入れる：（±）
48. 朱を注ぐ如し：顔を真っ赤にするさま（±）
49. 白魚を並べたよう（＋）
50. 白波：盗賊のこと（－）
51. 白羽（の矢）が立つ：（－）
52. 白張りの提灯：一文なしのこと（－）
53. 白を切る：知らないふりをする（－）
54. 白い歯を見せる：笑顔を見せる（±）
55. 白い目で見る：白眼視（－）
56. 白黒をつける：（±）
57. 青眼：うれしい気持ちをいう（＋）

- 58. 青天の霹靂：(－)
- 59. 青天白日 (＋)
- 60. 青蠅白を染む：小人がよってたかって君子を中傷することのたとえ (－)
- 61. 清廉潔白：(＋)
- 62. 赤縄：夫婦の縁 (＋)
- 63. 赤貧：(－)
- 64. 千紫万紅：さまざまな色 (±)
- 65. 天地黒白の違い：月と鼈 (－)
- 66. 白日の下に晒す：(－)
- 67. 白紙に返す：(－)
- 68. 白砂青松：(＋)
- 69. 白寿：九十九歳 (＋)
- 70. 白昼夢：(－)
- 71. 白眉：多くの中で、ひときわ目立ってすぐれている人やもののたとえ (＋)
- 72. 白壁の微蝦：ほんの少しの欠点 (－)
- 73. 白面の書生：(－)
- 74. 旗色を見る：形勢のよしあしや物事のなりゆきを見る (－)
- 75. 緑の黒髪：つやのある黒髪 (＋)
- 76. 紫の朱を奪う：不当な者が正当な者をおしのけて、その地位を奪うこと (－)
- 77. 明々白々：(＋)
- 78. 目の色を変える：目つきを変える (－)
- 79. 目の黒い内：生きている間 (－)
- 80. 目を白黒させる：ひどく驚いたり、あわてたりするさま (－)
- 81. 緑林：青々した林、盗賊 (－)

【資料3】
 色彩に関する語彙、その用例数、意味論的分類、語用論的分類の結果
 ドイツ語

色彩に関する語彙	用例数	意味論的分析		語用論的分析		
		比喩的	非比喩的	肯定的	中立的	否定的
schwarz	36	11	25	1	6	29
grün	25	11	4	3	13	9
blau	18	8	10	1	8	9
rot	17	2	15		8	9
weiß	16	4	12		13	3
golden	14	6	8	1	6	7
bunt	10	1	9	1	5	4
grau	10	5	5		3	7
Farbe	6	2	4	2	3	1
silbern	5	2	3			5
braun	4	3	1			4
gelb	2	1	1			2
kupfern	2	2			2	
rosarot	2	2			1	1
Aschgrau	1	1				1
blond	1		1		1	
himmelblau	1		1			1
rosa	1	1			1	
総計	171	61	110	9	70	92

日本語

色彩に関する語彙	用例数	意味論的分析		語用論的分析		
		比喩的	非比喩的	肯定的	中立的	否定的
白	19	6	13	5	2	12
色	13	9	4	2	3	8
青	9	4	5	2		7
赤	8	5	3	1	3	4
黒	6	3	3		2	4
金	5	3	2	3	1	1
黄	3	2	1		2	1
朱	3		3		3	
顔色	2		2			2
紅	2	1	1	1	1	
紫	2	1	1		1	1
緑	2	1	1	1		1
あけ	1		1		1	
気色	1		1			1
黄金	1		1	1		
声色	1	1			1	
旗色	1		1			1
烏の濡れ羽色	1		1	1		
目の色	1		1			1
	81	36	45	17	20	44

【資料1】ドイツ語における数詞を構成要素とするイディオム

EINS

1. j-s ein und alles sein: das Liebste, Kostbarste, Schönste für j-n sein (Friederich 1976: 100) (唯一すべてである : 一番大切かわいいものである → 目の中に入れても痛くない)
2. ein für allemal: endgültig (Friederich 1976: 100) (これを最後に)
3. nicht ein noch aus wissen: überhaupt nicht wissen, was man tun soll (Friederich 1976: 37) (入り方も出方も知らない : 途方に暮れている)
4. in einem fort: ständig, (fast) ununterbrochen (Friederich 1976: 100) (間断なく)
5. du bist mir einer! : du bist ein unzuverlässiger Kerl, du hast mich hereingelegt (Friederich 1976: 100) : 頼りにならない
6. eine Eins mit Stern: allerhöchstes Lob (Friederich 1976:101) (星印付きの1 : 最優秀)
7. mit j-m eins werden: s. einigen mit j-m (Friederich 1976: 101) (だれかと一になる : 意見が一致する)
8. s. eins mit j-m fühlen (od. wissen) : fühlen (od. wissen), daß man e-s Sinnes mit j-m ist (Friederich 1976: 101) (一心同体だと感じる)
9. mir ist alles eins : mir ist alles gleichgültig (Friederich 1976: 101) (みんな一緒だ)
10. (A und B) war(en) eins: (A und B) folgten unmittelbar aufeinander (Friederich 1976: 101) (すぐ後に続く)
11. auf eins herauskommen (od. hinauslaufen): ein und dasselbe sein, dieselbe Wirkung haben (Friederich 1976: 101) (同じ結果になる)
12. eins, zwei, drei: im Handumdrehen (Duden 1992: 173) (一、二の三、ほい!)
13. eins zu null für jmdn. (ugs.): in diesem Punkt ist jmds. Überlegenheit anzuerkennen (Duden 1992: 173) (1対ゼロ : その点において相手の優位を認める)
14. Nummer eins: (ナンバーワン)
15. Thema eins: (最重要のテーマ)
16. stehen wie eine Eins: ganz gerade und fest stehen (Duden 1992: 685) (直立している)
17. der erste beste: s. beste (Friederich 1976: 107) (第一等のもの)
18. fürs erste: vorläufig (Friederich 1976: 108) (とりあえず)
19. in erster Linie: hauptsächlich, vor allem anderen (Friederich 1976: 108) (第一に)
20. erste/allererste Sahne sein: ausgezeichnet sein (Duden 1992: 184) (最上、一番茶)
21. Erster von hinten (scherzh.): Letzter, Schlechtester (Duden 1992: 184) (最後)
22. die erste Geige spielen: die führende Rolle spielen, tonangebend sein (Duden 1992: 244) (指導的役割を演じる)
23. aus erster Hand: aus bester Quelle, authentisch (Duden 1992: 302) (信頼できる筋から)
24. das ist das erste, was ich höre: (それは初めて聞くことだ : 初耳)
25. die Letzte werden die Ersten sein: (残り物に福あり)
26. der erste Mann an der Spitze sein: die Führung, Entscheidungsgewalt haben (Duden 1992: 473) (指導権、決定権を握っている)
27. wie der erste Mensch: sehr unbeholfen, ungeschickt (Duden 1992: 485) (不器用に)
28. erste Ordnung: von ganz besonderer Art (非常に特別な種類の)
29. ersten Ranges: von ganz besonderer Art (非常に特別な種類の)
30. Ruhe ist die erste Bürgerpflicht: (静寂は市民の義務の第1のものだ)
31. nicht vor dem ersten Schlaganfall: Ablehnung, sich in den Mantel, in das Jackett o.ä. helfen zu lassen (マント、ジャケットを着るのを手伝ってもらうのを断る)
32. der erste Schritt/die ersten Schritte: (最初の一步)
33. den ersten Schritt tun: (最初の一步を踏み出す)
34. den zweiten Schritt vor dem ersten tun: (ちゃんとした準備なく事を始める)
35. Selbsterkenntnis ist der erste Schritt zur Besserung: (自己認識が更正への第一歩である)
36. dieses/das war der erste Streich: (これが手始めの仕事だった)
37. die erste Stunde: (物事の始まりの時)
38. erste Wahl: (最良のもの)
39. das ist ja mein erstes Wort: (それは初めて聞くことだ)

EINMAL

40. einmal ist keinmal: bei einem Mal, bei einem Versuch soll man es nicht belassen (Duden 1992: 172) (一度試みただけでやめてはいけない) :
41. einmal mehr: wiederum (Duden 1992: 172) (再び)
42. auf einmal: plötzlich (Duden 1992: 172) (突然)
43. wer einmal lügt, dem glaubt man nicht, und wenn er auch die Wahrheit spricht: (一度うそを

つくど、本当をいっても信用されなくなる)

ZWEI

- 44.dazu gehören immer noch zwei: das geht nur, wenn ich auch will (Friederich 1976: 564)
(2人一緒になってこそうまくいく)
- 45.zwei Fliegen mit einer Klappe schlagen: s. Fliege (Friederich 1976: 564) : (一石二鳥)
- 46.so sicher, wie zwei mal zwei vier ist: = so sicher, wie das Amen in der Kirche (Friederich 1976: 564) (2かける2が4であるように確実だ: 絶対確実だ)
- 47.s. das nicht zweimal sagen lassen: sofort zusagen (od. etw. sofort tun)(Friederich 1976: 565)
(2度といわせない) (ただちに同意する)
- 48.das zweite Gesicht: die Fähigkeit, Ereignisse vorausszusehen (Friederich 1976: 565):
(第2の顔: 出来事を予言する能力)
- 49.mein zweites Ich: mir sehr vertraut (Friederich 1976: 565)
(第二の自己: 非常に信頼できる)
- 50.wie kein zweiter: besser, mehr als alle anderen (Friederich 1976: 565)
(無二の: 誰よりもいい)
- 51.in zweiter Linie: an zweiter Stelle, sekundär (Friederich 1976: 565)
(第二に: 二番目に)
- 52.zur zweiten Natur werden: s. Natur (Friederich 1976: 565)
(第二の性質になる: 習慣や鍛錬によって、性格の一部になる)
- 53.wenn zwei dasselbe tun, so ist es nicht dasselbe: was einem Menschen erlaubt ist, ist nicht unbedingt auch jedem anderen erlaubt (Duden 1992: 844)
(ひとりに許されていること、すなわち他のものにも許されているわけではない)
- 54.jedes Ding hat zwei Seiten: (物事には二面がある)
- 55.zwei Eisen im Feuer haben: (2つの鉄を火の中に持っている: 2つの計画を追求する)
- 56.zwei linke Hände haben: (2つの左手を持つ: 不器用である)
- 57.nicht auf zwei Hochzeiten tanzen können: (2つの結婚式で踊ることはできない): 2つの異なったことを同時に行うことはできない)
- 58.ein Plättbrett mit zwei Erbsen (Duden 1992: 550): (非常にやせた女性)
- 59.zwei Seelen wohnen, ach, in meiner Brust (Duden 650): (2つの思いの間で分裂している)
- 60.zwei Seelen und ein Gedanke (Duden 1992: 650): (そっくりの考えをだれかが表明したときに言う言葉)
- 61.wenn zwei streiten, freut sich der Dritte: (2人が争うとき、第3の者が笑う: 漁夫の利)
- 62.zusammenpassen wie zwei alte Latschen: sehr gut zusammenpassen (Duden 1992: 842) (非常によく合う)
- 63.auf den zweiten Blick: bei näherem Hinsehen (Duden 1992: 117) (子細に見ると)
- 64.die zweite Geige spielen: von untergeordneter Bedeutung, in untergeordneter Funktion sein (Duden 1992: 244) (従属的な意味、機能を果たす)
- 65.aus zweiter Hand: von einem Mittelsmann (Duden 1992: 303) (仲介者を得て)
- 66.der zweite Schlag wäre Leichenschändung: Drohrede (Duden 1992: 447) (次の一撃は死体陵辱だぞ: 脅し文句)
- 67.zweite Wahl sein: nicht besonders gut (Duden 1992: 777) (それほど良くない)

ZWEIERLEI

- 68.mit zweierlei Maß messen: unterschiedliche Maßstäbe anlegen (Duden 1992: 479) (2通りの物差しで測る: 異なった尺度を適用する)
- 69.das sind zweierlei Stiefel: das sind zwei ganz verschiedene, nicht vergleichbare Dinge (Duden 1992: 693) (二通りの長靴だ: 全く異なった、比較できないものだ)

ZWEIMAL

- 70.sich das nicht zweimal sagen lassen: von einem Angebot sofort Gebrauch machen, einer Aufforderung sofort nach kommen (Duden 1992: 602) (要請に直ちに応じる)

DREI

- 71.aller guten Dinge sind drei: von guten Dingen gibt es, wenn alles wirklich gutgehen soll, einen drei (Friederich 1976: 85) (すべて良い物は3つ:) (良い物については、本当に良いというのであれば、3つある)
- 72.bleib mir drei Schritt vom Leibe: komm mir nicht zu nahe, fasse mich nicht an (Friederich 1976: 426) (3歩離れている: あまり近づくな、さわらな)
- 73.ehe man (od. ich) auf (od. bis) drei zählen kann (od. konnte): ganz schnell (Friederich 1976: 91) (3つ数える前に: 非常に素早く)
- 74.nicht auf (od. bis) drei zählen können: sehr dumm sein (Friederich 1976: 91) (3つまで数

えることができない：非常に愚かである)

75.so tun, als ob man nicht auf (od. bis) drei zählen könnte: s. ganz dumm stellen (Friederich 1976: 91) (3つまで数えることができない振りをする：非常に愚かな振りをする)

76.für drei essen: sehr viel essen (Friederich 1976: 91) (3人前食べる：非常に多く食べる)

77.Hunger für drei haben U: sehr großen Hunger haben (Friederich 1976: 91) (3人分の飢えをもつ：非常に空腹である)

78.ein dreieckiges Verhältnis: ein Mann mit Ehefrau und Freundin (Friederich 1976: 92) (三角関係：夫と妻と、夫の愛人の関係)

79.seinen Dreier dazu geben U: = s-n Senf dazu geben: seine Meinung ungefragt äußern (Friederich 1976: ;92) (問われもしないのに自分の意見を言う)

80.nicht für Dreier: nicht im mindesten (Friederich 1976: ;92) (ほんの少しも)

81.das lachende Dritt: j-d, der aus dem Streit zweier Personen e-n (unerwarteten) Vorteil hat (Duden 1992: 427) (漁夫の利)

82.ewig und drei Tage: sehr lange (Duden 1992: 187) (非常に長く)

83.ein Gesicht machen wie drei Tage Regenwetter: verdrießlich dreinschauen (Duden 1992: 256) (不機嫌な顔でのぞき込む)

84.drei Meilen gegen den Wind riechen: etwas sehr deutlich, schon sehr frühzeitig bemerken (Duden 1992: 585) (風下三マイルでにおう：非常にはっきりと早くに気づく)

85.drei Meilen gegen den Wind stinken: unerträglich schlecht stinken (Duden 1992: 694) (風下三マイルでにおう：耐え難い悪臭がする)

86.in drei Teufels Namen: Ausdruck der Verärgerung (Duden 1992: 721) (不機嫌な時の表現)

87.Tobias sechs, Vers drei: Kommentar, wenn jemand mit weit geöffnetem Mund gähnt, ohne die Hand vorzuhalten (Duden 1992: 726) (誰かが口を開けて大あくびしたときにいう言葉)

88.flotter Dreier: Geschlechtsverkehr zu dritt (Duden 1992: 213) (三人でするセックス)

89.doppelt und dreifach: über das Notwendige hinausgehende (Duden 1992: 155) (必要を越えて、十二分に)

90.dreimal darfst du raten: das ist ganz einfach zu begreifen, das weißt du doch selbst! (Duden 1992: 159) (三度当てて良いよ：とても簡単だ、君だって知っているよ！)

91.Hokuspokus Fidibus, dreimal schwarzer Kater: scherzhafte Zauberformel (Duden 1992: 346) (手品などの、冗談めかしたまじない言葉)

92.jede Mark/jeden Pfennig zweimal/dreimal umdrehen: sehr sparsam sein(Duden 1992: 477) (非常に儉約している)

93.dreimal umgezogen ist so gut wie einmal abgebrannt: bei jedem Umzug wird ein Teil der Wohnungseinrichtung beschädigt oder geht verloren (Duden 1992: 748) (三度引っ越しは焼け出されたも同じ：引っ越しの度に家具が傷んだり、駄目になる、引っ越し貧乏)

VIER

94.s. auf seine vier Buchstaben setzen: sich hinsetzen (Friederich 1976: 71) (すわる)

95.in seinen vier Wänden: in seiner Wohnung, zu Hause (Friederich 1976: 514) (自分の住まいで)

96.unter vier Augen: ohne Zeugen, ohne Zuhörenden (Friederich 1976: 514) (第三者抜きで)

97.alle viere von s. strecken: s. hinlegen, um zu schlagen od. dösen (Friederich 1976: 514) (手足を伸ばす)

98.auf allen vieren (gehen, kriechen usw.): auf Händen und Füßen (gehen usw.) (Friederich 1976: 514) (両手、両足で這う、四つん這い)

99.(immer) wieder auf allen viere fallen: = (immer) wieder auf die Füße fallen: immer Glück haben, aus Schwierigkeiten gut herauskommen (Friederich 1976: 141) (いつも幸運である、困難からうまく逃れる)

100.das akademische Viertel: die 15 Minuten, die die Vorlesungen an der Universität später beginnen (Friederich 1976: 514) (大学の15分、15分遅れで授業が始まる)

101.vier Augen sehen mehr als zwei: zwei Menschen, die gemeinsam aufpassen, entgeht weniger als einem (Duden 1992: 62) (2つの目よりも4つの目が多くを見る：一人よりも2人で見る方が見逃しが少ない)

102.über alle vier Backen grinsen/strahlen: besonders auffällig grinsen, ein auffällig fröhliches Gesicht machen (Duden 1992: 78-79) (誰にもそうと分かるうれしそうな顔をする)

103.in alle vier Winde: überallhin, in alle Himmelsrichtungen(Duden 1992: 807) (四方八方に)

FÜNF

104.fünf Minuten vor zwölf: im allerletzten Augenblick (sonst wäre ein Unglück passiert) (Friederich 1976: 139) (12時5分前：最後の瞬間に)

- 105.alle fünft(e) gerade (od. grade) sein lassen: die Dinge nicht so genau nehmen, großzügig sein (Friederich 1976: 139) (大まかである)
- 106.nicht auf (od. bis) fünf zählen können: = nicht auf drei zählen können (Friederich 1976: 139) (5まで数えることができない: 愚かである)
- 107.das fünfte Rad am Wagen sein: überflüssig sein (Friederich 1976: 373) (余計である)
- 108.sich etwas an den fünf Finger abzählen können: etwas ohne große Überlegung begreifen, einsehen (Friederich 1976: 127) (5本の指で数えることができる: それほど考えなくても理解できる)
- 109.nicht für fünf Pfennige: nicht im geringsten (Friederich 1976: 360) (ほんの少しも)
- 110.seine fünf Sinne nicht richtig beisammennehmen: nicht bei Verstand, nicht vernünftig sein (理性的でない)
- 111.verrückt und fünf ist neune: Kommentar zu einer unvernünftigen Handlung, einer widersinnigen Situation o.ä. (Duden 1992: 762) (理性的でない行為に対する言葉)

SECHS

- 112.e-n sechsten Sinn (für etw.) haben: e-n guten Instinkt, die übernatürlich erscheinende Fähigkeit haben, das Richtige, Notwendige zu erahnen (Friederich 1976: 437) (第6番目の感覚を持っている): 正しいもの、必然的なものを予感する、超自然と思える能力、本能をもっている)
- 113.Tobias sechs, Vers drei (scherzh.): Kommentar, wenn jemand mit weit geöffnetem Mund gähnt, ohne die Hand vorzuhalten (Duden 1992: 726) (誰かが大あくびをしたときの言葉)

SIEBEN

- 114.eine böse Sieben: eine böse, giftige Frau (Friederich 1976: 444) (邪悪な7番目の女: 意地悪な、毒のある婦人)
- 115.seine sieben Sachen packen: all sein Gepäck zusammenpacken (Friederich 1976: 397) (七つ道具をしまう: すべてをしまう、引っ越す)
- 116.seine Siebensachen/sieben Sachen/(bair., österr.) sieben Zwetschgen packen (ugs.): ausziehen, einen Aufenthaltsort verlassen (Duden 1992: 663) (引っ越す)
- 117.in sieben Sprachen schweigen: nicht das geringste sagen (Friederich 1976: 455) (一言もいわない)
- 118.ein Buch mit sieben Siegeln: 1)ein Buch, dessen Inhalt unverständlich ist, 2)eine Sache, die unverständlich ist (Friederich 1976: 444) (7つの封印がされた本: 1) 内容が理解できない本、2) 理解できない事柄)
- 119.mit j-m um ein paar (oder um sechs, sieben Ecken) verwandt sein: mit jemandem entfernt verwandt sein (Friederich 1976: 98) (ずっと遠縁の人)
- 120.im sieb(en)ten Himmel sein: von den Gefühlen höchsten Glücks erfüllt sein (Friederich 1976: 214) (7番目の天国にいる: 最高に幸せの気分である)
- 121.die sieben fetten Jahre: gute Zeiten, nach denen schlechte Zeiten drohen (Duden 1992: 662) (ふとった7年: 悪い時代がくる前の良い時代)
- 122.die sieben mageren Jahre: schlechte Zeiten, die guten Zeiten folgen (Duden 1992: 663) (やせた7年: 良い時代がくる前の悪い時代)
- 123.auf Wolke sieben schweben: überglücklich, in Hochstimmung sein (Duden 1992: 813) (7つの雲の上で漂う: 最高の気分である)
- 124.Siebenmeilenstiefel/-schritt: sehr schnell (Duden 1992: 663) (一またぎ7マイルの長靴: 非常に早く)

ACHT

- 125.j-n achtkantig hinauswerfen/rausschmeißen: = j-n hochkantig hinauswerfen: jemanden grob und nachdrücklich hinauswerfen (Duden 1992: 27) (八角に投げ出す: 手荒く投げ出す)
- 126.jmdm einen Achter ins Hemd treten (landsch.; ugs.): jmdn. verprügeln (Duden 1992: 26-27) (誰かをむち打つ)

ZEHN

- 127.ich wette zehn gegen eins, daß...: ich bin fest überzeugt, daß... (Friederich 1976: 554) (10対1で賭ける: 確信している)
- 128.s. alle zehn Finger lecken nach etw.: etwas sehr gern haben wollen (Friederich 1976: 126) (10本の指をなめる: ある物をととてもほしがる)
- 129.die oberen Zehntausend: die oberste Schicht der Gesellschaft (Friederich 1976: 554) (上の1万人: 社会の上層)

- 130.das kann der Zehnte nicht: das können nur wenige (Friederich 1976: 554) (それは 10 人に一人もできない: わずかの人しかそれはできない)
- 131.zehn an jedem Finger haben: sehr viele Verehrer, Freundinnen haben (Duden 1992: 206) (各指に 10 人もっている: たくさんの友達がいる)
- 132.die zehnte Muse: das Kabarett (Duden 1992: 499) (寄席)
- 133.keine zehn Pfennige wert sein: wertlos sein (Duden 1992: 544) (何の価値もない)
- 134.keine zehn Pferde können jmdn. von etwas abbringen/abhalten: jemand ist keinesfalls von etwas abzubringen, abzuhalten (Duden 1992: 545) (馬 10 頭でも止めさせることができない: 決して止めさせることができない)
- 135.toben wie zehn nackte Wilde im Schnee: sehr heftig toben (Duden 1992: 726) (激しく暴れる)

ELF

- 136.von elf, bis es läutet = von zwölf bis Mittag (Friederich 1976: 103) (1 2 時前)
- 137.das elfte Gebot S: s. nicht erwischen lassen (Friederich 1976: 103) (捕まるな)
- 138.in elfter Stunde = in zwölfter Stunde (Friederich 1976: 103) (1 2 時間目)

ZWÖLF

- 139.nicht von zwölf bis Mittag: nicht mal für e-e ganz kurze Zeit (Friederich 1976: 565) (ほんのわずかの時間も)
- 140.in zwölfter Stunde: im allerletzten Augenblick (Friederich 1976: 565) (最後の最後の瞬間)

DREIZEHN

- 141.jetzt schlägt's (aber) dreizehn!: so e-e Frechheit, das ist ja unerhört!, das ist unglaublich! (いけずうずうしい、とんでもない、信じられない)

FÜNFZEHN

- 142.Fuffzehn machen (ugs.; landsch., bes. berlin.): eine Pause bei der Arbeit machen (Duden 1992: 223) (小休憩する)
- 143.kurze Fuffzehn machen (ugs.; landsch.): keine Umstände machen, nicht zögern (Duden 1992: 223) (躊躇しない)
- 144.kurze Fünfzehn machen: =kurzen Prozeß machen (Friederich 1976: 139) (正式の裁判なしに、誰かを処刑する)

SIEBZEHN

- 145.Trick siebzehn (ugs.): der richtige Kniff (Duden 1992: 736) (秘策)

FÜNFZIG

- 146.ein falscher Fünfziger (mst. Fuffziger) : ein unaufrichtiger, unehrlicher Mensch (Friederich 1976: 139) (不誠実な人間)

ACHTZIG

- 147.auf achtzig kommen: wütend werden (Duden 1992: 27) (激怒する)
- 148.auf achtzig sein: wütend werden (Duden 1992: 27) (激怒する)
- 149.jmdn. auf achtzig bringen (ugs.): jmdn. wütend machen (Duden 1992: 27) (激怒させる)
- 150.zwischen achtzig und scheintot sein (ugs.; scherzh.): sehr alt sein (Duden 1992: 27) (非常に年取っている)

NEUNUNDNEUNZIG

- 151.auf neunundneunzig kommen (od. sein) = auf hundert kommen (Friederich 1976: 340) (激怒する)
- 152.auf neunundneunzig sein (ugs.): äußerst erregt, erbost sein (Duden 1992: 516) (激怒している)

HUNDERT

- 153.auf hundert kommen (od. sein) : wütend werden (od. sein) (Friederich 1976: 227) (激怒する)
- 154.jmdn. auf hundert/hundertachtzig o.ä. bringen (ugs.): jmdn. wütend machen (Duden 1992: 356) (激怒させる)
- 155.unter Hunderten nicht e-r (od. nicht der Hundertste): nur sehr wenige (Friederich 1976: 227)

(ほんのわずかの人)

156.vom Hundertsten ins Tausendste kommen: vom Thema (immer mehr) abschweifen
(Friederich 1976: 227) (百番目から千番目になる: だんだん本題からそれていく)

HUNDERTACHTZZIG

157.sich um hundertachtzig Grad drehen: einen dem bisherigen Standpunkt völlig
entgegengesetzten Standpunkt einnehmen (Duden 1992: 273)
(180 度回転する: これまでとは全く反対の立場をとる)

【資料2】日本語における数詞を構成要素とするイディオム

【一】

「一か八か」
「一から十まで」
「一言もない」
「一事が万事」
「一日の長」
「一段落をつける」
「一にも二にも」
「一念発起」
「一脈相通ずる」
「一目置く」
「一も二もなく」
「一翼を担う」
「一家を成す」
「一卷の終わり」
「一驚を喫する」
「一刻を争う」
「一切を入れる」
「いっとうを博す」
「一糸乱れず」
「一糸もまとわず」
「一笑に付す」
「一笑を買う」
「一緒になる」
「一矢を報いる」
「一新を画す」
「一寸も引かない」
「一世を風靡する」
「一席をぶつ」
「一席を設ける」
「一石を投じる」
「一線を画す」
「一戦を交える」
「一ちゅうを輪する」
「一丁字を知らず」
「一滴ケンコンを賭す」
「一手先も見えぬ」
「一頭地を抜く」
「一杯食う。一杯食らわせる」
「一敗地に塗れる」
「一髪鉤を引く」
「一服する」
「一服盛る」
「一步を進める」
「一步を譲る」
「一本参る」
「今一つ」
「打って一丸となる」
「男一匹」
「九死に一生を得る」

【二】

「二度あることは三度ある」

【三】

「三界に家なし」
「三度の飯より好き」
「三度目の正直」

「三年居れば温まる」
「三拍子揃う」
「舌先三寸」

【四】
「四海を家とする」
「四海波静か」
「四苦八苦する」
「四通八達」

【五】
「五臓六腑」
「五指に余る」

【六】

【七】【八】
「七転び八起き」
「七転八倒」

【九】
九死に一生を得る

【十】
「十死一生」(九死に一生を得る)
「十把一絡げ」
「十人十色」
「十年一昔」

【五十】
「五十歩百歩」

【六十】
六十の手習い

【百】
「五十歩百歩」

【千】
「千に一つ」
「千変万化」
「千載一遇」

【万】
「万が一」:

【資料3】統計表

数詞	ドイツ語	日本語
1	39	49
2	29	1
3	24	6
4	10	4
5	8	2
6	2	
7	11	2
8	6	2
9		1
10	9	4
11	3	
12	2	
13	1	
15	3	
17	1	
50	1	1
60		1
99	2	
100	4	1
180	1	
1000		3
10000	1	1
	157	78

【資料1】ドイツ語における身体に関する語彙

1. Achsel (肩) (5)
2. Ader (動脈) (5)
3. Arm (腕) (15)
4. Armeslänge (腕の長さ) (1)
5. Atem (呼吸) (10)
6. Augapfel (眼球) (1)
7. Auge (目) (88)
8. Backe (頬) (1)
9. Bart (髭) (10)
10. Bauch (腹) (5)
11. Bein (脚) (41)
12. Blick (視線) (6)
13. Blöße (露出部分) (3)
14. Blut (血液) (23)
15. Brust (胸) (6)
16. Brustton (胸に響かせた音) (1)
17. Buckel (こぶ) (13)
18. Daumen (親指) (6)
19. Däumchen (親指ちゃん) (1)
20. Daumenschrauben (親指を締め付けること) (1)
21. Ellenbogen (ひじ) (1)
22. Fasern (繊維) (1)
23. Faust (こぶし) (4)
24. Fäustchen (軽く握ったこぶし) (1)
25. faustdick (こぶし大の) (3)
26. Fersen (くるぶし) (5)
27. Finger (指) (40)
28. Fleisch (肉) (7)
29. Fuß (足) (46)
30. Fußangeln (鉄びし) (1)
31. Fußbreit (足の幅) (1)
32. Fußtapfen (ペダル) (1)
33. Fußzehen (足の指) (1)
34. Galle (胆臓) (3)
35. Gaumen (あご) (4)
36. Gehör (聴覚) (5)
37. Genick (首筋) (3)
38. Geruch (臭い、嗅覚) (1)
39. Geschmack (味、味覚) (5)
40. Gesicht (顔、視覚) (27)
41. Glieder (四肢) (3)
42. Gurgel (喉) (6)
43. Haare (髪、体毛) (22)
44. Haarbret (髪幅) (1)
45. Haaresbreit (髪幅) (2)
46. Hacken (かかと) (2)
47. Hals (首) (46)
48. Hand (手) (116)
49. händeringend (揉み手をしながら) (1)
50. Handgelenk (手の関節) (3)
51. handgemein (つかみ合いの) (1)
52. handgreiflich (殴り合いの) (1)
53. Handumdrehen (手のひらを返すこと) (1)
54. Haupt (頭 (あたま)) (5)
55. Haut (皮膚) (18)
56. Herz (心臓) (91)
57. Hintern (尻) (2)
58. Hirn (脳) (1)

- 59.Hühneraugen (うおのめ) (1)
- 60.Kalk (石灰、カルシウム) (1)
- 61.Kehle (喉) (12)
- 62.Knie (膝) (5)
- 63.Kniekehle (ひざかがみ) (1)
- 64.Knochen (骨) (13)
- 65.knochenkotzen (どこぞのうまのほね) (1)
- 66.Kopf (頭部) (107)
- 67.kopfscheu (おどおどした) (1)
- 68.kopfüber (まっさかさまに) (1)
- 69.Kopfzerbrechen (あたまをなやます) (1)
- 70.Kreuz (仙骨部) (3)
- 71.Kropf (甲状腺腫) (2)
- 72.Leber (肝臓) (3)
- 73.Leib (身体) (22)
- 74.Leibeskräfte (全身の力) (1)
- 75.Lider (まぶた) (1)
- 76.Lippe (唇) (8)
- 77.Lunge (肺) (1)
- 78.Magen (胃) (11)
- 79.Mark (髄) (6)
- 80.Miene (顔の表情) (3)
- 81.Mund (口) (44)
- 82.mundgerecht (口に合った) (1)
- 83.mundtot (口が封じられた) (1)
- 84.Mundwerk (発語器官としての口) (4)
- 85.Muttermilch (母乳) (1)
- 86.Nacken (うなじ) (12)
- 87.Nagel (つめ) (3)
- 88.Nagelprobe (徹底的な調査) (1)
- 89.Nase (鼻) (41)
- 90.naselang (鼻の長さの) (1)
- 91.Nasenlänge (鼻の長さ) (1)
- 92.Nerv (神経) (17)
- 93.Nieren (腎臓) (2)
- 94.Ohr (耳) (57)
- 95.Organ (器官) (1)
- 96.Puls (脈) (1)
- 97.Pupille (瞳孔) (1)
- 98.Rachen (咽頭) (5)
- 99.Rippen (肋骨) (4)
- 100.Rücken (背中) (19)
- 101.Rückendeckung (後押し) (1)
- 102.Rückgrat (脊椎) (2)
- 103.Schäde (頭蓋) 1(8)
- 104.Scheitel (頭の髪の毛の分け目) (1)
- 105.schlucken (のみ込む) (2)
- 106.Schopf (頭髪) (1)
- 107.Schoß (膝) (6)
- 108.Schulter (肩) (8)
- 109.Schuppen (ふけ) (1)
- 110.Sinn (感覚) (22)
- 111.Sitzfleisch (お尻の肉) (1)
- 112.Spucke (つば) (1)
- 113.Stielaugen (出目、蟹などの目) (1)
- 114.Stirn (額) (9)
- 115.Tränendrüsen (涙腺) (1)
- 116.Wanst (太鼓腹) (1)
- 117.Wimpern (まつげ) (2)
- 118.Zahn (歯) (17)

- 119.Zähneklappern (歯をがらがらいわせること) (1)
- 120.Zahnfleisch (はぐき) (1)
- 121.Zehe (足の指) (2)
- 122.Zopf (お下げ髪) (2)
- 123.Zunge (舌) (35)

【資料2】日本語における身体に関する語

1. 垢：あか(4)[5]	9
2. 顎：あご(0)[15]	15
3. 足：あし(24)[52]／片足：かたあし(2)[0]	78
4. 汗：あせ(7)[7]／汗：かん[1]／乳：ちち(0)[1]／ 涙：なみだ(0)[6]／涙：るい[1]	23
5. 頭：あたま(19)[38]／頭：とう[1]	58
6. 息：いき(11)[22]／息：そく[1]	34
7. 命：いのち(28)[25]	53
8. 腕：うで(2)[15]	17
9. 鬢：えくぼ(3)[1]	4
10. 面：おもて(5)[3]／面：めん[18]	26
11. 顔：かお(21)[27]／笑顔：えがお(3)[1]／顔：がん[1]	53
12. 頭：かしら(9)[8]	17
13. 肩：かた(4)[29]	33
14. 髪：かみ(3)[4]	7
15. 体：からだ(0)[7]／体：たい(3)[5]	15
16. 皮：かわ(27)[7]／皮：ひ[2]	36
17. 気：き(31)[70]	101
18. 肝：きも(0)[17]／肝：かん[4]	21
19. 糞：くそ(18)[8]／糞：ふん[1]	27
20. 口：くち(58)[104]／口：こう[4]	166
21. 唇：くちびる[5]／嘴：くちばし[3]	8
22. 首：くび(17)[36]／首：しゅ[2]	55
23. 毛：け(13)[5]	18
24. 頭：こうべ(2)[1]／頭：とう[1]	4
25. 心：こころ(85)[80]／心：しん[13]	178
26. 腰：こし(6)[11]	17
27. 瘤：こぶ(2)[1]	3
28. 舌：した(13)[9]／舌：ぜつ[1]	28
29. 小便：しょうべん(4)[4]	8
30. 尻：しり(9)[45]／尻：けつ[4]	63
31. 脛：すね(7)[5]	12
32. 背：せ(8)[8]／背：はい[1]	17
33. 魂：たましい(0)[6]	6
34. 血：ち(6)[31]／血：けつ[4]	41
35. 唾：つば(6)[4]	10
36. 旋毛：つむじ[2]	2
37. 爪：つめ(7)[8]／爪先：つまさき(2)	17
38. 面：つら(6)[10]	16
39. 手：て(63)[160]／掌：たなごころ[5]	228
40. 喉：のど(0)[6]	6
41. 歯：は(9)[10]／歯：し[2]	21
42. 肺：はい[1]	1
43. 肌：はだ(0)[10]	10
44. 鼻：はな(25)[45]／鼻：び[1]	71
45. 腹：はら(38)[56]／腸：はらわた[7]／腹：ふく[6]	107
46. 腫れ物：はれもの(3)[1]	4
47. 髭：ひげ[2]	2
48. 膝：ひざ(0)[18]	18
49. 額：ひたい(3)[5]	8
50. 懐：ふところ(2)[11]	13
51. 尻：へ(8)[8]	16
52. 臍：へそ(0)[5]	5
53. 頬：ほお[6]	6
54. 骨：ほね(23)[29]	52
55. 股：また(0)[1]／腿：もも(0)[3]／股：こ[1]	5
56. 睫：まつげ[2]	2
57. 眉：まゆ[12]／眉毛：まゆげ[2]	9

第9章に関する資料

58.	身：み(109)[89]／身：しん[5]	203
59.	耳：みみ[46]／耳：じ[2]	48
60.	脈：みやく[6]	6
61.	胸：むね(4)[52]／胸：きょう[2]	58
62.	目：め(74)[158]／目：もく[1]	233
63.	指：ゆび(4)[10]／指：し[1]	15
64.	涎：よだれ(2)[2]	4

【資料3】 "Zunge"を構成要素とするドイツ語のイディオム

1. die Zunge hängt mir zum Halse heraus: ich bin außerordentlich durstig, erschöpft
(舌が出て喉まで垂れ下がっている: 非常に喉が渴いている、疲れ果てている)
2. jemandem klebt die Zunge am Gaumen: jemand ist sehr, sehr durstig
(舌が上顎にくっついていて: 非常に喉が渴いている)
3. böse Zungen behaupten: schlechte, verleumderische Menschen sagen
(意地悪な舌が主張する: 口さがない人々が言っている)
4. die Angst bindet jemandem die Zunge: jemand kann vor Angst nicht sprechen
(心配が舌を縛り付けている: 心配で話すことができない)
5. das Herz auf der Zunge haben/tragen: alles aussprechen, was einen bewegt; offenherzig, zu gesprächig sein (DUDEN 1992: 328-329)
(舌の上に心臓を持っている: 心動かすこと、何でも話す、打ちあけて話す)
6. jemand würde sich eher die Zunge abbeißen (als daß er etwas sagt): jemand sagt (oder verrät) gar nichts
(当該のことを話すぐらいなら、むしろ舌を噛むだろう: 何も話さない、漏らさない)
7. sich die Zunge ausrenken: pausenlos reden
(舌をはずす: 絶え間なく喋る)
8. sich die Zunge (ab-)brechen (bei einem Wort): ein Wort ist unaussprechbar schwierig (so daß man sich fast die Zunge verletzt)
(ある語を言おうとして、舌を破る: ある語は発音が難しいので、舌を傷つけそうになる)
9. sich die Zunge aus dem Hals rennen: bis zur Erschöpfung rennen (DUDEN 1992: 840)
(喉から舌から抜けそうになるぐらい走る: ぐたぐたになるほど走る)
10. jemandem /nach jemandem die Zunge herausstrecken: jemanden durch Zeigen der Zunge [schadenfroh] verhöhnen](DUDEN 1992: 840)
(誰かに向かって舌を突き出す: 舌を見せて誰かの失敗をあざ笑う)
11. jemandem die Zunge lähmen: es jemandem unmöglich machen zu sprechen
(舌が麻痺する: はなせなくなる)
12. jemandem die Zunge lösen: 1) jemanden durch Wein zum Reden bringen
2) jemanden durch Gewalt dazu bringen, Aussagen zu machen
(舌を解き放つ: 1) ワインを飲ませて喋らせる、2) 力づくで口を開かせる)
13. sich die Zunge verbrennen: sich den Mund verbrennen
(舌をやけどする: 口をやけどする→失言から禍を招く)
14. seine Zunge hüten (oder wahren, zügeln): vorsichtig sein mit dem, was man sagt
(舌を守る(動かさないでいる、手綱を締める): 発言に注意する)
15. seine Zunge im Zaum halten (oder beherrschen) können: nur das sagen, was man sagen will
(舌を囲いの中においておく(支配する)ことができる: 言おうと思うことだけを言う)
16. eine beredte (oder feurige) Zunge haben: (sehr) beredt, redegewandt sein
(饒舌な(火のような)舌を持っている: 非常におしゃべりである)
17. eine boshafte (oder böse, giftige) Zunge haben
(悪意のある(意地悪な、毒のある)舌を持っている)
18. eine falsche Zunge haben: Falsches sagen, lügen
(偽りの舌を持っている: 偽りを言う、嘘を言う)
19. eine freche (oder lose) Zunge haben: ein freches Mundwerk haben
(生意気な(緩んだ)舌を持っている: 生意気な口を持っている→生意気な口を利く)
20. eine feine Zunge haben: ein Feinschmecker sein
(洗練された舌を持っている: 美食家である)
21. eine glatte Zunge haben: geschickt, schmeichelnd, nicht ohne Lügen reden
(なめらかな舌を持っている: ことば巧みに、お世辞をならべたてる)
22. eine scharfe (oder spitze) Zunge haben: Kränkendes, Verletzendes sagen
(鋭い(尖った)舌を持っている: 人の心を傷つけることを言う)
23. eine schwere Zunge haben: 1) nicht leicht formulieren können
2) angeheitert sein
(重たい舌を持っている: 1) ことばを述べるのが容易でない、2) お酒が入ってろれつが回らない)
24. der Zunge freien Lauf lassen: frei, ungehemmt reden
(舌に自由な動きを与える: 自由に、言い淀むことなく喋る)
25. etwas auf der Zunge haben: etwas sagen wollen, dann aber doch nicht sagen
(舌の上に持っている: 何かを言いたいと思っながら、言わない)
26. etwas brennt jemandem auf der Zunge: es drängt jemanden, etwas zu sagen (DUDEN 1992:

【資料4】「舌」を構成要素とするイディオム表現

1. 舌が長い：ぺらぺらとよくしゃべる、口数が多い
 2. 舌が回る：ぺれぺらとよくしゃべる、弁舌がたくみである
 3. 舌先三寸：うわべのことばだけで、心や中身がともなっていないこと
 4. 舌三寸に胸三寸：口から出るちょっとしたことばと胸の内のちょっとした考え
 5. 舌鼓を打つ：おいしいものを舌を鳴らして食べる
 6. 舌尚存す：舌がまだある。舌さえあればだいじょうぶ、なんだってできるということ
 7. 舌の根の乾かぬ内：言い終わるか終わらないうちに
 8. 舌を出す：当人に見えないところで、そしったりあざけったりするしぐさ、失敗したときなどに軽くするしぐさ
 9. 舌を出すのも嫌い：舌を出すのもいやだというくらいに、徹底的に出ししぶるさま
 10. 舌を鳴らす：不満や軽蔑の気持ちを示す動作にいう、感心したりするときの動作にいう（舌打ちをする）
 11. 舌を振るう：熱心にしゃべる、雄弁をふるう
 12. 舌端火を吐く：ことば鋭く論じたてるさま
 13. 舌を巻く：口が利けなくなるほど、非常に驚いたり感心したりする（語中に「舌」を含むイディオム表現）
- "sich die Zunge verbrennen"(13)
14. 陰で舌を出す：その人の前では、お世辞などを言っただけで相手にとりいりながら、その人のいないところでは、悪口をいったり、馬鹿にしたりするたとえ
 15. 舌頭に千転する：繰り返す何度も口ずさむ
 16. 三寸の舌を悼う：雄弁をふるう

意味的観点からの分類

a-1) 5 [1]

a-2) 7, 8, 9, 10, 15 [5]

b-1) 1, 2, 3, 6, 11, 12, 13, 14, 16 [9]

b-2) 4 [1]

【資料 1】 ドイツ語における "Mund" を構成要素とするイディオム

1. den Mund nicht aufbekommen/aufkriegen: sich nicht trauen, etwas zu sagen (－)
(口を開けない：何かを言う自信がない)
2. einen großen Mund haben/führen: vorlaut sein, angeben (－)
(大きな口を持っている：うるさい、ほらを吹く)
3. du hast wohl deinen Mund zu Hause gelassen: du bist aber sehr schweigsam (－)
(家に口を置き忘れてきたのだろう：とても口数が少ないではないか)
4. Mund und Nase aufreißen/aufsperrn: sehr überrascht sein (±)
(口と鼻を広げる：非常に驚いている)
5. den Mund /das Maul aufsperrn: sehr erstaunt sein (±)
(口を開く：非常に驚いている)
6. den Mund/das Maul aufreißen/voll nehmen: aufschneiden, prahlen, großtun (－)
(口を開く、口を一杯にする：自慢する、大きく出る)
7. den Mund/das Maul auf dem rechten Fleck haben: schlagfertig, beredt sein (＋)
(口を右側に持っている：機転が利く、ことば巧みである)
8. den Mund (das Maul, die Fresse o.ä.) aufmachen/auftun: etwas sagen, reden (＋)
(口を開く：何かを言う、話す)
9. den Mund (das Maul, die Fresse o.ä.) halten: schweigen, still sein (＋)
(口を閉ざす：沈黙する、静かにしている)
10. den Mund [zu] voll nehmen: [zu] viel versprechen, angeben (－)
(口を一杯にする：約束しすぎる、ほらを吹く)
11. reinen Mund halten: nichts verraten (＋)
(口を清く保つ：何ももらさない)
12. einen schiefen Mund/ein schiefes Maul ziehen: ein unzufriedenes, beleidigtes Gesicht machen (－)
(口をゆがめる：不満足、不機嫌な顔をする)
13. sich den Mund fusselig/fußlig reden: durch Reden vergeblich versuchen, jmdn. zu etwas zu bewegen, jmdm. etwas einprägen (－)
(口がすり切れるほど話す：だれかの心を動かそうと懸命に話す、うまくいかない：口を酸っぱくして言う)
14. sich den Mund/das Maul verbrennen: sich durch unbedachtes Reden schaden (－)
(口をやけどする：不用意な話で害を被る)
15. sich den Mund/das Maul wischen können: leer ausgehen (±)
(口を拭うことができる：何も得ない結果となる)
16. jmdm den Mund öffnen: jmdn. zum Reden bringen (±)
(だれかの口を開く：話させる：口を開かせる)
17. jmdm. den Mund/das Maul verbieten: jmdm untersagen, sich zu äußern (－)
(だれかの口を禁じる：だれかに話すことを禁じる)
18. jmdm den Mund wäßrig machen: jmdm. Appetit, Lust auf etwas machen (＋)
(だれかの口を水っぽくする：食欲を起こさせる、何かをしようという気にさせる)
19. jmdm. den Mund/das Maul stoppen: jmdn. zum Schweigen bringen (－)
(だれかの口を塞ぐ：だれかを黙らせる)
20. an jmds. Mund hängen: jmdm. gebannt zuhören (＋)
(だれかの口にぶら下がる：だれかの言うことを魅入られたように聞き入る)
21. nicht auf den Mund gefallen sein: schlagfertig sein, gut reden können (＋)
(口に躓いて倒れていない：機転が利く、よく話すことができる)
22. wie aus einem Munde: gleichzeitig, alle zugleich sprechend (±)
(一つの口からのように：みなが同時に話す)
23. in aller Munde sein: sehr bekannt, schnell verbreitet, im Gespräch sein (±)
(すべての人の口の中にある：非常に知られている、早く広まって話題になっている)
24. etwas [nicht] in den Mund nehmen: etwas [nicht] aussprechen (±)
(何かを口の中にとる：何かを言明する)
25. jmdm. etwas in den Mund legen: jmdm. auf eine bestimmte Aussage hinlenken (－)
(だれかの口に何かをおく：特定のことを言うようにだれかを誘導する)
26. etwas ständig/dauernd/viel im Munde führen: über etwas oft reden, ein Wort häufig gebrauchen (±)
(何かを常に／たえず／多く口にのぼせる：何かについてしばしば話す、ある語をしばしば用いる)
27. mit dem Mund vorneweg sein: vorlaut sein (－)
(口が先にある：うるさい、やかましい)
28. jmdm. nach dem Munde reden: jmdm. immer zustimmen, das sagen, was der andere gern hören will (－)
(だれかの口にならって話す：ある人にいつでも同意する、相手の聞いた

いと思うことを言う)

29. **jmdm. über den Mund fahren: jmdm. das Wort abschneiden; jmdm. scharf antworten** (－)
(だれかの口の上を通る: だれかのことばを切断する、だれかにきつく答える)
30. **von Mund zu Mund gehen: durch Weitererzählen [schnell] verbreitet werden** (±)
(口から口へいく: 次から次へと話すことによって広まる)
31. **sich etwas am/vom Munde absparen: unter Entbehrungen sparen** (S. 24) (±)
(口から節約する: 必要なものを儉約する)
32. **sich jeden/den letzten Bissen am/vom Munde absparen: unter Entbehrungen sparen, sparsam leben** (S. 24) (±)
(最後のひとくちを口から節約する: 必要なものを節約して生活する)
33. **Ausdrücke im Munde führen: Ausdrücke gebrauchen/Ausdrücke an sich haben: sich derb ausdrücken, Schimpfwörter gebrauchen** (S. 70) (－)
(表現を口にのぼせる: あらっぽく表現する、ののしりことばを用いる)
34. **aus berufenem Munde: von kompetenter Seite** (S. 99) (+)
(しかるべき口から: 有能な側から)
35. **jmdm. die Bissen in den Mund/im Mund zählen: jmdm. aus Sparsamkeit das Essen nicht gönnen** (S. 111) (－)
(口に入れるたびに数える: 節約するため、だれかに食事を恵まない)
36. **kein Blatt vor den Mund nehmen: offen seine Meinung sagen** (S. 113) (+)
(口の前に葉をとらない: 意見をはっきりという)
37. **jmdm. Brei um den Mund schmieren: jmdm. schmeicheln** (S. 126) (－)
(だれかの口の周りに粥を塗る: だれかにお世辞を言う)
38. **von der Hand in den Mund leben: die Einnahmen sofort für Lebensbedürfnisse wieder ausgeben** (S. 306) (－)
(手から口へと入れる生活をする: 収入をただちに生活の必要のために支出する)
39. **wes das Herz voll ist, des geht der Mund über: wenn jmd. von etwas besonders begeistert ist, besonders bewegt ist, dann muß er einfach darüber sprechen** (S. 327) (+)
(心を一杯にしているものは、口に移行していく: うれしいことはつい話さざるをえない)
40. **jmdm. Honig um den Mund schmieren: jmdm. schmeicheln** (S. 348) (－)
(だれかの口の周りに蜂蜜を塗る: だれかにお世辞を言う)
41. **mit einem goldenen/silbenen Löffel im Mund geboren sein: Kind reicher Eltern sein, Glück in allen Dingen haben** (S.461) (+)
(金/銀のスプーンをくわえて生まれた: 金持ちの両親の子供である)
42. **Morgenstunde hat Gold im Munde: am Morgen läßt es sich gut arbeiten; wer früh mit der Arbeit anfängt, erreicht viel.**(S.494) (+)
(朝の時間は口に金を持っている: 朝には仕事がかどる)
43. **jmdm. läuft das Wasser im Munde zusammen: jmdm. bekommt großen Appetit auf etwas, großes Verlangen nach etwas** (S. 783) (+)
(口に涎が溜まる: 何かを大いに食べたくなる、何かを大いにほしがる)
44. **jmdm. das Wort im Mund herumdrehen: jmds. Aussage ins Gegenteil verkehren** (S. 816)(－)
(だれかのことばを口の中でひね回す: だれかの発言を反対にしてしまう)
45. **jmdm. das Wort aus dem Mund/von der Zunge nehmen: genau das sagen, was jmd. gerade selbst sagen wollte** (S. 816) (±)
(だれかの口からことばをとる: だれかが言おうと思っていたことを言う)
46. **jmds. Mundwerk steht nicht still: jmd. redet ununterbrochen** (－)
(口が静かにしていない: 絶えずしゃべる)
47. **ein böses/lockeres/loses/frechtes o.ä. Mundwerk haben: gehässig/vorlaut/frech o.ä. reden** (－)
(意地の悪い/ゆるやかな/ゆるんだ/生意気な口を持っている: 憎まれ口を聞く/生意気なことを言う...)
48. **ein gutes/flinkes Mundwerk haben: sehr gewandt reden** (+)
(よい/すばやい口を持っている: 非常に雄弁である)
49. **ein großes Mundwerk haben: großsprecherisch reden** (－)
(大きな口を持っている: 大きなことを言う)

"Mund"を構成要素とするイディオム (Friederich 1966: 232-236)

50. **den Mund aufreißen** = das Maul aufreißen (wie ein Scheunentor): 1)derb, (wie ein Scheunentor) zornig, reden, 2) außerordentlich prahlen (－)
(納屋の門のように口を開く: ぞんざいに話す、大自慢話をする)
51. **den Mund aufreißen** = das Maul aufreißen über j-n: schlecht reden über j-n. (－)
über j-n

- (だれかについて口を開く : だれかについて悪いことを言う)
52. s. den Mund zer- = s. das Maul zerreißen: häßlich reden (über j-n.) (-)
 reißen
- (口を裂く : 意地悪なことを話す)
53. ein ungewaschener = ein ungewaschenes Maul = ein grobes Mundwerk haben (-)
 Mund
- (洗っていない口を持っている : 粗雑な口をきく)
54. j-m eins (od. eine) j-m e-n Schlag auf den Mund geben (-)
 auf den Mund geben
- (だれかの口の上にひとつあげる : だれかの口の上に一発見舞う)
55. eins (od. eine) auf e-n Schlag auf den Mund bekommen (-)
 den Mund bekommen
 (od. kriegen)
- (口の上にひとつもらう : 口の上に一発見舞われる)
56. etw. aus j-s Mund etw. von j-m hören, erfahren (±)
 (zum erstenmal)
 hören
- (何かをだれかの口から初めて聞く : 初めて聞く)
57. (ein Wort) (nicht) in ein (abscheuliches) Wort (nicht) benutzen (+)
 den Mund nehmen
- (口に入れない : 汚いことばを使わない)
58. j-m etw. in den Mund etw. so darlegen, daß man es verstehen muß (-)
 schmieren
- (だれかの口の中に何かを塗る : いやでも解るようにかみ砕いてやる)
59. mit offenem Mund = den Mund (od. Mund u. Nase) auf sperren (±)
 dastehen
- (口を開けて立っている : 非常にびっくりしている : 口あんぐり)
60. j-m etw. = j-m etw. schmackhaft machen: j-n so beeinflussen, daß er
 mundgerecht etw. angenehm, wünschenswert findet (S. 729) (-)
 machen
- (だれかの口に合うようにしてやる : 望ましいと思うようにし向ける)
61. j-n mundtot machen machen, daß j-s Worte nicht verbreitet werden (-)
 (だれかの口を死んだ状態にする : だれかの言葉が広がらないようにする、口を封じる)

意味論的分類 :

a-1: 4, 5, 12, 15, 31, 32, 35, 38, 41, 42, 43, 54, 55, 59 [14]

a-2: 58, 60 [2]

b-1: 1, 2, 3, 6, 8, 9, 11, 13, 16, 17, 19, 23, 24, 27, 46, 48, 61 [17]

b-2: 7, 10, 14, 18, 20, 21, 22, 25, 26, 28, 29, 30, 33, 34, 36, 37, 39, 40, 44, 45, 47, 49, 50, 51, 52, 53, 56, 57 [28]

【資料2】日本語における「口」を構成要素とするイディオム

1. 口あんぐり：何かにあきれたり、びっくりしたりして、思わず口を開けるさま（±）
2. 口裏を合わせる：口を合わせる（-）
3. 口が旨い：口が上手：（-）
4. 口がうるさい：口うるさい（-）
5. 口が多い：口数が多い（-）
6. 口が奢る：口が肥える、舌が肥える（-）
7. 口が重い：口が重たい（-）
8. 口が掛かる：誘いがかかる（+）
9. 口が堅い：秘密などを軽々しく人に話さない（+）
10. 口が軽い：おしゃべりであること（-）
11. 口が腐っても：口が裂けても（+）
12. 口が過ぎる：遠慮しなければならぬことまでいう（-）
13. 口が酸っぱくなる：同じことを何度もくり返している（-）
14. 口が滑る：口を滑らす（-）
15. 口数を利かない：ことば数が少ない（±）
16. 口が達者：よくしゃべること（-）
17. 口が干上がる：暮らしがたたなくなる（-）
18. 口が減らない：ああ言えばこう、こう言えばああと、平気で言い返す（-）
19. 口が曲がる：そういうことは言うべきでないということ（-）
20. 口から先に生まれる：非常におしゃべりな者を、多少のからかいとあなどりをこめていう（-）
21. 口が悪い：人に対して、遠慮なくずけずけとものを言う（-）
22. 口車に乗せる：上手に言いくるめて、相手をだます（-）
23. 口車に乗る：相手の巧みな言いまわしによって、だまされる（-）
24. 口三味線に乗せる：口先だけで相手をごまかす（-）
25. 口でけなして心で褒める：口では悪く言うが、心の中では高く評価する（±）
26. 口と腹とは違う：口で言うことと心の中で考えていることとは別である（-）
27. 口に合う：食べ物や料理の方法が、食べる人の好みに一致する（+）
28. 口に栄耀（えよう）身に奢り：ぜいたくの限りを尽くすこと（-）
29. 口に風邪を引かす：せっかく話をしても、相手にわかってもらえず、むだになるたとえ（-）
30. 口にする：話題にする、飲み食いをする（±）
31. 口に出す：心で思っていることをことばにだして言う（±）
32. 口に使われる：ただ食べていくために、あくせくと働く（-）
33. 口に上せる：話題にする（±）
34. 口に糊する：やっと暮らしを立てること（-）
35. 口に乗る：人々のうわさになる、甘言にだまされて言うがままになる（-）
36. 口に任せる：深く考えないで、思うままにものを言う（-）
37. 口の下から：話すそばから（-）
38. 口の端に掛かる：人々のうわさに上って、話の種にされる（-）
39. 口の端に掛ける：うわさをする、話題にする（-）
40. 口の端に上る：話題になる、人の話にしばしば出てくる（-）
41. 口は重宝：口は便利なもので、都合のいいように言って、とりつくろうこともできるということ（-）
42. 口幅広し：口幅ったい：遠慮のない思いついた口のきき方である（-）
43. 口火を切る：一番先にものを始める（±）
44. 口弁慶：口は達者で力強いことを言うけれども、実際の行動は全くだめなこと（-）
45. 口ほどに手は動かさず：口先だけで実行しない（-）
46. 口程にもない：口程もない（-）
47. 口（も）八丁手（も）八丁：しゃべるのも仕事をするのも、人一倍達者であること（±）
48. 口を合わせる：相手の言うことに話を合わせる（-）
49. 口を掩う：忍び笑いをする（-）
50. 口を掛ける：誘う、声を掛ける（+）
51. 口を利く：物事がうまく運ぶように仲をとりもつ（+）
52. 口を切る：最初に発言する（±）
53. 口を極める：言葉を尽くす（+）
54. 口を添える：口添えする（+）

55. 口を揃える：人々が同時に同じことを言う（±）
 56. 口を出す：差し出口をする（－）
 57. 口を叩く：よくしゃべる（－）
 58. 口を衝いて出る：次から次へとことばがすらすら出てくる（±）
 59. 口を噤む：口を閉じてものを言わない（±）
 60. 口を慎む：慎重にものを言う（－）
 61. 口を尖らす：唇を尖らす（－）
 62. 口を閉ざす：沈黙を守る（－）
 63. 口を直す：口直しをする（－）
 64. 口を濁す：言葉を濁す（－）
 65. 口を拭う：悪いことややましいことをしながら、何食わぬ顔をする（－）
 66. 口を濡らす：細々と生活する（－）
 67. 口を挟む：話に割り込む（－）
 68. 口を開く：ものを言う（±）
 69. 口を塞ぐ：口を封ずる（－）
 70. 口を割る：泥を吐く：自白する（±）
- 語中に「口」を含むイディオム表現
71. 開いた口が塞がらない：相手の態度や行為にあきれかえったり、あっけにとられたりして、ものも言えない（－）
 72. あたら口に風を入れる：せっかく言い出したことがむだになる（－）
 73. 言う口の下から：言うとすぐに（±）
 74. 狼の口あいたよう：裂け目が大きいさま（±）
 75. 大きな口をきく：大口をたたく：えらそうなことを言う（－）
 76. 綺麗な口をきく：自分には偽りやごまかしがいないかのような、体裁のよいことを言う（－）
 77. 心と口と違う：口ではいいことを言うが、心では悪いことを考えている（－）
 78. 序の口：物事がまだはじまったばかりであること（±）
 79. 手八丁口八丁：することも話すことも非常に達者であること（±）
 80. 立派な口をきく：口先では偉そうなことを言う（－）
 81. 口頭の交わり：口先だけで誠実さのない交際（－）
 82. 口吻を漏らす：それとなく気持ちの一端を口に出す（±）

意味論的分類

a-1:1, 11, 17, 19, 20, 32, 34, 49, 61, 65, 66, 71, 74, 78 [14]

a-2:6, 27, 28, 63 [4]

b-1:4, 5, 7, 9, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 29, 30, 31, 33, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 43, 45, 46, 47, 52, 56, 57, 58, 59, 60, 62, 67, 68, 69, 70, 73 [37]

b-2:2, 3, 8, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 35, 42, 44, 48, 50, 51, 53, 54, 55, 64, 72, 75, 76, 77, 79, 80, 81, 82 [27]

【資料1】日本語における外来語を構成要素とするイディオム

1. アーチをかける<現>
2. アドバルーンを揚げる<現>
3. アルファからオメガまで<明>
4. イニシアチブを取る<昭>
5. エンジンが掛かる<明>
6. オクターブが上がる<現> (オクターブ<明>)
7. オブラートに包む<明>
8. ガードが固い<大>
9. キャスティングボードを握る<昭>
10. コップの中の嵐<江> *
11. コペルニクスの轉回<大> *
12. コロンブスの卵<昭> *
13. コンマ以下<昭>
14. スープの冷めない距離<江>
15. スクラムを組む<昭>
16. スタートを切る<明>
17. ステップを踏む<明>
18. タオルを投げる<明>
19. 絶好のチャンス<明>
20. テープを切る<昭>
21. トップを切る<大>
22. ハートを射る<明>
23. パイプを通す<明>
24. バトンを渡す<昭>
25. パンドラの箱<?> *
26. ピンからキリまで<江>
27. ピントが外れる<江>
28. ピンを撥ねる<?>
29. プライドが高い<大>
30. ブレーキが掛かる<昭>
31. ベストを尽くす<昭>
32. ペテンに掛ける<江>
33. ペンを折る<昭>
34. ペンを執る<昭>
35. ボルテージを上げる<昭>
36. ボルトが緩む<昭>
37. マットに沈む<昭>
38. ミイラ取りがミイラになる<明>
39. メスを入れる<江>
40. メートルを上げる<明>
41. モーションを掛ける<昭>
42. モルモットにされる<現>
43. リーダーシップをとる<昭>
44. レールを敷く<明>
45. レッテルを貼る<現>
46. アクセントを置く<明>
47. サンドイッチになる<明>
48. シャッポを脱ぐ<明>
49. スポットライトを浴びる<大>
50. スポットを当てる<昭>
51. Z旗を掲げる<明>
52. タッチの差<昭>
53. バスに乗り遅れる<昭>
54. パンチがきく<明>
55. パンチを食う<明>
56. ピッチを上げる<昭>
57. ピリオドを打つ<昭>
58. ピントがぼける<昭>

第12章に関する資料

59. プラスアルファ<現>
60. ペナントを握る<現>
61. ベンチを暖める<大>
62. ポイントを稼ぐ<昭>
63. マスコミに乗る<現>
64. ラストスパートをかける<昭>
65. ワンクッション置く<現>
66. ハンディをつける(ゴルフから) / 一目置く(囲碁から)<明>
67. ウェイトをおく<現>
68. ダッシュする<昭>
69. コネを付ける<昭>
70. ネックになる<現>
71. トンネルを抜ける<明>
72. スパイスを利かす<明>
73. ヒットを飛ばす(野球から)<昭>
74. リーチを掛ける(麻雀から)<現>

【資料 2】 ドイツ語における外来語を構成要素とするイディオム
(L)=ラテン語、(I)=イタリア語、(F)=フランス語、(E)=英語、(H)=ヘブライ語、(J)=イディッシュ語、(M)=マレー語、(Sp)=スペイン語、(U)=ハンガリー語
N=名詞、ADV=副詞、ADJ=形容詞、S=文、V=動詞(句)、INT=間投詞

1. ad absurdum: etwas ad absurdum führen: die Unsinnigkeit von etwas aufzeigen(L)
(あることの矛盾を示す) (ADV)
2. ad acta: etwas ad acta legen: etwas als erledigt betrachten(L)
(あることを片づいたものと見なす) (ADV)
3. ad calendas graecas: niemals(L)
(決して～しない) (ADV)
4. ad hoc: aus dem Augenblick heraus [zu einem bestimmten Zweck](L)
(当座の、その場しのぎの) (ADV)
5. ad infinitum: unbegrenzt, bis ins unendliche(L)
(無限に) (ADV)
6. ad libitum: nach Belieben(L)
(随意に) (ADV)
7. ad oculos: jmdm. etwas ad oculos demonstrieren: jmdm etwas durch den Augenschein beweisen(L)
(明示的に証明する) (ADV)
8. ad usum Delphini: für die Jugend, den Schulgebrauch überarbeitet [und von "anstößigen" Stellen gereinigt](L)
(不都合な箇所を削除したりして、教科書を若者のために改編する) (ADV)
9. Advocatus Diaboli: jmd., der mit seinen Argumenten die gegnerische Sache vertritt(L)
(相手側の立場を擁護する人) (N)
10. à fonds perdu: ohne Aussicht, etwas wiederzubekommen(F)
(見込みなしに) (ADV)
11. à gogo: in beliebiger Menge, reichlich(F)
(好きなだけ十分に) (ADV)
12. à la: im Stil von(F)
(ある様式で、ある仕方で) (ADV)
13. à la bonne heure!: recht so, vortrefflich!(F)
(正しく、正鵠を得て) (ADV)
14. à la carte: nach der Speisekarte, nicht als festes Menü(F)
(品書きに沿って) (ADV)
15. alea jacta est: der Würfel ist gefallen: eine Entscheidung wurde getroffen(L)
(賽は投げられた、決定は下された) (S)
16. Alter ego: 1)jmd., der die Eigenschaften, Fähigkeiten o.ä. hat, die einem fehlen, mit dem man - sich ergänzend - eng verbunden ist, 2)zweites, anderes Ich (L)
(第 2 の自己) (N)
17. amen: sein Amen zu etwas geben: seine Zustimmung zu etwas geben(H)
(了承する、同意する) (N)
18. das ist so sicher wie das Amen in der Kirche: das ist ganz gewiß(H)
(教会で唱えるアーメンのように、確実である) (S)
19. Amok: Amok laufen/fahren: in einem Anfall von Geistesgestörtheit umherlaufen/umherfahren und blindwütig töten(M)
(狂気に駆られて盲目的に殺人を侵す) (N)
20. anno: anno dazumal/dunnemals; anno Tobak; anno X: frühere Zeiten; in früheren Zeiten(L)
(当時、昔) (ADV)
21. Anno Domini: im Jahre des Herrn(L)
(西暦紀元) (ADV)
22. anno Schnee: im Jahre Schnee: vor sehr langer Zeit (österr.)(L)
(ずっと昔に) (ADV)
23. a posteriori: nachträglich, später(L)
(あとから、のちに) (ADV)
24. Avance: jmdm. Avancen machen: 1) jmdm. zu erkennen geben, daß man an einer [sexuellen] Beziehung interessiert ist, 2) jmdm. deutliches Entgegenkommen zeigen, weil man sich davon Vorteile verspricht(F)
(気を持たせる、好意を示す) (N)

25. Avec: mit einem Avec: mit Schwung(F)
(澁刺として) (N)
26. c'est la vie: so ist [nun einmal] das Leben(F)
(人生とはそういうもの) (S)
27. chacun à son gout: jeder nach seinem Geschmack, wie es ihm gefällt(F)
(好みに従って、好きなように) (ADV)
28. Chambre séparée: kleiner Nebenraum in Restaurants(F)
(レストランなどの別室) (N)
29. cherchez la femme!: dahinter steckt bestimmt eine Frau!(F)
(背後に女有り) (S) (フランス語は、命令文)
30. comme il faut: wie es sich gehört(F)
(しかるべく、ふさわしいように) (ADV)
31. Conditio sine qua non: unabdingbare Voraussetzung(L)
(不可欠の前提条件) (N)
32. coram publico: vor aller Welt, öffentlich(L)
(公衆の面前で) (ADV)
33. Corpus: Corpus delicti: Beweisstück [für eine Straftat](L)
(犯罪の証拠) (N)
34. Coup: einen Coup landen: ein großes, kühnes Unternehmen erfolgreich durchführen(F)
(大胆な企画を遂行して成功を取る) (N)
35. Crème de la crème: die vornehmsten, bedeutendsten Vertreter (bes. der gesellschaftlichen Oberschicht)(F)
(社会の上の上の人) (N)
36. cum grano salis: mit Einschränkungen, nicht ganz wörtlich(L)
(制限を付けて) (ADV)
37. Cura posterior: etwas, das gegenüber etwas Wichtigerem zurückstehen muß, erst nach diesem zu behandeln, zu erledigen(L)
(後回しにすべきこと) (N)
38. dato: bis dato: bisher(L)
(それまで、これまで) (ADV)
39. Debüt: sein Debüt geben: erstmals öffentlich auftreten(F)
(初登場) (N)
40. de facto: tatsächlich, nach Lage der Dinge(L)
(事実上) (ADV)
41. de jure: formal sprachliche, rechtlich betrachtet(L)
(法的に見ると) (ADV)
42. Dernier cri: allerletzte Neuheit[bes. in der Mode](F)
(最新のこと) (N)
43. Deus ex machina: unerwarteter, im richtigen Moment auftauchender Helfer(L)
(機械仕掛けの神) (N)
44. Dolce vita: [luxuriöses] Leben, das aus Müßigang und Vergnügung besteht(I)
(安楽な生活) (N)
45. en bloc: im ganzen, nicht einzeln, pauschal(F)
(一括して) (ADV)
46. Enfant terrible: jmd, der gegen die geltenden [gesellschaftlichen] Regeln verstößt und daher dadurch seine Umgebung schockiert oder in Verlegenheit bringt(F)
(恐るべき子供) (N)
47. en vogue: en vogue sein: in Mode, im Schwange sein(F)
(流行している) (ADV)
48. First Lady: Frau eines Staatsoberhauptes o.ä.(E)
(ファースト・レディー) (N)
49. Fortuna: Fortuna lächelt jmdm.: jmd.hat Glück(L)
(幸運である) (N)
50. franko: gratis und franko:völlig unentgeltlich (I)
(無料の) (ADV)
51. Furore: Furore machen: Aufsehen erregen, großen Beifall erringen(I)
(賞賛、大当たりをとる) (N)
52. Genre: nicht jmds. Genre sein: nicht nach jmds. Geschmack sein(F)
(趣味に合わない、好みでない) (N)
53. Hasard: Hasard spielen: leichtsinnig sein, sein Glück leichtsinnig aufs Spiel setzen(F)

- (軽率に賭けに出る) (N)
54. hic et nunc: sofort, auf der Stelle(L)
(その場で、直ちに) (ADV)
55. in extenso: ausführlich, vollständig(L)
(詳細に、完全に) (ADV)
56. in flagranti: auf frischer Tat(L)
(現行犯で) (ADV)
57. in medias res: in medias res gehen: zur Sache kommen(L)
(本題に入る) (ADV)
58. in memoriam: zum Gedächtnis, zum Andenken(L)
(追憶のために) (ADV)
59. in natura: 1) in Wirklichkeit, in seiner wirklichen, natürlichen Gestalt, 2) in Form von Naturalien(L)
(1) 現実に、2) 現物支給の形で) (ADV)
60. in nuce: im Kern; in kurzer, knapper Form(L)
(核心において) (ADV)
61. in persona: persönlich, selbst(L)
(その人自ら) (ADV)
62. in petto: etwas in petto haben: etwas in Bereitschaft haben, vorhaben(I)
(備え持っている) (ADV)
63. in puncto: hinsichtlich, betreffend(L)
(その点に関して) (ADV)
64. in puncto puncti: was das Sexuelle betrifft (in puncto puncti sexti) (L)
(セックスに関しては (第 6 の戒律に関して) を省略した表現) (ADV)
65. in spe: zukünftig(L)
(将来の) (ADV)
66. Kapee: schwer von Kapee sein: begriffsstutzig sein, schwerer begreifen(F)
(理解が遅い) (N)
67. laissez faire, laissez aller/passer: gewähren lassen, sich nicht einmischen(F)
(放任しておく) (S)
68. Lapsus linguae: versehentlicher Fehler beim Sprechen(L)
(言い間違い) (N)
69. last, (but)not least: nicht zu vergessen, zuletzt in der Reihenfolge, aber nicht der Wertschätzung nach(E)
(最後ではあるが、重要である) (ADV)
70. Law and order: Schlagwort zur [rücksichtslosen] Bekämpfung von Kriminalität(E)
(法と秩序) (N)
71. Maitre de plaisir: jmd., der bei gesellschaftlichen Veranstaltungen das allgemeine Unterhaltungsprogramm arrangiert und leitet, der bei einem Fest für die Unterhaltung der Gäste sorgt(F)
(祝い事などでの幹事役) (N)
72. mens sana in corpore sano: in einem gesunden Körper [sollte auch] ein gesunder Geist [sein] (L)
(健康な身体に健全な精神がある) (S)
73. mutatis mutandis: mit bestimmten Abänderungen(L)
(一定の変更のもとで) (ADV)
74. Nervus rerum: die Triebfeder, das Entscheidende(L)
(原動力、決定要因) (N)
75. noblesse oblige: das ist selbstverständlich für jemanden, der auf sich hält(F)
(自らを持すものにとっては自明のことであること、当然の義務) (N)
76. nolens volens: ob man will oder nicht(L)
(望む、望まないに関わらず、どうであろうと) (ADV)
77. nomen est omen: die Bezeichnung, der Name deutet auf den Charakter, die Beschaffenheit von jmdm., von etwas hin(L)
(名は体を表す) (S)
78. off limits!: [Eintritt] verboten(E)
(立入禁止) (ADV)
79. on the rocks: mit Eiswürfeln(E)
(オンザ・ロック) (ADV)
80. paletti: alles paletti: alles in Ordnung * Die Herkunft dieser Wendung ist nicht geklärt

- (万事良好、OK) (ADJ)
81. Pampa: in der Pampa: weit außerhalb [in menschenleerer Gegend](Sp)
(パンパ、南平の草原) (N)
82. Panier: etwas auf sein Panier schreiben: sich etwas zum Ziel setzen(F)
(目標に設定する) (N)
83. Paprika: scharf wie Paprika sein: begierig auf sexuelle Bestätigung sein (U)
(セックスに飢えている) (N)
84. par excellence: in höchster Vollendung; schlechthin(F)
(完全な形の、もっばら) (ADV)
85. Pater, peccavi: "Pater, peccavi" sagen: demütig um Verzeihung bitten, eine Schuld eingestehen(L)
(罪を告白し、許しを乞う) (S)
86. per acclamationem: durch Zuruf, Applaus [bei einer Abstimmung](L)
(訴えによって) (ADV)
87. per annum: jährlich; für das Jahr(L)
(毎年、年ごとに) (ADV)
88. per definitionem: wie es das Wort, die Aussage beinhaltet; erklärtermaßen(L)
(定義によって) (ADV)
89. per pedes [apostolorum: zu Fuß(L)
(足で、歩いて) (ADV)
90. per procura: in Vollmacht(L)
(全権を負って) (ADV)
91. per saldo: alles zusammengenommen, nach abschließender Feststellung(L)
(すべてを合わせて) (ADV)
92. per se: an sich, von selbst(L)
(それ自身) (ADV)
93. peu à peu: allmählich, nach und nach(F)
(徐々に) (ADV)
94. post festum: hinterher, im nachhinein(L)
(事後的に) (ADV)
95. Postillon d'amour: Überbringer eines Liebesbriefes(F)
(ラブレターを運んでくる人) (N)
96. Primus inter pares: der Wortführer, Leiter o.ä. in einer Gruppe Gleichrangiger (L)
(指導者) (N)
97. pro domo: für die eigene Sache(L)
(自らのことのために) (ADV)
98. pro formell: nur formell(L)
(形式上) (ADV)
99. prosit/prost: prost Mahlzeit!(L)
(乾杯!) (INT)
100. prosit/prost Neujahr!: Grußformel, Segenswunsch an Silverster(L)
(新年おめでとう!) (INT)
101. quitt: mit jmdm quitt sein: gegenüber jmdm keine Verpflichtungen mehr haben(L)
(負債がない) (ADJ)
102. Quivive: auf dem Quivive sein: wachsam sein; aufpassen(F)
(注意している) (N)
103. quod erat demonstrandum: was zu beweisen war(L)
(証明終わり) (S)
104. quod licet Jovi, non licet bovi: was einem erlaubt ist, ist noch lange nicht allen erlaubt(L)
(ある人に許されていることが、すべての人に許されているとは限らない) (S)
105. Revue: etwas Revue passieren lassen: etwas in Gedanken od. Worten [noch einmal] naheinadner vorführen(F)
(思いめぐらしてみる) (N)
106. rien nu va plus: jetzt ist Schluß, es ist nichts mehr zu machen(F)
(もはやどうしようもない、おわりだ) (S)
107. salvo errore: unter Vorbehalt eines Irrtums(L)
(誤りがあるということを留保して) (ADV)
108. sapienti sat!: es bedarf keiner weiteren Erklärung für den Eingeweihten(L)
(事情に通じているものにはこれ以上説明の必要はない) (S)
109. semper idem: immer derselbe(L)

- (いつでも同じ人) (N)
110. sic transit gloria mundi: so vergeht der Ruhm der Welt(Kommentar, wenn jmd. Besitz, Macht, Ansehen o.ä. verliert)(L)
(この世の名声は儂いもの) (S)
111. sine ira et studio: ohne Haß und Vorliebe, betont sachlich(L)
(愛憎無く) (ADV)
112. sit venia verbo: man verzeihe das Wort(L)
(そのような言葉遣いを許されたい) (S)
113. Spritus rector: die leitende, treibende Kraft eines Unternehmens o.ä.(L)
(企業等のの指導者) (N)
114. stante pede: sofort, ohne Verzögerung(L)
(直ちに、遅滞なく) (ADV)
115. Status quo: der gegenwärtige Zustand(L)
(現状) (N)
116. Status quo ante: der anfängliche, vorherige Zustand; Stand vor dem in Frage kommenden Ereignis(L)
(以前の状態) (N)
117. sub specie aeternitatis: unter dem Gesichtspunkt der Ewigkeit(L)
(永遠の相のもとで) (ADV)
118. sub voce: unter dem Stichwort(L)
(見出し語のもとで) (ADV)
119. summa summarum: alles zusammengefaßt(L)
(すべてをあわせて) (ADV)
120. suum cuique: jedem das Seine(L)
(各自に各自のものを) (ADV)
121. tabula rasa: tabula rasa machen: radikal Ordnung, Klarheit schaffen, unnachtsichtig aufräumen(L)
(白紙状態にする) (N)
122. Tacheles: Tacheles reden: ganz offen und deutlich reden(J)
(タケレス: あけすけに、はっきりと話す)
123. Tempa passati: das sind längst vergangene Zeiten(L)
(それはとうの昔のことだ) (S)
124. Tempo: das Tempo machen: die Geschwindigkeit des Rennens bestimmen(L)
(速度をきめる) (N)
125. Terminus ad/ante quem: Zeitpunkt, bis zu dem etwas gilt oder ausgeführt sein muß(L)
(有効期限) (N)
126. Terminus a quo/post quem: Zeitpunkt, von dem an etwas gilt oder ausgeführt wird(L)
(発効時点) (N)
127. Teminus technicus: Fachausdruck(L)
(専門用語) (N)
128. Terrain: das Terrain sondieren: die Gegebenheiten [vorsichtig]erkunden, vorfühlen(F)
(領域、状況) (N)
129. Terra incognita: unbekanntes Gebiet(L)
(未知の地域) (N)
130. Tertium comparationis: das Gemeinsame zweier verschiedener, aber vergleichbarer Gegenstände oder Sachverhalte(L)
(比較の第 3 項) (N)
131. Testimonium paupertatis: Armutszeugnis(L)
(貧困証明書) (N)
132. ubi bene ibi patria: wo es mir gutgeht, da fühle ich mich zu Hause(L)
(住めば都) (S)
133. Ultima ratio: letztes Mittel(L)
(最後の手段) (N)
134. Upper ten: Oberschicht(E)
(上層) (N)
135. up to date: zeitgemäß, auf dem neuesten Stand(E)
(最新の) (ADV)
136. va banque: va banque spielen: ein übergroßes Risiko eingehen, alles riskieren(F)
(大きな危険をおかす) (ADV)
137. Valet: einer Sache Valet sagen: etwas aufgeben, verlassen(F)

- (あることを放棄する) (N)
138. *variatio delectat*: Abwechslung macht Freude(L)
(やり方を変えると楽しくなる) (S)
139. *vice versa*: umgekehrt(L)
(逆に) (ADV)
140. *vis-à-vis*: machtlos *vis-à-vis* stehen: nichts ändern, nicht eingreifen können(F)
(なすすべなく向き合う) (ADV)
141. *Visier*: mit offenem *Visier* kämpfen: kämpfen, ohne seine Absichten zu verbergen(F)
(戦意をむき出しにして戦う) (ADV)

【資料 3】分類表

N	N のみ		Advocatus Diaboli, Alter ego, Corpus delicti 等	30
	N+V	Na+V	Amok laufen, einen Coup landen, sein Debüt geben 等	12
		Nd+Na+V	jmdm Avance machen, einer Sache Valet sagen	2
		Nn+V+Nd	Fortuna lächelt jmdm	1
	PRA+N	PRA+N	mit einem Avec, in der Pampa	2
		PRA+N+V	schwer von Kapee sein, etwas in petto haben 等	3
	ADJ+KON+N+V		scharf wie Paprika sein	1
ADV	ADV	ad calendas graecas, ad infinitum, à gogo 等		53
	ADV+V	in medias res gehen, va banque spielen, machtlos vis-à-vis stehen		4
	(N)+ADV+V	etwas ad absurdum führen, etwas ad acta legen 等		4
		anno dazumal, Anno Domini, anno Schnee, bis dato		4
S	alea jacta est, c'est la vie, cherchez la femme!等			17
ADJ	franko, paletti, quitt 等			5
INT	prosit/prost, prosit/prost Neujahr!			2
				141

【資料 4】

【名詞】

1. amen: sein Amen zu etwas geben: seine Zustimmung zu etwas geben(H)
(了承する、同意する) (N)
2. Amok: Amok laufen/fahren: in einem Anfall von Geistesgestörtheit umherlaufen/umherfahren und blindwütig töten(M)
(狂気に駆られて盲目的に殺人を侵す) (N)
3. Avance: jmdm. Avancen machen: 1) jmdm. zu erkennen geben, daß man an einer [sexuellen] Beziehung interessiert ist, 2) jmdm. deutliches Entgegenkommen zeigen, weil man sich davon Vorteile verspricht(F)
(気を持たせる、好意を示す) (N)
4. Avec: mit einem Avec: mit Schwung(F)
(澁刺として) (N)
5. Coup: einen Coup landen: ein großes, kühnes Unternehmen erfolgreich durchführen(F)
(大胆な企画を遂行して成功を収める) (N)
6. Debüt: sein Debüt geben: erstmals öffentlich auftreten(F)
(初登場) (N)
7. Fortuna: Fortuna lächelt jmdm.: jmd.hat Glück(L)
(幸運である) (N)
8. Furore: Furore machen: Aufsehen erregen, großen Beifall erringen(I)
(賞賛、大当たりをとる) (N)
9. Genre: nicht jmds. Genre sein: nicht nach jmds. Geschmack sein(F)
(趣味に合わない、好みでない) (N)
10. Hasard: Hasard spielen: leichtsinnig sein, sein Glück leichtsinnig aufs Spiel setzen(F)
(軽率に賭けに出る) (N)
11. Kapee: schwer von Kapee sein: begriffsstutzig sein, schwerer begreifen(F)

- (理解が遅い) (N)
12. Pampa: in der Pampa: weit außerhalb [in menschenleerer Gegend](Sp)
(パンパ、南平の草原) (N)
13. Panier: etwas auf sein Panier schreiben: sich etwas zum Ziel setzen(F)
(目標に設定する) (N)
14. Paprika: scharf wie Paprika sein: begierig auf sexuelle Bestätigung sein (U)
(セックスに飢えている) (N)
15. Quivive: auf dem Quivive sein: wachsam sein; aufpassen(F)
(注意している) (N)
16. Revue: etwas Revue passieren lassen: etwas in Gedanken od. Worten [noch einmal]
nacheinander vorführen(F)
(思いめぐらしてみる) (N)
17. tabula rasa: tabula rasa machen: radikal Ordnung, Klarheit schaffen, unnachsichtig aufräumen
(L)
(白紙状態にする) (N)
18. Tacheles: Tacheles reden: ganz offen und deutlich reden(J)
(タケレス: あけすけに、はっきりと話す)
19. Tempo: das Tempo machen: die Geschwindigkeit des Rennens bestimmen(L)
(速度をきめる) (N)
20. Terrain: das Terrain sondieren: die Gegebenheiten [vorsichtig]erkunden, vorfühlen(F)
(領域、状況) (N)
21. Valet: einer Sache Valet sagen: etwas aufgeben, verlassen(F)
(あることを放棄する) (N)

【副詞】

22. ad absurdum: etwas ad absurdum führen: die Unsinnigkeit von etwas aufzeigen(L)
(あることの矛盾を示す) (ADV)
23. ad acta: etwas ad acta legen: etwas als erledigt betrachten(L)
(あることを片づいたものと見なす) (ADV)
24. ad oculos: jmdm. etwas ad oculos demonstrieren: jmdm etwas durch den Augenschein
beweisen(L)
(明示的に証明する) (ADV)
25. anno: anno dazumal/dunnemals; anno Tobak; anno X: frühere Zeiten; in früheren Zeiten(L)
(当時、昔) (ADV)
26. Anno Domini: im Jahre des Herrn(L)
(西暦紀元) (ADV)
27. anno Schnee: im Jahre Schnee: vor sehr langer Zeit (österr.)(L)
(ずっと昔に) (ADV)
28. dato: bis dato: bisher(L)
(それまで、これまで) (ADV)
29. en vogue: en vogue sein: in Mode, im Schwange sein(F)
(流行している) (ADV)
30. in medias res: in medias res gehen: zur Sache kommen(L)
(本題に入る) (ADV)
31. in petto: etwas in petto haben: etwas in Bereitschaft haben, vorhaben(L)
(備え持っている) (ADV)
32. va banque: va banque spielen: ein übergroßes Risiko eingehen, alles riskieren(F)
(大きな危険をおかす) (ADV)
33. vis-à-vis: machtlos vis-à-vis stehen: nichts ändern, nicht eingreifen können(F)
(なすすべなく向き合う) (ADV)

【形容詞】

34. franko: gratis und franko:völlig unentgeltlich (I)
(無料の) (ADV)
35. paletti: alles paletti: alles in Ordnung * Die Herkunft dieser Wendung ist nicht geklärt
(万事良好、OK) (ADJ)
36. quitt: mit jmdm quitt sein: gegenüber jmdm keine Verpflichtungen mehr haben(L) (負債が
ない) (ADJ)

【資料1】日本語における固有名詞を構成要素とするイディオム

1. あだし野の露、鳥辺野の煙：人がはかなく死んでいくことのたとえ
2. 有馬の道連れ：仲間に頼りになるような者がいないことのたとえ
3. いざ鎌倉：
4. 伊勢や日向の物語：つじつまの合わない話
5. 韋駄天走り：非常な速さで走ること
6. 猗頓（いとん）の富：巨万の富のこと
7. 越俎（えっそ）の罪：他人の職分を侵す罪
8. 江戸からも立ち序：きっかけがあると気軽に決心がつくこと
9. 閻魔の色事：似合わしくないことのたとえ
10. 閻魔の帳面に付く：死ぬ、亡くなる
11. 大津馬の迫いからし：使えるだけ使われて、あとは無用とされること
12. 遅かりし由良之助：待ちかねていた人がやっと来た場合、また、時期に遅れて間に合わなかった場合などに言うことば
13. 小田原評定：長引くばかりで、なかなか意見や方針などがまとまらない相談のこと
14. 親も嘉兵衛、子も嘉兵衛：親と子がよく似ていること
15. 槐安（かいあん）の夢：南柯（なんか）の夢
16. 会稽（かいけい）の恥：戦いに敗れて、命だけは助けてくれと憐れみを乞うような屈辱
17. 鹿島立ち：旅立ち
18. 鹿島の事触れ：騒々しいおしゃべり
19. 上総のそこ一理：
20. 河東（かとう）の獅子吼：やかまし屋の妻が夫に向かって、がみがみと食ってかかること
21. 賀茂川の水：どうしても思いどおりにいかないもののたとえ
22. 河梁（かりょう）の別れ：送別のこと
23. 干将莫邪（かんしょうばくや）：名剣のこと
24. 邯鄲の夢：
25. 箕山（きざん）の節：自分の志を固く守って変えないこと
26. 木曾の深山で木が多い：たいそう気が多い。非常に移り気である
27. 北山時雨：腹が空いてきたこと、相手に好かれていること
28. 京の着倒れ大阪の食い倒れ：
29. 京のお茶漬け：
30. 京の夢大阪の夢：
31. 清水の舞台から飛び下りる：
32. 許由巢父（きょゆうそうほ）：ひとり行いを清くすること
33. 桐壺源氏：
34. 愚公山を移す：怠ることなく刻苦し努力すれば、何事も成し遂げることができるというたとえ
35. 孔子（くじ）の倒れ：
36. 口弁慶：
37. 原憲（げんけん）の貧：清貧のたとえ
38. 源氏の共食い：
39. 孔子に論語：
40. 孔子の腹黒：
41. 孔子も時に会わず：
42. 孔席暖まらず、墨突黔（くろ）まず：
43. 呉越同舟：
44. 呉下の阿蒙：いつまでたっても進歩しないつまらない人物のこと
45. 狐丘（こきゅう）の誠め：
46. 薩摩の守：
47. 薩摩の飛脚：いったまま戻ってこない人のこと（鉄砲玉）
48. 四面楚歌：
49. 釈迦に宗旨なし：
50. 釈迦に説法：
51. 釈迦に説法孔子に悟道：
52. 釈迦も御存じない：
53. 終南捷徑：正道によらないで官につく方法
54. 葉公の竜：うわべはもっともらしく見えて、実際は違っていること

55. 商山の四皓：秦代に、乱を避けて商山に隠れ住んだという四人の老人
 56. 承知の助：承知した、引き受けたということ、人名に擬していったもの
 57. 常山の蛇勢：先陣と後陣、左翼と右翼などが互いに相応じて攻撃したり防御したりして、敵に乗じるすきを与えないような軍隊の配置。また文章の構成が前後相呼応していること
 58. 知らぬ顔の半兵衛：
 59. 次郎にも太郎にも足りぬ：どれにもおよばない
 60. 随徳寺をきめる：
 61. 駿河の富士と一里塚：比べものにならないことのたとえ
 62. 宗祇の蚊屋：風流なことでみえを張ることのたとえ
 63. 総領の甚六：ろくでなしを人名めかしていったもの
 64. 楚越同舟：
 65. 楚材晋用：
 66. 蘇張の弁：蘇秦・張儀のようなすぐれた弁舌
 67. その手は桑名の焼き蛤：
 68. 楚人の沐猴：沐猴にして冠す：うわべだけを飾るあさはかな小人物のこと
 69. 泰山頹（くず）れ、梁木折る：
 70. 泰山卵を圧す：
 71. 泰山の安きに置く：泰山のように、どっしりと揺るぎのない安定したものにするもののたとえ
 72. 泰山は土壤を譲らず：
 73. 泰山北斗：学問や芸術などの分野で、肩を並べるものがないほどすぐれているもののたとえ
 74. 泰山前に崩るるとも色変ぜず：肝が据わっていて、何事にも驚かないことのたとえ
 75. 大山鳴動して鼠一匹：
 76. 泰山を挟みて北海を越ゆ：
 77. 頼めば越後から米搗きに来る：
 78. 筑前女に筑後男：
 79. 朝秦暮楚：居所が定まらず流浪することのたとえ
 80. 直窮父を証す：
 81. 陳勝呉広：先鞭をつける人のこと：
 82. 筑波の道：連歌の異称
 83. 鶴に騎りて陽州に上る：多くの欲望を一心に兼ね合わせ満足させようとするたとえ
 84. 鄭家の奴は詩をうたう：
 85. 敵は本能寺にあり：
 86. 敵本主義：
 87. 天竺から禪：非常に長いもののたとえ
 88. 東家の丘：人を見る目、人物の真価を見抜く眼識のないことのたとえ
 89. 道風の朗詠集：教養のない好事家をいうのに引きあいに出されることば
 90. 土佐船の錨：
 91. 長崎から強飯：物事がだらだらと、いつまでも続くことのたとえ
 92. 名無しの権兵衛
 93. 浪速の葦は伊勢の浜荻：同じ物でも所が違えば呼び名が変わるということ
 94. 南華の悔い：なまじ知識があり、それをひけらかしたりすると、身の災いとなって後悔することになるというたとえ
 95. 南山の寿：事業などが南山のように末永く続くこと
 96. 日本橋で知らぬ人に逢ったよう：気にしないさま、知らんふりをしているさまのたとえ
 97. 伯夷叔齊（はくいしゅくせい）：清廉な人物のたとえ
 98. 伯牙、琴を破る：自分の心をよく知ってくれる人の死をいたみ悲しむことのたとえ
 99. 柏舟の操：妻が亡き夫のために操をたてること
 99. 伯樂の一顧：名君などから重く用いられるたとえ
 100. 箱根知らずの江戸咄：
 101. 箱根の馬は目から弱る：
 102. 始めきらきら奈良刀：めっきははげやすいということ
 103. 早牛も淀、遅牛も淀：同じ結果になるなら、それほどあわてることはないということ
 104. 早船も淀、遅舟も淀：
 105. 板東太郎：利根川の別称
 106. 飛驒の巧み和泉の杣：

107. 富士の山と丈比べ：争おうとしても全く問題とならないこと
 108. 富士の山を蟻がせせる：無力のものが大仕事にいどむこと
 109. 富士は磯：
 110. 平氣の平左衛門：
 111. 平家を滅ぼすは平家
 112. 併州の情：第二の故郷をなつかしむ心情のこと
 113. 汨羅の鬼：水死した人
 114. 弁慶に薙刀：
 115. 弁慶の立ち往生：進退きわまった状態のたとえ
 116. 弁慶の泣き所
 117. 弁慶の七つ道具
 118. ほう祖の寿：長生きすること
 119. 墨子意図に泣く：人間の主体性の弱さを嘆くたとえ
 120. 墨守：自分の説を堅く守って変えないこと
 121. 北ぼうの塵：死んで土に帰すること
 122. 骨川筋右衛門：
 123. 洞ヶ峠（を決め込む）：
 124. 右は京道左は伊勢道：最初は小さな違いだったものが最後には大きな違いを生む
 ことのたとえ
 125. 見ぬ京の物語
 126. 面々の楊貴妃
 127. 孟母三遷の教え
 128. 孟母断機の教え：断機の戒め：学問は、途中でやめてしまっはなんにもならな
 いという教え
 129. 元の木阿弥：
 130. 文殊の知恵：
 131. 文殊の知恵槃特が愚痴：
 132. 文殊も知恵の零れ：
 133. 百合若大臣のよう：何をされてもわからないくらい、ぐっすり眠りこむたとえ
 134. 陽州の夢：過ぎ去った日の歡樂のたとえ
 135. 義経の八艘飛び：
 136. 世を金馬門に避く
 137. 洛陽の紙価貴し：落陽の紙価を高める、紙価を高める
 138. 洛陽負郭の田：都の近郊で交通の便のよい肥沃な農地のたとえ
 139. 羅浮の夢：梅の花のことをいう
 140. 李白一斗詩百編
 141. 梁山泊：不平を抱くものや英雄気どりの者たちが集まる場所のたとえ
 142. 遼東のいのこ：ひとりよがり、世間知らず
 143. 隴山雲暗し：今は野にあって無名であるが、やがて天下に有名になるであろう優
 れた人材がいるというたとえ
 144. 廬山の真面目：
 145. 廬生の夢：
 146. 魯陽のほこ
 147. 魯陽、日をさしまねく
 148. 藁しべを以て泰山を上げる：全く不可能なことのたとえ

【資料2】 ドイツ語における固有名を含んだイディオム

1. Abraham (22): wie in Abrahams Schoß: absolut sicher, geborgen
(アブラハム) (アブラハムの膝にいるよう: 絶対安全に、保護されている)
2. Adam (27): der alte Adam: die alten Schwächen, Gewohnheiten eines Mannes
(アダム) (老アダム: 古傷、習慣)
3. Adam Riese (27): nach Adam Riese: richtig gerechnet
(アダム・リーゼ) (アダム・リーゼに従って: 正確に計算して)
4. Adamskostüm (28): in Adamskostüm: nackt
(アダムの衣装) (アダムの衣装を着て: 裸で)
5. Ägypten (30): sich nach den Fleischtöpfen Ägyptens zurücksehnen: sich nach dem Wohlleben früherer Zeiten sehnen
(エジプト) (エジプトの肉鍋を恋しがる: 以前のよき時代の生活を恋しがる)
6. ägyptisch (30): ägyptische Finternis: tiefste Finternis
(エジプトの) (エジプトの暗闇: 真っ暗闇)
7. Alsterwasser (33): mit Spreewasser/ Alsterwasser getauft sein: ein geborener Berliner/ Hamburger o.ä. sein
(アルスター湖の水) (シュプレーの水/アルスターの水で洗礼を受けている: ベルリン生まれ/ハンブルク生まれである)
8. Amor (35): Amors Pfeil/Pfeile: plötzliches Sichverlieben
(キューピッド) (キューピッドの矢: 突然恋いに陥る)
9. Anton (46): keinen Ton, nicht mal Anton: keinen Laut will ich hören!
(アントーン) (音なしのアントーン: いかなる音も聞きたくない)
10. Arabien (48): alle Wohlgerüche Arabiens: viele angenehme Düfte
(アラビア) (アラビアのよき香り: かぐわしい香り)
11. Assmann (55): das kannst du halten wie ein Dachdecker/ wie der Pfarrer Assmann/wie der Pfarrer Nolte: das kannst du tun, wie du willst; das läuft auf das gleiche hinaus
(アスマン) (屋根葺き職人/牧師アスマン/牧師ノルテのようにしていい: すきなようにしていい、結果は同じだ)
12. Athen (56): Eulen nach Athen tragen: etwas Überflüssiges tun
(アテネ) (アテネに鼻を運んでいく: 余計なことをする)
13. attisch (56): attisches Salz: geistlicher Witz
(アテネの) (アテネの塩: 機知)
14. Augiasstall (69): den Augiasstall ausmisten: verrottene Zustände, Mißstände beseitigen
(アウギアスの牛小屋) (アウギアスの牛小屋を掃除する: 腐敗した状態を除去する)
15. August (69): dummer August
(アウグスト) (愚かなアウグスト)
16. babylonisch (78): babylonische Sprachwirrung/babylonisches Sprachgewirr: Vielfalt von Sprachen, die an einen Ort gesprochen werden
(バビロンの) (バビロンのことばの混乱: 多くの言葉が同じ所で話されている状態)
17. Bacchus (78): dem Bacchus huldigen: [reichlich] Wein trinken
(バッカス) (バッカスに忠誠を尽くす: したたかにワインを飲む)
18. Barthel (85): wissen, wo Barthel den Most holt: alle Kniffe kennen
(バルテル) (バルテルがどこから発酵中のワインを持ってくるかを知っている: コツ、裏を知っている)
19. Beelzebub (89): den Teufel mit/durch Beelzebub austreiben: ein Übel durch ein ebenso schlimmes oder noch schlimmeres beseitigen
(ベーゼブーブ) (ベールゼブーブで悪魔を追い払う: 悪いものをそれよりももっと悪いもので除去する: 毒を以て毒を制する)
20. Blücher (567): rangehen wie Blücher: sich unerschrocken, energisch einsetzen, aber sicher, sagte Blücher: ganz sicher ist das so
(ブリュッヒャー) (ブリュッヒャー将軍のように取りかかる: たじろがず、勢い込んで取りかかる) (確実だとも、とブリュッヒャー将軍は言った: 全く確実にそうだ)
21. Bodensee (122): ein Ritt über den Bodensee: eine durch nichts abgesicherte, sehr waghalsige Unternehmung
(ボーデン湖) (ボーデン湖に馬を乗り出す: 危険で、大胆な行為)
22. böhmisch (123): jmdm. böhmisch vorkommen: jmdm. seltsam anmuten, von jmdm. nicht verstanden werden, jmdm./für jmdn. böhmische Dörfer/ein böhmisches Dorf sein: für jmdn unverständlich, unerklärlich, seltsam sein
(ボヘミアの) (ボヘミア風に思える: 奇妙な感じがする、理解してもらえない) (ボヘ

- ミアの村だ：理解できない、説明できない、奇妙だ)
- 23.Brutus(133): auch du, mein [Sohn] Brutus: auch du verrätst mich, läßt mich im Stich?
(ブルータス) (ブルータス、おまえもか：君も僕を裏切るのか、見捨てすのか?)
- 24.Buxtehude(138): in/aus/nach Buxtehude: in/aus/nach einem irgendwo fernab gelegenen, unbedeutenden kleinen Ort
(ブクステフーデ) (ブクステフーデに／から／へ：どこか遠くの名もない所)
- 25.Charlottenburger(139): einen Charlottenburger machen: sich die Nase zwischen Daumen und Zeigefinger ohne Taschentuch schneuzen
(シャーロットンブルクの) (シャーロットンブルクをする：手鼻をかむ)
- 26.Charybdis(139): zwischen Scylla und Charybdis: zwischen zwei großen Gefahren
(カリュウブディス) (スキュラとカリュブディスの間：2つの大きな危険の間)
- 27.China(139): ob/wenn in China ein Fahrrad/Sack Reis umfällt; ob/wenn in Peking ein Fahrrad/Sack Reis umfällt: ob/wenn etwas [für mich, uns] völlig Unwesentliches geschieht
(中国) (中国／北京で自転車／米俵が倒れようが：全く関係ないことが起きてても)
- 28.Damaskus(142): sein Damaskus erleben; seinen Tag von Damaskus erleben: bekehrt, ein neuer Mensch werden
(ダマスカス) (ダマスカス／の日を体験する) (改宗する、新しい人間になる)
- 29.Damokles(142): das Schwert des Damokles hängt/schwebt über jmdm./über jmds. Haupt: jmd. ist in ständiger Gefahr, ist ständig bedroht
(ダモクレス) (ダモクレスの剣が頭の上にぶら下がっている：常に危険に曝されている)
- 30.Damoklesschwert(143): wie ein Damoklesschwert über jmdm., über jmds. Haupt hängen/schweben: eine ständige Bedrohung für jmdn
(ダモクレスの剣) (ダモクレスの剣のように頭の上にぶら下がっている：脅威である)
- 31.Dänemark(144): es ist etwas faul im Staate Dänemark::; da stimmt etwas nicht, da ist etwas nicht in Ordnung
(デンマーク) (デンマーク国は何かおかしい：あっていない、ちゃんとしていない)
- 32.Denkart(149): die Milch der frommen Denkart: argloses Denken
(デンクアルト) (敬虔なデンクアルトのミルク：悪意のない考え)
- 33.deutsch(150-151): auf deutsch: unverblüht, ohne Beschönigung; mit jmdm deutsch reden: jmdm. unverblüht die Wahrheit, die Meinung sagen; du verstehst wohl kein Deutsch mehr/nicht mehr Deutsch?: du willst wohl nicht hören?
(ドイツの) (ドイツ語で：飾ることなく、単刀直入に) (だれかとドイツ語で話す：だれかに飾ることなく真実、意見を言う) (ドイツ語がわからないのじゃないのか?：聞こうとしないのか?)
- 34.Eckart(165): ein [ge]treuer Eckart: ein treuer, stets hilfsbereiter Mann
(エッカルト) (忠実なエッカルト) (忠実で、いつでも助けてくれる人)
- 35.Eskimo(186): das haut den stärksten Eskimo vom Schlitten: das ist unfaßbar, das wirft einen um
(エスキモー) (強靱なエスキモーでさえそりから投げ出す：理解しがたい、ひっくりかえってしまう)
- 36.Evangelium(186): jmds Evangelium/für jmdn. das Evangelium sein: etwas blind glauben
(福音) (福音である：盲目的に信じる)
- 37.Eva(186): eine Tochter Evas: ein eitles Mädchen
(エヴァ) (エヴァの娘：虚栄心の強い娘)
- 38.Evaskostüm(187): im Evaskostüm: nackt
(エヴァの衣装) (エヴァの衣装を着て：裸で)
- 39.Frankreich(217): leben wie Gott in Frankreich: im Überfluß leben
(フランス) (フランスの神のように生活する：贅沢三昧の生活をする)
- 40.französisch(217): sich [auf] französisch empfehlen/verabschieden: heimlich aus einer Gesellschaft weggehen
(フランスの) (フランス式に推薦する／暇乞いをする：こっそり抜け出る)
- 41.Frau Holle(217): Frau Holle macht/schüttelt die Betten/ihr Bett: es schneit
(ホレお婆さん) (ホレお婆さんがベットをたたいている：雪が降っている)
- 42.Friedrich(221): seinen Friedrich Wilhelm unter etwas setzen: etwas unterschreiben
(フリードリヒ) (フリードリヒ・ウィルヘルムをおく：署名する)
- 43.Fritz(221): als der Alte Fritz noch Gefreiter war/ noch Fahnenjunker war/nach [mit der Schippe] im Sand spielte: früher einmal, vor langer Zeit; für den Alten Fritz sein: vergeblich, zwecklos sein
(フリッツ) (老フリッツがまだみんなからおめでとうを言われたとき：かつて、はるか

- 昔) (老フリッツ用だ: 無駄である、目的がない)
44. **Furie** (226): **wie von Furien gehetzt/gejagt/gepeitscht: in wildem Schrecken fliehend**
(フーリエ) (フーリエに急ぎ立てられたように: びっくり仰天して逃げ出す)
45. **Goderl** (268): **jmdm das Goderl kratzen: jmdm. schöntun, schmeicheln**
(ゴードレル) (ゴードレルをかく) (お世辞を言う)
46. **Gomorrha** (269) : **Sodom und Gomorrha: ein Ort, ein Ereignis höchster Verderbheit und Unmoral**
(ゴモラ) (ソドムとゴモラ: 道徳が退廃したところ、退廃的な出来事)
47. **gordisch** (269): **den gordischen Knoten durchhauen: eine schwierige Aufgabe verblüffend einfach lösen**
(ゴルディアスの) (ゴルディアスの結び目を断ち切る: 困難な課題をあっさりと解決する)
48. **Götz** (272): **Götz von Berlichingen: laß mich in Ruhe!**
(ゲッツ) (ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン: 一人にさせてくれ!)
49. **Grand Old Lady/Mann** (273): **älteste/bedeutende weibliche/männliche Persönlichkeit in einem bestimmten Bereich**
(御大老、大御所) (特定の領域における年長の重要な人物)
50. **Hannemann** (310): **Hannemann, geh du voran!: Aufforderung, den Anfang zu machen, voranzugehen**
(ハンネマン) (ハンネマン、君が先に行け!: 初っぱなにやるようにとの要請)
51. **Hans** (310): **Hans im Glück sein: immer wieder Glück haben [und daher ein glücklicher und zufriedener Mensch sein]; Hans Guckindieluft: jmd., der beim Gehen nicht auf den Weg achtet; Hans Taps: ungeschickter Mensch; jeder Hans findet seine Grete: jeder Mann findet eines Tages die zu ihm passende Frau; was Hänschen nicht lernt, lernt Hans nimmer mehr: was man in der Jugend nicht lernen will oder kann, das läßt sich später auch nicht mehr lernen; ich will Hans heißen, wenn...: Formel, mit der man ausdrückt, daß man etwas für ausgeschlossen hält**
(ハンス) (幸せのハンスである: いつでも幸運で、満足している) (上ばかり見上げて
いるハンス: 歩いている先に注意しない人) (つまづきハンス: 不器用な人) (どのハ
ンスもグレーテを見つける: われ鍋にとじ蓋) (ハンスが子供の時に学ばなかったもの
は、いつになっても学ばない) (もしそうであるなら私はハンスということにしよう)
52. **Hansdampf** (31): **ein Hansdampf in allen Gassen sein: überall dabeisein und sich auskennen**
(ハンスダンプ) (どの通りでもハンスダンプである: どこにいても事情通である)
53. **Heinrich** (320): **der flotte Heinrich/Otto: Durchfall**
(ハインリヒ) (軽やかなハインリヒ/オットー: 下痢)
54. **Hektor** (321): **rangehen wie Hektor an Buletten: sich unerschrocken energisch einsetzen**
(ヘクトール) (ヘクトールが肉団子に向かうように突進する: たじろぐことなく勢い込
んで取りかかる)
55. **hic Rhodus, hic salta!** (334): **hier gilt es, hier mußt du dich entscheiden, dich beweisen**
(ここがロドスだ、ここで飛び上がれ!) (ここで決断しなければならない)
56. **Hinz und Kunz** (342): **jedermann**
(ヒンツとクンツ: 任意の誰か)
57. **Hochdeutsch** (343): **Hochdeutsch mit Streifen: nicht ganz einwandfreies Hochdeutsch**
(標準ドイツ語) (模様のある標準ドイツ語: 非の打ち所がないわけでない標準ドイツ
語)
58. **Holland** (346): **da ist Holland in Not/in Nöten: da ist man in großer Bedrängnis, da ist man ratlos**
(オランダ) (オランダが大変だ: 切羽詰まっている、途方に暮れている)
59. **homerisch** (348): **homerisches Gelächter: schallendes, nicht enden wollendes Gelächter**
(ホメロスの) (ホメロスの笑い) (大きくて、何時までも終わりそうにない豪快な笑い)
60. **Hornberger** (351): **ausgehen wie das Hornberger Schießen: [nach großer Ankündigung] ohne ein Ergebnis enden**
(ホルンベルクの人) (ホルンベルクの人) (ホルンベルクのように終わる: 鳴り物入りで行われた
が成果はない)
61. **Jakob** (365): **[nicht] der wahre Jakob sein: [nicht] das Richtige sein**
(ヤーコブ) (真のヤーコブ (ではない): 正しい (ものではない))
62. **Jesus** (365): **Jesus, Maria [und Josef]!: Ausruf des Erschreckens, Erstaunens o.ä.**
(イエス) (イエス様、マリア様、ヨセフ様!: 驚いたときの叫び)
63. **Jordan** (365): **über den Jordan gehen: 1. sterben, 2: entzweigen [und weggeworfen werden]**

- (ヨルダン) (ヨルダンを超えていく：1. 死ぬ、2. 折れる、割れる)
- 64.Kanossa (230): ein Gang nach Kanossa: ein als erniedrigend empfundener Bittgang
(カノッサ) (カノッサ行き：願うため、身を低くして行くこと)
- 65.Kantonist: ein unsicherer Kantonist: ein nicht verlässlicher, unzuverlässiger Mensch
(カントン者) (不確実なカントン者：信頼できない、あてにならない人間)
- 66.Katharina (375): die schnelle Kathrin/Katharina haben: Durchfall haben
(カタリーナ) (せわしいカトリン／カタリーナを持つ：下痢をする)
- 67.Kolumbus (396): das Ei des Komumbus: eine überraschend einfache Lösung
(コロンブス) (コロンブスの卵：あっけなく簡単な解決)
- 68.Kotzebue (411): Kotzebues Werke herausgeben/studieren: sich erbrechen
(コッツェブー) (コッツェブーの作品を刊行する／研究する：おう吐する)
- 69.Krethi (417): Krethi und Plethi: jedermann, alle mögliche Leute
(クレーティ) (クレーティとプレーティ：だれでも)
- 70.Laban (426): ein langer Laban: ein großer, hochgewachsener Mensch
(ラバン) (長身のラバン：大きな背の丈の高い人間)
- 71.Lampe: Meister Lampe: Bezeichnung für den Hasen [in Fabeln und Märchen]
(ランペ) (巨匠ランペ：(おとぎ話の中での) ウサギの名前)
- 72.Latein (436): mit seinem Latein/seiner Kunst/seinem Verstand/seiner Weisheit am Ende sein:
nicht mehr weiterwissen
(ラテン語) (彼のラテン語は終わりだ：万策尽きた、どうしていいかわからない)
- 73.Lieschen (457): Lieschen Müller: der Durchschnittsmensch; ach du liebes Lieschen!: Ausruf
der Überraschung
(リースちゃん) (リースちゃん・ミュラー：平均的な人) (まあ、リースちゃん！：驚いた
ときの叫び)
- 74.Lukas (465): haut den Lukas!: jetzt fest zuschlagen!
(ルーカス) (ルーカスを打て！：ここぞとばかり打て！)
- 75.Lumpi (465): scharf wie Nachbars Lumpi sein: begierig auf sexuelle Betätigung sein
(るむび) (隣のルムピのようにぴりぴりしている：セックスに飢えている)
- 76.Madrid (471): fern von Madrid!: weitab vom eigentlichen Geschehen
(マドリッド) (マドリッドから離れろ！：ことの現場からはるか遠ざかる)
- 77.Maria (477): Jesus, Maria [und Josef]
(マリア) (イエス、マリア、ヨセフ！)
- 78.Matthäi (481): bei jmdm ist/es ist Matthäi am letzten: jmd. hat/es ist das Schlimmste zu
erwarten; jmd. ist am Ende
(マタイ) (マタイが最後である：最悪のことが予想される)
- 79.Max (483): den strammen Max spielen/markieren: großsprecherisch auftreten
(マックス) (ぴしっとしたマックスを演じる：大きく出る)
- 80.Meier (483): keine Feier ohne Meier: Bemerkungen über jmdn., der an allen geselligen
Ereignissen [in aufdringlicher Weise] teilnimmt
(マイヤー) (マイヤーのいない祭りはない：どんな祭り、祝い事にも顔を出す人につい
て言う)
- 81.Methusalem (487): alt wie Methusalem: sehr alt
(メトウーザレム) (メトウーザレム (ノアの父) のように年取った：非常に年取った)
- 82.Michel (487): der deutsche Michel: der deutsche Spießbürger, Biedermann
(ミヒェル) (ドイツ人ミヒェル：ドイツの小市民)
- 83.Minna (488): jmdn zur Minna machen: jmdn grob ausschimpfen, zurechtweisen
(ミンナ) (ミンナにする：粗暴に叱りつける)
- 84.Mohr (491): der Mohr hat seine Schuldigkeit getan, der Mohr kann gehen: jmd. hat alles
getan, was zu tun war, und ist/fühlt sich jetzt überflüssig
(ムーア人) (ムーア人は負債を果たした、行ってもいい：すべきことをしたので、不要
となる)
- 85.Monikaner (491): der Letzte der Monikaner/der letzte Monikaner: der/das Letzste, der/das
von vielen übriggebliebenen ist
(モヒカン族) (最後のモヒカン族：たくさんあったうちの最後のもの)
- 86.Montezuma (493): Montezumas Rache: Durchfall [den man sich besonders auf Reisen in
südliche Länder zuzieht]
(モンテズマ) (モンテズマの復讐：とりわけ南方への旅をしたときにかかる下痢)
- 87.Moritz (494): der kleine Moritz: jmd., der von etwas gar nichts weiß, einer Sache ganz
naiv gegenübersteht
(モーリッツ) (幼いモーリッツ：何も知らない、素朴な人)

- 88.Morpheus(494): jmdn aus Morpheus' Armen reißen: jmdn [unsanft] wecken; in Morpheus' Armen: in ruhigem und zufriedenenem Schlaf
(モルフェウス) (モルフェウスの腕から引き離す: たたき起こす) (モルフェウスの腕の中で: 安らかに眠っている)
- 89.Muse: die leichte Muse: die heitere, unterhaltende Kunst; die zehnte Muse: das Kabarett; jmdn. hat die Muse geküßt: jmd. fühlt sich zu künstlerischer Betätigung angeregt, hat eine künstlerische Inspiration
(ミューズの神) (軽い芸術の神: 娯楽芸術) (第 10 の芸術の神: 寄席) (芸術の神にキスされた: 芸術活動に励む)
- 90.Neger: etwas haut den stärksten Neger/Seemann um: 1. etwas ist kaum zu fassen; 2. etwas hat eine sehr starke Wirkung, ist kaum zu verkraften
(ニグロ) (最強のニグロ/船乗りをうち倒す: 1) おおよそ理解できない、2) あまりにも強烈で、立ち直れない)
- 91.Neptun (514):Neptun opfern:sich [wegen Seekrankheit] übergeben
(ネプチューン) (ネプチューンに犠牲を捧げる: 船酔いでグロッキーになる)
- 92.Nürnberger (522): ein Nürnberger Tichter: ein märchenhaftes Hilfsmittel, mit dem man sich mühelos Wissensstoff aneignen kann
(ニュルンベルクの) (ニュルンベルクの漏斗: 苦勞なく知識をものにするのできる魔法の道具)
- 93.Oskar: frech wie Oskar: sehr frech
(生意気な) (オスカルのように生意気な: 非常に生意気な)
- 94.Otto: Otto Normalverbraucher: der statistische Durchschnittsmensch, der Durchschnittskonsument
(オットー) (ふつうの消費者オットー: 統計上平均的な人間、平均的消費者)
- 95.Pandora: die Büchse der Pandora: etwas Unheilbringendes
(パンドラ) (パンドラの箱) (災いをもたらすもの)
- 96.Pappenheimer: seine Pappenheimer kennen: bestimmte Menschen mit ihren Schwächen genau kennen und daher wissen, was man von ihnen zu erwarten hat
(パッペンハイムの人) (パッペンハイムの人を知っている: 弱点を知っているため、何が期待できるかわかっている特定の人々のこと)
- 97.Paulus (539): aus einem Saulus zum Paulus werden: aus einem Gegner einer Sache zu deren eifrigem Befürworter werden
(パウルス) (ザウルスからパウルスになる: あることを攻撃していたものがそのことを熱心に擁護する者となること)
98. Pegasus: den Pegasus besteigen/reiten: dichten
(ペガサス) (ペガサスに乗る: 詩を作る)
- 99.Peter (542): Jemandem den Schwarzen Peter zuschieben/zuspielen:etwas Unangenehmes [von sich] auf einen anderen abwälzen
(ペーター) (誰かに黒のペーターを押しやる: 不愉快なものを誰かに押しつける)
- 100.Petrus (542): Petrus meint es gut: es ist schönes Wetter; bei Petrus anklopfen: sterben
(ペトロ) (ペトロがよかれと思っている: いい天気である) (ペトロの門をノックする: 死ぬ)
- 101.Petz (542): Meister Petz: Bezeichnung für den Bären [in Fabeln und Märchen]
(ペッツ) (巨匠ペッツ: (おとぎ話の中での) 熊の名前)
- 102.Philippi (548):bei Philippi sehen wir uns wieder!:ich werde mich rächen, die Sache ist noch nicht abgetan.
(フィリッピ) (フィリッピの所で会おう!: 仕返しをするぞ、ことはまだ終わっていない)
- 103.Phönix: wie ein Phönix aus der Asche steigen/erstehen: nach scheinbar vollständigem Niedergang neu erstehen
(フェニックス) (フェニックスのように灰から蘇る: 完全に没落したと思われたのに、新たに蘇る)
- 104.Pilatus (549): von Pontius zu Pilatus laufen: von einer Stelle zur anderen laufen
(ピラトゥス) (ポンティウスからピラトゥスの所へと駆ける: あちこち駆け回る、東奔西走する)
- 105.Polen (553): noch ist Polen nicht verloren: noch ist Hoffnung, noch ist nicht alles verloren
(ポーランド) (まだポーランドは失われていない: まだ希望がある、まだすべてが失われたわけではない)
- 106.polnisch (553): polnische Wirtschaft: Schlamperei, Durcheinander,, Unordnung
(ポーランドの) (ポーランド経済: 混乱、無秩序)

107. Pontius (553): von Pontius zu Pilatus laufen
(ピラートゥス) (ポンティウスからピラートゥスの所へと駆ける: あちこち駆け回る、東奔西走する)
108. Potemkinsch (555): Potemkinsche Dörfer: Vorspiegelungen, Trugbilder
(ポチョムキンの) (ポチョムキンの村: 幻影、虚像)
109. Preuße (556): so schnell schießen die Preußen nicht: so schnell geht das nicht
(プロイセン人) (プロイセン人でもそんなに速くは撃たない: そんなに速くは事は進まない)
110. Robert Blum (587): erschossen sein wie Robert Blum: am Ende seiner Kräfte, völlig erschöpft sein
(ロベルト・ブルーム) (ロベルト・ブルームのように疲れている: 力尽きた、疲労困憊している)
111. Rom (589): **Rom ist [auch] nicht an einem Tag erbaut worden:** ein größeres Projekt braucht einige Zeit zur Verwirklichung; **in Rom gewesen sein und den Papst nicht gesehen haben:** das Wichtigste nicht gesehen, nicht bemerkt haben; **alle/viele Wege führen nach Rom:** es gibt mehrere Möglichkeiten, ein Ziel zu erreichen; **Zustände wie im alten Rom:** unmögliche, unhaltbare Zustände
(ローマ) (ローマは1日で作られたのではない: 大きな企画は実現するのに時が必要である) (ローマにいて、法王を見なかった: 一番重要なものを見なかった) (すべての道はローマに通じている: ある目標を達成するにはいくつも可能性がある) (かつてのローマのような状態: とても考えられない状態)
112. Rothschild: wie Rotschild sein Hund: in großem Luxus
(ロスチャイルド) (ロスチャイルドの犬のように: 豪華に)
113. Rubikon (591): den Rubikon überschreiten: den entscheidenden Schritt tun
(ルビコン河) (ルビコン河を越える: 決定的な一步を踏み出す)
114. Russe (597): jmdm einen Russen aufbinden: jmdn belügen; scharf wie tausend Russen sein: begierig auf sexuelle Betätigung sein
(ロシア人) (ロシア人を背中にくくりつける: だます) (千人のロシア人のように鋭い: セックスに飢えている)
115. Samariter (604): barmherziger Samariter: selbstlos helfender Mensch
(サマリア人) (慈悲深いサマリア人: 無私の心で人助けをする人)
116. Sankt-Nimmerleins-Tag (606): am Sankt-Nimmerleins-Tag: niemals [in der Zukunft]; bis zum Sankt-Nimmerleins-Tag: auf ewig, bis zu einem niemals eintretende Zeitpunkt
(聖来ぬ日に: けっして) (聖来ぬ日まで: 決して来ることのない時点まで)
117. Saulus (608): aus einem Saulus zum Paulus werden: aus einem Gegner einer Sache zu deren eifrigem Befürworter werden
(パウルス) (ザウルスからパウルスになる: あることを攻撃していたものがそのことを熱心に擁護する者となること)
118. Schiller (620): das ist eine Idee von Schiller: das ist ein guter Vorschlag; so etwas lebt, aber Schiller mußte sterben: Ausdruck verächtlicher Mißbilligung
(シラー) (それはシラーのアイディアだ: それはいい提案だ) (そういうものが生きているのに、シラーは死ななければならない: 侮蔑の表現)
119. Schwede (647): alter Schwede: kumpelhafte Anrede
(スウェーデン人) (年をめされたスウェーデン人: 仲間意識的な呼びかけ)
120. schwedisch (647): hinter schwedischen Gardinen/hinter schwedische Gardinen: im/ins Gefängnis
(スウェーデンの) (スウェーデンのカーテン: 刑務所)
121. Scylla (650): zwischen Scylla und Charybdis: zwischen zwei großen Gefahren
(カリュウブディス) (スキュラとカリュブディスの間: 2つの大きな危険の間)
122. Sodom (667): Sodom und Gomorrha: ein Ort, ein Ereignis höchster Verderbheit und Unmoral
(ゴモラ) (ソドムとゴモラ: 道徳が退廃したところ、退廃的な出来事)
123. Spanier (670): stolz wie ein Spanier/wie ein Pfau: sehr stolz
(スペイン人) (スペイン人/孔雀のように誇らしげである: 非常に誇らしげである)
124. spanisch (670): spanische Reiter: Absperrung mit Stacheldraht; spanische Wand: Klappwand, Wandschirm; spanisches Rohr: Rohrstock; jmdm. spanisch vorkommen: jmdm. verdächtig, seltsam erscheinen; für jmdn. spanische Dörfer sein: jmdm. unverständlich sein
(スペインの) (スペインの馬の乗り手: 鉄条網による遮断) (スペイン風の壁: 折り畳み式の壁) (スペインの管: 籐の杖) (スペイン風に思われる: 疑わしい) (スペインの村: 理解できない)

125. Thomas (722): ein ungläubiger Thomas: jmd., der sehr schwer zu überzeugen ist
(トーマス) (不信心のトーマス : 説き伏せるのが困難な人)
126. Timotheus (724): sieh da, sieh da, Timotheus!: schau an!
(ティモテウス) (あっちを見よ、あっちを見よ、ティモテウス : よく見よ!)
127. Tobias (726): Tobias sechs, Vers drei: Kommentar, wenn jemand mit weit geöffnetem
Mund gähnt, ohne die Hand vorzuhalten
(トービラス) (トービラスが 6、詩句が 3 : だれかが大口を開けて欠伸をしたときに言
うことば)
128. Türke: einen Türke bauen: etwas vorspiegeln
(トルコ人) (トルコ人を作る : 見せかけて、ごまかす)
129. Ulrich (746): den heiligen Ulrich anrufen: sich erbrechen
(ウルリヒ) (聖ウルリヒを呼ぶ : 吐く)
130. Wilhelm (805): den dicken Wilhelm spielen: sich aufspielen, großtun
(ウィルヘルム) (でぶのウィルヘルムを演じる : 大きく出る)
131. Zahlemann: Zahlemann und Söhne: es muß [viel] gezahlt werden
(ツァーレマン) (ツァーレマンと息子 : 支払わなければならない : 年貢の収め時)
132. Zeus (832): was tun, spricht Zeus: was sollen wir tun?
(ゼウス) (何をするべきか、とゼウスが言う : 何をするべきか?)

【資料 3】イディオムにおける固有名の出自

日本語のイディオムにおける固有名		ドイツ語のイディオムにおける固有名			
インド		6	ギリシャ・ローマ	23	
中国	地名	43	その他の外国名	30	
	人名	29	聖書	20	
日本の固有名			世界文学	1	
建築物（寺院）		3	世界史	3	
人 名	歴 史	14	地域的バリエーション	1	
	架 空	文学	1	ドイツの固有名	
		神話（仏教）・	5	ド イ ツ	3
		ことば遊び	7	人 名	歴史
地名	38	普通	23		
		文学	2		
		伝説・神話・物語	5		
		ことば遊び	7		
			地 名	5	
		146		131	